淨瑠璃素人講釋

其盦杉山茂丸先生著

淨瑠璃素人講釋

杉山其日庵著

本書の發刊に就いて

古語に画龍點睛と云ふ事があるが、この意味は物事の完成を意味して居る。然るに多幸なるべき人生の行路には稍々ともすれば、否寧ろ屢々、運命と云ふ悪戯者が無遠慮に躍動して、果ては粒々辛苦折角の画面をも、一瞬時の間に滅茶〳〵なものとして仕舞ふ事がある。實際私なぞは、學窓を出てから、克己精勵奮闘努力、漸くそれ相當の龍らしきものをば画き上げたが、將に其の點睛と云ふ間際、思はず魔の手が現はれて、見る〳〵中に画面はおろか、私自らと私を圍繞して居る總ての物までをも暗黑化して仕舞つた。さてかゝる困難に直面した私は、完く常夜の歎きに壓服されて、荐りに呻吟懊惱を重ねた結果、遂に昨春所謂其日庵煩悶病院の施療患者となつた。然るに其後境遇の故と云はふか、將又意識せざる生存慾の結果と云はふか、漸くにして再生の萠を得、這般化學研究所創設の叫を上げ得るに到つた。其の間、其日庵先生の慈愛は曩に『百魔』の玉稿を賜り、今又た化學研究資金の一助として、『淨瑠璃素人講釋』なる玉稿を寄與せられた事は只々感泣の外なく、爰に粟禪一番して、画龍の點睛を遂げ、只管師思に酬ひん事を期する許りである。

抑も本書淨瑠璃素人講釋は、斯道唯一の擁護者たる、其日庵先生蘊蓄の一端たるに過ぎないが、それとても猥に餘人の追隨を許さない事は言を俟たない。然るに今般右樣の曲折と右樣の意味合から、斯くの如き高著刊行の榮を辱ふするに當つて、私の微力、到底その實を擧げ得ざる事を尠なからず惧れたが、計らずも

敬逸せる此原稿の蒐集に盡力された

本書の刊行に終始參劃せられた

刊行の目的に盡瘁せられた

刊行の主旨に贊同高助ありたる

大熊淺次郎翁

久田善基君

深野英治君

福光美規君

小林繁次郎君

星野桔梗君

黑柳柳君

豐竹古靱太夫君

竹本靜太夫君
竹本素女孃

諸氏の限りなき純情と懇切なる後援は、私をして、初めて本書刊行の重任を完ふするに到らしめたのである。私は、謹んで前記諸氏に對し滿腔の謝意を表します。猶他日私の微力以て多小なりとも邦家の爲め盡すところあらば、そは其日庵先生の餘慶たるに止まらず、又以て諸賢御高助の賜物たる事を深く信じます。

大正十五年十一月

其日庵門下生
三角不止

コロタイプ版　義太夫節祖先七功神及び人形
浄瑠璃御前演藝之圖は此君帖より抜萃せり

祖先義太夫節　七功神之圖

五代目春太夫室　長原梅園女史画

（古畫）人形淨瑠璃御前演藝の圖

（右）近松門左衛門
（中）お初の人形　辰松八郎兵衛
（左）竹本筑後掾
（ツレ）竹本賴母
（三味線）竹澤權右衛門

右元祿十六年近松翁五十一歲作　最初の世話物お初德兵衛曾根崎心中道行の段

はしがき

此冊子を讀まんとする人は、先づ第一に、此「はしがき」を能く讀まれたい。

一、義太夫節と云ふ物が、距る貞享二年乙丑（今大正十五年を距る二百四十二年前）大阪道頓堀の西に、櫓を揚げて以來、此藝が滿天下に流行したが、流行するにより て名人が輩出した。名人が輩出したから、其藝妙が擴大して來た。藝妙が擴大して來たから、修業が烈敷なつて來たのである。

二、然るに若し藝道が、此の反對になつて來たらば大變である。修業が粗末になつて來ると、藝妙が廢れる。藝妙が廢れば、名人が無くなる。名人が無くなれば、斯藝が極端に衰微する事になるのである。

三、卽ち現今は、斯界に衰微荒廢の暮鐘が鳴つて居る時である。夫を回復するに

は、修業を烈敵する外はないのである。修業を烈敵するには、藝妙が解らねばならぬ。藝妙が解つて來ると、名人が出來て來る。名人さへ出來れば、滿天下に流行の實が擧るのである。

四、其藝妙とは、何であらうか、即ち名人優越の風である。其優越の風は。ドンな物であるか、其學的材料が、古來より口傳〳〵斗りで、今は少しも無いのであるから、自得の外得られないのである。自得の妙風は。修業の鍛練から起るのである。

五、今庵主は、其妙風の何物たるを穿鑿する、百千萬分の一にでも、參考となるべき資料を發見したいと、藻掻きあせりつゝある、一人である。

六、而して其修業の資料は。元々口移しの仕事で。咽と腹と頭の働きで。空氣の顫動させ方。即ち聲の働きを。定規とせねばならぬ物が。筆や墨で、決して書き顯はされる物ではない、是を藝道の妙風と云ふのである。

七、其口移しが、古代には、名人も澤山あつたであらうが、庵主等は、其名人の口移しには、接する事が出來ぬ譯であるから、先づ近代に於ける、豊澤團平の言ひ殘した事を始めとして、次は竹本攝津大掾、竹本大隅太夫、名庭絃阿彌等に就いて、熱心に修業し、又咄を聞くの外無いのである、夫以上の事は到底庵主では不可能であつた。故に此書は右三四人の咄の聞書の一冊子と思ふて貰いたい。

八、右の譯故此冊子には、庵主が熱誠に、其聞いた事を基礎として、細大洩さず記憶を探つて書く事とした。

九、併し庵主とても、神でない限りは、聞違ひ、憶え違は、澤山ある事と信ずる去り乍ら、以上の三四人も、決して庵主斗りに、斯る咄をして聞かせた事とは思はぬ、屹度他の門弟や旦那衆などにも、咄した事と思ふから、少しにても、間違の事があつたらば、他に聞いた人々は、ドシ〳〵之を訂正して呉れ

るのが、單に庵主の爲めでなく、斯道の爲めであるから、此冊子は全く其非難訂正を受ける爲めの、題材として書くのである。

十、總て藝道は、末になると、枝葉斗りを攻究して、根本を忘れる物である。斯藝も太夫や絃師が、乏しき學術を以て、文章などを弄り廻して、斯藝の基礎問題たる、咽と腹と頭の修業を忘れて居る傾があるから、藝道が斯く墮落して、衰微斗りするのである。文章は學者に聞きさへすれば、一度の訂正で、永久の改善が出來るが、藝道の方は、火の出るやうな修業と、鍛練でなければ、決して訂正は出來ぬ物である。

十一、扨て其藝風とは、ドンな物かと云へば、

此義太夫節と云ふ物は、攝津國東成郡、四天王寺村の土百姓の子が、天性淨瑠璃節を好み、井上播磨掾と、宇治加賀掾との、藝風を比較し、播磨の長き所を縮め、加賀の短かき所を伸ばして、聲の表裏を付け、運びの上に「舒

破急」を定めて、總體を能樂の式に形どりて、一流を立てたので、夫が世に斯くまで流行したのであるから、夫を基礎として、庵主の聞いた事丈けを、書いて見れば

(1)竹本義太夫、即ち筑後少掾は大音嬌喉で、「其文章を語る中に謳ひ、謳ふ中に語る」と云ふ、絶妙の意味を失はなかつたのである。(**鸚の元祖**)(**貞享二**)

(2)其門弟竹本若太夫、即ち豊竹越前少掾は「嬌喉美音であつて、「一」の音が、前後に無い程、齊なうて「一二三のギン」の音の遣ひ分けが、最も名人であつたとの事。(**東の元祖**)(**享保三**)

(3)其門弟豊竹駒大夫は、絃師に「高調子」を彈かせて、浮沈みの音遣ひの名人にて「詞」にまで、一種の音遣ひを鍛練し、上下貴賤の品格を、語り分けたとの事。(**享保十八**)

(4)竹本政太夫は、義太夫の門弟にて、即ち播磨少掾であるが、此人は小音なが

ら「文章を「語る中に音の間から、謳ふ意味を漂はし「三上、コワリ」の音を主として、上手に遣ふたのである。(二代目薩太夫)(享保十九)

(5)竹本錦太夫は、師匠越前少掾の風を鍛練し、一種異風の音を遣ふて「一二三の中の音」を遣ふ事に上達し、「地中、地色、フシ落」等、四段目語りの風を、定めたとの事。(元文二)

(6)二代目政太夫は、播磨少掾の門弟にて、雑魚場十兵衛と云ふ人にて、深く師の風を學び「三上、コワリ」の音遣ひに上達し「詞止め、節切り」の語方に一種の風を殘したとの事。(寛保三)

(7)豊竹嶋太夫は、二代目若太夫にて、東の元祖越前少掾の孫にして、天下無双の美音にして、腹強くして、聲和かに、最も「大ノリ、小ノリ」の名人であつたとの事。(延享二)

(8)竹本河内太夫は、大和掾の門弟中にて「最も音遣ひの達者な人にて」京都の

「立花河内」の音遣ひの風を、深く研究し「一二三ともニジッタ」音の遣ひ方を、自得したとの事。（享延二）

(9)竹本大和掾は「詞ノリ、地ノリ。地色」の名人にして、斯道の何れの段にも此風を忘れる事は出來ぬとの事。（延享三）

(10)竹本鐘太夫は、筑前掾の門弟にて、大音にして、美聲で「捨て間とか云うて「間」を大變に明けて、人形を息で活かす事を、鍛練した名人との事。（延享四）

(11)豊竹筑前少掾は、陸奥茂太夫の門弟にて、斯藝中興の祖とも云ふ「低調子」にて派手に、賑かに、斯藝を語り活かした人にて「ギン」の音の遣ひ分け。働きは勿論「ハルギン、ハリキリ」の音を、上手に遣ふて、斯界を風靡した人であるとの事。（寛延元）

(12)竹本春太夫は、大和掾の門弟にて、斯界前後になき名音にて「間拍子、運方」の達人であつたとの事。（寛延元）

(13)竹本組太夫は、竹本染太夫の門弟にて、天性の悪聲にて「三を放した音よりも、聲が下らぬ」ので、夫を利用して「一二の絃を運ばせた」と云ふ、名人であつたとの事。(寛暦三)

(14)三代目政太夫は、二代目政太夫の門弟にて、前名中太夫と云ふて「カワリ」の名人にて中太夫の「四季ガワリ」と云ふて、評判せられしとの事。(寛暦六)

(15)竹本住太夫は、政太夫の門弟にて、其當時、謳ふ事に流れた斯界の藝風を、語る事に引戻した程の、名人にて、此人にて、古淨瑠璃の回復が、出來たとの事である。即ち文章を詰めて、云ふて仕舞ふ中に、一種云ひ得られぬ、情合より、音遣ひを割出して、語つたとの事。(寛暦七)

(16)豊竹麓太夫は、駒太夫の門弟にて、「表」の三本にて、上が支へず「裏」の三分にて下が支へず、「ギン」の音と云ふたら「一二三」とも「ニジッタ」音より出て「張り強く、底強く、押強く」して、人情を語り抜いたとの事。

（寶暦七）

(17)竹本綱太夫は、染太夫の門弟にて、絃師を十分陽氣に彈かせて、語り方は成る丈け陰氣に運んで、夫を派手に聞かせて、人情を濕はする事を、一生研究したとの事。（寶暦十一）

(18)竹本重太夫は「低き調子」を、基礎として、高き音より、低き底の音まで、使ひ分けたとの事。（天明四）

(19)竹本染太夫は、駒太夫門弟にて、又斯藝中興の祖とも云はれた人にて、「地合、詞」共、サラリとした中に「産地」運びの名人にて、最も濃密の人情を語り明したとの事。（天明五）（此染太夫の事は初代より甚だ調べ困難故單に斯く書いてをく）

斯く太夫の風を書たものの、各太夫の初代二代三代と、各語り風が違ふ事は當然であるが、夫は調べやうがない。稍分つて居るのは、政太夫の初代二代三代丈けである。其他の太夫は餘り穴さがしをせずに、初代の風で皆押通して語つたが、良いと

聞いて居る。

先づ聞いた事を基礎として、庵主の記憶から探り出した事は、此位とし、是とても調べる書籍も、皆震災で燒けて仕舞つたから多大の間違はあらふが、先づ、假りにコンナ事でも、土台とせねば、修業も鍛練も、目標がないのである。義太夫節は、其書下しを語つた人に依つて、其風格が違ふが、夫を修業してこそ、藝妙が顯はれるのである。喩へば、弓や鐵砲でも、打つ的が出來ねば、殼鐵砲と同じ事である。今の斯界は穀鐵砲斗りではないかと思はるゝ。文字でも、先づ草聖と云ふ王義之とか、文徵明とか、董其昌とかの、手本があつて、夫を習得してこそ、妙味も出るのである。今の學校の如く、鉛筆やペン斗りで、讀めさへすればよいと云ふ、物質本位となれば、藝術も、美術も、亡滅である故に、先づ正しき手本、即ち、目標が先決問題である。若し夫がなくて「ハルフシ」や「スヘテ」や「フシヲチ」を、只だ一通りに云ふのなら、淨瑠璃を、五六段憶へさへすれば、何でも語れるのである。

即ち何でも同じ物に語るのなら、外題の名が違ふ丈けで、中の藝術は、何でも同じ物となる。今時の藝人は、皆夫斗りであるやうである。嚴重な目標に向つて、鍛練すればこそ、一種の風格が更に出來て來るのである。夫を藝術と云ひ、淨瑠璃と云ふのである。其鍛練より發する、恐ろしき味を號けて、藝術の妙風と云ふのである妙風とは「不可侵力」の事である。此力に向つて、賞讃し、敬服し、尊崇して暇を潰し、費を投じても、憧憬するのである。故に夫を學ばずしては、賞讃もせず、敬服もせず、尊崇もせぬから、暇も潰されず、費も投じられぬ。左すれば藝道は、只だ蕪頽する斗りである。

竹本攝津大掾は、六十歳の聲を聞いた年から、成丈け、滅多に語らぬ物斗りを、心掛けて語る事に、勉強を始めたのである。其語る前の第一の調子は、此先輩の風格である。夫の調掛りの先乘が、名庭紋阿彌（六代目豊澤廣助）である。大掾が廣助と、此打合せが濟むと、屹度二人で、其調べた經過を咄に、庵主の所に、出掛けて

來たのである、庵主は何と云ふ仕合者であらう、飯より嗜の藝道の咄、殊に明治十四年より、贔負にした、大掾、紘阿彌の茶瓶頭の老爺が、藝術の精妙を、殘らず咄すのであるから、庵主は夢現で、生存の意義が怪しい位に、トロ〳〵になつて聞くのである。其大椽の心掛けは、何物でも調べては居たが、最も春太夫と、綱太夫の風に、心を傾けて居たやうである。紘阿彌は、大体大和掾の風と、錦風と、染太夫風とに、大分魂を入れて居たやうである。夫から大隅太夫は、師匠團平が、世間一般が、遊女の行列のやうに、身形正しからざる風体で、ゾロ〳〵と、謳ふて斗り居るのに、癇を立てゝ、鍛治屋の息子の大隅を、譬古台にして、住太夫風の、詰字、詰詞、詰息、の一點張で、鍛ひ上げられたから、大身の鎗の如く、住太夫風の一本であつたやうである。斯の如く、アノ力量で、其宗とする所を正して、鍛練するのであるから、善惡となく、鐵壁でも、突拔かねば止まぬのである。其他は、庵主の耳には、誰にでも身を賣る遊女の如く、前受本意、金が欲しい斗りの、聲と

音であつたやうである。扨て是で「はしがき」は、大略濟んだが、此まで書いた、藝妙とか風格とか云ふ事の、調べ方であるが、元々素人の庵主が、熱心で聞込んだ記憶を書くの外、日本に、此藝風の書物は、只の一つの種本も無い事は、事實であるから、無論間違つて居る事が、大部分であらうと思ふ。ドウか夫は、識つて居る人々が、藝道の爲めに、日本に初めての試みである、斯藝の書物として、此の小冊子の發刊を、茜の萠とも思ふて、訂正に訂正を加へて、育てゝ貰いたいのである。庵主はモウ、年も取つた事故、死後の爲め、切に讀者に賴み置くのである。即ち其風格調査の、困難間違多き一例は、

先般。豊竹古靱太夫が、大阪の文樂で、「彦山權現誓の助太刀」の「九ツ目。毛谷村の段」を語る時、彼は幼少より、庵主が最贔の藝人である爲め、態々手紙を寄せて來た。曰く

『私は、今度文樂で、毛谷村の役が付ました。如何心得て、語つたら宜しいでム

りませうか、御意見を伺升』

と云ふて來たから、庵主は左の返事を遣つた、曰く

『毛谷村は、大掾も、大隅も語つて、三代目政太夫物と聞いて居る、又紘阿彌（廣助）も、三代目政太夫として、庵主に謦咳をして居るから「カワリ」を、大事に語らねばならぬ「中太夫の四季ガワリ」と、云ふ事も聞いて居るから「カワリ」を、大事に鍛練する事が、肝要である』

と書送つたら、數日の後、又手紙が來た。曰く

『御意見によりて、三代目政はんの物として、調査致ましたら、アノ毛谷村は、三代目さんではムりませぬ。丸本に、麗々と、竹本内匠太夫さんの役場となつて居ます、左すれば、如何心得ましたら宜しいでムりませう』

と書いてある。ソコデ庵主は、大狼狽にて、調査をしたらば、完く其通りである。サア、グット行詰まつて、毛谷村の風格が解らぬ事になつて仕舞ふた、夫から、此

古靱太夫が、嘗て庵主に貸與へて居る、「竹豊音曲高名集」と云ふ本を見たら、矢張、大掾、紋阿彌が云ふ通りに、三代目政太夫の、「塩町播磨屋理兵衛が」語つたと書いてある。併し丸本の役割は、斯藝の根本であるから。夫を無視する譯には、ドウしても行かぬ。然らばと云ふて、内匠太夫の風を、今日調ふる譯には、猶ほ、行かぬから、庵主は早速手紙を遣つて。其輕卒を謝まつたのである。此如く、折角調べて。斯く刊行までしても、元々正確な。義太夫學の、教科書が無いのであるから、恐は〳〵ながら、やつと此丈けは。書いて置くが、此から先は。斯道の爲めに。厚き志のある人々が、段々と完成を、圖るの外。道はないのである。庵主は此内に、一つでも二つでも。正しき物があつて、何人かの、參考の一助ともなつたらば、此上の滿足はないのである。

其日庵主人

大正十五年丙寅の九月澁谷偶居に於て秋雨蕭々の日之を誌す

本書刊行上最も遺憾とするのは活字の誤植、校訂の不徹底である。是等は再版度を重ねて完全するものとして暫く讀者の寛怒を乞ふのである。

淨瑠璃素人講釋目次

一　傾城冥途飛脚　梅川忠兵衛　新町封印切の段……一
二　鎌倉三代記　八ツ目切　三浦別れの段……六
三　天の網島時雨の炬燵　茶屋場の段……一一
四　天の網島時雨の炬燵　紙屋内の段……一五
五　檀浦兜軍記　三段目口　阿古屋琴責の段……二〇
六　苅萱桑門筑紫轢　三段目切　宮守酒の段……二四
七　和田合戰女舞鶴　三段目切　市若切腹の段……二九
八　堀川夜討　三段目切　辨慶上使の段……三四
九　近頃河原達引　お俊傳兵衛　堀川猿廻しの段……三八
一〇　平假名盛衰記　三段目切　松右衛門逆櫓の段……四二
一一　平假名盛衰記　四段目切　神崎揚屋の段……四五

一二 中將姫古蹟松 雪責の段……五一
一三 田村麿鈴鹿合戰 阿濱浦平治住家の段……五六
一四 楠昔噺 三段目口どんぶりこの段……六一
一五 楠昔噺 三段目切 德太夫內の段……六四
一六 菅原傳授手習鑑 三段目切 佐太村の段……七三
一七 菅原傳授手習鑑 四段目切 寺子屋の段……七八
一八 義經千本櫻 三段目切 鮓屋の段……八四
一九 花の上野譽の石碑 四段目切 志度寺の段……八九
二〇 假名手本忠臣藏 四段目切 判官切腹の段……九四
二一 假名手本忠臣藏 六段目切 勘平切腹の段……九八
二二 假名手本忠臣藏 七段目 一力茶屋の段……一〇三
二三 假名手本忠臣藏 九段目 山科閑居の段……一〇八
二四 双蝶々曲輪日記 橋本の段……一一一

二五 双蝶々曲輪日記 八ッ目切 引窓の段……一一五
二六 源平布引瀧 三段目切 繰馬の段……一二〇
二七 増補源平布引瀧 四段目切 松波検校琵琶の段……一二六
二八 増補玉藻の前曦の袂 三段目切 道春館の段……一三三
二九 戀女房染分手綱 六ッ目切 沓掛村の段……一三七
三〇 戀女房染分手綱 三吉愁嘆の段……一四一
三一 一の谷嫩軍記 須磨浦組打の段……一四六
三二 一の谷嫩軍記 三段目切 熊谷陣屋の段……一四九
三三 傾城反魂香吃又平 將監住家の段……一五二
三四 義經腰越状 三段目切 泉三郎館の段……一五六
三五 三十三間堂棟の由來 三段目切 平太郎住家の段……一六六
三六 岸の姫松戀鑑 三段目切 飯原兵衛館の段……一七〇
三七 奥州安達ヶ原 三段目切 袖萩祭文の段……一七六

三八 奥州安達ヶ原
三九 壽連理の松
四〇 蘭奢待新田系圖
四一 蘭奢待新田系圖
四二 本朝二十四孝
四三 本朝二十四孝
四四 太平記忠臣講釋
四五 關取千兩幟
四六 染模様妹背門松
四七 傾城阿波鳴戸
四八 紙子仕立兩面鑑
四九 近江源氏
五〇 近江源氏先陣館

四段目切 一ッ家の段……一八〇
お夏清十郎 湊町の段……一八六
三段目切 幸内住家の段……一九一
四段目切 盲縁の段……一九九
三段目切 勘助住家の段……二〇三
四段目切 十種香の段……二〇五
七段目切 喜内住家の段……二〇九
二段目切 稻川住家の段……二一五
質店の段……二二一
順禮歌の段……二三一
揚巻助六 大文字屋の段……二三五
八ッ目切 盛網首實驗の段……二三七
九ッ目切 高網隱家の段……二四〇

五一 神靈矢口の渡 四段目切 頓兵衛内の段……二四六
五二 妹背山婦女庭訓 二段目切 芝六住家の段……二五二
五三 妹背山婦女庭訓 四段目切 竹に雀の段……二五七
五四 艶姿女舞衣 三勝半七 酒屋の段……二六六
五五 櫻鍔恨鮫鞘 お妻八郎兵衛 鰻谷の段……二七四
五六 攝刕合邦ヶ辻 下の巻 合邦住家の段……二七七
五七 傾城冥途飛脚 新の口村の段……二八二
五八 兢伊勢物語 三段目切 有常物語の段……二八七
五九 戀娘昔八丈 鈴ヶ森の段……二九一
六〇 桂川連理の柵 半右衛門 お長 帶屋の段……二九六
六一 新版歌祭文 お染 久松 野崎村の段……三〇一
六二 伊賀越道中双六 沼津里の段……三〇四
六三 伊賀越道中双六 八ツ目切 岡崎雪降の段……三〇八

六四 加賀見山舊錦繪 七ッ目切 長局の段……三一二
六五 伽羅千代萩 六ッ目切 政岡忠義の段……三一六
六六 碁太平記白石噺 七ッ目切 新吉原揚屋の段……三二三
六七 蝶花形名歌の島臺 八ッ目切 小阪部兵部館の段……三二九
六八 日本賢女鑑 十册目 片岡忠義の段……三三三
六九 伊勢音頭戀寢刀 油屋の段……三三七
七〇 加賀見山廓寫本 七ッ目切 又助住家の段……三四〇
七一 繪本太功記 十册目切 尼ヶ崎の段……三四五
七二 箱根靈驗記躍の仇討 十一册目 躍瀧の段……三五〇
七三 日吉丸稚櫻 三段目切 小牧山城中の段……三五四
七四 忠臣義士傳 彌作鎌腹の段……三五八
七五 增補生寫朝顏話 四段目切 宿屋の段……三六二
七六 忠臣二度目清書 寺岡切腹の段……三六九

七七 義士忠臣藏 本蔵下屋敷の段……三七五
七八 夕霧伊左衛門 廓文章 吉田屋の段……三七九
七九 三日太平記 九ッ目切 嘉平次住家の段……三八七
八〇 明烏六花曙 山名屋の段……三九一
八一 増補菅原傳授手習鑑 松王屋敷の段……四〇〇
八二 忠臣義士銘々傳 赤垣出立の段……四〇三
八三 八陣守護城 八ッ目切 正清本城の段……四〇九
八四 三十三ヶ所花の山観音霊験記 壺坂寺の段……四一三

(一) 傾城冥途飛脚

梅川忠兵衛

新町封印切の段

此外題は正徳元年卯三月、今大正十五年を距る二百十六年前の作とは聞いて居るが風は分らぬ。後年此太夫が語つて其の風が今日殘つて居るとの事である。竹本座にて上場した筈、作者は近松門左衞門と聞く。

庵主は此段を大隅太夫に聞き、又攝津大掾に聞いたのである。昨今素人連中にボツ〳〵語る人が出て來たから、特に書いて置くが、コンナ底力の要る、腹加減の六ケ敷い淨瑠璃を、聞き覺えと、三味線に合ふ位丈けで、決して語る物ではない。此種の物はキツチリ覺へた上、更らに鍛練と云ふ物が語らせる物である。又大概なら三味線彈の方でも、一度や二度の彈合せで語る人には斷るが好いのである。道樂にも戲れにもならぬ、只だ見苦しい丈けである。商賣人の太夫は、烏驚覺えでも三十日斗りは毎日語らせて貰ひ、又稽古も付けて貰ひ、三味線とも毎日彈合せるのであるから、ドンナ鈍物でもソコ〳〵には筋道が歩行るやうになるのである。若し素人で語るなら、藝人、旦那衆

であらうが、何であらうが、先づ虱殺しにキッチリと覺へて、夫から自分も三味線彈も、體を打込んで三十日位は彈合せて、目を塞いで居ても、音と間と足と腹の鹽梅が夫になるまで鍛練をせねば餌の無い針で魚を釣るやうな物で、魚の方でも食やうが無いのである。庵主は「此段を稽古してくれ」と大正元年に攝津大掾に申込んだ處が「私は明治五年の十一月(庵主が八歳の頃に)松島文樂で語つた儘に役が付ませぬから、十分調べましてお知らせ申升。自分の稽古にもなり升から、是非御稽古を致たい」との返事が來た。夫から庵主は直に本を書かせ讀初めて準備に取掛つた。夫と同時に故鶴澤仲助には、故園平の朱章を繰らせて、手馴らしに掛らせ、又大掾の方でも早速に六代目豐澤廣助に交渉して、朱の方の調べを賴んだとの事。夫から大正二年の初めに「一度聞いて頂き升」との手紙が來たから、下阪して叩きで聞く事になつたが、丸で音の運方が庵主の思惑と違ふて居るので、大變な困難をした。兎に角癖物であるから、夫を大體に呑込まねば、覺へると云ふ道に入らぬのである。そこでヤット筋合丈け合點が行つたやうだから、其年の四月に又大阪に往き、今度は大隅太夫を呼んで聞いて見たが、玆に「神人合一天地一貫」と云ふ妙理があるのは、數百年前の戲作、近松の筆の痕が現實化して生動して居る事は、大掾と大隅と全く一致である。音も間も足もチ

ヤンと一致であるが、只だ違ふ處は、語る腹加減である。夫が大隅も人間、大掾も人間、別個の活動をして居る個性がある。自己の見識でチヤンと人形が違ふて居る。一例を云へば、大掾の忠兵衛の腹構への好いことは龜屋の養子としては勿體ない程の品格であつた。又一方大隅の八右衛門の好い事と云ふたら、氣前格好共、其詞の止め止めに生動して今尙ほ活きたる人形が生動して居るやうである。アレでこそ木偶の人形を活かす技能を藝人に一任して、數百年藝界を驚倒せしめたのであらうと思はせた。夫から又餘りの面白さに其年の六月に行つて、大掾に就いて又聞始めた。其面白さと云ふたら、一人一役の氣の拔けた千兩役者共の仕る芝居などの追付く物ではないのである。其後三代目越路太夫の語るのを聞いたが、之は三味線の吉兵衛とともに、初役と見へてマダ足取が付いて居なかつた。

先づ初めの歌が「ナヲル」と「青編笠」となる。直ぐに音の癖があるので、サア大抵の藝力では、人が聞いて呉れぬ「サイハラ」になつては最と腹拵き良くサラ〳〵と語らねばならぬ。「梅川の出になつて」一寸氣をかへて淨瑠璃に這入らねばならぬ「夕霧文章」になつては全く紋に離れて、禿聲を忘れずに語る方が本當である。夫から「詞ナマリ」と「地色」とを面白くコナスのである。夫で人を厭か

せずに運ぶと云ふ事は、全く力と見識との結晶で「平伏して聽け」と云ふ藝に恐ろしき威光がなくてはなれぬ事である。此は度々藝人にも云ふ事で「良く語る面白く語る」丈けでは、眞西物のスネタ物は、直に腰が碎けて仕舞ふ。少しでも語る方に手薄き事があつたら、藝の命が無くなるのである。故に却て盲目蛇に怖ぢずで強身があるのである。役揉みと給金爭は、藝格が分つては中々出來ぬ物である。兎も角物を識つて鍛練をするのは、藝人として中々の樂みである。決して他人の財産にはならぬ。必ず間違なく其人の所有財産となるのである。良き役が付き、高い給金が得らるゝのは、一時的でなく、永久である。其上に自分の樂みと云ふ物が、大變な物である。

「八右衛門の出」からは普通の淨瑠璃にはなるが、「色」の語り方が一つ〳〵に違ふ。夫は「總ての人の心持」が、詞と地合の變化で聽衆に「ハッキリ」と移らねばならぬ『心も殘る三百兩』から『越後やに走り付』までの心持は、大掾も大隅も餘程面白かつた。今以て耳には殘つて居るが、口には言へぬのである。夫は云へねが當り前である。彼等は藝が「心持に出來て居るからである」「八右衛門」は敵役でない所に面白味も、藝の力も入る所で「忠兵衛」は惡人でなくて惡事をなす所、心身梅川の情に包まれて居る中に、チラ〳〵と良心のヒラメキのある所に妙味も鍛練の秘奥もあるのである。

「梅川の事を」書くと長くなるから他日に譲るが「梅川」は全篇を通じて、大掾が天下一品である。『夕告鳥』から『跡は野となれ大和路や』の段切は、大隅太夫の息込みの漲溢して居つた事と云ふたら、庵主などは放り出されたやうに、ジヤンと〆めた後まで、驚き惘れて居たのである。庵主なども聽天狗では大抵人に負けぬが、藝もアヽなると即座に天狗廢業で、人にまで忠告して、滅多に語るなと云ひたい氣になるのである。此新町の三味線は六代目廣助が昔の清七や、團平の朱章を調べて故仲助に稽古して遣る積りで待ちに待つて居たのに、トウ〳〵稽古に行かぬ中に仲助が死んで仕舞ふたから、其後廣助に會度に膨れ面をして居るのである。

(二) 鎌倉三代記 八ツ目切 三浦別れの段

此段は享保三年戊正月、今大正十五年を距る二百九年前豊竹座にて、豊竹越前少掾（若太夫、即竹本采女と云ふ）語ると聞く、又後年豊竹麓太夫も語つたとの事である、作者は紀海音であるとの事である。

此段は今こそ飯粒の乾びたやうな節廻しに成果てて居れ共、藝格から云へば、容易ならぬ品物である、一體元祖の語つた物は、一聲聞いても恐ろしい思ひを起すべきものである、夫が越前の風と云ひ得らるゝのである、先「三重」のシャン。〳〵。〳〵。〳〵。が大變である。其「間」と「足」が大きい斗りでなく、腹の底から淀まない大波の一ッ〳〵打やうな事になつて居なければならぬ。夫で『入相過』が本當の越前風に語れるのである。『されば風雅の歌人』と語り出すのも、聲の力、腹の力一杯と云ふが原則である、小さくては何にもならぬ。

此越前風と云ふ物は、「間」と「足取」と「節」と「音遣ひ」との四つは先づ跡として、間の一杯と、腹

力の一杯とを、大汗になつて修業せねば、外の事には取掛られぬのである、夫が出來たら、大男は大男丈け、小男は小男丈け、聲の大小善惡とも、出來る丈け一杯になる事である、其癖が付いてから、夫から「間」を一鎖りづゝ修業する事、「足取」を一鎖りづゝ修業する事、「節」を一鎖りづゝ修業する事、「音遣ひ」を一鎖りづゝ修業する事、夫が出來て、出る人形の情合を一切又一鎖りづゝ修業するのである。是丈け修業すれば、淨瑠璃は下手でも、越前風にはなるのである。玆に於て和田合戰の市若切腹も、日向島も語れる事になるのである、原料がなくて、品物が出來る例しがない故其原料さへ整へば、其風の門弟たる筑前風なども、何でもなく語れる事になる、又其後の達者麓風の尼ケ崎、日吉丸、蝶八、八陣、等の如きは此越前風から見ればお茶の子である、今の淨瑠璃は、劍法も知らず、馬にも乘れず、軍術の驅け引も分らぬ武士が、棒千切れを振り廻はして、金鍬形の兜斗りの競爭をして、大將顏を仕て居るやうなものである、本當の武術を知つた人の前に往くと、ボンと鍋蓋で押へ付られて、逃げ出す者斗りである、故に總てが一杯と云ふが條件で、先づ夫を修業するのである。

一杯と云ふのは、息を一杯に引取つて、其息を又一杯に出す事である。『修羅の街の戰と』と皆假名

の數を數へて語つては、ドうしても一杯になれぬ。「修羅の、街の、戰と」と文章を語らねば、一杯になれぬのである。『人もや』と云ふたら、掛文句であるから、止まつて『三浦が、孝行の』と「ネバリ」て、乘つて語るのである。總てソンナ風に一息づゝ一杯に語るのである。庵主が大隅に稽古を仕て貰ふた時『行つ戻りつ』と云ふ一句で滿身の力も拔けて、飯も喰はれぬ程疲れ果てた事があるが夫は「チン」「ッン」と云ふて火鉢の緣を叩く大隅の「力」と「間」の恐ろしさの爲で、今尙ほ膽に徹へて忘れられぬのである、『ユキ――イイッ。モーヲ、ドーオ、リーイッウ。トッ。オイッ。』が本當に一杯にならねばならぬ、夫を修業するので、滿身汗になるのである。汗に浸つてヤット一杯になると、其處に何とも云得られぬ孝子の心情が浮んで來て母の病氣を捨てゝ討死に行くに、其後髮を引かるゝ悲哀が漂ふて來るのである、夫が一杯から出た情でなければ、藝が死んでゐる。今の太夫の情は、物眞似の拵へた情である、夫で全部駄目である、夫から病母の「詞」が六かしい其「詞」にウント鍛練をして、「咳」でも拵へ「咳」でなく「病」と「涙」と「情」から出た「咳」が一杯に語れる事になれば客人の方は皆水を打つたやうになつて、又一杯に聽く物である、ソコで時姫が挾まつて、眞に生動するのである。此「カラマリ」の役が生きねば三代記は駄目である。團平が「ドウか時姫が牛になら

ぬやうに願升」と云ふたのが、今では遺言と成つて仕舞ふたのである。

『思ひ遣つて呉れもせで』『オーモー、ヲチ、イーイーイ、ヤーア、アア、ッ……テーエエ、クレーエ、エーエ、モヲセ、エ、エーエ、エーエエデ――エエエ』「モヲ」と假名切れになるから、牛を氣遣ふたのである、故に「クレーエエモヲ」「チヨン」セーエーエ、エエーデーエエエ」と云ふたら牛にならぬのである、即ち「モ」の字を上に付けるのである。

夫から『短夜』の「ヲクリ」が一番洩付いて、大事に語らねば越前さんが仕置きの「ヲクリ」と云ふて後世に遺した型が失せるのである。

夫から『名にしあふ坂本』から段切までの語り方が尤もサラ〳〵と研究を要する處で、皆「字餘り」に成つて居て、夫に何とも云へぬ情合と、運の妙味が付いて居るので、中々修業も面倒であるが、面白いものである。

要するに太夫には必要ないとしても、義太夫學を識りたい我々は、先づ元祖義太夫の「筑後掾」の世繼曾我、愛染川を識り、夫から若太夫の「越前掾」の日向島を識り、「政太夫」の爺打栗公平を識り「大和掾」の鐘場や戀十を識つて、夫から「筑前掾」に及び、忠九や楠の三段目、夫より「驀場」の女護

島や、尼ケ崎に及ばねば、斯道變遷進歩の歴史を知る事は出來ぬのである。文字で云へば、先づ階書の字畫を識り、夫から行書、草書と時代、世話、眞世話物と斯ふ運ぶのである、故に此三代記の如きは、聲の据りと腹のカの覺悟が出來た堂に入つてから、奥を伺はんとする人の熟心修業する品物であると、心得て居らねばならぬ。庵主が聞いたのに、大掾が『時姫せき來る涙ながら』の一鎖りは永久死に至るまで、其鮮明なる情の漂を忘れぬのである。又大隅の『うら紫の色深き』の一鎖りは、永久其「ギン」の聲の大きさと、徹底的なりし事を、死に至るまで忘れぬのである。總て名人には、一段に一ケ所若くは二ケ所位は、大身の鎗で突拔いたやうな、恐ろしい處があるものである。夫が今は飯粒細工のやうな淨瑠璃斗りになつて、全部甘い御馳走斗で、何でも幾百の付け味斗りにて腹を下す斗りである。或る老師匠の評に「アンナ淨瑠璃を語るのなら、一層の事、響てくれ〳〵〳〵。錢を吳れ〳〵〳〵。と大聲へで呶鳴つた方が宜いと思升」と云ふた事がある、是は少し酷評ではあるが、決して其傾がないと云はれぬのである。

(三) 天の綱鳴時雨の炬燵　茶屋場の段

此外題は近松門左衛門作と聞く、多分享保五年子十二月(今大正十五年を距る二百七年前)竹本座に上場。其後五十八年目、即ち安永七年戊の四月廿一日(百四十九年前)近松半二と竹田文吉が改作し、心中紙屋治兵衛と銘を打つてから流行出した物と思ふ。此時に此段を、元中太夫改め三代目政太夫、俗に鹽町、播摩屋理兵衛と云ふ(彦山の九ツ目や鞆山噺の在所を驚く程語つた)人が語つたとの事であると聞く。此段を語るには「中太夫の四季變り」と云ふて、變りの名人であるから、人情の變りを大事に修業せねばならぬのである。夏が秋に變り冬が春に變るやうに、男女の人情、喜怒哀樂がサラ〳〵と變る丈けの修業の腕前がなければ、歯が立たぬ物である。庵主素より此様な物を語る了簡も、語れる物とも思はぬが、其藝道の筋合丈けは、故攝津大掾に就いて研究した事がある、其時の問答が床本にチヤント書いてあるから、夫を左に掲げて同好者の參考に供へやう。(此本は今豐竹古靱太夫に與へて保存させてある)

庵主曰く。此段の枕は、普通の三味彈が朱を繰つた間で語つては駄目で、總て太夫の腹の間に引付けて、其模樣に聽衆が心醉する樣に語らねば先きの治兵衛が怒る時の變が出來ぬ。

大掾曰く。お說の通り。三味線はスネて彈け共、語るには心を引締め、腹に力を入れ、ユツタリ語り升。『堰かれて逢はれぬ』からは少々ウイて腹に物なく、カン張つた方がよろし。

庵主曰く。『身は空蟬の拔殼の』は『拔殼や』でなければならぬ。

大掾曰く。御說の通り。

庵主曰く。『ア、有難い忝い』から以下は、成べく西風に止め〳〵がベタ〳〵せぬやうに注意を要す。

大掾曰く。お說の通り、併し女の情を持つやうに。

庵主曰く。『親方にせかれて』からは、足取と、產字と、音遣ひが、只の義太夫節では駄目である。其風を呑込まねば語れぬ。

大掾曰く。頓とお說の通り。

庵主曰く。『外には』より山に十分語る是から此段の本題に入る處。

大掾曰く。お說の通り。

庵主曰く。『內にも小春が』よりの變りは、太夫の腹に十分の變りが必要である。

大掾曰く。夫は違升。此變りは三味線の方から拵へ升。併男女の情の變りは、太夫の心構へが大事であり升。小春の心が嘘故尤も空々敷腹にて『突かれぬ胸にハット貫き』以下の小春の詞遣ひ、息の六ケ敷事、此段にて此所の外なし。

庵主曰く。孫右衛門は眞實小春を薄情物と思ふてゐる腹構へが、藝力に出來て居ねば、先の文を見た時の變りが出來ぬから、其等の修業が常に大事である。

大掾曰く。貴說の通りでムい升。『馬鹿を盡した此刀』以下は、旦那は之を詞と間違へてムるやうに聞へ升。此等は皆地色でムい升が、其地色の語り方が、ソンナ御修業では駄目でムい升。

庵主曰く。『ア、誤つた〳〵』以下は、治兵衛が天性正直者故、眞實心から誤つた心で語る

事。

大掾曰く。貴説の通り。

庵主曰く。「此治兵衛の出て行く所は」阿漕の平治が自訴に出て行く時の三味線を弾かせて語つては如何。

大掾曰く。平治は決心をして出て行きます。治兵衛は心がマダ十分殘つて出て行きます。

庵主曰く。『ヤイ赤狸奴』からの治兵衛の詞は、又十分の山で語る、其息込が六ケ數い思ふ大掾曰く。貴説の通りでムい升が、治兵衛が腹立の餘り泣く程セキ込む心持が、昔から滅多に出來た者がムりませぬ。

庵主曰く。終りの『戀の道』で男泣に泣いて置いて『別れ』とトル事。

大掾曰く。ソウなくては叶はぬ所と思ひ升。

以上の書抜にて、義太夫節の研究が、ドンナ物であるかと云ふ事が、初心の人にも分らうと思ふて書て置。聲も音遣ひも節も足取も詞ナマリも大事は大事であるが、語る心持がチヤンと鍛練が出來て居らねば、今時の太夫の樣に、皆節を付けて讀むばかりの仕事に成るものである。

（四）小春治兵衛 時雨の炬燵 紙屋内の段

此外題は享保五年子の十二月（大正十五年を距る二百〇七年前）竹本座に上場せしが始めと思ふ。尤も其時は大近松の作で、後には半二、文吉などが増補した物が多く用ゐられたのであると思ふが今語る紙治は染太夫が此役場を語つたと聞く、尤も宮戸風とは云ひ傳へてある事もあるが其方は格別殘らず、只「チクリ」斗りに其風が殘つて居る許りで、先づ名人染太夫の風が勝利を占めたものゝ様にと思ふ。此名人染太夫は又大家の宮戸風には、大分尊敬を拂つて語つて居る事が分るが、何様一代の名人染太夫の語り風は又格別であつて、淨瑠璃古咄集と云ふ本に

「染殿が此段を語り出すと其儘、年増髷鐵漿付けの女房衆達は、おさんの思ひ餘りに貰ひ込んで、一人も顔を得上げられざりし」

と書いてあるにても、染太夫が如何に其情念の腹構へが切實なりしかゞ分るのである。

總て斯る心中物などは、嫌氣が射す程情念の切實を捕へて語る位にして、聽衆には丁度好き程度

に感覚する物と云ふ事を聞いて居る。夫は其筈である。元來が世話仕立ての物であるから、運びと腹捌きがサラ〳〵と出來て居るから、餘程其情を腹に嚙み分けて疊み込んで持つ事が濃厚でなければならぬ譯である。時代物になると、節付け足取共、其情緒を懇篤に辿るよふに出來て居るから、餘り執拗く語ると所謂「捗へ過ぎ芝居臭く成る」の虞れある譯になるのである。

當時染太夫の藝風を海棠の花に譬へ、彼の牡丹や、芍藥や、梅や櫻の如く美やかな物の群を脫して、色合ひと云ひ、姿と云ひ、顆な垂れて青芽の先を失はず、一種忘れ難き思ひを、永く殘す色氣と、悲し氣とを深くする、無理のない藝風と云ふたのも、至極尤もである。先づ伊賀越の五段目、饅頭娘を聞いたら、直に感ずるのである。作としては何でもない、小兒欺しのよふな、すら〳〵と書いた夫を、アノ皮肉さの藝風はドウである、滿足に眞似の出來る者は一人もないではないか。其次に沼津の里となりては、師匠の男得齋、即ち咲太夫を前に廻して「小揚」を語らせ、チヤリの名人古今一品と云はれた程の咲太夫が、目の廻るよふに面白く語つた跡に出て、『お米は一人物思ひ』と語られるかドウか。皆々責任を以て考へて見たら分る。夫が大成功であつたればこそ、今日まで其藝風が殘つて居るのである。其他教興寺であれ、吃又であれ、皆名人中の名人元祖義太夫や政太夫

やと云ふ天下の一人者が語つた物を染太夫が語れば語る程、其自分の風を殘して行つたとは、何と云ふ恐しくも又尊き藝人であらう。即ち此紙治の如きもチャンと名人の一人者たる、宮戸風に敬意を拂つて語つて居るが、殘つた物は、染太夫風斗りとあつて、世に傳へられて居るのである。即ち『直ぐに佛なり』の「チ、ン」で裏に廻る、アレが宮戸風との事、筑前掾の語つた菅原の三段目、佐太村の「送り」から『年は寄つても恐いは親、上へも上らず犬つくばい』アレが宮戸風と聞いて居る。即ち『門送りさへ、ソコ〳〵に、治兵衛側に有合す、定木を枕うたゝ寢の』皆宮戸風の運びと聞く。夫から『涙にしめる其風情』と語るに『しめる』の音遣ひが皆ドカ落ちであるが、夫が染太夫には決して無い事と思はねばならぬ。此人のお蔭で、總て何でもドカ落にならぬよふに、淨瑠璃の天下の掟が極つたと云ふてよいのである。『しめる』を高い處から出て、即ち『シメー』と高い處から『エー』と產む處が「二」に落ちるのが悪い、『エー』と持つ處は、最一つ『エー』と「三上み」から「三を放した」處に漂よふて「二」に落ちて又「三上」に戻つて『ルーウ』とならねばならぬとの事、又政太夫の語つた忠臣藏四段目の『一間もヒッソと靜まり』の如く、夫は「二の」音の咄ではあるが『シズウーウ』と『ウー』の產みが、モウ一に落ちて居る、夫がいかぬので「チン」と聞いたら、高い處から『シズ』を下がらぬよ

ふに、夫から『ウーウー』を産む時に、先づ「二の上から二を放した處」と順に下つて、挨拶をして下るのである。夫が修業する處である。夫で大掾や大隅などが今の奴共は「無理斗り云ふ〳〵」と云ひ死をしたのは夫である。夫は無理に相違ない。階子の段を一段目から七段目に飛下りたり、三段目から十段目に飛び越えたりするのを聞いて居ては堪つた物でない。浮雲ないと云ふよりも、無茶苦茶である。

庵主は永年大掾、大隅の浄瑠璃を聞き殺す程聞いたが、ソンナ無理な處は一ケ所も、又一度もなかつた。今の太夫衆の語るのは、飛降り飛越してないのが一つも無かつたのである。夫は修業する處の目標が違ふて居るからである。『お三は惘れつく〳〵と』宮戸地で語るのに、又一つもお三が惘れたのがない、只だ良い聲はチョイ〳〵聞こえたが、ソンナじやら〳〵した處ではない、是がお願ひじやからよく魂を据えて聞いて置いて貰いたい。貞操無二の女房お三が、天にも地にも掛替へない大事の〳〵の夫が姑に向つて、情婦小春の悪口愛想盡かしを云ふて、誓紙まで書いて渡した跡故其夫たる治兵衛が、滿身の情愛の復歸するは、女房たる自分である。私に元の通りの愛を注ぎ掛けて呉れるのじやと、心の底から喜んで、晝寢の蒲團をソーッと除て見たれば、其蒲團の襟に、治

兵衛の涙に浸つて居るので、ビックリして扨ても〳〵男の女に執着した心は、斯くも恐しい未練がある物であらうかと思ふ一刹那の『悩れつく〳〵と』である。夫は良い聲處の騒ぎでない、涙に張り切る叫びである。夫が聽衆の腸に短刀でも突込まれたよふに刺されるから、聽く女房達は耐へ溜らぬので、聲も得上げなかつたのである事が分るのである。夫に治兵衛が空ら〳〵數、夫を胡魔化す積りで『子まで成した二人が中』と云ふたから、お三はモウ中々承知せず『イエ〳〵憎いそふな〳〵』と強き叫びが溢れ出て、ビッタリと得も云はれぬ息がめつて、『憎ましやんすが嘘かいなァ』と涙で語るから、此を聞く物が人間では溜つた物ではない。劇を超越して、實際以上の打撃を受けるのである。大掾が『憎いそふな〳〵』と云ふ時の顔は、何時も恐ろしくてビックリするよふな聲を出して居た事は、知つて居る人がマダ何人も居る筈である。大隅は斯く云ふた事があつた。

「春太夫師匠が云やはりました。お前等に染はんの藝が分るか。俺は紙治を語ると、毎日體が痛ふなるがナ。大の男が優しい正直な貞女のお家はんのお三さんが、悔やしい殘念なと云ふ張詰めた心の眞似を爲るのじやさかい叶わぬがナ。夫が中々甘く行かぬので難儀するがナ」と咄したと聞いた。

(五) 檀浦兜軍記 三段目の口 阿古屋琴責の段

此外題は享保十七年子九月(今大正十五年を距る百九十五年前)、竹本座に上場した筈である。作者は長谷川千四と聞く。役場は竹本大和太夫との事である、此人は前名彦太夫と云ふ名人にて、此段を語りて翌年丑三月に死去した筈である。其後東の豊竹座にて此外題を上場せし時は、豊竹駒太夫が此口の場を語つたとの事。此の人は音遣の名人にて今に至るまで此場を駒太夫場と云傳へて居るが、彦太夫の西風も、チラ〳〵と交りて居るとの事である。併し此駒太夫と云ふ人は、聲曲上天稟の妙手にて、後世に其風格を殘した、名高き達人であつて、此人の風斗りが持て囃さるゝのである。此外題が竹本座の大和太夫にて上場せられて、三年の後、享保二十年卯の八月、豊竹座にて「苅萱桑門筑紫轢」を上場した時、此駒太夫は始めて豊竹座に入座し、素人の旦那衆播磨屋彌三郎が、豊竹駒太夫と云ふ藝名を貰ふたのである。故に此琴責の段は大和太夫の語り始めにて、駒太夫は其風を遁りて語つた物に相違ないのである、故に長谷川千四が、古昔の自由主義の如き學者の徐

祥とか云ふ人の書いた名文を拾ふて來て『鳧の脛短かしと雖も、之を續がば憂なん。鶴の脛長しと雖も、之を斷ば悲みなん』と堂々筆陣を布いて書出した其の『鳧の』と語り出すのに『カーモーヲノベキ』と語らぬ、元祖義太夫が語る「原則」とも云ふべき掟は「一」の絃を「ハジク」音に響くやうに、字を詰めて語る事を、西風の根本と心得ねばならぬとの事である。故に『カモヲ――ヲノハギ』と「ノギン」の「ニジツタ」所に止めるとのこと。是は西風として決して忘れてはならぬとのことである。即ち『民を制すること』も『ターミ――イヲ』とは西東とも決して義太夫節では云ふ事はならぬとの事二字の假名は大抵「ツメ」て語り出すので『タミ――――イ――ヲセイスコト』と音を遣ふのである。此段斗りでなく、吃又でも『家貧く』を『イ――ヘ――エ』とは語らず『イエ――――エマヅシクテ』と何時でも「一」の絃を「ハジク」音をトックリと据へて後を語るのが、政太夫風でも、筑前風でも、同樣である。昨今琴責を方々で聞いて見るに、斯道から押して見ると、耳立たぬのは、滅多にない。大抵東西分からぬ遣り方であるやうである、此頃注意して聞いて居ると、古靱太夫丈は總て夫等に氣を付けて語つて居るやうに思はれるのである。古老の咄に聞いて居るが、故攝津大掾が明治元年の辰年、即ち彼が三十三歳の時の閏四月二十六日から、大阪稻荷文樂座にて、此段の「阿古屋」を語

りし時「重忠」は茂太太、「岩永」は唉太夫であつたとの事、夫から四年目未年の八月一日から又同座で此段を語る時は、彼が(三十六歳)「重忠」で、「阿古屋」がむら太夫で、「岩永」が古靱太夫である此兩度とも、三味線は新左衛門であつたそふじやが、三味線が第一の呼物であつたとの事である。庵主は或時彦六座で風斗此段を聞いた、大隅太夫が「重忠」で『例の粗忽と、重忠押止め』から重忠に語つた、『マ――ア――ズ』『チン』『マタ――ア――アレ――エエヨ、イワナガ』と「中」で止めた時は何だか其息組に押されて恐ろしい思ひがしたので、四十年後の今日まで、夫斗りが耳に殘りて、外の役は誰が並らんで居つたか、皆消へて少しも記憶に殘つて居らぬのである。コンナ物であるから修業の力量は一文高な物で、良加減の胡魔化しでは、影も形もある物ではない、故に稽古と云ふて「イニシヘ」を「カンガヘル」と云ふ修業が第一である、夫に少し語れたり、彈けたりすると、古人の苦心の藝術を捨てゝ、自分の力丈け相應の拵へ事斗りを振り廻すから、藝も人も墮落する斗りである。トウ〳〵人氣も評判もない、今日の如くになるのである。夫から古は三曲の稽古は全く本文より離れて修業したものゝやうである。唯謠ふ斗りでなく、責めらるゝ氣を失はぬやうに修業せねば「琴責めでなくて、琴うかれになる」と古人が云ふて居るそふである。夫から段切になつて『バチリ

セウアル』と語呂で『ベチリ』と云ふのは良くない、『撥』で止めて『利生ある』と語るとの事、又『直なる道こそ有がたき』でなく、矢張丸本の通りに『直なる道の、言の葉や』と語りて『言の葉や』を三段目切の「三重」に残すやうに語るがよいとの事である。

(六) 苅萱桑門筑紫轢 三段目切 宮守酒の段

此外題は享保廿年卯八月(大正十五年を距る百九十二年前)豊竹座に上場した筈である。作者は並木宗介、同丈助と聞く、役場は元祖越前であるとの事、然るに故攝津大掾が故圓平の紿で、明治十四年の十一月に此段を語つた時、圓平と大掾との工夫で、此段を駒太夫風に譜を付けて直して語つたら、非常に評判が悪くて、大失敗をした。其後明治十九年の五月に故吉兵衛(江戸堀)の紿で又出したら、又失敗で僅かに十七日で千秋樂となつたので、旅稼をしたとの事。其後故豊澤廣助で此段を語る時、大掾と廣助(即ち紿阿彌)は、此二度の顚末の咄をするから、庵主は少なからず理窟を云ふた。其譯は

「元來藝術と云ふ物は、傳統の力を以て崇高とする物である。一巳人の細工で成立つた藝術は、善にして良なる種類の物でも、淺薄と云ふ事は免かれぬものである。殊に此義太夫節は、古來よりの傳統のみに因つて、風格を異にして居る其(風)と云ふ物を構はねば、聲の好い者の呶鳴

勝ち、腕の達者な者の彈まくり勝であつて何も修業をする必要はない。一段〳〵と語り始めた、古人の風格を辿らねばならぬからこそ、師匠に就いて、艱難辛苦、血の涙を出して習得するのである。故に若し、此宮守酒が、果して越前風と傳はつて居るならば、ナゼ越前風を習得せぬのであるか、庵主は殊に不滿に感ずるのは、藝人の天狗と増長である。圓平が、當時の勢ひは、腕も、見識も、飛ぶ鳥も落す有樣で、天下無双の春太夫を彈殺し、人氣に於て、天下一の越路太夫を彈くのであるから、ドンナことをしても仕たい放題である、故に、何んでも見識と、腕とに任せて、傳統の風を改竄するのである。元來、圓平が後世に、崩れた藝を回復したのは數限りもなく、庵主などは全部夫れを感謝するが、改竄すると云ふ事は、餘程の早計で全く不謹愼の行爲と思ふのである。殊に駒太夫が、如何に名人であつても、丁度此の(苅萱)の書下しの時、播磨屋彌三郎と云ふ素人が、始めて藝人となつて、越前門下に加はり、駒太夫と云ふ名前を貰ふた時である、其全くの大序語り端場語りの風に、其東の元祖の風を改竄して易へるなどは、言語道斷である、又越路も如何に先輩園平の申條とは云ひながら、恩師春太夫が死んで三年を終つた計り位の時に、元祖の風をかへて、此三段目を語つたと云ふのは、全く不

謹愼の行爲であると云はねばならぬ、故に兩人とも藝道の天罰覿面にて不人氣不入にて、芝居が長く持たなかつたのである」

と遠慮もなく言ひ放つたのである。之を聞いた大掾は

「イヤ早全く旦那の云やはる通りでございます、其頃は何もかも、若い氣に任せて、無我無中で遣つたに相違ムりませぬ、昔の豪い方は五十にして天命を知ると云やはつたそうでムいますが私は七十越しまして始めて天罰を知りました、有難ふムりました」

と禿た頭から汗を流して懺悔したのであつた。廣助（弦阿彌）も嘆息して

「成程其の頃は、新町の師匠が（是れは淋しくてドウもならぬ。ドウも是れはガザ〳〵して彈いて居られぬ）と云ふて、易へて居やはりましたが、私共は年もいかず、藝の事は分りませず、只だ豪い師匠じや、恐い師匠じやと計り思ふて居りまして（今度も又我々の役の物も、易やはるかも知れぬから、夫を聞いて稽古を仕やう）などゝ、仲間同士で互ひに咄して居た事もムりましたが、成程旦那はんから見れば、何も新町の師匠が恐い事も何もない、澄み切つた心の藝道熟心のお心で、遠慮もなく云やはる事を、今聞きますれば、其通りに違いムりませぬ、其譯

は圓平師匠が彦六の方に行きやはつてからは（淋しい物は淋しいで六ケ敷、賑やかな物は賑やで六ケ敷、夫が鹽梅よく彈けぬのは、力と修業の足らぬのじや、何でも藝人は氣を付けて、凝らぬ事には淋しい譯も賑かな譯も分る物ではない）と云ふて夜通し一睡もせずに、思案して居やはつた事も厶りました、して見ると、越前さんの風は、風で凝り處がおますさかい、別に駒太夫風に易へやはらぬでもよかつたかも知れませぬ……一見さん、今度は何でも昔の越前さんの方で遣る事に致しませふ」

と云ふと、大掾も

「マア兎も角も、惡るい癖も付いて居るさかい、氣を付けて稽古をする事に仕ませふ」

と云ふ事になつて來た。夫から初日が出て、庵主が聞いたのが、即ち生れて宮守酒の初物であつた當時聞いた人は驚へて居るであらうが、其大掛りで淨が拔けて無理のない粘り氣の好い事と、腹捌きのサラ〳〵した所は全く眞似の出來ぬ、天下無比の藝術と聞へたのであつた。

五行本の枕は、丸本とは多少遠ふて居るが、此方が良いと思ふ『月と雪との眞中に。花と詠める後帶。男撰みのゆふしてが』の「本フシ」から越前風になるとの事、夫から『誰ぞ賴まん』と云へる

までの品格を、怯ず憶せず語り進む大掾の力量は、物恐ろしくて決して凡人の窺ひ知らるゝ事ではないのである。『テモいかいお心づかひ。私はゆふしでと申て。まだ人數にも入らぬ女』からの詞遣ひは、實に六ケ敷運である。此詞遣ひで此段の藝格が極るのである。夫から『あわれ此矢を貰ふ氣な』と「カワル」心持が、聽衆に溢れかゝるやうに語る事『テモ粋な兄嫁御』から又「カワル」、夫からたゝら新洞左衛門の詞捌きが、又大變である。總て其氣が浮かねば語れぬので、十分に讀んで〳〵讀み拔く事、夫からゆふしてが『かく成行は神の罰。神明怒りの鏑矢に。射殺さるゝ覺悟をして』と大掾が語つた時は、滿場其藝力に醉はぬ人は一人もなかつたやうである。夫から新洞左衛門が詞のよい事と云ふたら、義太夫節でなくて、全く大掾の精神の發露であつた。『未來で夫婦と悦べども。悲む親が此世から。夫が見へるかたわけ者』と云ふ時、庵主が双眼鏡で見たれば、大掾も廣助(弦阿彌)も瞼毛に涙の露の光が見へて居た。總て斯る決心と腹構へにならねば、斯る段は語れぬのである。

(七) わだかつせんおんなまいづる 和田合戰女舞鶴 三段目切 市若切腹の段

此段は享保二十一年辰の三月(大正十五年を距る百九十一年前)豐竹座で東の元祖豐竹越前少掾が語つた物で八釜數物であると聞く。作者は並木宗輔で、即ち此四段目にある小倉山莊で「世の中は常にもかもな渚こぐ、海士の小舟の綱手かなしも」と右大臣實朝が詠んだ歌を百人一首の中に加へると云ふ趣向をコジ付けた作である。庵主は竹本攝津大掾が、明治三十五年に文樂座で此段を語つた時、三度芝居で聞いて旅宿で三度教へて貰ふた事がある。然るにこの段は元來不徹底な惡文章であつたので、日頃の研究を書入れしたものを大掾の前で語つたが、大掾は矢張り舊格を尊んで、事々く筆記教訓をして呉れたのである。今其書抜を左に記して見ると、

庵主が『三寸〳〵斗り射込みしは』と語つたに
大掾曰く『三寸〳〵』と切つてはいけませぬ。『三寸斗り射込みしは』と續けて語るのです。
庵主が『最前もそなたの友達衆に』と語りたるに

大掾曰く『も』の字はいらぬ様に存じ升。
庵主が『兜を猪首に着けたのはヲヽ』と語つたに
大掾曰く『ヲヽ』は如何哉。
庵主が『忍びの緒を屹度結んでおきやらぬぞ』と語つたに
大掾曰く『屹度』と『ぞ』とは言ごろ悪敷くなる故無しでは如何哉。
大掾曰く『私に結んで貰らへとか、「ムンー」と考がへ、ム、聞へた』と有度し。
庵主が『今此紐の切れたのは、コレハ』と語つたに
大掾曰く『コレハ』何と云ふお心持が更らに分りませぬ。
庵主が『主を殺した者の子』と語りたるに
大掾曰く『此は』主を殺した者の子は』と語られた方が宜しうム升。
庵主が『遁れぬ命、ヲ』と語りたるに
大掾曰く『ヲ』はいらぬように思ひ升。
庵主が『紐も母が付直し、丈夫にして遣りませう』と語つたに。

大掾曰く『紐も母が付直し』『マ』と入れて『丈夫にして』と力を入れて口拍子に『マ』と入れるのでムイ升。

庵主が『お渡しないは如何に將軍の母君とて餘り親御ガイの我儘』と語つたに

大掾曰く『お渡しないは餘り。親御ガイの我儘』でも將軍の母君と云ふ事は聞人に分りそうに存じ升、如何。

庵主が『ムヽ、ソリヤそなたの夫』と語りしに

大掾曰く『スリヤそなたの夫』の方が宜敷と存じ升。

庵主が『此子が助る筋もあらば』と語りたるに

大掾曰く『此』も』の字は音遣ひの邪魔になる樣に存じ升。

庵主が『早御身代りと云ふ事を虫が知らして』と語つたに

大掾曰く『虫が知らして』と『早』の字は不用と存じ升。

庵主が『敷けば夫も塀の外』以下の淺利の詞は全然不同意である、忍んで樣子を聞に來て居る淺利が『チヽ、父は是に來て居るぞ』と大聲に詞で云ふて溜るものでないと云ふ理由の本に、

「地色」に語つたに

大掾曰く此を「地色」にお語りなつたは御尤もに思升が、東物故「地色」は餘り好ましからず「中ノ
ル」の心にて御語りなさるが宜敷、成程「詞」では惡敷と心付ました。

庵主が『市若を何身代りに』と語りたるに

大掾曰く夫より『願好んで』の方が宜敷樣に考へます。

庵主が『忍んで來たと延上り』を『忍んで』を上の音で高く出たに

大掾曰く『忍んで來た』と云ふ文字を上で出てはイケませぬ、「延上り」を「地ヘル」で語りて『足つ
ま立てゝ』『足爪ま』の二字を「上」の音で出なければイケませぬ。

庵主曰く師匠が語つた時に『モいかひ御苦勞(板額)御苦勞の(與一)』と分けて語られたが跡に『ハ
アはつと』を與一で語られたから前の『いかひ御苦勞御苦勞』は皆板額一人で語つて如何

大掾曰く夫はイケませぬ、前の文句に『我子の首を受け取り渡し』と有升故二人で語る物と聞いて
居升、前後をよく御考へなされねばイケませぬ。

庵主曰く師匠の語られた時『歎けば夫も塀の外』の次に「吉兵衛」が「テヽン」と「ハリ切」で彈いたら

師匠も又『歎けば夫も塀の外』を皆男で語つたが僕の考は之と違ふ「チ。チン」と云ふ譜にして『歎けば』は女で語り『夫も塀の外』は男の氣で語りたいと思ふ。元來「ハリ切」は成可男の「地合」『チ。チン」は成可女の「地合」に遣ふが宜いと君に教しへられて居るから僕は「チ。チン」が宜いと思ふが如何

大掾曰く成程此は氣が付ませんでした。私共は若い時から「ハリ切」斗りで語り癖に語つて夢我夢中で今日まで語つて來ましたが是丈はドウしても「チ。チン」ではなければイケませぬお蔭で大變宜い事を承たまはりました。

以上に因て見るも如何此段の研鑽の面倒な物であるかと云ふ事が分るであらう。夫で大體に於て此を越前風に語るには腹構へが根本から違はねばいかぬことがわかる。

『程なく一子市若丸』と云ふ一句が『程なく一子』が「地ハル」で、『市若丸』が「色」である。夫が此段の段切まで突抜く丈げの腹力で出なければ其始の「江戸」と云ふ三味線が彈かれぬのである。元來「江戸」と云ふ譜は多く何人かが舞臺に出て來る譜である。故に詞遣ひと音遣ひが毛筋程も胡魔化しの出來ぬ藝格であると云ふ事を克く心得て堪念に修業せねば物にならぬのである。

(八) 堀川夜討　三段目切　辨慶上使の段

此外題は文耕堂や三好松洛の作と聞く。又初演は、元文二年巳の正月（大正十五年を距る百九十年前）に竹本座にて若竹政太夫、即ち二代目義太夫、後の播磨少掾となつた太夫が役場と思ふが五行本に竹本越太夫、鶴澤仲助とあるは、後年江戸で改作して講座に上せたとの事で、此等が風となつて今日傳はつて居るとのこと。併し元來の作が悪るい爲めか、文章をいじりいじつてメチヤ〳〵にしたのみならず、語り方も何が何やら判らなくしてしまふたものである。隨つて絃の方もヨタの競爭會見たよふに、太夫と共に當節斗りになつて居る。されば大掾生存中に曰く「堀川夜討の四段目藤彌太物語は、園平師がスッカリ朱章を調らべて、キチンと致されまして、前の源太夫と三郎が勤めましたと聞ましたが、三段目丈は吾々生き殘つた者共が、何共申譯ない哀れな物にして仕舞ました」と云ふて居た。

即ち小音であつたと云ふ二代目義太夫、即ち若竹政太夫、所謂播磨少掾の語り場故、尤も眞西風

に位取を語るが第一で、足取音遣ひが大變に六ケ敷のである。枕からシットリと大地にメリ込むよふに彈いたり語つたりして、『ムヅと座して一禮し』まで語つたら、滿場の見物は、モウ其舞臺に醉ふて何處も彼方も元暦頃の氣風になるやうに、語り且つ彈かねばならぬ。『程もあらせず入來るは』の一句は、譯が分らぬでも元暦の頃の鎌倉と云ふ事を思へ、又大山の崩るゝ計りの大難題を胸に持つた辨慶が、鎌倉から態々京に馳せ上つて、今此所に入り來る時の心地で語れと「淨瑠璃古咄集」に書いてある。總てトン、ツン、テン、と云ふ音に、限りなき重味ある妙趣を含んだ三段目の音遣ひを研究修業せねば、齒の立たぬ品物である。

『イザお通り』は侍從太郎で語り、『御案内』とは花の井で語る。『跡に引添ふ武藏坊、鎌倉殿の難題を、ツイこう〳〵と云へばへに、暫く心奥の間へ、打連れ伴ない入にけり』の文句が、此段の一番六ケ敷所である。古今獨歩の忠臣武藏坊辨慶の息組を語るは、此所を外してはモウないのである豫ても云ふ通り、義太夫節の半可通の人々が、ヤレ其處でソー語れば、奥の筋を割つて仕舞ふとか、ソー云へば人形の腹が割れるとか云ふが、夫れは此藝を知らぬ人の言である。元來此義太夫節と云ふものは、能樂から出たもので、組織が一切能樂であつて、チヤンと主手脇が極つて居る。夫

に主手連れ、脇連れが付いて居る。夫から能樂は、絕對に表情を禁じてある。義太夫節は表情が主である。夫が尤も極端である。夫故兩者共其の極端が六ケ敷のである。

表情を語れば割れるのである。割るには其人形の意思の變化と境遇の差別が、太夫の腹にチヤンと理解せられた表情でなければ徹底せぬのである。夫を實行するには、技量が入用であり、其技量は修練せねば出來ぬのである。其修業には斯藝の種が正式でなければならぬ。今の太夫共は、絃の音の何物たるかをも知らず、又極まり切つた三段目、四段目の音遣ひをも知らずして、暗雲に吹鳴り散らして、人氣と金丈けを欲しがつて居るから、全く浪花節と一所の、無茶苦茶藝と、なり下つたのである。

夫斗りでなく、今の素人の馬鹿天狗共が、一番此藝の賊である。三段目、四段目計りより外知らずに、太夫を凌駕せん斗りの殼法螺を吹立て居る、是が又藝の惡るくなる一原因である。此等は飯を食ふ事を知つて、米と云ふ物の譯を知らぬと同じ事である。即ち大序が苗代で、二段目、三段目四段目に付隨する端場や道行や、景事等にて組立てて、耕耘幾多の艱難の經過となつて、始めて三段目、四段目の切場と云ふ米や、飯になるのである。其三段目や四段目の切計りを修業して語つて

も、夫が不味いから、素人義太夫の事を、昔から冷飯太夫と云ふのである。

藝人は身分は卑くとも、藝は權威である。權威は修業である。其修業が悪るくては、本が腐つて居るから、何も無いのである。夫を錢を出して聞く奴、是が人間中の一番の馬鹿者である。此堀川夜討の三段目も今錢を出して聞く太夫はあるまいと思ふ。

「おわさの口説」はアンナに俗受の陳列會ではいけない。詞ノリの心持で憂の腹でサラ〳〵と語り捏くり廻したり、引摺り廻したりしてはいけない。元來が此段は辨慶が泣くよふに書いたもの故、外の連脇で舞臺を破壞さぬよふにせねばいけない。皆辨慶に對する藝の保護者でなければならぬ。夫から侍從太郎が脇であるから、中々位取が六づかしい。

（九）近頃川原立引（ちかごろかはらのたてきひ）　お俊（しん）傳兵衛（でんべゑ）　堀川猿廻しの段（ほりかはさるまはしのだん）

此段は近松半二の作と聞くが、初演の年代甚だ詳からず。何でも元文三年頃、京都布袋座にて、竹本河内太夫が立看板を出して、未曾有の大入をなせし時、二代目豊竹八重太夫が勤めたのが初演なりとの事なれど、確かとも思へない。併し此八重太夫は、音遣ひと足取の名人、殊に太夫として口捌きのよき人で、世に語呂の伊豆平と云ふ仇名を付けられた位評判の太夫である。其名も、此堀川の段で名高くなつたとの事である。節付けは西風であるが、東風で修業した太夫故、チョイ〳〵其風が交つて居るよふである。

攝津大掾は、『ヲヽお鶴さん』と云ふと、目が明いた人のよふに聞ゆるとて、『アヽ。お鶴さん』と語つて居た。婆さんの詞の處はなる丈淋しく語る事に心掛けねばならぬ。此謡は元園八節の鳥部山から取つたので「一人來て二人連立極樂の」と云ふ文句の奥であつて、節も大方園八の風を取つてゐるやうである。『女肌』から『立姿』までお鶴で、『男も』から『色盛りをば』までが婆さん。又『戀と云字』

から『捨小舟』までがお鶴で、『どこへ』から『島迎もなし』までが婆さん、『島部山』から『後髪』までがお鶴で、『弾三味線』から『祇園町』までが婆さん、『茶屋のやま衆』から『色酒に』までがお鶴で、『亂れて』から『騒ぎ合ふ』までが婆さん、夫から合の手があつて、『アノお面白さ』がお鶴である。『染殿』から『某』までが婆さんで、『去年の』から『かこ付けて』までがお鶴で『忍び逢た事』から婆さんである此掛合が婆さんとお鶴とハッキリ分るのが滅多にない。修業の鍛練を積ねば此誘が賑かに計り聞へて、ボコ〳〵三味線の貧家の稽古屋風に淋しくは中々聞へぬのである。是れが淋しく薄煙りも立兼ねたやうに聞へてこそ、此段全體の主意が動いて來るのである。與次郎の出が尤六ケ敷いので『息せき』も『母を大事と』も太夫腹一杯の氣構へが聽衆に移つてこそ、藝と云はるゝのである。聽衆が堀川は派手なものじやと云ふたら此段は語れて居らぬのである。此點になると攝津大掾も大隅太夫も予はマダ感服する事が出來ぬ、況んや其他をやである。『婆さんの身悔み、與次郎の慰め詞』等は此の段の眼目として六ケ敷所であるが、要するに音を陽氣に、腹が一杯に陰氣で、夫がハッキリ聽衆に分らねばならぬ。夫から今一つ六ケ敷いのは、三味線が全部反對の腹構へにならねば、其藝の色合が浮いて出ぬのである。今時語る門付け見たやうな堀川計りでは、浮いて面白い計りで、沈ん

だ此親子暮しの境界に、滿場の聽衆を引込んで、淋しき中に潜んだ人情の詩を聽衆に讀まする事は出來ぬのである。此段は義太夫節中に珍らしく泣處の少ない段であるが、夫でウンと泣かせねばならぬ責任があるのである。第一正直一圖な與次郎が、孝心の詞を語り盡し得る人は、眞正に孝を知るの太夫である。『微塵も案じる事はないぞやと』顏を母の前に押し付て「ヲス」、夫でも母の一度沈んだ氣は浮立たぬ、與次郎は何とかして母を慰めて氣分を浮立たせやうと思ふて、今まで嚙八百を並べた以外、何物か捕へ來て母を慰むる種にしやうと思へ共、貧家の事故モウ種切れである。其の種を捜し求むる節付けで、「夫にマダ〳〵」と捜して居る、ソコに「ヲ」と家の事を見付出して、拍子を打つたら、三味線彈が(イヤ)と乘せる、夫に乘つて『マダ〳〵〳〵〳〵』と語ると、文章も情も節も皆語れる事になるのである。夫から『母に案じをかけさせぬ』との一句が語れた太夫をマダ聞た事がない。此一句丈けが與次郎で涙の流露する處、『遙か增しでもあろふかと』と云ふたら息でピタッと止まつて、一ぱいの涙で引息を十分に取つて、大へタリにへタッて『母に案じを』と腹の涙で語るのである。夫からお俊との三人の取り遣りも、引〆めて淋しく、又お俊の心情を語るには、「半太夫」と云ふ節付けで、一番太夫の氣を付けねばならぬ節と足取である。『更け行く』と云ふ送

りになつたら、此浄瑠璃はモウ片付いたやうな物であるからこの先は三味線をドン〳〵鍛練さへすれば運ばれるものである。お俊の「サワリ」はベタ〳〵せぬやう、引字せぬよふ、假名切りをピタ〳〵と切つて三味線に彈かせ、婆さんの自覺の述懐を大事にして、詞ノリや地色崩を克く習ふて、腹に情を失はぬよふ、サラ〳〵と語り、猿廻しになつたら、體を全部三味線彈に遣つて仕舞ひ命令の息と間と足を取違へぬやう、與次郎と云ふものを忘れぬやう語つて、段切になつたら、少しの休み氣もなく、太夫は間で三味線をマクリ立て、三味線彈も又間で太夫をマクリ立てるやうにして、ズキンと語り捨て彈き捨てるのである。

（十）ひら假名盛衰記　三段目切　松右衛門逆櫓の段

此外題は、元文四未の四月（大正十五年を距る百八十八年前）竹本座に上場せし物で、作者は文耕堂、三好松洛、淺田可啓、竹田小出雲、千前軒であるとの事、又芋屋平右衛門と云ふ人、竹本鳴太夫と名乘つて始めて出座したとの事。役場は二代目義太夫、即ち竹本播磨の少掾であると聞く。此人は、元祖に較べると、極々の小音の人で、全く修業の一點張にて、成功した人である故に、音遣ひが其藝術の骨子と成つたので、音遣ひの點になると、寧ろ元祖よりも、後世に傳はる音譜の運は、此人の方が元であると云ふてもよいとの事。斯道中興の祖とも云ふべき、筑前の掾の語り口などは、其淵源を全く此二代目義太夫に取つて居るやうに思はるゝ。先づ『妻戀ふ鹿の』ハルフシ風が「一」に落ぬやう、尤も上品に語らねばならぬ、大抵はお筆に色氣があり過ぎて困る、お筆はソンナ人形ではないのであるから、出の文句にも『妻戀ふ鹿の果ならで』と書いてある。『難儀硯の海山と、苦勞する墨憂事を、數書くお筆が身の行衛』との名文は其作者たる文耕堂等が作中の誇りと賞

へられたのである。故に此文句を語り出す太夫は、大概は位負を爲るのである。故園平は「逆楫の枕は近來の太夫さんでは、ドンな豪い人でも、物に成つてる人は一人もなかつたと思はれる。ただ巴太夫さんに(柳適太夫ならん)此枕を云はせた時斗りは、アー良なア、是が本當の逆楫の枕ぢやなアーと思ひ升た」と云ふたとの事である。左すれば大掾も大隅も、園平の耳には、夫が面白くなかつたと見へるのである。「ナン――ン――ンギスズリノ、ウミーイ、ヤマト』と音で語るが此風であるとの事。『クロ――スルスミ、ウキコトヲーヲーヲ」、と音で走るべき味がある。『カズカクオフデガ、ミノユークーウエ』と足を極めて語る事が六ケ敷との事。夫から『松を見當に尋ね寄り』は「ユリナガシ」に品よく收めるのが正式だと聞いて居る。此「ユリナガシ」と云ふ手を能く味わはねばならぬ。二ノ口村の「二ノ口村へ着けるが」、湊の町の「湊の町に着にけり」、又「ギンガ、リ」では、玉三の「白書院」、布四の「庭の紅葉斗りなり」等の如く、皆此節で語方彈方が違ふのである。夫から「詞」から「地中」から「地色」から、皆音の操縱が秘決である。其遣り方運方で、此段が自然と田舍じみた、漁村の漁師の家となるのである。夫から後段になつて『踏碎く頭の皿微塵に成つて死してんけり』になつて、何時も素淨瑠璃では「ツンルン〳〵〳〵』涙にむせぶ腰折松』となるが

是は無理とも無法とも、藝にも咄にもならぬが、然らばと云ふて『畠山の重忠』や『權四郎の船唄』などを、五行本の通りに入れて語れば、惰劣て仕方がない故に、庵主は大掾の頼みで五分間斗りで仕舞へるやうに此繋を書足して置いたことがある。

（十一）ひら假名盛衰記　四段目切　神崎揚屋の段

此外題は元文四年未四月（大正十五年を距る百八十八年前）竹本座に上場した筈である。作者は文耕堂、三好松洛、淺田可啓、竹田小出雲、千前軒等の作と聞く。役場は世にも名高き竹本大和太夫の門弟、竹本大和小掾藤原宗貫と云ふて元祖義太夫の弟内匠理太夫の倅であつて俗稱を近江屋三衛門と云ふ人である、始め三輪太夫とも内匠太夫とも云ふたが、是が則初代の大隅太夫である。明和三年戊の十一月八日、六十五歳で死んだが辭世に「折るゝともひびきは殘れ雪の竹」と云ふたやうに、斯道節語の巨擘と云はれた人で「ノリ地」の名人であつたとの事。彼の「安達の三段目」や「戀女房の十段目」など時代物計り語りてゐたが、寛延二年巳七月即ち此時より十年目に世話物として「双蝶々曲輪日記」が書下しの時自から望んで「橋本の段」を語り始めて「ノリ地」や「地色の運び」や「詞遣ひ」等世話物語りの範を後世に殘されたとの事である。即ち今日まで「大和風」と云ふて「ひびきは殘れ雪の竹」でチヤンと其風が殘つて居る。五行本にも依るが此段の黑朱には多少の間違があるや

うに思はるゝのである。

庵主は此段を竹本摂津大掾が語る折最も熱心に聞いたが、或る時「故五代目鶴澤仲助」に命じて、

「お前少し隙を拵へて大阪に行て大掾に俺が云ふたと云ふて「神崎の揚屋」を稽古して「詞遣ひ」をよく覚へて來てくれ、アノ詞遣ひは大掾の死後には決して稽古して呉れる資格の師匠はなくなると思ふから……」

と云ふたので仲助は早速大阪に行て大掾に咄すと、大掾曰く

「旦那はんが態々稽古にお前をヤリヤはつたからには詞丈では稽古が出來へんがナ、前からの「地合」の仕込で「詞」になるのやサカイ、「地合」からよく覚へて往て旦那はんに聞かせて上げとくれ」

と云ふて仲助を自分の宅に泊まらせて置いて毎日丸一段を語り聞かせて稽古をしたのである。ソウすると越路太夫や南部太夫の門弟供が不平を起して

「我々は芝居を抱へて居て、毎日稽古に往ても師匠は二階に計り仲助と共に引籠つて居て一寸も稽古を仕て呉れはらぬ」

と云うて、大揆の女房のお高に色々と仲助の讒訴をした。お高は女の事ではあるし仲助を呼び付け「寛や(昔の名を呼ぶ)お前知つての通り師匠は今文樂で「尼ケ崎」の大役が出て居る、贔屓の衆からも「モウ年寄の冷水、「尼ケ崎」は引受けな」と云はれた事が度々の處に、師匠は年を取れば年寄の「尼ケ崎」を語りますと云ふてトウ〳〵引受けて語りやはる事になつた。夫にお前はんが朝から二階に師匠を引上げて毎日丸一段の稽古、若し師匠が病氣にでもなつたら芝居の方も贔屓客の方も大變や、明日から當分稽古を止めとくれ」

と手厳敷云はれたので、仲助は其翌日大揆の前に平伏して

「お師匠様昨日お家さんから是々のお咄がございましたサカイ當分お稽古は御遠慮申上たう存じます」

と云ふと大揆目をピカ〳〵と光らして女房と越路と南部の居る前にピタリと座つて

「是お高、私は外の事なら何でもお前達の意見も注意も聞くが、藝道の事丈には口を入させぬ。私が寛三郎の稽古をするのんで、弟子共が悋氣をして、ボヤいて居るによつて、お前は弟子が可愛さにそんなことを云ふのであらうが。私は寛やに稽古して居るのではない、「東京の旦那

はん」のお稽古をして居るのである。明治十四年から御厩員になつて、私位の藝人を何のやうに思召してか魂を入れて眞劍で聞いて下さる。此「揚屋」も前に語つた時聞いてくりやはつて、「アノ「ひらがな揚屋」の「詞」はアノ親爺が生きて居る中に聞て置かねばならぬから死なぬ中に早う行て聞いて來い」と此世智からい世中に態々仲助をお越して下はつた。何と云ふ有難い事であらう、私は毎日芝居で「尼ケ崎」を語つては居れども、誰アれも魂を入れて聞てクリヤはる人はない。年を取つて何事も思ふやうに出來ぬから弟子共でさへヨウ聞いてくれぬ事となつて來た。夫に「東京の旦那はん」は何處か少しでも耳に掛つた事があつたと見へて親爺の事を忘れずに、仲助をおこして下はつたからには一生懸命に稽古して居升、夫をお前は横から何を言ふのや、又弟子共も、其所に持つて來て居る本は此の芝居で今語る本やないか、藝と云ふものは商品のやうに今入用やから、今仕入やうとしても手に入るものやおまへん、私が今語つて居る「尼ケ崎」でも、私は一度も師匠に稽古をして戴いたのやないぞへ、師匠のお稽古は、「端場」か「道行き」か「掛合物位」で、其他の「切物」は、師匠が御連中樣か外のお方にお稽古をして居やはるのを側から聞て置いたのが、今日年を取つて役に立つ所、毎日々々有難い〳〵と思うて語

つて居升、殊に「東京の旦那はん」かてお素人じやぞへ、今「神崎の揚屋」がお入用じやからで、寛やが稽古に來て居のとは違升ぜ、聞いて置ねばァノ親爺が死んで仕舞へば聞かれぬからと云ふて、寛やをおこしやはつたのやから、其お心掛けが藝道の本筋で私は心から有難いと思ふサカイ一生懸命にお稽古をして居るのや。お前方も其心掛けがあるなら、ナゼ私が寛やに「神崎」の稽古をして居るのを、今の中に聞いて置いてくれぬのや。今は今語る物斗りを稽古して、若し今度神崎の役が付いた時に、サア「神崎」が入用になつて來たと云うて、毎日「神崎の本」斗りを持つて來ても私は決して稽古を仕ませぬ。ソンナ事で「神崎」が語れる物ではないから…私は決して弟子が可愛ふない事はない、弟子が藝を輕んじて自身の藝の一大事と思ふてくれぬ…其心に對して稽古をせぬのであるから、決して師匠を怨んでハタに讒訴などする事はならん」

と懇々と說諭して聞かせたので、越路や南部や女房は申に及ばず仲助は只だ藝道の威に推されて、有難涙に咽び、顏も得上げなかつたとの事である。夫から仲助は東京に歸つて來て、庵主に其咄も「揚屋の段」も聞せてくれたが、其後庵主の指圖で柳原伯へ此「揚屋の段」を稽古させ常に側で聞いて居た。丁度仲助が大掾の敎訓を受けた頃は庵主は兒玉大將と大阪と京都の間に滯在して居た頃であ

つたから、大掾が「尼ケ崎」の役のある上に「神崎」の稽古は少し氣の毒と思うたから、暫く稽古を止めさせやうと思うて居る所に、或日大掾が講座で卒倒したと云ふ報知が、京都の旅宿に來た。サア大變、此は女房も弟子共も庵主が大掾を殺したやうに云ふであらうと思ふて、「此は仕方がない大掾の死骸は俺が拾はねばならぬわい」と決心して居たら、幸ひに漸次全快したので庵主は醫者に頭を下げた位で事濟んだ。

一體此「神崎の揚屋の段」と云ふやうな物はマア此位な大騷動の物であるから、事只だ筆の先などで、藝道のなやみを書解かれるやうな物ではない、何れ折を見てボツ〳〵書いては見る積りではあるが、先大體に於て此段の「品合」と云ふ物が第一の修業である。夫には「詞」が根本である。「地合」は又全く別の修業と云ふ事に氣が付かねばならぬ。マア一寸分り易く云へば此段の風は『世なりけり』の出から『爰も名高き難波津に』と語る處や、總ての「ウクオクリ」「地色」等まで殆んど上下に「ニジッタラ」音で運ぶのである。「籠風」などは「ギン」の音を「ニジッタラ」先づ其風にはなるそふじやが、此段の風は「地合」も「詞」も總て其心持で運ぶ修業をすると思ふて居たらよからうと思ふのである。

（十二）中將姫古蹟松　雪霽の段

此外題に就いては庵主色々後人の爲にと思ふて調査をした事があつたが中々分らぬので、止むを得ず故竹本攝津大掾に手紙を以て問合せた處が其返事は左の通りであつた。

前略陳ば近頃扇屋之段御研究遊ばされ候由不相變御心掛の段難有奉存候、且又中將姫の事御申込に付色々取調別紙に書留御覽に入候併し五行本に有之は初代竹本綱太夫增補を致候故少々丸本と相違致居候右御承知被成下度候　下略

大正四年十一月十七日　　二見金助拜

別紙書抜

○中將姫漣曼陀羅　岡本文彌（年號不詳）

○中　將　姫　宇治加賀掾（同斷）

○當麻中將姫　當流竹本筑後掾

（寶永の頃か　作者不詳）

○鰭山姫捨松　豊竹越前掾

（元文五年申二月六日―今大正十五年を距る百八十七年前―作者並木宗輔）

只今其本手元に無之候間取寄せ中に御座候何れ相分り次第跡より可申上候　以上

此報告に因るも一寸捕捉する處に苦むのである。庵主の調査は古事來歷の謂はれ因緣を述べ立つる爲めでなく、其藝風の幽玄にして後人の努めて仰鑽すべき所の一端でも、世の人の爲に書殘して置たいが一杯で、及ばぬ力で之を模索するのである。夫には語り初めた藝人の名前を識るが第一である。古事來歷や、字句の難解は學者に聽けば一度で直ぐに判明するが、古名人の藝風は其人々の特長妙技が傳來相續して、一種筆にも盡し難き高雅優秀の風を漂はして居るのであるから、夫を捕へて研鑽修業せねば藝にも何にもならぬのであるから、夫に接觸したいのである。而して此中將姫は攝津大掾でさへ俄かに誰々の風であると答へる事は出來ぬのである。左すればアレ程一世を風靡させた攝津大掾の中將姫は、攝津大掾獨特の語り風を以て一冊を纏めたと見ても差支へあるまいと思ふ。曾て庵主は大隅太夫と共に此大掾の中將姫を聞いた時、大隅は「此中將姫は此師匠の爲めに書

下して手を付けたのじやと思ふて聞かねばならぬので、新町の師匠（圓平）の彈いて居られた時もソー云うて居られ升た。兎てもアノ通りを辿つて語る太夫は又出來ませぬから」と云うて居た事があつた故に、庵主は現在の中將姫の語り方は攝津風と極印を打つて研究して差支ないと絶叫するのである。扨てソー極めて之を後人に修業させよふと思ふと、サア其の藝格の狹くなる事は夥しき物にて、何にさま大掾と云ふ人は「エ」の譜より「サ」の譜までクリ上〳〵しても尙ほ餘りて居ると云ふ上の音の豐富な人故、夫を風としては學ぶ境域が誠に困難である。然らばと云ふて加賀風、越前風に辿る事は微力な藝人としてゝ尙ほ〳〵困難であるから、此は大掾一代限りの物として、丁度アレ丈けの聲の質と藝力とを持つた藝人の出た時に完全に其大掾風の譜音を辿らせる事にせねばならぬと思ふ。左すれば一般藝人の學ぶべき譜音の目標はドウしたら良いかと云へば、庵主は當然增補した綱太夫風が良いと云ふのである。現に綱太夫は此外題を增補して語つたのが今語る此の古蹟の松であるから、夫を辿るが當然である。而して大掾も矢張り綱太夫風で語つては居るが、アノ大掾の天性の美音が又其上に加味されて一種の品格を添へて居るのである。然らば綱太夫風としてドウ語れば良いかと云へば、豫ても云ふ通り三味線の方を克く熟練させて出來る丈け派手に彈かせ

太夫の方は總て上下の裏に廻る事と、低き「ニジッタ音」とに漂ふて陰氣に〳〵と運び、夫に根強き情合のからむよふに語らねばならぬ。夫が全體に其心持を忘れてはならぬ。先般であつた三代目越路太夫が座主に望まれて此中將姫を文樂で語つた。庵主は大掾が語つた跡故、ドウであらうかと人知れず心配をして居た。又世間の評判も餘り能くなかつたが、折柄庵主不圖一日の閑を得て此段を文樂に聽に行く事となつた處が、實に驚いたのは越路太夫の運方であつた。總て大掾の語り風に拘泥せず皆「ニジッタ」音で運んで居た、此丈は間違もなく越路の力で語つて居る事が分つて、聽く庵主は現つになる程面白かつた。此の太夫は語り口の悪い物もあるが、藝力は慥かに認むべき物が有ると云ふ事を、庵主此段で屹度値打を付けたのである。夫から直に庵主の宿に越路が來たから庵主は飛付くやうに「今日のお前の中將姫は師匠臭くなくつて綱太夫臭かつたので堪納する程面白き珍しい語物を聽いて、大阪に來た甲斐があつて有難ふと御禮を云ぞ」と云ふたら、越路は頭を押へて「ワタイ叱らるゝじやらうと思ふて心配してました、飛でもない物でお譽に預り升てビックリしました有難ふムい升」と謙遜するから、一入悦しく又可愛くなつて色々御馳走をして、夜と共に藝道の咄もした。其中庵主はお前の師匠は俺にコンナ遺言をしたよ。「アンタに中將姫の事はお稽

古して置升たが、ドウカ「下駄」が角力取りの「下駄」に成らぬように願升。若し弟子共が角力取の下駄に語り升たら旦那はんから叱つてやつておくんなはれ」と云ふたよ。今日の下駄の『鼻緒の締りよく』は「ギン」の譜を聞いた、「ハリキリ」から「ゲーター」と自然に「ギン」に落なかつたよ」と云ふと、越路は翌晩又来訪して「昨夜アンタがアンナ事を云ひなはつたから今日は「下駄」の所になつて氣になつてヤリ悪ふて難儀しました」と云ふて居た事がある。是等は越路の美談中の一とすべき謙抑の詞であるが、全く中将姫は面白く聽いたのである。世評の悪るかつたのは先代越路の山の語り方が永年聽客の耳に染込んで居るからの事である。併し藝格の品位一方から云へば、三代目越路の中将姫は屹度後世の手本になると思ふ。只だ夫をハッキリと聞分けるお客と藝人の無い今日としては殘念な事である。

（十三）田村麿鈴鹿合戰　阿漕が浦　平治住家の段

此段は寛保元年酉九月（大正十五年を距る百八十六年）の作とあれどもドウ調べてもより處がないのである。聲曲類纂に因ると豐竹座の外題中にあつて、元文六酉年九月の作としてあるから、夫が稍確なやうに思ふ。ナゼなれば此寛保年號は元文六年酉の二月廿七日に改元した筈なのである。作者は矢張淺田一鳥と、豐田正藏が古歌の「伊勢の海阿漕が浦に引網のたび重なれば顯はれにけり」を種に書いた物であると思ふ。役場はドウしても竹本綱太夫の風と思ふから、終に豐澤廣助に尋ねて遣つたら、此場は二代目綱太夫で（前名濱太夫猪熊甚兵衛といふ）あるとの事、左すれば全部初代同樣の藝風で語れば夫で宜いのである。三代目は名人では有つたが江戸訛の拔けぬ太夫で風も少し變つて居たとの事、初二代は全く同じ風である。一體此綱太夫風と云ふ物は豐の段でも云うた通り、太夫は飽迄陰氣に位と品合との音を以て運び、三味線は飽迄陽氣な心持で足と間を能く腹に持つて一切を呑込んで淀みなく運ばねばならぬのである、先づ枕の『故鄕は都』から克く「ギン」の音に

氣を付けて上下の「ニジリ」から出る事を忘れてはならぬ、「チン」『阿漕ケ浦』と「ハル」音の持方が腹の中に淋しい氣斗りでなく物凄い氣がなくてはならぬ。夫から「お春」即ち「春姫」の心持が中々六ケ敷「お春」に成つたり「春姫」になつたりの「カワリ」が氣を付けねばならぬ。『仕習ひ安き下司仕事』から全く綱太夫獨特の運び風となるのである、猶茲に一番大事に考へて修業せねばならぬ事がある夫は前段では「春姫が主手」である、其心持が底まで藝に徹底した太夫でなければ語られぬ。ナゼなれば田村將軍の御息女春姫が人生の悲慘につれて阿漕の漁民平治の妻のお春になつて居る、其夫たる平治に對しての慚方と云ふものは浄曲中の隨一である、夫から心立も浄曲中に此程良き貞節の女は有まいと思ふ、夫は作者が畢生の力を此文中に潜めて居るのである、人間の義理人情と云ふ物は六七分は人見せの筋が多い、然るに此春姫の義理人情は人見せではない、天性眞底から善良の心の發露である、此心を語り現はすには先づ修業で春姫を知つての鍛練で、夫を聽衆にハッキリと感ぜしめねばならぬ。『溜る懸路の種産んで育つる世話と姑の病氣の世話と』……と書いた筆力を屹度受取らねばならぬ、作者は夫でも心元ないから『仕習ひ安き下司仕事網すく中に姑の加減の薬煎じ上げ心に薬師の女唱へ用ゐさへすりや其儘に驗もあろかと女氣の』とは何と云ふ名文であらう、庵主

は文才宇宙に磅礴した近松の名文よりも此淺田等の運筆に驚嘆するのである。サア此を語り現はすには腹に其構へがなくては叶はぬのである。聽衆の善男善女の人々が「コンナ氣立の女房を持つたらドウであらう、コンナ心掛の女を自分も學びたいなァ」と聞く中にゾーッと身を襲はるゝやうに感じねば此文が語れたとは庵主は云はぬのである。故に庵主が淨曲の修業は聲も間も節も足も風も修業の第二以下で、修業の基と云ふは腹であると云ふは是の事である。夫から姑が『アゝ冥加なや』から「河内地」になつて君臣の義を語り分け、又春姫が『ヲゝお袋様とした事が』から春姫の心の底にフット昔の身の上を思ひ出して、『アレアノ櫻も』から時代腹にカワリ、『ヲホ……ハテモ昔は昔、今は阿漕の平治が女房お前の嫁』と世話にカゝル邊、何とも云へぬ藝力が入るのである。夫から『機嫌取氣の姑に』から「表に人音」となつては全く普通の淨節になるのである。夫から『聲は平治が胸板に打たゝる釘の先折つて云くろめんとつか〳〵立出』、此は平治が此段で始めて顏を出す所で春姫にアレ程惚られて居る亭主は是であるとの感じを聽衆に輝くよふに感じを與へる所、即ち魂は忠孝である、器量は優秀である、其男が死生の大難を腹に持つて立出るのである。庵主は前から此段の面白いのを一度も聞いた事がなかつたが、先年或る太夫の語る此平治の出を聞いた時、ハット

思ふ程感心して後で其太夫を呼び、

「お前は誰に阿漕を習ふたか」

と聞いたら

「私は新町の師匠に云うて貰ひ升た、私は淨瑠璃は下手でムい升が阿漕丈けは日本一じやと心に誇つて居り升す」

と大變な風掛けであつた。庵主は外の全部で慥かに其下手なる事は認めたが、此平治の出丈けには驚いたのである。『聲わァア』と音を遣つて、『平治が胸板に』に突貫かれた『打る〻釘』と止つて『の先打つて』『チン』『云くろめんーンと』と持つて、『ツカ』と止つて氣を變へ『ツカ立出』と早く輕く「色」で語りて、息を持つて『ヤ。コリヤ庄屋殿お出』と語られたのには、一寸庵主も漂うたのである此所丈けは此下手太夫が新町の師匠に云うて貰うたかして正さに確に日本一と誇つても好いと思つたのである。總てコウ云ふ意味に注意してさら〳〵と語るのが大事である。夫から平治が『夕べ始めて網を入れ見付けられたがサ絶退絶命』と云ふのに、『エ、ヱ……そりやお前何の爲慰にか慾にかとそゞろに問ひし妻の顏』と云ふ一鎖りは實に此お春の山である。アレ程惚れて拏帳紅閨の深

窓を捨てゝ阿漕の漁民の妻とまで成下り、寝ても覚めても思ひにおもひ手便として居る其平治が、大罪を犯したと聞いたお春の春姫の驚きはドウであつたらうかと云ふ心が溢れての『ヱ、ヱ……』である。夫が皆腹構へで語れるのである。夫から平治が時代に成つたり世話に成つたりは文章を見て考へれば直に分るのである。次に「右石の舞」は人形でも素浄瑠璃でも抜いた方が宜い、此等達者な作者には昔から有り勝ちの「出来過し」「書き過し」である。夫から笠印の符合などは実に名作であるから、其処を親切に語つて『音に(聲と云ふてはいかぬ)讀む字を訓に讀み、よみぢに急ぐ一文字』と云ふ名文で段局を告ぐるまで、腹を一杯にして決して弱みを見せてはならぬのである。

（十四）楠昔噺　三段目の口　どんぶりこの段

此外題は延享三年寅正月（大正十五年を距る百八十一年前）竹本座に上場し、作者は竹田小出雲、並木千柳、三好松洛で、役場は政太夫と思ふが又錦太夫とも聞く。往昔から此場は切太夫が、「徳太夫内の場」を喰ふ事（切の太夫を顔色なからしむる事）が多いので、此三段目の切りを語る太夫は餘程の覺悟がなくてはならぬ。扨て此端場を庵主は故人の彌太夫の語つたのより外、甘いのを聽いた事がない。

彌太夫の時の聞本を調べて見ると、

『昔し〳〵其昔し』と云ふ「地色」の取付の息が一種違ふて居た。『子供すかしを今爰に』がよく腹に解けて居たから『思ひ合せし』の「ハルフシ」が大變都合がよかつた。『祖母は六十の水汲は』の邊から三味線が只だ達者に彈く斗りの者では中々物になるのが少ない。夫から政太夫の聞書と云ふ本に「媼は齒で物を云へ、爺は唇で物を云へ、此端場は節を語るな情を語れ、詞を

語るな情を語れ、情を語るな人になれ」と書いてある。夫で故彌太夫の語つたのは『盥をおろし』の「色」の後に息があつて、『サァ〳〵親父殿』となつて居る、總て爺媼何れも詞になる所には、夫れ〳〵一所一所に違うた息がある、夫が皆『重荷持つまいぞやーァ』と引地をするから、後の息が惡くなるのである、「爺の方は少し早口の心で云ふ事、媼の方は少しユルく云ふ事」。夫から『杖を力』から『わりなけれ』までの「アミト、ガ、リ」から「文彌」夫から「林清ヲクリ」まで此所に作者の意を用ひた、文章の情味を甘く嚙み分けて語つた人は、外の名人は聞かぬが故彌太夫のは幾年立つても耳に殘つて居るのである。夫から『アゝいとしや』からの媼の獨り言の良かつた事と言ふたら、天下一品と思うて、大掾にも其事を話したら大掾曰く

「夫がアンタ「人にならぬ事」にはアレ丈けは云へませぬ、私もよく聞いて居升が、旦那はんがそないに云ひなはると又一層云へぬやうになり升物でナア」と。

夫から此政太夫物と云ふものは「三上の音」と「コハりに響く音」と「中ギン」に能く氣を付けて修業する事。奴詞に詭がある、『たまして勝た』『負た』『身が旦那』『古狸』等氣を付けて語る事。『ヲ勝手にする』とから段切までは皆「マクレ」て居るやうに聞える、是は前から腹と腰とが据つて居らず。口

先で斗り語るからソンナになるのである。庵主は彌太夫の語り物では此段が一番良かつたやうに思ふのである。

（十五）楠昔噺　三段目切　徳太夫内の段

此外題は延享三年寅正月（大正十五年を距る百八十一年前）、竹本座に上場し、作者は竹田小出雲、並木千柳、三好松洛である、役場は豊竹筑前の掾と思ふ。故竹本摂津大掾は八十歳の老齢で、此段を引退の語物とした。三味線の豊澤廣助（名庭紘阿彌）も七十餘歳の老體で勤めたが、庵主此の時、出抜けに下阪して、文楽座に聴に往つたら、大掾が庵主の旅宿に來て曰く

「旦那、今日出し抜けにアンタのお顔を見升したサカイ、甘く出來ませなんだ、明日最一度聴いておくんなはれ、今日は是から廣助と弾合せを仕升て、明日は講座で語り死ぬ積りで語り升サカイ何にしても明治十四年から、アンタに御贔屓になつて、四十年近く聴いて貰うた語り仕舞ひの聴いて貰ひ仕舞でおますサカイ、此親爺の語り死ぬ所を聴いとくんなはれ」

と云うて歸つた。サア大變、明日はシッカリ聴かねばならぬと、朝早くから他の用を片付けて、用意を仕て居ると、其所へ大隅太夫がヒョッコリ來た。丁度鶴澤仲助も連れて往つて居つたから、咄

が大ハズミである。ソコデ庵主は、

「ヲィ〳〵今日はソンナに八ケ間敷云うて呉れるな、昨夕大掾の親爺が來て、明日は語り死ぬからモウ一度聽いてくれと念を押して歸へつたので、夫をシッカリ聽かねばならぬから、色々外の咄を聞いて、頭が亂れると困る、飯を喰うてソロ〳〵出掛けねばならぬから…」

と云ふと、大隅も仲助も、

「お伴して宜う厶り升か、何にしても師匠が語り死ぬと。旦那に誓言立てた藝を聽かずには居られまへんから」

と云ふから、

「宜しい連れて往くから」

と云ふと、大隅が、

「私は新町の師匠(團平)に、脂も抜ける程責められて稽古致升した」

と大天狗である、ソコデ庵主は、

「其お前の修業と大掾の語り口は違ふか」

と問ふたら、大隅は大得意になり、

「中興の元祖此さん(筑前掾)の風で、ムります丈け、私の考へ違ひかも知りませんが、二見の師匠(大掾)の語り方とは大分違ふ所がムり升、(第一)枕の運びが違ひ升、(第二)爺媼の思惑の詞の立方が違ひ升、(第三)二人の嫁爭の息の使ひ方が違ひ升」

と云ふから、

「ドンなに違ふのじや」

と云ふと、大隅は飯を喰ひ止め、茶碗も箸も下に置いて、

「コヽがコウ違ひ升、アソコがコウ違ひ升」

と一々膝を叩いて講釋を始めた。油を掛けて煽てた庵主の面白さと云うたら無い、何にせよ命掛けで稽古をした大隅が、眞面目になつて講釋するのであるから、又と聽く事の出來ない稽古である。夫から三人連れで文樂に行つたら、大隅は中風で足が叶はぬので、棧敷に上れぬのを、仲助が押上げて遣つて、ヤット坐り込んだ。大隅は仲助を頼んで、樂屋の大掾師匠に、

「旦那のお伴をして來升たから、前で聽かして戴き升」

と断りに遣つた、大掾は目を光らかして、

「大隅も二階に上れるやうで結構じやナア」

と云うたと、仲助が報告して來た。サア大掾が語り出したから、庵主は兩人に、

「僥舌る事ならぬぞ」

と云うて聽いて居たが、其面白さと云うたら無い。大掾も廣助も、離棄斗りで、摑んで捨てるやうに語つて仕舞ふた。庵主は打倒されたやうになつて、フイと大隅と仲助を見ると、兩人共膝の上は小便でも垂らしたやうに、汗でズク〳〵に濡して居る。ソコで庵主は、

「ヲイ大隅、お前が講釋した個所々々は、唯の一つも違ふて居ないでないか、何所が違ふのじや」

と云ふと、大隅は腕を組んで、ウーンと考へて居たが、暫くして、

「旦那、新町の師匠で鍛へたのは、二見の師匠の方が、私より先輩でオマスわい。夫が私のやうにギコチなくならないで、綿のやうに成つて居升わい。又廣作さんも(廣助の事)考へて見升と、ウント新町の彈きやはるのを聞いて居やはり升わい。夫れかと云ふて、コーは遣れぬ物でおます……旦那、此段をコウは語れませぬわい、マア二人共に此年にならねばナア……アーア長生き仕た

うオマスなア……」

と云うた時、仲助は側から、

「旦那、私は長年大隅さんと懇意にして貰うて居升が、コンナに感心しやはつた事を見た事がオマヘン」

と云うから、庵主は、

「夫が大隅の力のある處である。力がなくては此感心は出來ぬ物じや」

と云ふたら、矢張り大隅は腕組をして考へて居た。此時が大隅と庵主との生き別れで、間もなく彼は臺灣に行つて死んで仕舞うた。大隅も是で感心死をしたかと思ふ。個樣な物であるから、此位に三段目を語つてこそ「切語り」と云はれるのである。其後三代目越路太夫が此段を語つた時、彌太夫が此端場を語つたが、立派に越路太夫は喰はれた。夫で越路に庵主は忠告した、

「如何に表方から語れと云はれても、此段を引受けると云ふが、お前の心得違じや、「何樣此間師匠が語り升た斗りでムい升から、マダ程もないので、お引受出來ませぬ」と云うて斷らねばならぬのじや。お前でなくとも唯だ語る位なら誰れでも語るが、夫は語ると云ふ物じやない、唯だ云

ふ丈けである、此段丈けは是から氣を付けねばならぬぞへ」

と云うたら、越路は、

「ハー豪らい事を致し升た、師匠の罰と、アンタの御贔屓の罰と一所に當り升た」

と云うたが、嘘にも是丈け云うた越路太夫も亦、斯藝の力は、慥かにあつたと思はれたのである。其丈けの事の判る太夫がモウ一人も居らぬ事となつて來た。

扨『早夕陽も傾く頃』の「ハルフシ」は成丈け明かるく語る事。『表へひゞ敷女乘物』は氣を變へて、『女乘物』は成べく「中」て語る事。『しづ〳〵入るを』を大隅曰く「長門」さんは「フシハル」に語られ升たと聞升たが、考へ物でムい升」と云うて居たが、大掾は矢張「ハルフシガヽリ」に語つて居たやうである。『祖母は不思儀ィ――――と』と大掾白眼を出して息を持つて『打なが め』と「色」て云ふて居た。又息があつて『此住みはびたあばら家へ』までは獨り言のやうて、『結構なお姿』から一寸「カワリ」氣味があつた。『ツイかゝとおつしやつて下さりませ』は何とも云へぬ上出來て、田舍婆々の情がパット浮出て居た。此等は其時聞いて今でも慥かに覺えて居る人が澤山あると思ふ故、聞いて見れば直に判るのである。『聞いて手を打ち』の下、息を抜かずに押へて『是は〳〵』のよかつた事も亦

格別であつた。總て此段は「詞遣ひ」「地色」「地中」「中」「色」とも實に〳〵鍛練を要する事にて、夫でないとアノ越路太夫でさへ初役では可愛想な程情が浮かなかつたのである。「覺えて、呑込んで」掛ると云ふ强味は斯る段の最大要件である。『娘を連れて奥間へ』から『鹿ヲドリ』の邊から「ギン」の音の遣方に氣を付ける事。『何と、モウ中を直ろかい』は丁度大掾が地詞で、淨曲とは思へない程良かつた。以下の祖父祖母兩人の昔噺のとりやりと云ふたら、絶妙であると歎賞したのである。大隅は仲助に斯く云うた、

「寬や、私が恐れるのは、是じやよ、自分が我で云うて居る時はソーモ思はぬが、斯う聞いて見るとハツキリ恐ろしさが判るでナア」

庵主は元來大隅と云ふ男は、ドコまで藝に力があるか判らぬと思うた。此一言は千古の金言である誰も自分天狗で云ふて居る時は、已惚れて居るから判らぬが、斯る達人の語るのを聞いて、自分の藝の未熟がハッキリト判るまでに聞く藝の力のある者が、世の中に幾人あるであらうか。『語れば祖母は泣出し』から『別れ〳〵にならふかと』と語るのを聞く庵主はモウ涙を催したが、オペラグラスで見たら、大掾が目にも、……フット又見た廣助の目にも涙が光つて居た。夫から謠がすんで跡

の「カワリ」は此段の一大事である。此邊の心持の「カワリ」が甘く行かぬと照葉、おとはの「詞遣ひ」も「地合」も中々甘く行く物でないのである。『コレお祖母、早日も暮れた看經しませふ、佛壇へ御明し上げてくれ』の詞が「シホレ」氣味になりたがる物である。夫が大々的間違ひである。此爺父の心の中にはモウ死ぬ覺悟をして居るのである。其氣が屹度浮かねばならぬから、中々「シホレル」所の事ではない。『無明を拂ふ大燈明、胸の曇りを晴さふぞされ』は「カワリ」てさびし氣も「ウレイ」氣もあつて宜いのである。『コレ照葉樣、其賴み人は誰が事』から又がらり「カワリ」て芝居が初まるのである。此段は忠臣藏九段目山科の段の如く、「地色」で「フシ」を語る所が澤山あるから、能々先輩に就いて修業せねばイカヌのである。『齒の根を碎き身をふるウウ、イイ、イイ、イ――』と語る時、太夫が心の底から、おとはの心情に成拔いて悔しい心持を語ると云ふが秘傳であるとのこと。ナゼなれば『ボウつと、もゑ立火焰はいかに』の「コハリガ、リ」の「カワリ」が移つて語れぬやうになるのである。是から先の「フシ」『詞』とも斯樣な風に研究して習得するが肝要と思ふが、兎も角に、「ノル」と云ふ事と「ハリ切」と「ハルギン」と云ふ音遣ひを忘れては、筑前場は語れぬと云ひ傳へられて居るのである。『見るに悔り』から『唐天竺が責かけても』と「地色」と「詞ノリ」をよく淀みなく鍛練

する事、此所が此段の藝術的の性根所である。夫から『障子ぐはらりと引明くれば、あけに染みたる祖父祖母の』此からの「地詞」を最も深刻に語る事、併し腹をサラ〳〵と持つてベタ〳〵せぬやう是所が加減物で聽衆が糟を食はする所、『二人は死骸に取付いて、前後にくれし折からに』冥まで漕ぎ付くればモウ安心で、是からは公綱と正成の押合となつて普通の淨曲になつてお仕舞になるのである。

（十六）菅原傳授手習鑑　三段目切　佐太村の段

此段は延享三年寅八月（大正十五年を距る百八十一年前）竹本座にて上演した物と思ふが、役場は竹本筑前掾（此太夫）、作者は竹田出雲、並木千柳、三好松洛であると思ふ。此の人は義太夫節中興の祖と云はれ、「低調子の初まり」にて名人である。常に故師豊竹越前掾の孫に當る豊竹島太夫、即ち二代目若太夫を輔佐して引立てゝ居たが、此の芝居にては、自分が三段目を語りて、島太夫には四段目の寺子屋を語らせたのである。サア此處を今時の太夫共が良く味はねばならぬ、役事ひや顔採斗りをして、其語る藝術は何を語つても、同じ節と同じ音遣ひ斗りでは物にならぬ、素人やお三ドンの焚いたゴチ飯のよふに、口に入れても咽に下がらぬ物斗りを語つて、人に聞かせるのは、罪悪の甚敷ものである。此筑前掾の語り風は、種々の口傳もあるやうじやが、先づ其一二を云へば「ハルギン」と「ハリキリ」の音を上手に遣ふことが、其風の最も著るしき物であるとの事。

此人が延享に此菅原を出した時、島太夫の前を語つて、先づ「大序の口」と、三段目を「茶筌酒」と、

「喧嘩場」と、「訴訟」と、「櫻丸の腹切」とを、ブッ通して語つて居る。ソウして島太夫には四段目を語らせて居る。又夫から六年後、寶暦元年未には、一の谷嫩軍記を出して、其時には此島太夫に「須磨の浦組打」を語らせ、筑前掾が三段目の「陣屋の段」を語つて居る。今時の太夫は、此佐太村を三ツにも四ツにも分けてゞなければ、語らせる資格が無い物斗りとは、情けない事ではないか、況んや大序などは「紋下」の太夫の語る物ではないと心得て居る。

先づ『年は寄ても』から語るとすれば、其送りは『あらず戻られし』が「宮戸風」であるとの事。『今日の御祝儀、お目出度い』は松玉梅王の二人の詞である、大隅太夫は『塵をひねらぬ斗り也』の聲が初役の時徹底せぬと云ふて、心から憤慨して居た、又『雜煮祝はしてたもやいの』と「ツン」『折れた櫻は見ながらも』「トン」『誰が仕業ぞと咎めもせず』等の「三味」と「語り方」が前後を押へ付けた、何とも云ひ得られぬ丈けの面白き心持が漂はねば話にも何も成つた物でない。「スエテ」の節も、總て「ハリキリ」の音が漂はねば風にならぬ。總て何處も彼處も「ハルギン」と「ハリキリ」の音に妙味を持たせる事。『夫婦は門へ、白太夫は唾を呑込んで』「チーン」「ウレイ」『奥へ行』の處で、庵主が曾て故鶴澤仲助と引合せをして居た時、庵主が大事の金に松の高彫した矢立に水を入れ章を打つて研究

して居たのに、仲助が『唾を呑込んで』の次に「チーン」と彈いた「間」と、腹込と「音」が如何とも云ひ得られぬ情の強い氣合と腹合と「間」に彈けたので、庵主は思はずホイと白太夫になつて、『奥へ行』が心の底から云へたので、嬉しさの餘り、後を語る事を忘れて、仲助の顔を見詰めて居たら、仲助は自分が彈いた「間」が悪るいのかと思うて、

「イケマヘンか、モ一度遣つておくんなはれ」

と云ふから、庵主はソウでなく、餘りの面白さに何か褒美を遣りたいと思ひ、手當り次第の物を心で探して居たが、生憎羽織も着て居らず、煙草入もなく、手に觸れた右の金の矢立を執つて、

「俺は永年脊原の三段目を研究して居るが、今お前が彈いたやうな、白太夫の這入の「チーン」を聞いた事がない、餘りの嬉しさに之を「チーン」の褒美に遣る」

と云ふて、其矢立を投出したら、仲助は見る間に座蒲團を下りてお辭儀をして、

「私はソンナに賞められるト、今の「チーン」をモウ忘れて仕舞い升た、只だアンタが『白太夫はーア唾を呑込んで』と云やはる時、白太夫が今度出て來る時には、子供の櫻丸に腹を切らせる刀を、三寶に載せて出て來ねばならぬのじやから、アンナ腹で、アンナ足で、アンナ心持で語りやはる

のじやナアと、コウ思ひ升た丈けで、今はドンな「チーン」を彈いたか分りませぬ。併し私の此下手でも、此「チーン」一つで金の矢立を戴き升たと云ふのは、一生に二度とない冥利で厶い升から家の寶に致し升」

と云ふた時は目に涙を一杯溜めて居た。故に藝術は人に聞かす物、人に見せる物と思うては間違である。自分が人も我を忘れて、其境涯になつて演ずるので、夫を無心の第三者が、見物となつて見たり聞たりするのである。故に云換ゆれば、

「藝人が我れを忘れて、其境涯になつて樂んで居るのを、外から見て面白いとか、面白くないとか感ずるのである。其無我の境になるのが修業てある」

夫から『兄弟夫婦に引別れ』から、櫻丸の「地詞」は、多く「河内地」に語り、白太夫の「地色」は、筑前風にて、殊に情に迫つた息で語り、又お八重の「地詞」は、例の「ハルギン」「ハリキリ」の音にからまつて何とも云へぬ面白い運にならねばならぬ。殊に段切になつては「大和地」と、「地色」とからんで一種特別の「ノリ地」に語らねばならぬ。コンナ事を書けば限りもないが、此僅か斗りの『年は寄つてもから』の修業でさへも、義太夫節中の興味には限りなき面白味があると云ふ事を味ふはねばな

らぬのである。

（十七）菅原傳授手習鑑　四段目切　寺子屋の段

此外題は延享三年寅八月廿一日（大正十五年を距る百八十一年前）初日にて竹本座に上場せし物と聞く、同年十月廿五日まで大入を占めた事六十五日間である。作者は竹田出雲、並木千柳、三好松洛、竹田小出雲で、役場は豊竹島太夫であるとの事。此人は前にも書いた通り、日本一の美音で三段目、四段目語りの大立者で、後には二代目若太夫に成つた人で、本名スワ町平衛門と云うた。此段は素より四段目に手が付いて居るから注意は當然の事であるが、何にせよ前の段は斯道中興の祖と云はれた筑前掾が、大序と三段目を語つた後に、此四段目を島太夫が語つて、今日まで大流行する程、上出來であつたのであるから、一通りの事で引受られる役場ではないのである。先づ第一に紋下の筑前掾は大序と三段目即ち茶筌酒の場、喧嘩の場、訴訟の場、櫻丸切腹の場をブッ通して語るし、錦太夫は序切と北嵯峨の場の二ツを語り、百合太夫は加茂堤の場と車引の二ツを語り、紋太夫は二段目の道行と汐待の場と五段目のカケ合の三場に出場し、柚太夫は道行と五段目のカケ合

に出場し、島太夫は杖の折鑑と東天紅と寺子屋の段とを語り、政太夫は道明寺の切と天拝山を語り三味線彈も鶴澤友二郎、竹澤伊左衛門、鶴澤本三郎、同平五郎等、人形では初代吉田文三郎や桐竹助三郎、同門三郎、山本伊平次等の腕揃で必死の活動をしたので、斯くは指導の大盛況を呈したのである。今時の太夫、三味線彈の如く、蚊細く蚊弱い者計りでは滅亡するの外ないのである。此大序の時間は、今時の紋下殿は丁度眞夜中頃で、鳴と寢て居る時である。其他の切語りの太夫にしても一段を語る者は一人もない。

先づ此の寺子屋の段は、音を「ヘリ切」に通はするは勿論であるが、「三上」と「中」の音に最も大切な注意をして修業して居る太夫は滅多に聞かぬのである。即ち『近付に』『機嫌まぎらす折からに』『主の源藏』『色青さめ』『あたりを見廻し』等平一面、「三上」や「中」の音等計りが組立の基礎となつて居る。夫から此源藏戻を六ケ數〳〵と云へ共、太夫の語るのを聞いて見れば一つも六ケ數所はない夫は腹か抜けて居るから六ケ數事も面白い事でないのである。即ち合邦の前でも此の寺子屋の前でも二人でブッ〳〵云うて居る間の腹構への六ケ數のを、六ケ數と云ふのである。昨今に『心ならず女房立寄』の「色」が成つて居るのが一ッもない、夫が腹に出來て居れば跡は語れる筈である。夫か

ら『屹度見るより暫くは』で源藏がモウ身代と思付くから駄目になるのである、コンナ所の源藏は太夫も大事を取つて、腹に持てる丈け持たねばならぬ。即ち太夫の腹力の見える大事の所である。『暫くは打守り』の「スエテ」が四段目の「スエテ」で、增補布引の四段目の『ハット計りに行綱は暫し詞もなかりしが』も、夕霧の『伊左衛門ハット堰いたる顔色にて暫し詞もなかりしが』も皆四段目の「スエテ」である。夫から『忽ち面色和ぎ』でモウ身代と思ひ付く、夫がマダ行かぬ。其弱身を遁がるゝにはマダ疑の心を以て『忽ち面色』と云ふて『和ぎ』を「中」にさへ、ソーッと語ればマダ持つて行かれる物である。『ムウ器量勝れて氣高い生れ付、公卿高家の御子息と云うても恐らく辱かしからず』と輕く獨言に語りて此で息で止つて『ヲヽ。テ扨てソナタは。マヽヽヽヽ。よい子じやノウ』と長門太夫が話つた時は、其息組みに見物も引倒ほされる程驚いたとの事である。總て斯る所は太夫の腹構へ計りで生きて來る物である、夫が源藏戻りの六ケ敷所である。松王の『ヤレお待ちなさアれと』は遠い所から云ふて、『暫く』と「中」で云ふ事、『憚りながら』から傍近く物を云ふ事、『病中なから』『病身の願』等總て腹で拵へて息で「ヘタッテ」云ふ、之を仕込と云ふ。夫でなければ二度する咳が生きぬ、此松王作病の拵へが首實檢の時三度目で樣子を覺られまいと云ふ、即ち『ム

ウ、こりや是嘗秀才の首打つたはまがいなし』と大きく云ふて太きく咳をして、息で『相違なし』と語るのである。『時平公のお目に掛けん』と云うた後、直に松王が物云うてはイカヌ、如何にも病苦に惱むよふに、息で低く『イカ樣暇取つてはお咎も如何、拙者は此よりお暇給はり』と云うて、息で『病氣』と止つて低く『保養を致したし』と云ふ事。『玄蕃は館へ』と高く云うたら、息で「ヘタッテ」、『松王は駕籠に』、又息で腹に泣いて「ヘタッテ』『ユーラアーレーテ』『テッツン』をゆつくり彈かして『カーアーアーア、エエエーリーイイ』『ツントン』と又ゆつくり彈かして『ケーエーエーリーイイ』「トン。トン。トン〳〵〳〵」と此所で庵主が彈かして置いて湯を呑んだら、大掾はピタット稽古を止めて仕舞うた。曰く、

「私は皮肉でアンタを苛るのではムいません、折角此所まで力を入れてお稽古仕やはつたのに、其處で湯を呑みなはる位ならお稽古は丸で出來て居ませぬ。源藏夫婦は戸の內より息を詰めて外の樣子如何にと窺ふて居る所ダッセ。大隅は此所で「トン。トン。トン」と彈くのに息を抜いたので團平師に「ドヤサレ」ましたと云うて居ましたから、私は「夫はお前が師匠(春太夫師)の語りやはるのを聞いて居ないからだ」と申升た。師匠春太夫は此所では『夫婦は門の戸』まで、目が血走つ

て居升た。アンタ湯を呑みなはるなら『あたりキョロ〳〵見合せり』で、ゆつくり呑んたらどふだす、アンタは此所で丁度貧乏人が晩の米買に行くよふに、息が駈け出して居なはるさかいコンナ事に成升、今夜は宜ふ思案して置きなはれ、明晩又聞に参り升から」

と云うて大不機嫌で歸つて仕舞うた。夫から『健氣なヤアツーウウヤアアーアア』と音を遣ふたら、大掾に又叱られた。

「ナゼそんな所で賣りに來やはり升、見ッともないじやおまへんか、前には『立派な奴、悧巧な奴』と云うて居なはるじやないか、只だ息を詰めて『健氣な奴』と詰めて止まつて居やはれば、ドンな阿房の三味線彈でも屹度迎へに來ますがナ、其時に『ウーウウヤーアーアア』と云うたらドウだす夫でないと又『コーコーチチーノーツーウーデ』でと云はれぬ事になり升じやおまへんか、『九ツで』と「色」にでも云はねば始末が悪るいではおまへんか、ソナイに新町の師匠に死別れて外の三味線引で我儘を云うて居る大隅や、年取つてドウにか前をせねば商賣が出來ぬ私などの講座ですると悪るい事計り覺えやハツテはドモなりまへんがな、アンタには本當の長門はんの淨瑠璃の息込みで敎えて上けたいと思ひ升て、一々調べた上でお聞かせ申て居升がナ、少しは氣を止めて聞ト

クンなはれぬと困り升がナ」

と木葉微塵に叱られた。

夫からいろは送りの段切り、人形分けをハッキリしてなら唱ふても宜い。

（十八）義經千本櫻　三段目切　鮨屋の段

此外題は延享四年卯十一月（大正十五年を距る百八十年前）竹本座に上場した物と聞く、又作者は竹田出雲、並木千柳、三好松洛の三人と聞く、役場は斯道中興の祖とも云ふべき、豐竹筑前掾、即ち竹本此太夫であるとの事、人形遣ひの吉田文三郎は、此外題で獨特の工夫を凝らして忠信の人形に源氏車縫箔の廣袖を着せて、後世の型となつたとの事である。庵主の永年の經驗では、攝津大掾の此段は前半が良くて後半の方が不十分に感じた。

大隅太夫の此段は前半が不十分で後半の方が良かつた。

三代目越路太夫の此段は全體に良く語つては居たが、音遣ひに足取が筑前風にならず、藝を聞いても恐氣が少しも無かつた。

大掾の惟盛、內侍、六代の上品さは誰も眞似が出來ぬが、權太と梶原の腹合に滿足しなかつた。

大隅の惟盛、內侍、六代の品の惡るさは、天下一品であつたが、權太、梶原の面白い事も亦た天

下一品であつた。

越路太夫の各々の人形は其腹組が受取れなかつた、夫は良く語る事に努めた弊害と思はれた。斯くの如く此段は誰が語つても満足には行かぬ、近代の名人大家が語つてさへも完璧とは行かぬので、此段の満足なのは只だ型を残した此太夫一人であるかも知れぬ。此も聞いて見たらばドウだか分らぬが、何様大正十五年から百八十年前の事であるから、誰れも聞いた者がない。只だ残つて居る風格に因つて考へて見るに、大分場外れの名人で、其の修業の苦心も努力も恐氣立つ程に練上げた音節と思はれる。此筑前風は大摑に決して忘れてならぬのは、「ハルギン」の音と、「ハリ切」の音と、「ギン」の音の遣ひ分けである。大略夫さへ分れば筑前風じやと云ひ得られるとの事である。

先づ『春はこねども』の三下りが「ナヲッテ」、『風味も』と云ふが「ハリ切」から出る、『早漬に』も『味い盛り』も一寸とは「ハリキリ」「ハルギン」の音に響いて、挨拶をせねばならぬとの事、此等音の挨拶が全く風であつて、『モウ戻らるゝ』も『噂半へ』も『明桶荷ひ』も同じ事である、其他『優男』『冠きせて』も又同じである、夫から『おことが様な者あろふか』の音遣ひがシットリ据はらねば『昔はいかなる者なるぞ』との播磨大がゝりの節が品よく語れぬ物であるとの事、此以下皆音遣ひに馬鹿

氣た勝手な事を云はず、叮嚀に修業してキッチリ覺えて後でなければ語つてはならぬ。『榮華の昔父の事』の結びは決して聲を聞かせる了簡ではならぬ、全く惟盛の境遇に同情し、浮世の盛衰を思ひ遣つて心で泣いて語らねばならぬとの事、夫から『娘お里は今宵待つ』の「長地」からは全く氣を替へて語る事、『奥へ行跡』の「ハルフシがゝり」も皆此種は「ハルギン」に挨拶する事、『蒲團敷』からパット變りて、『惟盛卿はつく〳〵と』と云ふ腹構へと心持と運の話り方の良かりし事、天下撫津大掾の右に出る者はあるまい。只此五行り斗りの文章で毎日ホロリとさせたのである。夫から若葉内侍の出の「地ハルサワリ」と云ふ文彌がゝりの三味線は先代の江戸堀吉兵衛の右に出る者はあるまいと思ふ、夫から先の「ウケ」は皆格別に悪るかつたが、此文彌の「チン、チリンチテレツツン、ツツンツン、ツン、」と彈く其音と云ふ物が天下一品で、其間の大きさと鮮やかさと云ふたら、誰も眞似は出來ぬ何百年でも殘る程の文彌であつた。又夫から先の「ウケ」の良かつたのは先年死んだ廣助（紘阿彌）であつた。此人の「間彈き」「ウケ彈」は又前後に誰も爭ふ者はないと思ふ。只だ感嘆する斗りであつた。此廣助が寺子屋の『嘆きも漏れて筦秀才』から以下と、鮓屋の『神ならず』から權太の出迄の彈方は、庵主の聞いた多くの中で廣助が大關であつた、其他の多くは全部駄目〳〵である。

コンナ處は全く修業と、一心の平生に於ける鍛練が熟して、コンナ面白い藝が出來るのである。『知らぬ道をば行迷ふ』の「ギン」の音遣ひは大隅太夫が良かつた。『早くも結ぶ』の處の「トンジヤン」此に太夫の力丈の「間」があつて『夢の體』と出るのである。夫から又太夫の力丈の「間」があつて『表に内侍は不思議の思ひ』と語る、總てコンナ心掛けで藝はサラ〳〵と出來ねばならぬのである。三代目越路太夫が文樂で語るのを聞いた時、『都でお別れ申てより、須磨や屋島の軍を案じ』『テン』に付いて『一門殘らず』と出て來たから子供の時から贔屓の庵主は聞て居られぬので、宿に呼んで「淨瑠璃はよく語つても、筑前の風になつて居らぬ、『都でお別れ』は「中ギン」から出て『軍を案じ』『テン」『一門殘らず』は「ハリキリ」に挨拶して出ると大掾よりも大隅よりも聞いて居る、お前も其邊に氣を付けて語つて筑前物は筑前風に語つたがよいと思ふ、夫と云ふもお前が只語る事斗りを考へて古淨瑠璃と云ふ物を知らぬからの事じや、夫が分らねば、斯藝は全部滅亡じやぞ」と云ふと、越路は腕組をして考へて居たが手を突いてお辭儀をして、

「有難ふムい升、鮓屋は總て其音でムい升か」

と云ふから、

「ソージャ付き離れは別として音は總て其心掛と聞いて居る」

と云ふと越路は屢々禮を云うて歸つたが、其翌年東京の歌舞伎座に來た時、庵主が聞に行つたら、只の一ケ所も「ハルギン」「ハリキリ」「ギン」の音を間違へずに語つて居たので、庵主は驚き賞讃の餘り褒美として羽織一枚と、庵主が大事の印籠とを遣つた。此男は權太以上に語り取る太夫と、今一つ咄になつて居る。以下能く習ふて練修して語るべきである。

（十九）花の上野譽の石碑　四段目切　志渡寺の段

此外題は延享五年辰の二月（今大正十五年を距る百七十九年前）、江戸肥前座にて上場した筈。役場は竹本住太夫と思ふ。此の人は二代目政太夫の弟子にて、住吉屋文藏又國根ともいふ大達者である。加賀見山の七ツ目長局の段、又は伊賀越の八ツ目、岡崎雪降の段等も此人だと聞いて居る。此住太夫と云ふ人の風で斯藝の語り方が一段確定したとの事である。即ち「ツメ仮名」「ツメ間」と云ふ事に政太夫の眞髓を會得し、鍛練に〳〵を重ねて語り出した人で大隅や大掾などは其權化たる園平と火水になつて修業した人である。夫が古淨瑠璃の根本で、語ると云ふ事の起る本である。一二例を云へば、「長局」でも『見送りて』と云うて仕舞ひ、『スズリーノヲヲ』と云うて仕舞ふ「岡崎」でも『既に其夜』と云うて仕舞ひ、『雨につけ風につけ』と云うて仕舞ふ故に、「志渡寺」でも『見送りて菅の谷は』と云うて仕舞ひ「カ、リ」でも「チン」間を「ツメ」て『屈かいで』と云うて仕舞ふが風である。其中に云うに云はれぬ情合の腹を見せる。此が總ての淨瑠璃に漂ふ事と成つたのであるとの事であ

る。作者は司馬芝叟、筒井半幸、其他三人であると思ふ。此段は書下しより大正十五年までの百七十九年間に、多くの名人を殺した役場であるが、或る時代には、此段の事を小塚ッ原と仇名した事があつた。即ち命を取らゝる段と云ふ譯である。今は命を取らるゝ程魂の入る、息の詰まつた藝人も居まいが、昔日から幾人も此段で倒れて、終に彼の黒澤圓平も打止めに、此段で死んだのである。

ナゼ夫程豪いかと云うに、第一『聞より菅の谷口惜涙、物をも云はず一間の内、かけ込む向ふへテテン』と云ふ其『向ふへ』と押掛、息が、女の息ではあるが、弓を張つたやうに強い息でなければならぬ。『駈け込む向ふへ』と云うて息を詰めて、無際限に待つて居ると三味線の方でも『向ふへ』と云ふエの仮名で息を取つて一所に「ハァッ」と息を合せて持てる丈け持つて居ると、「テテン」と受けるソコで太夫は其「テン」で大きい息を入れて『源太左衛門』と語る。其處が大隅が第一に稽古に苦んだ處で、遣つても〳〵も源太左衛門は出て來ぬのである。夫からお辻の出が又六ケ敷い。次に源太左衛門の「笑ひ」は聲りの瀧口上野と同格位の難物で、聲の方の『胸の劍を呑み込む瀧口……小田原さして出て行く』と、此段の森口の引込みは『高慢我慢、門弟引連れ森口は、惡口たら〳〵立歸る』を語

る心持は、ヤ、同じではあるが、云ひ得られぬ妙味が無くてはならぬのである。大掾は此源太左衛門の引込に大いなる苦勞をしたのである。夫から大難所は砂書である。其『花は昔し』の前に圓平が其送りを彈く時、「テッン」と打撥が何の蚊のと批評は入らぬ、只だ滿塲の聽衆がビックリする程で毎日〳〵〳〵樂屋の者共までビックリして居つたとの事である。或者が圓平に「お師匠さん アノ送りの「テッン」斗りは私共の非力では歸宅して何百度彈いて打て見ましても、皆目音が仕ませぬが、夫も修業と勉强さへ致しますれば、アンナ恐ろしい音がする樣になれるものでせうか」と聞いたら圓平は其弟子の顏を見詰めて「私は昔日から志度寺を度々彈かせて貰うて來たが、皆ンナ「マダ足らぬ〳〵〳〵〳〵」と 斗つかり云はれて來たので、今お前の云ふやうな譽め詞は聞いた事がない。お前等ソンナ事では藝は駄目じやよ、其今の送りの處斗りを彈かふと思うて居るサカイ駄目じや。前からズ——ツと彈いて〳〵〳〵彈込んで來て、アノ送りが彈ける譯になるから、送りが彈たければ前をウント修業しなハレ」と云はれたので「夫れなら一生掛つても彈けませぬ」と云いたくなつたと云ふ咄を聞いた事がある。『花は』から『今は老木の乳母お辻』此からコロット氣を變へて、淋しく沈んだ中に、尖く聞こゆる處がなくてはならぬ。砂書のヨミクセも六ケ敷いが、夫は藝人が

大抵知つて居るから、習ふがよい。疵りの塲も種々の口傳があるが、夫は實地に就いて修業するのがよい。一體此段は、修業鍛練の結果を以て、語れるとか語れぬとか云ふべきもので、只だ聞いた丈位では迚も遣られぬものである。大正二三年の頃、庵主が前の鶴澤仲助を連れて博多に行つて居たら、三代目越路太夫が突然に來た。庵主は不思議に思ひドウして來たのかと聞いたら

「私は今久留米で興行をして居り升が、旦那樣がお出になつて居る事を新聞で知り升たから少々お願があつて參り升た。其次第は私もモウ御覺の通り、兩鬢に白髪が出て來升たが、只今大掾師匠に毎日志度寺の稽古に參つて居り升が、先月大阪を出升までに、丁度半期になり升が、マダ中々源太左衛門が歸へらして貰へませぬ。旦那樣が今度お歸京掛けに、大阪で師匠に御面會に成升たら「越路も大分白髪も出て來て、可愛想じやから、モウ直い加減に源太左衛門を歸へしてやつてくれ」と、旦那樣から一聲お掛けを願いたい爲めに參り升た」

と、之を聞く庵主は忽ちにして兩眼に淚を浮べて同情した。夫から歸りに攝津大掾に逢つて、其事を云ふと、日頃篤實なアノ大掾が忽ちにして、忿怒の形相となつて

「ソンナ事を越路が申升たか、夫は本人がモウ會得して居るのに、私が故意に無理な稽古をすると

云ふ、旦那樣に對する彼が告白でムい升。私も可愛い弟子の事でムいますから、會得さへ付て呉れ升れば大喜でムい升。アノ奴マダ中々志度寺の會得と云ふ所まで參り升せぬから、私も心で泣いて悲んで居る處でムい升。只今其咄を聞升て、私はモウアノ奴の事は絶望致升たから、今日限りアノ奴の稽古は一切致しませぬ。永年アノ奴を御贔屓下さいました旦那樣に對しては相濟みませぬが、藝道の事は致方がムりませぬドウか惡からず…」

との屹相である。庵主も扨て飛でもない事を云ひ出して、是は大變と思ふて、手を變へ品を變へて說得したが、大掾中々肯かず、庵主はトウ〳〵二度目の下坂に、趣路の申分を取消として、無事に濟んだのである。其時に庵主はフツ〳〵ソウ思ふた。アーア何程好でも、志度寺などは稽古するものでないと。今日本一の越路太夫でさへ、其修業の慘憺たる事は斯の通りである。是が何よりの證據の現實であるから、是で何事も說明が出來るのである。

（二十）假名手本忠臣藏　四段目切　判官切腹の段

此段は寛延元年辰八月（大正十五年を距る百七十九年前）竹本座に上場せられ、作者は竹田小出雲、三好松洛、並木千柳であると思ふ。役場は竹本政太夫の筈である。豫ても云ふ如く他の淨瑠璃には流義の家元があつて自から又其風がある。長唄には杵屋、一中節には都と云ふ如く、チヤンと一家を建てゝ居るが、義太夫節には家元がない。夫は如何にも劇の創作が廣大にて、ドンナ名人でも一人で丸本全部の五六段を語り通す事の出來ぬ、大仕掛けの組織であるから、一生懸命で修業して、鍛練したのが、一段か二段である。故に此外題では、筑前掾が大序と九段目の山科と七ツ目の由良之助と語り、政太夫が四段目と十段目の天川屋と七ツ目の平右衛門を語つたのである。夫に後世四段目の方は、八ケ間敷云うて修業すれ共、十段目の方は追出の語り物のやうに心得て、馬鹿にして居るは、言語道斷である。矢張チヤンと政太夫風の備はつた物であるから、庵主は故豐澤廣助に、丸本の黑朱を調べさせて、立派な語り物に仕て置かうと思つて居た位である。菅原傳授でも、

筑前掾が、大序と三段目の茶筌酒、喧嘩場から、訴訟から、櫻丸切腹まで語つて居り、政太夫が道明寺と天拝山とを語つて居る。夫に後世、其段の家元の風を滅茶苦茶にして、道明寺は八ケ間敷いつて、天拝山の方は馬鹿にして居る。櫻丸は大事に河内風など修業すれども、其前は馬鹿にして居る。夫では風はないのである。風がなければ、義太夫節は千段も二千段も、一つ節を覺えて、三味線に合ひさへすれば、「スエテ」も「ハルフシ」も「文彌」も「中落」も「色」も「中」も同じ節で語れるのであるから修業も何も要らぬのである。

此判官切腹の段は、第一語る心得が六ケ敷い修業である。ドンナ身分の賤い太夫でも、腹の修業に心持が出來て、播州赤穗の城主、五萬三千石の大名の、江戸屋敷であるとの心持が、此段を語るのである。

先づ『浮世なり』と云ふ三重が「裏」で、最も沈重詳穩の氣に充ち〳〵て語らねばならぬ。四段目の「三重」には、多く「裏」で出る事が多いが、此「裏」は一種特別である。夫から枕半枚は容易の心掛では云へぬ。大抵泥濘を象が歩るくやうに語るか、講釋師が居睡りを仕て居るやうな語口に了るが、ソウデはない。只腹に呑込んだ嚴肅と、悽愴の氣で語るのである。即ち『鷺谷判官』と語り出すに、

政太夫の風がある、『扇ケ谷の上屋敷』と言ふに四段目の音がある、『事嚴重に見にけり』と云ふに、云ひ得られぬ悽愴の氣が漂はねばならぬ。『かゝる折しも』から氣を變へて、品良く語り、音使ひと「ギン」の音とを落付かせる事を忘れてはならぬ。鄕右衛門と九大夫は「色」に語つて、外は大抵「中」に語る事は皆人の知る處である。此は多く四段目にある條件である。『早玄關』から總て河内風を忘れるやうに、品良き「中」の音にかゝつて運んで行き、「石堂と藥師寺」の語り分けが、政太夫が天下一品であつたとの事である。『加古川本藏に抱き止められ』は『やらんに抱き止められ』の方が良いとの事。『湊川にて楠正成』は云はぬが良いとの事。『廊下の襖踏み開き』は『刎ね開き』の方が良いとの事。『ハット計りにドウと伏す』の一語は、御上使に平伏するのではない、『主人の有樣見るよりも』ハット腰を拔す如き驚きと、落膽の『ハット計り』である。其次に來る『ハヽヽヽヽ』は御上使が進めと言つて許せども、一寸腰も立兼ぬると、一方は敬意を御上使に表するのと、二つの意味にて、『ハッハッハヽヽヽヽ』と云ふのである。判官の遺言は、息で聽衆を釣付けて置いて、最も低い小聲で、大星に云ふ、夫が大劇場でも聞えるやうに、藝力を養はねばならぬ。『拳を握り』云々の「クリ上」は、尾籠にならぬやうに、大星の腹合が聽衆に徹底するを主として語る。『シヾ〳〵と皐

き上ぐれば』は此上なき憂を含んで語る、『御臺所は正體なく』は人目も構はず、泣いて良いとの事である。『嘆き玉ふを慰めて』は、是非「地色」に語らねばならぬとの事。『御菩提所へと急ぎ行』は、此一句を今一段語る積りにて、ユックリと充分に憂ひを含んで語れと云ふのが教へである。

（二十一）假名手本忠臣藏　六段目切　勘平切腹の段

此段は寛延元年辰八月（大正十五年を距る百七十九年前）竹本座に於て竹本錦太夫（綿武と云ふ）の役場であると聞く、作者は竹田出雲、三好松洛、並木千柳である。此段は庵主が明治十四年に、故竹本攝津大掾に入門して（此二代目越路太夫は慥か大阪今橋邊に居つたと思ふ）、大に自稱名人を振り廻して、先代萩の御殿を語つたら大掾曰く、

「貴君は御運動に聲をお出しになり升のですか、淨瑠璃をお覺へになり升のですか、ドチラでムい升か」

と云ふから、

「私は淨瑠璃を覺へるのじや、今語つた先代は淨瑠璃には成つて居ないか」

と問ふたら、大掾滿面に笑を浮べ、變な聲を出して、

「イヤ先代の御殿には慥かに聞へ升が、淨瑠璃には皆目少しも成つて居升せぬ、先づ暫くの間、堂

島の御宅へ或る太夫を差上げ升から、何なり御稽古をなさつて御覽じませ、其上で私が一度伺つて、又御稽古を初めませう」

と一度で破門せられた。夫から或る太夫に押掛けられて、鰻を毎日三箱四箱と喰ひ倒ほされ、ボツ〳〵と稽古を初めたのが、此忠六である。要するに庵主が斯道の手解きは、忠六である。夫から、『深編笠の侍二人』と遣り始めた、處が『ザーイ宿を——召さるゝか』から、勘平の突込まで聞されるのに、半月も掛つて、鰻は五十箱位は喰はれたのである。夫が段切になるまでには、何でも凡五ケ月位になつたと思ふ。夫から大掾の前に兩人で行つて、大掾に叩かれて語つたら、初めから仕舞まで雪崩を打つてメチャ〳〵になつて、今まで何の稽古をしたのか、サッパリ分らなくなつた。夫に可笑しい事には、大掾が庵主には一言の小言も云はず、其或る太夫に斗り小言を云ふのである。

「お前はんは、ドンナ心得で『原郷右衛門、千崎彌五郎、御意得たしと音のふ聲』と聲を替へてお稽古を仕なはつた、此は先に立つて居る郷右衛門が一人で云ふのだんがナ」

と云ふやうな譯に遣らるゝのである。庵主は婚禮の晩の花嫁御の樣に、押默つて坐つて聞いて居る斗りである。或る太夫は、只ピョコ〳〵頭斗りを下げて居るのである。殆んど一時間半も叱られて

兩人で大掾の家を引下つたが、何處かの河岸を歩行する時、或る太夫の云うた事を今でも忘れぬのである。

「旦那はん、アンタのお稽古を仕た爲めに、私はドエライ良い事斗りを覺へました、是から一層勉强してお稽古に參りますよ」

と云ふから、庵主は腹を立てゝ、

「何を云ふ、此馬鹿者奴、小半年も掛つて仕た稽古は、全部糟も殘らぬ程打破はされ、洗ひ流されて、喰はれた鰻の箱は數切れぬ程である、日本國中にドレ程の大馬鹿が居つても、是以上の者は決して有るまい、俺は當分コンナ馬鹿事は止める」

斯ふ云うたに相違ないのである。夫から一ケ月も經つて、稻岡と云ふ裁判官の宅で、大掾に面會したら、

「旦那樣、忠六はマダ御勉强でムい升か」

と云ふから、

「俺は忠六でさへ、人間生存の意義が怪しく成る位馬鹿になつたから、此上忠四とか忠七とか忠九

とか、質屋の伴頭見たよふな者と取組をしたら、洋服を着た人間の糟が、大阪の町を歩行くよふになるから、モウ當然浄瑠璃と絶交をしたよ」

と云うたら、大掾は堪へられぬ程笑つて、

「夫は旦那様一番好い御分別でムい升よ」

と云はれて、彌〻悩れ返つたのである。夫から後年段々此段を研究したが、第一此段の文章が非常に悪い。『薬は無きやと懐中を探り見れば……手に障つたは此財布……天より我に與ふる物と直に……彌五郎殿に手渡し』云々一體何と云ふ事であらう、武士たる者が人を銃殺して、薬は無きやと懐に、手を突込んで財布が有つたので、直ぐに天より我に與ふる物と云つて、夫を盗んで溜るものでない、作者の非常識にも程があるので、庵主は茫然として此の作者の常識を疑ふたのである。夫から當然此段を書直そうと思ひ立つたが、サア困難である。是非勘平が此金を取らねば、腹を切る事が出來ぬから、色々と工夫をして、武士道として止むを得ず、取る事に組立直そうとして、トウトウ唐の陸績が、袁術の家に於て、母の爲めに橘を盗んだ故事などを引出して、やつと勘平に此金を取らせる事に書直したのである。夫から語る方の事は稽古を仕直したが、何様四段目語り

の大達者錦太夫の風であるから、異様な聲を利用して、ミッシリ四段目を語り抜いた人故、其音遣ひの風の困難な事と云うたら、矢張結論は馬鹿氣切つて居たのである。短かい物ではあるが、庵主今日に至るまで、此忠六にはホト〳〵閉口して居るのである。故に聊か此忠六稽古の馬鹿咄を書いて責を塞ぐのである。讀者は宜しく機微の間を察して、此忠六の語り方を會得せらるべしである。

最後に此錦風と云ふ事を一言云うて置く、此は大掾も大隅も庵主に遺言のよふに常に云うて居た事である、何樣此錦太夫と云ふ人は、異風の音を遣つて四段目の風と品位とを極めた人故、夫を呑込んで居らぬ事には四段目と三段目は語られぬ事になる程の一大事であるとの事、夫から音遣ひでなく、節がゝりの方でも元祖から傳はつて居る節の中でも、後世錦風と稱して居るのが澤山ある。喩へば『公曉法師と申せしは此若君のヲヲン、コトヲ、ナア、アーアーリ』(市若)、又『源藏ハーア胞を、据テーゾ、イイイー、リイニイ、イイ、ケエーエーリ』(菅四)、『是の道理イイ、ヲヲーヲヲ、キキー、イイ、イイー、イイ、ワケーエテ、妹の初花の』(玉三)の如き皆錦風との事である。又四段目の音遣ひは增補布引の四ノ切などを研究すれば分るとの事である。

（二十二）假名手本忠臣蔵　七段目切　一力茶屋の段

此段は寛延元年辰八月（大正十五年を距る百七十九年前）竹本座に上場、作者は竹田出雲、三好松洛、並木千流で、役場は總掛合にて、「由良之助」此太夫（筑前掾）、「平右衛門」政太夫、「おかる、彌五郎」文太夫、「九太夫、喜太八」百合太夫、「伴内、重太郎」信太夫、「力彌」友太夫と云ふ役割である。扨此段の語り方に付き住昔攝津大掾から聞いた事がある。

「忠臣藏の茶屋場の事は、師匠春太夫が、曾て私に申ました。「俺は師匠から「平右衛門の尻押へ由良之助の頭抜き」と云ふ事を聞いて居るから、覺えて置け。」と云ふ事を云はれました。私も是には段々苦しんで、夫を考へて來ましたが、旦那は是程藝に御熱心な方ですから、ドレ程の御力があるか、試めしに申上升から考へて御覽じませ」

と云つたから、俺も男だ、考へ出さぬで置ふかと、段々考へたが、サア分らぬ。夫から茶屋場と云ふ茶屋場は、何處にても行つて聞く事にし、文樂でも幾度聞いたか分らぬ。素人の掛合でも、屹度

聞いて考へて居たが、中々分らぬ。殊に大掾は何時でもお輕であつて、由良之助も平右衛門も一度も聞いた事がない、夫で尚ほ分らぬのである。ソコで萬止むを得ず、或時庵主は大掾が茶屋場を語る時、コウ云つて聞いた。

「師匠お前は何時でもお輕で、由良之助は何時でも津太夫で、平右衛門は何時でも呂太夫の様であるが、一體津太夫の由良之助は、アレで成つて居るかドウじや」

「旦那様ソンナ事を云ふて、私を欺して聞かふと成さつてもイケませぬ、克く修業をしてお考へなさりませ、併し津太夫も初めは、中々〳〵由良之助には成れませなんだが、何様永年の持役と年功で全部とは申せぬが、チヨイ〳〵由良之助に成つて來ました」

と云ふから、サア何處が由良之助に成つて居る處で、何處が成つて居ない所であらうかと、毎日詰切りで由良之助斗りを聞く事に極めた。モウ平右衛門もお輕も一寸も聞かぬ事にした。何様文樂では、大概四年越位に此外題を出す様であるから、今度聞出さねば又四五年聞かれぬと、身も魂も打込んで、津太夫の由良之助斗りを聞いた。勿論津太夫は、無意識で語つてゐる事は分つて居るが、聞始めて三日目に、不圖心を新たにして聞いて居ると、『手の鳴る方へ、〳〵』と云ふ後に、由

良之助が「カブッテ」出ぬ、一息抜いて『とらまよ〳〵』と云ふ、ドウモ夫が如何にも其出方が全體の都合に宜ろしいやうに聞かれた。夫から段々聞續けると、總て由良之助丈は「カブッテ」出ると面白くないやうである。其晩宿に歸つて來て、ツク〳〵考へて居る内、ハット思ふ程悟つた。此由良之助は決して「カブッテ」出る氣持は少しもない、是が彼の「由良之助の頭抜き」じやナア、好し是だと心を極めて、夫から又考へたらズーツと平右衛門の尻押へが分つた。夫は平右衛門の詞丈けは、決して詞尻に息を抜いてはイケない、相手が何か云ふまでは、グウッと押付けて息を詰めて居なければ、後が云はれぬ事になる。夫は床本が皺クチヤに成る丈け、讀んで語つて考へて見ねば、夫がソウなることが分るのである。ソコデ先づ「平右衛門の尻押へ由良之助の頭抜き」丈けは曲りなりに考へが付いたから、之からお輕を研究して見たいが、此はドウ考へても只の義太夫節の音遣ひの外、研究の餘地がないのであると、先づ腹構へが出來たから、五行本を一冊買つて、夫に始からスッカリ語り方の章を打つて使に持たせて大掾の所へやつたら、大掾は其翌日に來て、

「アンタは、實に熱心な方です、トウ〳〵考へ出しなハッタ、夫に違ひオマヘン、恐れ入りました只だ此所から由良之助の變りが腹の中にも、詞遣ひにもムり升、即ち力彌が來てからの押合、又

九太夫に聲を掛られてからの押合は、又コロット違ふ腹加減がムり升」

と云はれた時は、喜で笑顔も禁じられぬ程嬉しかつた。ソコデ庵主は大掾に斯く難句を持掛けた。

「夫なら師匠は、此茶屋場三役の中の、一番輕い役斗りを拵へて、全太夫を喰つて仕舞つて、獨り銀見を取つて居るではないか。」

と云つたら、大掾頭を掻き、

「ソウでムいます、實は長年此段には苦勞も致しましたが、先輩師匠連の居られますときには、一番宜い役の付ましたのがお輕でムい升、夫に一生懸命凝りまして賣り出しました。又由良之助や平右衛門は役も付ませず、工夫も恐ろしくて付ませぬので、氣後れ勝に成りました。今アンタの云ひなはる處に氣の付いた時は、モウお輕で賣込んだ時で、お輕以外の者は、表で語らせて呉れぬ時でムいました。併し由良之助の本役で賣出せなかつたのは、常に殘念に思つて居升」

と答へたのである。此お輕の語方に付いても、澤山咄があれども長くなるから又別に書くとする。

元來筑前掾が此寛延の興行以來、斷然竹本座を退いて、東の芝居に這入り、豐竹を名乘つたのは全く藝道の爭ひからと聞いて居る。淨瑠璃古咄集に因れば、此筑前掾は、低調子の元祖である。之

までは皆の太夫は表の調子で語つて居た。夫に筑前は裏の低調子でも、派手に品よく語れる物であると云ひ張り、彼の豪慶と云ふ駒を掛けて、裏の調子で語れると云出したので、達役由良之助の調子に、皆の太夫は付かねばならぬ事となつた。ソコデ〳〵云ひ出したので、筑前掾はこんな狭い藝の太夫共と、共に藝を爲るのは嫌じやと云ふ意味から、竹本座を出たのであるとの事である。何様古今無双の大當りの外題であるから、マダ良い事を澤山知つて居る人もあらうが、庵主は庵主丈けが聞いた事を書いて置く。夫から先年力彌の出の三重を庵主が『月の出る』と直ほしたのに付いて色々の議論もあつたが、夫は山科に月入る里と云ふ地名があるからとの議論が大部分であるが、庵主は夫でも矢張『月の出る山』と掛けて語る事を主張するのである。今一つは『勿體ないが親さんは非業の死でもお年の上、勘平さんは三十に、成るやならずに死るとは』の文句を、庵主が『勿體ないは●親さんが、●お年の上に非業の●死、勘平殿も●三十に成るや成らずに死るとは』と直ほしたのも文章の上からも、旨趣の上からも、自分丈けはソー語る事を主張するのである。

（二十三）假名手本忠臣藏　九段目切　山科閑居の段

此外題は、寛延元年辰八月（大正十五年を距る百七十九年前）竹本座にて、竹本筑前掾が勤め此外題にて東の元祖越前少掾の孫、島太夫即ち二代目豐竹若太夫と共に豐竹座に入り、是より筑前掾は豐竹を名乘つたとの事である。即ち此九段目が、筑前掾が竹本座にての、お別れ語り納めの一段である。其後竹本姓の政太夫も語り、夫が非常に良くて、今日の太夫が語つて居るのにも、政太夫風も交つて居るのである。作者は例によつて竹田出雲、三好松洛、並木千柳等であるとの事。

此九段目は義太夫節中の大王とも云ふべき六ケ敷い物にて、先づ是以上の困難な物はあるまいと思ふ。第一に本藏の出までは他に類のない程「カワリ」斗りの六ケ敷地にて、太夫も三味線も鎖で繋がれて居て、「カワラ」ねばらぬのである。三味線が初め「雪下し」と云ふ手を彈くが、「チン、テンチン、テン」と彈く、其「チン」と「テン」との間が、屹度太抵は腰がなくて「マクレ」て居る。夫は「チン」と彈ゐて、「テン」に至る時の左手の棹を摺る、親指の股に力を入れる修業が積んで居らぬか

ら、壁り間の「チンテン」になつて仕舞ふのである。ソウなると『人の心の奥深き』を語り出す事が、修業の有れば有る程困難になるのである。ナゼなれば「チン」も「テン」も、雪の笹葉から靜かに落ちる舞臺の淋しさを拵へるのである、故に「チン」の音が必要でなく、「チン」の「ウナリ」と、「テン」の「ウナリ」が必要である。夫に「チンテン」では淋しくも何ともないのである。夫が此段の魂である。夫から下の音は、腹の底に「ツッパリ」があつて、無暗に決して振る事はならぬのである。夫から三味線の音に關係なく「ハリキリ」「ハルギン」の二音が、何とも云へぬ妙所に觸れねばならぬ。是が出來ねば、筑前風ではないのである。次に「ギン」の音が總て絃に離れて、無上無垢の上品な音使ひを覺へねばならぬのである。となせは溫順に上品に、お石は上品に嚴格に、其内に女の情が漂よはねばならぬ。小浪の「サワリ」と稱する所は、此を地色崩しと云ふそうで、此は他に一つも例がない。即ち腹の中にて、太夫が「地色」の氣味にて語れば、三味線は何の苦もなく、「サワリ」の積りにて彈くと云ふ位取りが、其位置にならねば、双方とも出來ぬのである。夫から政太夫風と云ふは、『道の案内の、乘物を』から『庵の戸口』まで、或は『表に虚無僧の尺八』から『一間もヒッソと靜まりしが』までなどが其風である。此外にも考へれば直に分るのである。今日まで大抵の太夫が、『涙止

めて立かゝり』此間に三味線が笛の手を彈く、此間に太夫が息も腹も拔いて居るから、『コレ小浪アレを聞キヤや』が、娘を斬らふと思ふ心も、刀を持つて居る氣も拔けて、只の時のとなせになつて仕舞つて居る。此等の一例で、九段目と云ふ物を知らねばならぬ。コンナ所は、前後を通じて、平一面にあるから、夫に心を止めて修業せねばならぬ。本藏の出からは、豪らい斗りで、只の義太夫節になるのである。鍛練さへすれば誰れでも語れるが、夫までの前の部は、修業しても語れる人と語れぬ人とが出來るのである。攝津大掾は全部を通じて一時間と四十五分(老年の時)、大隅太夫は一時間と二十五分、三代目越路太夫は、大抵一時間と四十分であつた。

（二十四）双蝶々曲輪日記（ふたつてうくるわにつき）　橋本の段（はしもとのだん）

此段は寛延二年己七月（大正十五年を距る百七十八年前）竹本座にて上場、作者は、竹田出雲、三好松洛、並木千柳で、役場は竹本大和掾であると思ふ。此大和掾は、初め三輪太夫、内匠太夫、大隅太夫と云つて、豊竹座を勤めて又竹本座に戻りて、二代目義太夫、即ち竹本播磨掾の後継者として、一世を風動した名人にて、大和地、大和風と云つて、節語りの名人である。此の太夫が斯る眞世話物を語つたと云ふは、實に珍らしき事にて、此段の語り風が、世に顯れて以來、世話物の詞遣ひの語り方が、一變したと云ふ位であるから、此段を引受けた太夫は、地合は素よりであるが、詞の語り方に性根を入れ替へて、シッカリ修業せねば語れたとは云へぬのである。夫が腹の心から其人形の氣になつて、藝と思はずに、其人になつて咄をするやうに、修業を徹底せよとは、此段稽古の心得の第一である。即ち上場人形心持の稽古が專一と云ふ事である。

一、お照の詞遣ひの修業が一種の風ある事。

二、下女の詞遣ひが、一種淀みなき風ある事。

三、鴈籠昇の詞遣ひも同前。

四、夫から一番の難物は、與五郎の詞遣ひである、夫がウント修業せねば、其心持が漂はぬのである。

五、夫から治部右衛門、甚兵衛、與次兵衛、と三人の親爺の詞遣ひは人格を語り分ける詞語りの修業の大難關である。

地合は、此段では寧ろ副事業であるが、此詞遣に伴つて、何とも云へぬ味がなければ、何の興味も起らぬのである。攝津大掾が或時、師匠春太夫に稽古を申出たら、

「夫は心掛は宜いが、グット年を取つた後の事にせよ、お前等は太夫に成れるやらドウやら、マダ分りもせぬのに、此橋本とか敎興寺とか云ふ物に野心を持つのは心得違じや、俺は先輩の語らるるのを、熟心に聞いて居た上で、自分も數回之を語つても見たが、ドウも滿足に語れやうとは思はれぬ位であるから、お前等はマダ外の物の修業が專要である」

と云はれたので、ギヤフンと閉口しました。とは大掾の直話である。夫から七十と云ふ歲になつて

初役として文楽で始めて此橋本を語つて、歸り掛けに庵主の旅宿に來て大掾は斯う云つた。

「往年湊太夫さんと勝右衛門さんが清水町の濱で語られたのも聞て居升し、其外聞ました記臆を辿つて遣つては見ましたが、心咎めでも致しましてか、全く浮甕を付けて泳いで居るやうで、思ふ方角に泳いで往かれませぬ、總稽古前に引籠まして、詞遣ひ丈けは三四十遍も、空で云ひ得るまでになりましたが、扨て地合に移り升と、ドウも折角の努力が逃げてドウも成ませぬ」

と云ふから、

「俺は今日着阪して、時間が間に合はなかつたから、明日から聞に行くが、隙なら一遍聞かせてくれぬか」

と云うたら

「ハイ〳〵有難ふ存升、私の修業に成升から聞いて戴き升」

と云ふて二分位の調子で膝を叩いて無本で丸ゴカシに聞かせて呉れた。其面白さと云うたら、今尚ほ耳の邊に、其息込と聲が漂ふて居るのである。其翌朝庵主がボンやりして、昨夜の面白味を繰り返して居ると、突然大隅太夫が這入つて來て「昨夜は一見の師匠が參られたそうですから、遠慮し

て居ましたが、ドンナ咄がありましたか」と云ふから、庵主が今考へて居る興味を、全部咄して聞かせたら「私は清水町の師匠に、橋本丈けは隨分シッカリ稽古をして貰うた積りで居ましたが、マダ迚も無本では遣れませぬ。夫から締り處とカワリ處が一寸往道が違ひ升、私も最一ツ勉強せねば、今のお咄しで、丸で破れて仕舞升たから、モウ語られは仕ませぬ」と云うて嘆息した事があつた。

（二十五）双蝶々曲輪日記　八ツ目切　引窓の段

此外題は寛延二年巳七月（大正十五年を距る百七十八年前）竹本座に上場したと聞く、役場は竹本政太夫で、橋本の段は竹本大和掾と聞く。庵主は何でも明治十八年の冬頃、彦六座で竹本組太夫が語り、橋本は大隅太夫が語つたと思うて居る。此時今の朝太夫は三ツ目の掛合と追出しの鈴ケ森を語つて居たやうである。庵主は此段を大隅太夫に聞かせて貰つた。其時彼の云ふには

「旦那衆の貴方方に云う必要はムりませぬが、貴方は特別じやからお咄し升が、私が新町の師匠に此段を聞かせて貰うて口を明ました時、師匠がコウ云やはりました……「ウム思つたよりも、よう語つては居るが、マダ引窓にはならぬわい」……と云やはり升から……「ドウ仕ましたら、引窓になりますか」……と申ましたら、師匠は……「アヽ、役が付いたら教へてあげ升、夫までよく考へて置きなはれ」と申されましたから、氣になつて〳〵なりませぬ。其後組太夫が語りましたから私は組太夫に申ました、「師匠が私に引窓を稽古して遣つて置いて私が口を明けると、「思うた

よりはよく語つては居るが引窓にはなつて居ない」と云やはつた、夫から始終考へては居るが、ドウしても分らぬ、お前はんは今度の芝居で語つて居て、じやが、私は夫を熱心に聞いて居ても其譯が分らぬ、ドウか私に其譯を聞かせてくれぬか」と申升と、組太夫は「ニコ〳〵笑ひまして「夫は友達のおまはんに云ふのは何でもないが、私も夫と同じ事を師匠に云はれて考へても考へても分らず、トウ〳〵今度役が付いたので、ヤット師匠に教て貰うて分つたのやさかい、申さば師匠からの預り物じや……師匠に一ツぺん尋ねて見て、教へて遣れと云やはつたら直に云ひ升……マア考へたかて中々〳〵アカンぜ、夫は〳〵六ケ敷しこツちや」と申升から、私はサア癇が立つて來まして、其晩から引窓の本を引出しまして魂ひを入れて讀みましたワ〳〵、端場から段切まで讀んで〳〵讀み抜きました。夫でもドウ語れば引窓になるか矢ッ張り考へが付きませぬ、ソコデ段々外の物の事を考へ初めました。元來此ザコバ政太夫の西口風と申す物は、陰氣な音を遣ふと思ふ時は、陽氣な音を遣うて置いて、上手に陰氣な音を得心の行くやうに遣ふと云ふのが、古淨瑠璃の法で、小が目的なら大から行け、大が目的なら小から行けでムり升から、何でもソンナ風の事に相違ないと考へました。夫から又師匠に聞かせて貰うた時の師匠の聲の事を、ジーツと目

を瞑つて考へて見ましたらハット考へ付きました。何でも引窓を開けたり閉たりするのやから、明かるく暗く音を遣うて見たらドウであらう、夫で古浄瑠璃の風が辿れはせまいかと思ひ升と、夫から又引窓の本を一生懸命に讀んで語つて見まして、何でも是に違ひないと、思ひましたから直ぐに師匠の所に參りまして「お師匠さん誠に濟ませんが引窓を一ぺん聞いて戴きたうムります」と申しますと、師匠が大變機嫌がよろしふムりまして「アヽモウ稽古して一年にも成るてないか考へて居たか、マヽ結構じや〳〵、藝人は夫でなければ藝にならぬ、サア遣つて見なはれ」と申されますから、今日まで苦心しました通りを一生懸命に遣つて見ましたら、師匠が閉いて居やはつた目を明けられまして「アヽ夫なれば惡ふても引窓じや、凝んなはれ〳〵、凝つたら浄瑠璃は良くなり升……お前組太夫に何か聞いたか」……と云はれますから……「ハイ聞きましたけれども云うてくれませぬから、忌々敷て〳〵〳〵なりませぬから、一生懸命に「天拜山」と「渡海屋」と「洞ケ嶽」の本を讀みまして、夫からお師匠さんの聞かせてくりやはりました時の音の事を考へまして、コウではあるまいかと考へまして、夫で幾度も語り込みましたから、一度聞いて頂きたうなつたので〆り升」と申ましたら、師匠はニコ〳〵仕やはりまして、「そーか夫で結構じや、斯藝

は先づ西東を極めて、夫から太夫風を他の本で讀んで極めて、責め上げれば知らぬ物でも語れる筈の物じや、夫で一段の稽古をしたら風をシッカリ極めて、他の物に持つて行ける丈け練習して覺えて置く事じやぞ。夫から此引窓に限つて婆の泣落しに「チ、……」と彈かせてはならぬ物じや。「チン〳〵」『ツン〳〵』と「アシライ」で語るものじや、又端場から奥を語れば『煙草盆提げて二階へしほれ行』の「フシ」切れに「ツントン」と重く彈くものじや」…… と此まで親切に云うて聞かされ升中に、私は頭を何時の間にか疊に付けまして、思はず有難涙が滴れて居た事に氣が付かぬ程、師匠の御恩を感じました。今貴方にお稽古をして居る中に、此時の事を思ひ出しましたから幾度も涙を呑込んで云うて居ましたから、序にお咄して、師匠の有難さをお咄して置くのでムり升。夫で考へて見やはりませ、『人の出世は時知れず』と明るく云うたら、『見出しに預り南與兵衛』と聲を落して云ひ升、『衣類大小申受け』と「ハッ」て云うたら『伴ふ武士は何者か』と平らに語るのでムり升、『所目なれぬ血氣の兩人』と強く云うたら『家來も其身も立止り』と靜かに語るので引窓になつて、明るく暗くなつて行ますので、三味線も其心で彈かねば引窓は彈けて居らぬのでムり升、此から先は語る人と、彈く人の考と、力とで引窓が出來て行くのでムり升。其他、

『一日々々と、親の事が身にしみ』などの邊まで其心持が滿ち〳〵て引窓になるのじやと思ふてゐなはつたら間違ひはおまへん」

と咄して聞かせた事がある。此等の咄は少々は憶へ違があるかも知れぬが、書いて置かねば、世に消へて仕舞ふから思ひ出した丈け書いておくのである。

近來に於ては頓斗此段を聞かぬ。竹本古靱太夫が時々此段を語るが、誰に稽古をして貰つたか知らぬが、大分面白いやうに思ふのである。庵主は昔より現代藝人の品評をした事はないが、此人の此段はソモ瓢太夫の昔日から聞上げて來た中で、惡い所もあるかは知らぬが、大體に於ての秀逸と思うて喜んで居るのである。

（二十六）源平布引の瀧　三段目切　綿繰馬の段

此外題は寛延二年己十一月（大正十五年を距る百七十八年前）竹本座に上場した筈である。役場は竹本政太夫と思ふ。

庵主は此段を大隅太夫に三度斗り聞かせて貰つた事があるが、芝居では同人の語るのを聞いた事がない。此稽古は大分六ケ敷くて、庵主は一寸語つて見る氣になれぬ程弱り込んだのである。明治二十四年の秋頃と思ふ、大阪の文樂座で、長尾太夫の語るのを聞いたと思ふが、大分賑盛の品格と瀬尾の詞「ガワリ」が好かつたやうに思ふ。此時は何でも津太夫が「鳥羽の離宮」の段で、大掾は（當時越路）「酒屋」の付け物、呂太夫は「志渡寺」を語つて居たと思ふ、何れも今日何の印象も殘つて居らぬ。只だ此長尾太夫の「綿繰馬」丈、耳に殘つて居るのが不思議である。其後明治卅九年の十一月に、又文樂座で之を聞いた、其時は三代目越路太夫が此段を語つて、津太夫が又「鳥羽の離宮」であつた、大掾は何でも四十何年目とかに語ると云うて「大文字屋」を語つて居た。此時は若年の時から

の最屓の越路太夫が語るのであるから、庵主は前からウント力瘤を入れて聞に行つたが、夫が全く失望に歸して、大掾の「大文字屋」がドエラク好くて、五日間斗り滯阪して、此「大文字屋」の稽古をして貰つた。之を綜合するに、此三段目は庵主の聞いた中では、日本で大隅太夫より豪らいのは決してなかつたやうである。夫は「地合」の「音遣」は無論であるが、「詞」が途方もない六ケ敷物である。夫に恐れて、庵主などはトウ〳〵語る氣がせぬし又世の中にも流行もせぬのである。元來此段は語る前から腹構へがウント据はつて居らねば、ドレ程語つても、臭くもない、屁を放つたと一所である、何ともない物なら、語らぬ方がよいのである。先づ政太夫風を語るとの腹が極つたら『音靜まれば』の「音遣ひ」から、衾へ込むやうに、サラ〳〵と皆「中」の「音」を離れずに運ぶ事である、『葵御前も、立出玉ひ』も「ニジッタ中」である、夫から『聞及びし實盛殿』の「詞」は兎ても大隅の云ふのを聞いた事があつては、人の前で云つて見る氣がせぬのである、何と云ふ品合の氣持であらう。元來大隅の語り口は、品と云ふ事には餘り十分に思はぬ庵主が、此『聞及ぶ實盛殿』斗りには、頭を下げたのである。又『段々のお情け』何とも形容の出來ぬ運びである、『是は〳〵御挨拶』も、只の「中」である。夫から『某元は源氏の家臣』と云出す實盛の「詞」は「カン張た」やうで、低く穩かなやう

に聞へ、重味のあるやうで、品格のあるやうに聞へ、迚ても筆には書かれぬのである。『不思議なは此肘』は「色」で、『矢橋の船中にて某が切』で止まつて、『落した覺あり』は低く、『御存じなきヤ——ツと尋ぬれば』は「色」で、『其切つたとある者の年格好は』と葵御前が品のよき押氣味の「詞」何とも云はれぬので、詰まり品合の競爭である。『九郎助女房』は世話に「カワル」事。『思ひ遣つてサネーモーリ』の重たサ、『扨は其方達が娘よな』の「ハリマ」を聞いた時は、モウ情けある武士の寳盛たる情合が張切るやうに、一杯に漂うた。ハット氣が「カワリ」て、『聞も及ばん宗盛公』となつた時は、大隅が名人やら何やら解らずに、生きた寳盛がズーット浮み出たのである。『口に白絹引くわへ』から「カワリ」て、サッ〳〵と『浮きつ沈みつ游ぎくる』と、庵主は面白さに目がくらんで、醉うて仕舞うた。『アレ助けよ、アレ殺すなと舷たゝいて』と云ふ時は大隅は二分位の調子で、火鉢の緣を叩いて聞かせて居たが、モウ目が血走つて居た。『折から比叡の山嵐シーンニ』と、「ギン」の「音」にからんで云ふ時は、アノ臭い息の大山嵐が、座數中一杯になつた氣がした。『追手と見へて聲々に』と「ノリ」て張つた時は大隅も庵主も、我を忘れて居た。『飛騨の左衛門飛掛つて、もぎとらん』と「ネベル」工合である。夫から『海へザンブと』と云つて『切落し』と不憫の心を浮べて語つた

時は、世の中にコンナ良い實盛物語りが、昔から有つたであらうかと思つた。夫から『親を慕ひ子を慕ひ流れ寄つた』で止まり、『不便や』と「上ギン」を「ニジッテ」、『涙交りの物語り』と語つた時は庵主稽古を打忘れ、「ヲイ一寸待つてくれ」と云つて、洟をかみ、涙を拭いて一寸休息した。夫から「瀬尾」の出となつて『小柴垣より顯れ出で』と云つた時は、淨瑠璃離れ、人間離れがして、ビックリした。庵主は此處で思案をした。ア、馬鹿々々敷イ、コンナに面白く途方途轍もなく、千變萬化に語らねばならぬ物なら、商賣にするのではなし、又一生語られそふにも思はれぬから、コンナ物は止めた方が上分別じやと全く思つたのである。大隅は語り了つて、

「旦那ドウだす、骨身にコタへましたか」

と汗をふき〳〵云ふから、

「ア、骨身所か心魂に徹へ過して、コンナ物は止めといた方が良いかと思つた」

と云つたら、大隅は大聲に笑つて、

「夫は旦那はんよい御思案で厶り升、アンタ方がドン丈け凝なはつたかて、山が知れて居升、上出來に凝んなハッタかて、我々〳〵の讀付位の物だす、併しアンタは止といた方が良いと云ふ位、解ん

なはるサカイ、私嬉しうて一生懸命お稽古をするのだす、マア語んなはらぬまでも、三日斗り聞いとくんなはれ、大方に解る丈けまで聞やはると、他のを聞いなはつた時、物事が解り升サカイ、本眞にアンタは感心だす」

と云つた。何だか譽めるのか、馬鹿にするのか解らなかつたが、全く此「綿繰馬」には閉口頓首したのであつた。其後前の三十九年に最屓藝人の越路（三代目）の語るのを聞いた時、居ても立つても居られなかつた。「アヽ大隅からアレ丈け聞いて、永年本を讀んで居なかつたら、此越路の三段目が面白く聞へやうもの、俺は全く大隅に悪い微菌を付けられた」と思つて越路に其咄をしたら、越路はコウ云つた。

「私は豪らい不調法をしました、實は師匠の所に本を持つて參りまして、一度聞いて戴きたいと申ましたら、師匠が……私も此三段目の事は、師匠にも云うて貰うて今に思案をして居るが、聞けと云へば聞も仕樣が、ナヾもつと早く來ぬのじや、此な物は今云うて、今語れる物でないから今度は其儘遣つて置なはれ、役が濟んだら、何時でも聞くわい……と云はれましたので、實はグット氣になりまして、毎日魂がウワ〳〵して遣つて居り升、師匠にも、旦那にも、全く申譯

ムりませぬ」

と云つた。マア斯様な物であるから、其儘を書いて置く。斯る品物を筆先で書くのは、書く程氣がひけるから、此位にして置く。皆よく注意して、研究すべき物と思ふ。此丈でも若し何かの參考になれば結構である。

（二十七）　増補源平布引の瀧　四段目切　松波検校琵琶の段

此外題は寛延二年己十一月（大正十五年を距る百七十八年前）の書下にして、竹本座にて興行せしと聞く。作者は並木千柳、三好松洛であるとの事。夫から間もなく矢張り並木、三好の手にて此四段目丈けを増輔として書直し、其前と後との約めが付けてないから、若し通して演奏するとすれば、前後を少しづゝイジらねばならぬと思ふが、先づ聞き傳へた儘を書いて置く。

役場は竹本和佐太夫、改め錦太夫であると聞いて居る。此錦太夫は、四段目語りの名人にして、異風なる聲にて、何でも面白く語る音遣の名人であつて、今四段目風と云つて、其音を八ケ間數云ふ。音遣ひは此人と政太夫の風とが多いと思つて居れば大體宜いとの事。「三重」は「ウラ」で出た方が宜い。『昨日まで』と「地ハル」で、『秋の雲井の御住居も』から尻が、「二」に落ちぬやうに「ウケ」の絃に決して付かぬやうにして、『冬枯に』の『に』の字になつて、始めて「二」の音に落ちる事。『フーウウユ、ガレ――エエ、エエ』と張り上げて、自然に下げて音が、「二」の音になつた時に、『に』と

「二」の音で止める事、是が先づ四段目の音と云ふとの事。『庭の紅葉斗りなり』の「ユリナガシ」の節は、大事の納まりである。玉三の『光りまばゆき白書院』の「ユリナガシ」と同じ積りであるが、舞臺は右大臣道春の白書院と、此四段目は鳥羽の離宮のお庭との違いが、太夫の心持に夫が屹度あつて其音の響きが、聽衆に威嚴だけでも、ハッキリするやうに語らねばならぬ。夫には「ギン」の音の修業が、チヤンと其位を定める程になつて居らねばならぬ。夫から今時の四段目は「スエテ」が、皆四段目になつて居らぬと思ふ。即ち『ハット斗りに行綱は、暫し詞もなかりしが』が全部駄目と思ふ。菅原四段目の『云ふに思はずふりあほのき屹度見るより暫くは打守りて居たりしが』の「スエテ」と同じ事である。此「スエテ」は西も東も屹度同じ事である。『ハット斗りに行綱ア――は、シベ、シーイ、イーイ、イイ――イ――イ。詞アーアモ、無かリーイ、シー、イーイ、イー』が此丈けの産字が有る筈である。寺子屋の方も『打ち――イ、イ――イ、イイ、イイ――イ、守ヲリ、居たり――イ、シ――、イ――、イ――イ――が』此産字丈けは、四段目なれば「スエテ」に是非語らねばならぬと思ふ。現に夕霧伊左衛門吉田屋の段でも、京都の友次郎が傳として、三代目吉兵衛が攝津大掾の南部太夫時代に稽古して居る朱を見ても、チヤンと四段目の手で責め上げてある。即ち『伊左衛

門ハットせいたる顔色にて暫し詞も無かりしが』の「スエテ」も誠に正しき物である。外の物は兎もあれ四段目丈けは餘り無茶では氣の毒と思ふのである。庵主は大隅太夫の此段の音遣ひの鍛練に感服して、素より稽古も仕て貰つたが、扨て大隅の高座に於て、其上の働きを聞く事が、最も樂として居た處、庵主は師匠大隅生涯の中に、前後六度程出入止めの勘當をした事がある。夫は最屓上の厚意とて、設令へ庵主が是程好きの淨瑠璃を止めても、大隅師の爲めに良くないと思つた事を意見して用ひない時に、固き決心の上に發表した事件である。夫程庵主の固き決心が、何時でも又た藝道の上で、一人の仲人なしで和解して仕舞つた。大隅死後の今日まで、思ひ出しても失笑するのである。或時今度こそはドンナ事が有つても、生涯大隅とは絶交であると決心をして、二年斗りは手紙が來ても封の儘で、突き戻して居たが、大隅も今度は諦めたかして、明治座に來て興行して居ても、庵主の家には顔出を仕なかつた。好い鹽梅と喜んで居たが、フト或朝新聞を見ると大隅が今夜は布引の四段目を語ると書いてある。庵主の頭は忽ちグラ〳〵と動いた。

「アーア大隅と絶交して後、澤山布四を聞いたが、皆丸で、目も鼻もない四段目であつた。今度大隅の布四を聞いて置かねば、モウ一生涯筋のある布四は聞けぬかと思ふと、絶交は仕て居るが、

變裝でもして、四段目丈けを聞に行ふか知ら……、イヤ〳〵止めて置ふ。イヤ〳〵分らぬやうに行ふ」

とトウ〳〵頭巾付の雨外套を着て、木戸で一枚札を買つて、正面の二階に上つて、丸で姿を見せぬやうにして、煙草盆を枕で寢て居た處が、其晩は大雨で聽客はタッタ六十名である。然るに大隅は毎晩庵主の得意茶屋たる花家に、樂屋入の度毎に何時も表まで來て、

「ドウだす。旦那はんは來やはりませぬか、何とも音沙汰はムりませぬか」

と尋ぬるが常であつたとの事、茶屋は大隅に氣の毒と思ひ、庵主の處に度々電話を掛けて、

「大隅師匠が毎晩尋ねに來升から、ドウカ一度お出を願升」

と云ふ事であるから、庵主は、

「近來腦病で、一切劇場には行かぬ、全快したら行くべし」

と云つて追拂つて居た位故、此晩も花屋に行かれず、自働車は久松町の警察署に賴んで、其門前に置き、ソーッと入塲したのである。處が大隅は樂屋で花屋の出方男に出逢ひ、

「ドウダス、今夜も旦那は來て居やはりませぬか」

と云ふと其男が、

「今度の興行には、ドウもお出にならぬやうです、併し正面の二階に大きな男の人が、一人寢て居り升ぜ」

と云ふと大隅は、ピシヤンと膝を叩いて、

「夫じや、旦那に違い有ませぬぜ」

と云つて、間もなく高座に現はれた。庵主は片唾を呑んで聽いて居ると、タッタ六十人の客を相手に語る。大隅の布四と云つたら、天地も裂けん斗りの息込みで、庵主は何時の間にか、蠱魔に魅せられて、生死の界も分らぬやうになつた。又其時の二代目圓平の紘の冴えと云つたら、庵主長年アノ人がアレ丈け三味線の彈けたのを聞いた事がないと思ふ程であつた。トウ〳〵大隅が此一段を語り捨てるやうに語つて仕舞つた時は、庵主も又投げ捨てられたやうに、起直る事も出來ぬやうであつた。兎も角匆々に起きて、木戸に出て來ると、其出口に大隅が、頭から汗の儘、帽子もインバネスも左手に抱へて、駈出して來たものと見えて出し抜けに、

「旦那樣、御機嫌ようムり升、何とも申譯ムりませぬ」

と云つた。ビックリして默つて居る庵主の、後に躙いてノソ〳〵來るので、トウ〳〵自働車の處まで來たから萬止むを得ず、

「マア自働車に乘れ」

と云つて、或る料理屋まで連れて來て、二言三言の挨拶で、トウ〳〵庵主の固き決心も何も、無條件挫折で媾和締結となつて仕舞つた。前後六度の絕交は一度も此手に乘らぬ事はなかつたのである其大隅の藝力と、庵主の藝病は大體コンナ物であつた。夫から大隅は、

「私は久し振りに、四段目をアンタに聽いて貰うて居ると思うて、ウツ、に成つて語りました」

と云つて、段々講釋を仕て呉れた。二時間斗りの後は庵主はチヤント大隅の怒隷と成り下つたのである。

「サア玆を云うて見なはれ……ソ、そんな詞遣ひを誰れが敎へました、私はソンナお稽古はしまへんぜ、夫では丸で、聲りの乞食と一所でんがナア、是は天子樣の御殿の仕丁ダッセ、夫も難波の六郎や、越中上總でおますぜ、アーアあきまへん、此段は錦塲としておますさかい、官女の這入も、仕丁の這入も、錦(節の名)に語んなはれと云ふといタジヤおまへんかいな、アーアあき

まへん〳〵行綱の初めの出には、ドンナ音を遣ひやハッタ、『蟲が知らすか松波が』ソンナ音でヨー語れ升なア、「ニジッタ」音で「ハッ」て、ソウ〳〵、モット、サラ〳〵と運びなハレ・あんたはアレ丈け叮嚀な稽古をして覺へて居て、私いが少し逢はないと、サッパリ胴も成りへんなア」と、丸で餓飢人足のやうに、踏まれたり蹴られたりてある。トウ〳〵築地本願寺門跡の朝のお勤の鐘がゴーンと鳴つた。是から毎日明治座へ樂屋入の前に、大隅は二時間斗り來て、庵主は丸てビョコ〳〵、誤りの、叱られの、毎晩出入の者共引連れて、明治座への出勤てある。モウ書けば書く程恥の上塗り斗りてあるから、此位にして置くから、以上の事を種に研究すべしてある。

（二十八）増補玉藻の前曦の袂　三段目切　道春館の段

此段は寛延四年未正月（大正十五年を距る百七十六年前）豊竹座に上場せしものと思ふが、此段の仕組は殆んど二段目にある、夫は金藤次が死なずして、萩の方の代りには、右大臣通忠卿がなつて居る。今語る三段目は其趣旨を取りて書換へ、之を三段目に据へ、増補の形となつて居る。併し矢張筑前風の三段目物として、尤も困難な物と考へねばならぬ。

予が此段を語る事を知つて、モー殆んど十有餘年であり、又故攝津大掾、大隅太夫の語るのも聞いて、一層の研鑽を加へて、之を譚奏する事も、亦數十回なりしと思ふが、予が天性の不敏は、一回も會心の域に到達せず、常に悒鬱の念を去る能はざるを遺憾とするのである。何て左樣に此段に限つて困難するかへ云へば、

第一、劇として、其組織の堂々たるに脅威せらるゝのである。

第二、斯界中興の祖たる筑前掾の語り場にて、調譜音遣の莊重嚴正なるに驚くのである。

第三、此段は素人玄人の別なく、男女の太夫間に、餘りに廣汎に流行普及してゐるが爲めに、予が研鑽中にも不知不識の間、耳馴れ口馴りにて終に高尙の格を失ひ、俗調俚臭に陷り易き事である。

第四、此段は眞の東風にて「ギン」の音の遣ひ分け尤も六ケ敷、喩へば枕の半枚を語るにも「ウキギン」「中ギン」「眞ギン」等の「裏表」がシットリと据り能く、「足取り」と「間と息」が頼母敷まで落付くのが重要の條件にて、殊に「白書院」と云ふ「ユリ流し」の節は、尤も莊重な「ギン」の音にて、ドッシリと結びを付けねばならぬのである。夫が予等が幾度語つても、其力量と藝位が其處に至らぬ爲め、締りの悪るき始末となるのである。

第五、最後に困難なのは、餘りに舞臺面が上品で、殊に出る人形が上品な者斗りで、金藤次、萩の方、桂姫、初花姫、采女、御勅使、丈にて下女も下男も出ず、照應の標準がなく、上品な人形五人の中にて各々特に異なりたる人格を現はす事の藝力の技倆が、甚だ困難な事業であるのである。

以上の困難條件が參互錯綜して、腰と腹とを紛雜せしむる爲めに、中々甘く行かぬのである。其外

の難局を云へば。例へば、浮浪生活の金藤次が皇子の見出しに遭うて大出世をなし、大得意にて右大臣道春邸に上使に來る、其得意の相貌意思を尤も濃厚に顯はして居た所に、後室萩の方の咄を聞き、自分が浪人中に棄てたる兒が桂姫にて、其拾兒に義理を立てて、實子の初花姫を以て身代にせんとする、日本道徳の尤も強烈なる電氣に觸れた金藤次が、二度目に發言する、即ち『云はせも果てず麁荒らゝげ』の詞以下は、如何なる息、如何なる聲調にて語れば、金藤次の心裏を聽衆に會得せしむることを得るかと問はれたらば、如何なる大家にても、直に其困難なる事が分明するのであらう。「金藤次は斯る大恩家とも知らず、其不幸に乘じ、即ち右大臣道春の死後、孤兒と寡婦とを恐喝して迫害を加へ、其朝廷より預けられたる獅子王の劍を盜みて、其家を滅亡の危運に陷入れ、其上に其愛孃の首を刎て、皇子に媚るの手段となさんと謀つたのである。夫が俄然、此後室の物語りを聞いて、其首を刎ねんとしたのは自分の娘であり、況んや後室が夫を自分の肉身の娘を犧牲として捨兒の姉を助命せんとする苦衷に對して、彼は自己積惡の懺悔と共に、一死を決して其罪を謝せんとする其心情を不言の中に語り出さねばならぬと云ふ」夫を困難と云ふのである。其他論じ來れば其類枚擧に遑あらずであるが、兎に角此段は義太夫節中の大困難なる物と思ふて予は今尙ほ失

敗の度を重ねつゝあるのである」

（二十九）戀女房染分手綱　六ツ目切　齊掛村の段

此外題は元近松門左衛門の作であつたが、何かの譯で格別流行らなかつた。其後四十五年を經過した後、吉田冠子、三好松洛が之を增補して、寬延四年未二月（十一月改元）（大正十五年を距る百七十六年前）竹本座に上場せし以來、西物中の錚々たる出し物として、權威を有する事になつたのである。此段の役場は、竹本錦太夫であつたと思ふ。

此人は前名和佐太夫、綿武と云ふ人にて、異風なる聲で、面白く語る上手の大達者である。忠六布引の琵琶等は此人の風である。此齊掛村も錦物として修業する事にすると、殆んど動きの取れぬやうに六ケ敷物である。此段は後世聲の惡るい人の語り物のやうになつて居るが、夫は大間違である。聲が良くても惡るくても、遣う丈けの音は、ドウしても遣はねばならぬ。夫が出來ねば齊掛村を讀んだので、語つたのではないのである。攝津大掾は若年の時、春太夫師に齊掛村の風を覺へて置たいと思つて、稽古を賴んだら、

「お前は難儀で、迚も沓掛村の音遣ひは出來ぬから、今は紋下の湊はんの語りやはるのを能く聞いとけ」

と云はれた。大隅太夫は團平に、シッカリ稽古はして貰つたが、或る時師匠に是で宜敷ウムい升かと云うたら、團平は、

「お前は沓掛を語つたには相違ないが、宜敷ウムい升かとは、何と云ふ太い云分じや、私は今日まで此段で成功しやはつたと思ふ太夫はんは、長門はん、湊はんと二人じやと思つて居る、お前は馬鹿じやナア」

と云はれましたと云つて居た。庵主も此段は澤山聞いたが、先の彌太夫、住太夫、先の津太夫、組太夫、大隅太夫と、耳に蛸が出る程聞いたけれども、耳に殘つて居るのは只の一人である。夫は組太夫の語り口であつた。其餘の太夫のも宜かつたかは知らぬが、大抵大同小異で、恐ろしいと思うたのは一つもない。組太夫のは間と足取と息遣ひと變りの鋭い事とが、今尚ほ頭に泌み込んで、「沓掛もアヽ語らねばならぬと極つたら、迚も恐ろしくて一寸手が付けられぬわい」と思つて居る位である。故に其一句一動の働きは、今尚覺へやうと思はずに、頭に殘つて居るのである。先年組太夫

が上京した時、日本橋茅場町の宮松亭で、沓掛を語ると聞いたから、何でもと驅け付たら、富助が彈いて居た。久し振で組太夫の顔を見たら、大分憔悴して居た。扨て語り出すのを聞いて見ると、皆嗜れ枕文句が聞取れぬ、足取も亂れて居る、夫を富助が實に鹽梅能く彈いて居る。此の富助の修業と技量には又感服したが、從來煮える程感服して、全く沓掛村の神樣じやと思つて居た、組太夫の語り方が、是ではと尠なからず失望した所が、詞になつて來て、『アノ子の布子代りに、俺が此ドテラを賣て、分けて取つて下され』との一句になつたら、見物全體は申に及ばず、斯く云ふ庵主も、共にグウッと引付けられて、前傾きになつて仕舞つた。夫からズーッと仕舞まで釣付けたなりに、ポンと突放なされたやうになつた。庵主は矢張り、組太夫は沓掛村のチヤンピオン、此段の名人じやと思ふ。是がこの太夫が庵主と今生後世の別れの一段であつて、再びアンナ沓掛村を聞く事は出來ぬのである。以上庵主の了簡の統計に因ると、第一が語り下ろしの錦太夫、第二が團平の云つた長門太夫、第三が湊太夫、第四が庵主の數回聞いた組太夫である事になるのである。マダ外の人のを聞いたら、名人の統計を拵へる事は出來るかも知れぬが、夫は庵主の生存中には不可能の事である故、庵主は生きて居る中に、切めて今一人丈け、面白い忘られぬ、恐ろしい程の沓段村を聞

たいものじやと思(おも)つて居(を)る。

（三十）戀女房染分手綱　十段目切　三吉愁嘆の段

此外題は寛延四年未四月（大正十五年を距る百七十六年前）竹本座に上場した筈である。作者は、三好松洛、吉田冠子との事である。役場は、竹本大隅の掾、即ち大和の掾であるとの事。此人は斯道節語りの元祖とも云ふべき大家であつて、元祖竹本義太夫の弟、内匠理太夫の伜、俗稱近江屋三右衛門と云ふ人で、始め三輪太夫と云ひ、次は内匠太夫と云ひ、更らに大隅の少掾と云ひ、終に大和の少掾藤原宗貫と任官して、老後に有隣軒と號し、明和三年戊十一月八日、六十五歳にて歿したのである。辞世に、

　折るゝとも響きは殘れ雪の竹

と讀んだが、面影に花の姿を先立てゝ、語り殘した音曲の、音色は絶えず幾度か、染め變はれども呉れ竹の、葉色は同じ竹本の、操の節を傳へ來て、百六十一年後の今日まで、鄙に都に充ち〳〵て詞の花と唱ふのは、全く此大和の少掾の努力が、多きに在ると思ふのである。

明治二十五年の春、攝津大掾が、大阪御靈文樂座で語つた時、染み〴〵と之を聞いて、これまで段々咄も聞いたが、第一「音」の就き離れから「ノリ」の運び方と「スネ方」が、一鎖り〳〵に六ケ敷、斯藝中の尤も面白き物、又面倒な物として聞いたのである。夫から明治三十二年の春(七年後)、又大掾の此段を聞いたが、大分前に聞いた時と相違の所もあり。我々が折角永年研究して居たのが、無駄になつたやうな感がしたので、宿に呼んで親敷質問をして見たれば、彼曰く、

「御尤でムい升、先年お稽古を致しまして後、耳の病氣を致しまして誠に難儀致して居ります所へ此正月から三味線が吉兵衛になりましたので、音の就き離れに、中々不自由致し升、松葉屋は總て大分呑込んで居て呉れまして、共々に少々の離れた事も出來て居ましたが、只今の所では、當分お氣に入るやうな藝は出來ませぬから、ドウか御不承を願升」

と云つて、其晩も矢張此「續十」の稽古をして呉れたが、扨て稽古となると、丸で講座と違ひ、全く先年の教授と少しの相違もないのである。

扨て先年の稽古と、此の時の舞臺の藝とが、ドレ丈け違ふかと云へば、先年の時は、聲が大きくて、底力があつて、据つて居たが、此時は、聲が小さくて、絃の通りに辿つて居るやうに思はれた

然るに今又、大掾が口三味線で、一段を聞かせたのに、矢張ドッシリと聲が据つて、側で聞いて居ると、部屋一杯、耳一杯になつて、實に大きく何とも云へぬ程面白くて、聞取られぬ程情味が漂ふたのである。

先づ『お傍の衆にはやされて、おさな心の姫君』『テン』と運ぶ、夫が『お傍の衆』と云ふ聲の大きさにビックリする。『はやされて』から離れて、段々面白くなる。『ヤァヒさらふとおつしやるは』の聲の大きさ。『こりや目出たいは〳〵』の面白さ、筆などには到底書かれる譯の物ではない。夫から、『是も馬子殿、おかげじやア――ア――アァ』となつては、實にモウ其音遣ひを聞取つて覺へるなどの心地はせぬので、只だ面白い斗りである。要するに大きい聲との對照で、斯く面白くなる事丈けは相違もない藝格と斷言が出來るのである。此段は決して、キャア〳〵云ふ淨瑠璃ではない事が、屹度判るのである。元來此大和風と云ふのは、總て播磨地から來た物と思へばよいそふであるが、此大和の掾は、全く鍛練の結果、斯く味いある語り風が出來た物の由である。世間皆「ノリ」地斗りが「大和地」と思つて居るが、そうでない。「スネル」事が旨いから「ノリ」地が際立つて鮮かになるのであるとの事。故に播磨地が元じやと思つて居れば、大和地も駒太夫風も判るのであるとの事。皆

一つ道を修業して、生きたる人間が丹精の結果、ズバ抜けて旨い藝力が漂ふ處を、名付けた節の名であると思つたら好いとの事である。故に此『おかげじや』の節廻しでも、決して大和の掾の專有獨特の節ではない。堀川夜討三段目の『手を取かはす親と子の――ヲヲ――ヲヲ』も、忠臣蔵七ッ目の『早里馴れて、吹風エに――イイ――イイ』の音遣ひも、皆播磨地から來た音の運びとの事である。夫から此播磨地でも、大和地でも、總て斯道の音遣ひ、節廻しに「引字」と云ふものをしては、根本が駄目になるとの事。『書は沓打ち』と引かぬから、『はらんず――ウ――ウウ、つく――ウウリ』と節が止まるので、藝にも曲にもなつて、跡に「チン」とか「テン」とか「トン」とか彈かれる事になるのであるとの事、故に其「引字」をせぬ素養が第一、即ち修業の基礎であるとの事。今の太夫連の語るのを聞いて、引ずり引張りせぬのが、誰であらうか、我々は夫が見付からぬのである。夫は修業して居らぬ立派な證據である。此修業鍛練が切れる刀の權威で、即ち藝の神力である。夫を修業せずして、音遣ひと、節廻しとをして居る太夫は、皆全部棒で藝味を叩き潰すのである。三味線などは、兎ても當り前に彈かれぬから、三味線なしで、講釋師になるがよいのである。夫でも情けない事には、彈かねば飯が食へぬから、彈かれぬでも彈いて、給金を取るのである。ソンな了

簡の人間が、二人講座に並んで坐つて、是非とも給金丈けは取る事になつて居る。大掾は曾て云つて居た。

「我々末の世の藝人は、情けない物でムいまして、興行師さんと、御贔屓様の前では、ドンな事でもせねば立行かぬとは、畢竟身前が至らぬからでムい升、昔の師匠方の咄を聞ますと……日頃の交際は、ドレ程親密であつても、藝が少しでも出來ぬとなりますと、彼碁敵のやうに、双方から出掛けて行つて、喧嘩のやうにして稽古をして居られたとの事でムい升」

と云つて居た。

夫から『數臺の段階子』と、『淺間しや』との高い音の節は、攝津大掾獨特の節廻しで、「ケからエからサ」の音までクリ上げて、マダ餘つて居るから、勝手に語つて居るが、此節は決して大和風でも、何でもない。出來る丈けの事をすれば、夫で澤山である。夫から古い教へを聞いて見ると、馬子歌の前で「チヽン、シアン」と彈いてはイカぬそふな、「間」をおいて「シアン」と丈け彈いて、遠い放れた聲で唱ふとの事である。

（三十二）一の谷嫩軍記　須磨浦組打の段

此段は寶暦元年未十二月（大正十五年を距る百七十六年前）豐竹座にて開演した物で、役場は豐竹島太夫であると思ふ。即ち二代目若太夫とて、所謂スワ町平右衛門と云つて、越前掾の孫で大達者の太夫である。此人は越前掾の高弟豐竹筑前掾と始終提携して、大役を勤めた人であつて、即ち菅原傳授を語る時には、此人は四段目の切寺子屋首實檢の段を語り、又引下げ役としては、嵯峨の奥を引受けて居る。又筑前掾は自から座頭で居ながら、大序を語り、夫から三段目、即ち茶筌酒から、喧嘩場から、訴訟、櫻丸腹切までを引くるめて語つて居る。夫から此嫩軍記の時は、筑前掾が三段目の熊谷陣屋を語つて、島太夫は此組打の場を語つて居る。其組打が古今未曾有に良かつたと云ふので、幾百年後の今日まで、斯く持て囃されて居るのである。此場は立端場の役らしくは成つて居れ共二段目である、何ぜう四段目太夫の大達物の語つた場故、當今語るやうに、只の端場に斗り語つてはならぬ物である。此場の語り方で、三段目の熊谷陣屋は喰はれて仕舞ふのである。

此場の熊谷で聽衆が、シッポリ泣かされては、三段目の熊谷では泣けぬ事になるからである。後世の太夫としては人形を語る時は、前の謡から玉織姫と平山の武者所を語り、素淨瑠璃としては『延玉ふ』を三重にして、夫から語る事にしてある。

作者は並木宗輔である。此場を宗輔が書くには、親敵目から須磨の濱邊に往つて、一夜を漁師小屋に明して、其浦曲の景色を見て居たのを、夫を漁師共が網盜捧と間違て、大勢寄つて打叩いたとの事である。實に一の谷中の名文である。『無官の太夫敦盛は』と語り出す時「テン、テン、〳〵」と彈く三味が、段中の一番六ケ敷處にて、故團平は一生中に一度も滿足に彈なかつたと云つた位である夫は自分が作者の氣になり、須磨の浦を目の前に見て居る心で彈かねば、其「テン、〳〵、〳〵」が須磨の浦曲の穩かな濱に打寄する、男浪女浪の音にならぬのである。故に「テン、〳〵、〳〵」も一度は强く一度は弱く撥が冴ねばならぬのである。『無官の太夫』と「地ヘル」の「中」、「無官」を「ヘッテ」『太夫』は低く、『敦盛』は又高いのである。夫で三味の意味と一致するのである。今では女義の口語りの通りに、男太夫でも語つて居るのである。其品合は一廉の修業をせねば齒も立たぬものである敦盛の詞の中に『去ながら忘れ難きは父母の御恩、我討れしと聞玉はゞ、嘸御嘆き思ひ遣る、切め

て心を慰む爲め、討れし迹にて我死骸、必ず父母に送り玉はれかし』は（板本に『必ず父に』とあれど、此は『父母』と直す事）の一節は、端場たる事を忘れて、滿心の魂を入れて語る所である。此敦盛が小次郎であるから、其詞の意味が聽衆に徹底すれば、其人が鬼でない限りは、屹度泣くのである。夫から熊谷の詞に『悴小次郎直家と申者』の一句は、今日本で此詞を云ひ得る太夫はあるまいと思ふ。此一節が此段の眼目である。此詞の語り方で、聽衆が顏を上げ得ぬまで、泣くと、泣かぬの別目で、其腹加減と、太夫の力の分る處である。夫から『熊谷は惘然と』の一句は、何とも云ひ得られぬ大事の一句である。熊谷蓮生坊が、此二人の死樣を見て、深く無常を感じ、轉た厭世の佛心を起したる萌芽の一句である。斯る文句は口で何と云つても駄目で、眞に其境遇に同化して仕舞ふ丈けの藝力がなければ、成し得られざる一大事である。此以下は全く切り太夫の語る腹構へにて精神を絞りて語らねばならぬのである。

（三十二）一の谷嫩軍記　三段目切　熊谷陣屋の段

此外題は寶暦元年未十二月（大正十五年を距る百七十六年前）豐竹座にて上場、此場は豐竹筑前掾が語つたと聞く。此人は前名、合羽太夫、美濃太夫、また此太夫といふ。作者は淺田一鳥、並木宗輔外三人なり。東物にして筑前場として尤も難物である。

此狂言は並木宗輔存生中三段目迄作り置きし遺稿を、一鳥や鯨兒や並木正三、難波三藏、豐竹甚六等にて、作足したるものとの事である。此時出座したる藝人は、即ち八重太夫（時太夫と改め）、筑前掾、駒太夫、阿曾太夫、友太夫、若太夫、鐘太夫、信濃太夫等にて大入をなせりと。

庵主が此淨瑠璃を聽く事、若年の時、竹本越路太夫（攝津大掾）を神戸にて、竹本生駒太夫を東京にて、竹本大隅太夫と竹本越路太夫（三代目）を大阪にて、都合四人の太夫の語るのを聽きたるに、其語る所の巧拙は別として、未だ一も會心の域に至るを覺へぬ。其主意は何れの太夫の語り方も、熊谷次郎直實が、源平時代の豪雄として勇氣一遍の人と聞こへたるのみにて、作者深意の潜む熊谷

といふ、大なる問題を會得したるものを聞かぬ。庵主の考へは之と異なり、熊谷は素より武邊一途の人なれども、頗る人情に脆き性質の人にて、其舊恩あり、且つ院の御胤たる敦盛を助くるに、滿身の情義を有したる所に、主君義經より、制札の諷刺を以て、一子を身代りとなすべく、命ぜられたる事さへあるにより、意を決して一子小次郎を以て、身代りとなす事を實行はしたもの、、父子恩愛の至情は、極度に刺戟して、終に菩提心を起すに至つた。即ち武邊義勇の動作、最終の判決は遂に我子を殺戮するの悲慘事に至るに依て、端なく厭世の心を起し、佛參の歸途幾多の無常を感得し、我陣屋に歸れば、國に殘せし妻相摸が來れるに會した、彼れ熊谷の心理狀態は、極度の攪亂を來した。即ち「武士たるものが、主命と舊恩の爲めに、合意の上、其子を殺したる事は、一方より云へば武士の本分である」故に妻に向つても、「武士道の爲め悴を殺したから、左樣心得よ」と一言すれば何事もなきに、之を明言したらば定めて妻が悲歎することを思ひ遣り、夫さへ明言し得ぬ程の弱蟲である。其上奥には梶原が來て居る事も聞き居る故、夫れにも氣兼しつゝある。要するに熊谷の心理と演者の心理とは、頗る應接多忙の結果、此熊谷にて滿場を泣かせるやうに書いたるものである。此根本的條件のもとに、其容貌や豪壯、言語や勇魁なるも、精神は飽迄も多情多涙の人格

に語らねばならぬと思ふ。此腹藝が困難なる故に、之を三段目として、夫れ相當の太夫に語らせるの必要がある、若し此段を受取りたる太夫にして、此腹藝を解せざる時は、只だ節を付けて素讀する、職人の太夫である。庵主が此段を研鑽して初演せしは、去る明治三十七年二月七日、即ち日露大戰開始の當日、墨堤の僑居、其日庵にてゞあつた、總て一時間と八分にて語り終りたるも、何分初めての事にて、紘師鶴澤仲助とも、息の馴染薄く、至極の困難をなした。爾後殆んど十年餘閑を偸んで研磨を加ふるも、一回として其意氣を發揮する能はざるを誠に遺憾とするのである。元來筑前風とは、ギンの音遣ひが六ケ敷、殊に「ハリキリ」と「ハルギン」の音遣ひが尤も鍛練せねば駄目である。庵主が之を試演する事既に九回、猶其作の梗概をも譚明し得ざるは其深奥殆んど量り知り難きを覺ゆるのである。

（三十三）傾城反魂香吃又平　將監住家の段

此段は、寶暦二年申三月（大正十五年を距る百七十五年前）竹本座にて開演し、作者は吉田冠子外二人で、此時は竹本政太夫の役場と思ふ。河内地、大和地等の風にて摺み、實に斯藝中の難物である。其後竹本染太夫も語つて、又其風が加はりて、修業に又一種の困難を覺えて來たのである。往昔は段々名人もあつて、此段に精魂を抽んで丶、修業を仕た人も澤山あつたが、庵主は、故竹本大隅太夫の演奏を、尤も意義ある物として、打返し研鑽を試みたのである。其他の太夫衆の語り方は、實に沙汰の限りの亂暴狼藉にて、筋を素讀するのが、不思議に三味線に合ふ位のものである。一例を擧ぐれば、大隅が圓平に稽古をして貰ふ時に、『爰に土佐の末弟』と語り出すに、『末弟』の、『イ』と云ふ產字が、息に力なき爲めに、幾度云つても、圓平師が「トン」と打つ事が出來ぬ、ソコで朝から晩まで『爰に土佐の末弟』斗り云はされて、圓平師は三味線を構へた斗りで、とう〳〵「トン」を一度も打ち得ずして、稽古を終つた事が、幾度あつたか分らぬのである。圓平曰く、

「私も、色々の太夫衆を弾いて來て、コレ程三味線が、下手なとも思はなかつたが、大隅よ、お前の語るのを弾くと、ドウも下手になつたやうな氣がして、ドウしても打たれぬ、コウなると私も自分の藝の事も、考へて見ねばならぬ事になつて來た、私の弾かせて貰ふた太夫衆は皆な下手で私位の者でも弾けたが、お前が天性藝が上手なので、私が斯まで弾けぬのではないかとも思つて今思案をして居る處じや」

と云はれた時は、大隅は師匠の家の雪隠の處の、廊下の板張りに身を打伏して、目も血走つた儘、泣伏して居たとの事である。斯る修業をした大隅故、彼が如何斗り天性愚なる男にしても、其語る事が『爰に土佐の末弟』一句の上に、サラッとして、天地を提げた氣合が見へるのである。圓平死後は、故清六、其時の叶が之を弾く時は、又之と反對にて、大隅が『爰に土佐の末弟』と語ると、清六が「トン」と打つと、サア大隅は、咽に拳を突込まれたやうな氣がして、息の根が止まつて、ドウしても『浮世又平重起と云ふ繪書あり』と「コハリ」より「ハナシ」た音に漂つて、收められぬ。大隅曰く「叶は若手では、一番良く弾くのでムり升が、コチが片輪の精か、ドウしても云はれませぬ、叶も又私の昔の通り、目も血走つて弾いて居り升、私も何でも語らねば、商賣が出來ぬと思ふて、熱心

に、幾度も〳〵遣つて見升が、ドウしても當分、甘く行きさうにもムりませぬ、今度文樂で語り升のも、お耳ダルウはムりませうが、そう云ふ譯でムり升から、當分御不承を願升」

と云つた事がある。庵主は其時、文樂にも聽に行つたが、イヤ面白かつた〳〵と云つたら、今に其語り口を忘れ得ぬのである。叶は枕から責立られて、御注進の引込になつて「テ、デン、〳〵、〳〵」と云ふ、清六、十八番の腕の冴えは何處へやら、壓搾に掛つた煎餅のやうになつて仕舞つた事が、今尙ほ耳底に新たなるのである。夫を辛抱して、恐ろしい此の太夫を、清六が十年間彈いたればこそ、彼の清六が產れて、アノ力が漂つて居るのである。此段の困難な事は、ザッと先コンナ物である。

先づ枕が濟んでも『筆の軸さへ』から『殊勝なる』までは、ズーッと河內地ではあるが、有ふれた風とは違つて、ヒッ立てた足取で語らねばならぬ。夫から『さゝへでも致しまして』から『御世にお出なされませ』の色止めまでも、同じ事で足が六かしい。夫から『私のしやべりと入「チン〳〵」合せたら』から『おはもじやと笑ひける』までが、所謂染太夫風で、大掾が常に云つてゐた「ヨドマズ流れず「ギン」の音を柔かに遣ふ」と云ふのが染太夫風である。「ヨドム」所は間て流し、「流れる」所は

息で「ヨドマ」するのである。夫は百千度の鍛練が物を云つて、語つて居るのである。夫を大隅が語る當時、女樂の見物も、太夫衆も、前受けが悪るい、面白くないと云つて、聽いて居る者が無かつたやうに見へた。其天罰でトウ〳〵今日一人も、吃又の語れる人が無いやうになつたのである。其後誰が語つた時か、『幸〳〵盃も戴いてあやかりやヤイのと有ければ』が詞風に聞へたのに、三味線の方は矢張り彈いて居た。其時斗りは、庵主思はず、口に頬張つて居た、辨當の飯を噴出したのである。大和地の語れぬ太夫は、決して吃又は語らぬがよいのである。

（三十四）義經腰越狀　三段目切　泉三郎館の段

此外題は寶暦四年戌の七月（大正十五年を距る百七十三年前）豊竹座に上場したものらしいが、作者が誰やら、役場の太夫が誰やら分らぬのである。其後十六年目の明和七年寅の正月に大阪堀江市の側の芝居にて、豊竹庵律が四段目を一段書足して上場し、此三段目は豊竹此太夫が語つたと聞いて居るが、夫も慥かとは云へぬのである。只だ寶暦の書下しの時、東の元祖越前少掾が語つたと云ふ説もあるが、此説は今殘つて居る語り風に照らして研究して見ると、何でも越前風に相違ないと思ふ。故に、庵主は之を越前風として書くが、夫なら決して間違つた節には墮落せぬと思ふからである。

此段は一時世間に大分流行したものであるが、之を教へる師匠が、斯る貴き音遣ひを辨へずに、出たら目に教へ散したから、誠に聞いて居ても、嫌厭な物となつて仕舞つて居るが、庵主の耳に止つて居るのは、東京に於て故綾瀬太夫の此段は、誠に襟を正して聞いたのである。勿論三味線は團

八であつて、良くは彈いて居たが、聞に位がなくて、申さば貧弱の方であつたが、太夫としては、此以上は無いと思つた。文樂でも彦六でも、聞く事は聞いたやうであるが、皆語つた丈けで、此段らしき品位は、ドウ熱心に聞いても、認められなかつたやうである。夫が皆「酒と云ふ」の「地色」から、モウ心得が間違つて居るから駄目である。『世のくせ物に』と云ふ「ギン」の音も、只の「ギン」では駄目である。皆腹で、浮いた「ギン」でなければ物にならぬのである。夫でないと『うかされて』が云へぬ事になると云ふ理窟が分らぬのである。ソコで『軍師も今は』にカが入れられて、『塵埃』が、「塵埃」に語られる事になるのである。夫で『箒の先に二升樽』も云へる事になつて『くゝり付』の「色」も面白くなるのである。夫から幾人の太夫の語るのを聞いても、『エイ〳〵〳〵』が皆行儀好き「定間」になつて居る。夫では此段を語る事が分つて居らぬのである。此『エイ〳〵〳〵』は前から語り込みの腹構への足取りで、足の踏途もシドロに亂れて居らねばならぬ。其亂れて居るのが腹の修業で、極つて居らねばならぬ。ソコデ『何でもせい』と云ふ「色」が、義太夫節千番の中に、一つも類のない「色」となるのである。總て「色」と「地色」と「詞ノリ」「中ノリ」「大ノリ」とが、腹の中に嚙み分けが付いて、人間並に語れぬ太夫は、コンナ物をドウ甘く語つても、語れては居らぬのであ

る。夫が語れねば、給金ばかり高く取つて、人氣ばかり湧立つやうに好くても、義太夫節の神樣に對しては、大罪人である。ソンナ、ちやんちやら可笑しい、手薄い事で、此藝は組立てられた物ではないのである。多くの人が知らぬと云ふのに付込んで、好加減な事ばかりを云つて、大金を貪り、恥かしい事も知らぬ者は、詐爲取財じやと云はれても、何と云譯があるであらうか。庵主はタッタ一度、東京で大隅太夫に此段を聞かせて貰ふ時、彼曰く、

「私は形丈けはお聞かせ申ますが、此段は私も知りませぬから、其積りで聞いておくんなはれや」

と云つて聞かせてくれたが、其面白さは何とも云はれぬ、底意地の惡るい恐ろしい心地がした。跡で庵主は、

「實に有難う、何とも云はれぬ、尊い意味合の、五斗を聞かせて貰つた。僕が語る事は、一生出來ぬと思ふが、お前の敎訓丈けは、生きて居る中は決して忘れぬ。私は此段は、我々の非力で齒の立つ物ではないと思つて、常に綾瀨太夫の語るのを、熱心に聞いて居たが、今日お前の語るのを聞いて、我々の聞いて居たのに、自信が付いて實に有難かつた」

と云つたら、大隅はポンと膝を叩いて、

「違いない、アンタは豪い、綾瀬はんは確かに此段を覺へて居やはります、私が今お聞かせ申たのが、綾瀬はんの語りやはるのと違ふた所がおましても、決して變へなはんなや、私はシッカリ覺へて居ませぬ、アノ方は此段をシッカリ覺へて居やはります事を、私は知つて居り升、アンタは實に豪い、私に語らせて聞く前に、夫れ丈け聞いて置いて、私に語らせやはるのやさかい、本當にお稽古の仕甲斐があり升、弟子共が皆、アンタのやうに心掛けて呉れますと、嬉ふおますが、中々ソウ行まへんでなア」

と云つた。其跡で側に聞いて居た五代目仲助が、

「私は小供の時から大隅さんは、全く藝の神様じやと思ふて居ました、夫は金太郎を盡して叱りやはるのが、皆一言も云へぬ事ばかり云やはるから、ソウ思ふて居りましたが、今日と云ふ今日は眞底から藝の神様じやと思ひました、夫は綾瀬はんがアレ程覺へて、一本で語つて居やはる、宗玄庵室を、アレはな、コヽをコウ突張つた詞遣ひでなければ、宗玄にはならぬ、モウ年を取りやはつたから、夫を云やはらぬけど、おまはん達は、夫を知つて居るがよいぞへと、敎へてくりやはりました、夫に今日、五斗のお稽古になつたら、ガラリ自分の金太郎を捨てゝ、私は覺へて居

まへん、形丈けを聞かせます、綾瀬はんはシッカリ、五斗を覺て居やはり升、私のを捨てゝ、綾瀬はんのを覺へなはれと云やはりました、此は本當に藝の神様でなければ、云はれぬ事でございます、私は今考へて見ても、大隅はんは、底の知れぬ恐ろしい藝人でございます、私共を蟲螻のやうに云うて、叱りやはつた大隅はんが、其私を前に置いてアレ丈け卑下したお稽古は出來ぬ事でおますせ」

と云つて嘆息した。庵主も共に嘆息して斯く云つた、

「お前がそう思ふは尤もじや、俺は昔から、大隅は人間ではないと云つて居た、夫はアノ男の不斷の行ひは、全く人間離れした程非常識である、又藝道の事になつては、全く人間離れのした程、尊い事斗りであると思つて居る、夫は俺は二十二三歳から、身を傾けて贔屓にして可愛がつた、三代目越路太夫に常に云つて居た、藝と云ふ物は何でも聞いて、恐ろしい感じが起らねば、藝ではない、夫は修業である。大隅太夫は芝居で語る出物を、ドレ程覺へて居る物でも、毎日稽古に行く、師匠團平を家に送り届けて歸つて來て、晩酌一杯を飲み、グット寢込む、午前一時頃から起上つて夜明頃まで本讀みをする、夫から又グット寢込む、朝八時頃起きて飯を喰つて、本を抱

へて稽古に出掛ける、夫を女房が衣物の袖を捕えて……「師匠…お前さんは、毎日〳〵稽古〳〵と云うて、お座數が云ふて來ても、斷り斗り云うて出て行なさるが、今日と云ふ今日は、小供も妾も喰べる米がおまへん、モウ米屋は借り斗りで、持つて來て呉れませぬ、ドウにかして貰はねば、留守して居られません」と云つて放さぬのである。大隅は「ムウ……難儀やナア……」と引かれながら、ポンと羽織の紐を引解いて、「此でドウなと仕とけ」と云つて稽古に出て行つた男である。夫程の稽古をしてこそ、アノ樣に、面白くない、ソッけない、クシヤ〳〵〳〵、云ふ藝が出來て、前受けが惡るくて、給金の取れぬ、金儲けの出來ぬ、一生貧乏して、乞食のやうにして暮さねばならぬ、藝人が出來たのである。夫にお前はドンナ修業をしたのか、人氣が割れ返るやうにあつて、淨瑠璃は何を語つても皆喜んで聞いてくれる、給金は大隅の幾倍を取つて居るが、夫でお前は三十日の芝居の役前に、何處に行つてドンナ稽古をして居るか、ドンナ所にスッ込んで居るか、其天罰で、聞いて居れば面白い斗りで、恐ろしい所は只の一つもないではないか、鍛練さへすれば誰でも眞似が出來る事を云つて居るとは思はぬか、大隅の藝は、毎日〳〵〳〵、聞けば聞く程恐ろしくなつて來て、トウ〳〵仕舞いには、義太夫節も、斯ふ語らね

ばならぬことに極れば、先づ止めて仕舞つた方が、上分別じやと思ふやうに、恐氣が立つて來るのである。夫は修業である。綾瀬太夫でも昔日の財産で三十萬圓の身代を語り潰したと云ふ藝である。よい物斗りもないが、慥に藝に手ごたへと、行く所に當りが付いて居る、老年に及んでは三味線彈も鹽梅よく彈いてもくれぬので、長くなつたり、口捌きもボト〳〵はして居るが、修業は又別に恐ろしい物があるのである、當時の藝人として、綾瀬の五斗位は隙を缺いても一度位聞いて置いたらドウじやと思つて居た、自分の人氣の天狗で、トンと聞外して居るのではないか、と云つた事がある。仲助よお前も藝人である、大隅の豪い事斗りを知つて、大掾のアノ難聲で力斗りで藝を仕て居る事が分つて居るか、ナゼ魂を入れて人の藝を聞かぬのじや。モ一つ咄がある。先年東京の朝太夫と松太郎が大阪に往て藝を仕たそふで、大阪での評判が非常に惡るい其後俺が大阪に行つて、故名庭紘阿彌と對座して居る側に、或る一廉の太夫が來て、此兩人の批評を初めた。「朝はんと松太郎はんが大阪に來て、當り前の藝をして吳りやはつたら、大阪の藝人共も、性根がついて結構で厶りましたらうに、殘念な事で厶りました」と云ふから、餘りの事に俺は聞くに忍びず「コラ〳〵ドンナ藝をアノ兩人が仕ても、貴樣達は夫を批評する資格はない

ぞ、只だアレが好いとか悪るいとか、批評する資格は、藝人でない俺丈けであると思ふ、ナゼなれば、アノ兩人は、東京と云ふ所を馬鹿にして、生活が仕たい、〳〵〳〵と云ふ聲を出して、生活が仕たい、〳〵〳〵と云ふ絃の音をさせて居る丈けである、當り前の藝を知らぬので、今のやうな藝を仕て居るのとは違ふぞ、松太郎が三十臺で、彦六座で仕て居た藝も、朝太夫が語つて居た藝も、俺は聞いて居る、斯道一通りに於ては、當代の森口源左右衛門である、若し彼等兩人が、昔から鍛ひ上げた當り前の藝を仕て居たら、お前達は、月夜の提灯で、有るか、ないか、分らぬのである、お前達からは、朝太夫樣、松太郎樣である。アナタ方が昔と違ふ藝を仕て下さる、お蔭で、私共が斯ふして生きて居られるのでムり升と、ナゼ蔭膳を据へてお禮を云はぬのじや、滿足な事も云へぬなりで、アノ離れ態をして居る藝の批評が出來るか、コウ云はれるのが腹が立つなら、今日から東京に來て、朝太夫、松太郎のする通りに、詞を捨てゝ語らず、「色」を語らず、表の一本でも二本でも、松太郎の彈次第に、ザーアーッと「ケ」「エ」「サ」の譜から投げ出すやうに出て、一段の藝を仕て見よ、夫でアレ丈けの金を取る事が出來るか、アノ兩人は、お前等の思つて居るやうな藝を、知らぬのでない、知つての上のホタへである、ホタへて金

を取る丈けの力が藝にあるのである。夫を嘘と思ふなら、松太郎に付いて何でも稽古をして見よ何でも知つて居る、お前等は皆落第生斗りである。俺は昔から、松太郎の藝も知つて居る、朝太夫は此に居る此廣助が彈いて東京へ來て、其時からも聞いて居る、只だ今彼等が仕て居る、藝の眞似をせよとは云はぬが、彼等は他に目的があつて仕て居る藝を、善だの惡だのと批評をする事丈けは、お前達には、藝道の爲めに許さぬのである、只だ俺は、アノ兩人が、自己に忠實にして藝道に忠實でない事を悲む丈けである」

と云つて、訓戒した事があるのである。總て藝道は一筋の物でないから、聞くにも語るにも修業の力丈けより外、動かぬ物であるから、此五斗の如き品物は、現在では、今ドンナわかつた藝を仕て居ても、松太郎にでも尋ねば、他に一人も其云ひ得られぬ風を、覺へて居る者はないと思はるゝのである。

此段は元來が文章も餘り上等でなく、作も無理な所が多くて、困る事が多いが、其譜節と、語り明す意味の崇高な事は、庵主等の拙き筆などでは、到底書盡される物ではないと思ふのである。古人曰く「ドンナ六ケ敷段でも、熱心に六十度讀めば、自然と語る道が分つて來る」と、先づ此言

を何よりの金言と思つて、誰人も怠らずに、修業するが一番好い事であると、大聲疾呼して置くのである。

（三十五）三十三間堂棟の由來　三段目切　平太郎住家の段

此外題は、祇園女御九重錦と稱して、寶曆十年辰十二月（大正十五年を距る百六十七年前）豊竹座に上場せし物と聞く、作者は若竹笛躬、中邑阿契の二人であるとの事。此三段目は書下ろしには巴太夫が語つたと聞いて居るが、一向其風も見出されぬのである。其後綱太夫が語り、又麓太夫は語り方床本に、大增補大改良を加へて語つたとも聞いて居るが、庵主は矢張麓風が一番大勢力を殘して居るように思ふ。何樣語り崩しに崩して居るから、此段の研鑽には中々手が要つたのである。即ち作は此如く無茶苦茶で、暖國の紀州に大雪、其雪の中に大根、蕪、獨活、山葵がある、其雪中に青柳の葉が散つて來るなど、大分マゴ付いて居るが、三味線の朱と、語り方には大分力が這入つて居る。コンナふわ〳〵した夢幻劇にコウは力が行屆かぬ物である。

第一、（丸本に因らず床本の通りに因る）、『夢や結ぶらん』の送りは、シツカリ麓場に「ニジツタギン」で語る事。

第二、總て「ギン」の音に注意して語らねば、品が悪るくなるは勿論であるが、「ヘリキリ」の音が又大事である。『信田の古巣』の『信田』を訛らぬよふに「ヘリキリ」の音で語る事。此は此段に限らず、十種香の段の『繪には書せはせぬ物を』の『せぬ』の二字が世間皆訛つて居る。此を「ヘリキリ」の音で語るべきは斯道全體の掟とも云へるとの事である。

第三、此お柳の詞が一番六ケ敷い。此は、躑躅の初花の如く、人間の幽靈でもなく、又、葛の葉の如く、狐の化身でもなく、非常の草木の精であつて、其情愛の正純なる事、悲哀無比である。此情は無情の草木でさへ、斯くの如し、況んや人間に於てをやと云ふ事を、語り生かす事に、昔からドンナ太夫でも難義して居るやうである。

第四、故に總て腹を〆め、息を持つて、サラ〳〵フワ〳〵と語つて、決して泣いてはならぬ。又決して息遣ひを拵へてはならぬと云ふ土臺が修業でチヤンと極まらねばならぬ。

第五、『心の鬼の和田四郎』からは只の義太夫節に氣を付けて語れば宜い。

第六、木遣音頭が此作の上出來であるが、其音頭が決して絃に尾いてはならぬ。スッカリ離れて賑かに遠い聲で語らねばならぬと聞いて居る。後の平太郎の音頭は皆、音の下る處を「ウ

レイ」の譜に持つて來て宜い。

庵主が聞いた手控への本を調べて見ると、明治二十四年の六月に、故撫津大掾（二代目越路太夫）が語つた時は、庵主聞分くる力も無かつたが、只だ何も蚊も、聲に任せて振り廻して語つて居たようである。其時聞いた五行本の表紙に、庵主の評が書いてある。曰く、「お柳尚ほ妖艶にして、平太郎に貧窶の情なし、盜賊の和田四郎も說諭したらば改心仕そふである」と、考へて見ると、其頃の越路の語り方が分るよふである。其後九年目明治三十二年の八月に、此段を聞いた時は、此大掾が斯道に目覺めて、凝りに凝つて、調べに調べて勉強して居た時であつたから、全く別人の樣に恐ろしい程面白く聞得た。此時の本には斯ふ評が書いてある。曰く「お柳の物凄い生別の氣滿ちて、平太郎の境遇に同情した。和田四郎は眞に無慈悲な惡るい武士に聞えて一杯に充滿し、遂に人形を見る事を忘れた」と、一體此頃の大掾は其四月に、重の井子別れを聞いて、眞に大和掾の風はコンナ物かと驚く程面白く。其六月に、彦山の九ツ目で、又其勉强に驚き。其十月には、伊勢物語りの春日村で、咽喉を刺さゝれた程深刻に感服したのであつた。庵主は大掾が此頃の勉强は忘れよふと思つても、忘れられぬ程の努力で、少しも不謹愼な語り方は無かつたと思ふ。其後三代目越路太夫

が此三段目お柳子別れを語つたのを聞いた事があるが、何樣前に聞いたのを頭に持つて居たので、此頃の三代目は何に凝つて居たか知らぬが、丸で餅の無い汁粉を食ふやうに、この太夫、末はドウ成るであらうかと餡汁（案じる）斗りであつた。何樣人氣のある太夫は、皆慢心が先に立つ物で、慢心するからアンナ事に成るのである。ドウ語つても、何を云つても、人に譽めて貰へると云ふのが藝道の一番毒である。庵主は此三代目が子供上りの時からの贔屓であるから、常にソウ咄をする。「お前の今の年頃の二代目（大掾）と比較して見ると、慥かに師匠よりも藝は動いて居る、即ち語れて居る、然るに大掾は此頃までは自分の聲の特徴を利用して渡世を仕て居たから、淨瑠璃其物は比較的語れて居なかつたが、此明治三十一二年頃からグッと藝道に勉強を初めた事は事實である夫がアノ力とアノ修業とで凝つたので有つたから一足〳〵に履んだ處には足形が煮へ込む程痕が殘つたのである、お前も大掾同樣に目を覺まして凝つたら、聲柄と云ひ天賦と云ひ、慥かに大掾以上に滋味が着くと思ふ。

と云つたが、不幸にして早世し、終に黄泉の人となつたから、此の太夫の自覺的捲土重來を見る事が出來なかつたのである。

（三十六）岸の姫松戀鑑　三段目切　飯原兵衛館の段

此段は寶暦十二年閏午の四月（大正十五年を距る百六十五年前）豐竹座に上場し、作者は豐竹應律、若竹笛躬其他であると聞く。此段の役場は書下しに誰かゞ宮戸風で語つたと聞いて居るから、調べて見ても中々分らぬが、矢張島太夫風で宜いと思ふ。勿論今の太夫共の語るのに、越太夫、即ち利齋節もあるとのことではあるが、矢張系圖正しい島太夫で大きく、小刀細工でなく語らねばイカぬと思ふ。元來此作は二代目義太夫（播磨掾）が語つた、堀川夜討の三段目から轉化して來た物で不味い事と云つたら此上もない作であるが、一寸珍らしい事には、物語りの共進會が出來て居る。之を腹に持つて上手に語りコナスことに心掛けねばならぬのである。出る人形も〳〵殘らず物語りをするから、夫が其人〳〵の心行きと境遇との、品合を物語りあはせるとチヤンと一段が纏る事になつて居る。夫が中々面倒で一寸外にはコンナ類はないのである。節付の方は大分甘い、餘程の傑作であると思ふ。何でもブツ〳〵云つて手を入れる淸水町の團平でも、二代目越路を彈く事になつ

た明治十一年の五月に、此段を出した時、團平が此岸姫丈には一撥も手を入れなかつたのである。夫から五日目に團平が越路に、「コンナ物は勿體ないから大事に語んなはれや、私も一生懸命に彈升から」と注意したと大掾が咄して居た。

「何にせよ師匠(春太夫)が、古淨瑠璃の風で鍛ひ上げた修業に、此段が後先きにないと云ふ程の當り藝であつたのを兩人共、夫を抜ける程聞いて知つて居升のに、其師匠が此前年死去られた其後直に私が同じ團平さんの絃で語り升のでムり升から、舞臺に上らぬ先から、腹はペチャペチャでムいました、團平さんに稽古も仕て貰ひましたが、何分にも小男の小音でムり升から、團平さんに「トン、ジャン〳〵〳〵」と彈れ升と「送り」で、モウ咽がピッタリと乾き着いて云へませぬ、此を思ひ升と、私共の門弟共の修業と云ふ物は、修業でも何でもムりませぬ、豪い太夫さん計り彈き殺して來て生き殘つた三味線彈さんに彈かれ升修業は、常の修業の幾層倍でムり升、明治六年に古靱さんが稻荷文樂に出られまして、師匠の前の切を語られます時、何樣名人でムり升から、淨瑠璃を〆るに〆めて語られまして、お客さんが、モウ澤山、モウ叶はぬと云やはる程〆め上げて泣かされ升ので、私始め弟子供は「お客さんがコンナに成りやはつた跡に、内の師匠が出ら

れてドウ仕やはるてあらうか」と皆心配をして咄も仕ませず息を殺して居升と、其跡に内の師匠が知らん顔をして出られまして『跡に藤巻只だ一人』と云やはり升と、弟子一同がホーッと致しまして、古靱さんは二三日前に語りやはつたか知らぬと思ふ程、世界が違ひ升程の岸姫でムりました、アノ一聲はドウしても古淨瑠璃の風で鍛ふた修業でなければ出來ませぬ、只今では大隅が圍平さんに叮嚀に稽古をして貰ひまして、『跡に藤巻只だ一人』又『跡に娘は氣もイソ〳〵』と申ます、アレが師匠春太夫の一本鎗で、娘であらうが、お姫樣であらうが、カ一杯ブッ付けて出る、夫が紙三枚語る内には何とも無くて、當り前のやうに成まして、お客樣は遂に懐に入れられて仕舞うて居やはり升、夫が本當の淨瑠璃でムり升。私は若い時から師匠に「貴樣の樣な小男で小音では兎ても一人前の太夫には成ぬから止めろ〳〵」と云れ通しでムいましたから、段々清水町や松葉屋等とも相談を致し、工夫に工夫を致てまして、コンナ淨瑠璃に致しました。夫で私が十種香のお稽古を阿方に致しますのは、私が舞臺で語り升のとは全く違ひ升、夫は古淨瑠璃で鍛ひ上られた日本一の大音の鐘太夫さんの風で、即ち師匠が語られた風でムい升、今大隅が語り升のも可愛そうに、時節がソンナ風を知りませぬから、お客さんが聞いてくりやはりませぬ。淨瑠璃と

云ふ物は、譯がお分りに成ましたら、和らかに構へた體中の力を有る丈出す物でムい升、夫が嫌なら外の藝をお稽古になるが宜ふムい升、夫で阿方は私の申事も、大隅の語り升風も克くお腹にお入れにならねば淨瑠璃を聞分ける事は出來ませぬぞ」

と大掾が懇ろな教訓であつたのである。此丈けの咄しを聞かされた翌晩から、二分位の調子で此岸姫を聞かされたのである。庵主は斯る尊き稽古を碌々に覺えても居らぬが、何にせよ、美音大達物と世に謳はれた島太夫、即ち二代目若太夫の語つた風とすれば、ヘナチョコ太夫では一寸郡合が悪いのである。

第一、『跡に藤巻只だ一人』此の『ヒトーヲリ』と云つて居る内に、何とも云へぬ情が浮いて來ねばならぬ。夫の譯が分らねば浮いて來ぬのである。夫兵衛に娘を身代りの爲めに、殺せと云はれた跡の藤巻である。其心を浮かすのである。夫でお客が其情で皆捕まるのである。

第二、『司姫』と云ふ「ヘルフシ」は出來る丈けブツ付けて廻して居る中に、決して「二」の音に下つてはならぬ。其の廻して居る中に、藤巻が腹の心配の氣が浮かねばならぬ。夫から一大事は腹の恐氣から出る音である。夫から「ジャン」とめる、夫が庵主の聞いた多くの「ジヤ

ン」は大掾から聞いた「ジャン」は一つも無い、ナゼならば『我子を切つて身代り』と息から走つて語らねばならぬ「ジャン」であるからである。

第三、『末代家の』後の「テンツン」が又碌な「テンツン」が無い。ナゼならば『去りながら』と心持が變らねばならぬ起の「テンツン」てあるからである。

第四、總て變りの彈ける三味線彈でなければ此枕は駄目である。『マダたんまりと顔形、見覺える間も、有る事か』「トン〳〵〳〵ジャン」と〆るのに、大掾が二本の指で火鉢の緣を叩いて居るのに、庵主が直に『來ると其日に身代りとは』と詞を云つたら、大掾滿身の力の拔けた樣な顏をして、

「旦那はん見なはれ、私の指は此通り眞赤になる程叩いて居り升ゼ、其詞を藤巻に云はせる爲め今まで艱難して、枕を語りなはつたではおまへんか、貴君の息の根が止まる樣にと思ふて「ジャン」と指が赤うなる程〆めて居るではおまへんか、夫でグウと息を詰めて藤巻は身も世もあられぬ程の情ない心を絞つて、モウ涙一杯の息の間で『來ると其日に身代りとは』と云うて貰はぬ事には指を赤うした甲斐がおまへんがな」

と云はれた時には庵主も、

「アーア、俺は外の事でも此程の馬鹿で有らうか知らんと思つたのである」

第五、以下は總て此通りに注意して稽古をせねば物に成らぬと思ふ。夫から御詠歌の與茂作の聲は總て離れた音で、近江の湖で謳ふ船唱の聲の積りで謳へと聞いて居る。

兎も角各人各箇の物語りを其人の人格と境遇との情合の浮くやうに語り分けるのである。

（三十七）安達ケ原　三段目切　袖萩祭文の段

此段は寶暦十二年午九月（大正十五年を距る百六十五年前）竹本座にて上場したとの事である。作者は竹田和泉、近松半二、北窓後一、竹本三郎兵衛で、役場は竹本大和掾であると思ふ。此人は前にも云つた通り、斯界節語りの泰斗と崇められた人にて、此三段目を語つて、天下を風靡する程流行らせた人である。處が、此書下しの時、四段目の一つ家の段を、政太夫が語つて居つて、是も最上の出來てはあつたが、此三段目の派手なる音遣ひには及ばず、世の中には三段目計りが持て囃やされたので、政太夫は之を殘念に思ひ、後年此三段目を又政太夫が語つた處が、是が又最上の出來てあつて、現今世に語り囃やされて居るのは、皆此政太夫風であると聞く。又後年に至つて、故豐澤團平が、京都の鶴澤友二郎師の教へた風で、ドウカして此安達の三段目を、大和風として殘して置きたい物と思ひ、苦心の結果、團平の晩年に至つて、堪念に朱章を改め、之を大隅太夫に教へて、一二回語らせたとの事である。庵主が往年から聞いたのは、故掘津大掾が若年の時より、度々

語つたのも、大隅太夫が庵主に教へたのも、三代目越路太夫が語つたのも、皆此政太夫風の變化した斗りのものであるが、明治三十五年十一月、大阪の明樂座にて組太夫の語つたのと、七八年前、有樂座に於て鶴澤清六が彈いて、豐竹古靱太夫に語らせたのが、何でもアレガ即ち團平の改朱した大和風であるかと思つて聞いて居たのである。

此段を語るには、大和風でも、政太夫風でも、何れも腹構へと、音遣ひの事が、十分腹に入らねば、物にならぬのである。又節廻しの事も、腹乘り、間乘り、詞乘り、地色崩しにも乘り氣味があるが、夫には文章の意味と、情合が、音にも、足取にも少しも離れては、品物にならぬのである。先づ、

第一、枕文句の内でも『只さへ曇る雪空に』の一句は、此舞臺の形狀が、雪凍る冬であると云ふ事を心持に十分漂ふやうに語る事。

第二、『心の闇の暮れ近く』は、第一に出て來る人形の、袖萩の心情が漂ふやう、心持を離してはならぬ。

第三、『一間に直す白梅も』は、此瓊の宮の御殿に白梅と云ふ大問題が横はつて居ると云ふ腹込を

忘れてはならぬ。

第四、『身にこたゆるは血筋の縁』の一句は、袖萩の一身に纏はる、父母と娘との中に介在する切情に、泣き枯れて居る有様を、ユッタリと、「ギン」の裏に、音と廻して語り締めるのである。

第五、夫から『不便やお袖はトボ〳〵と』になつては、チヤント盲目の足取に手が付いて居るから足取をズンベラ、ノッペラと謳つては大變である。陰氣に泣沈んだ足取を語らねばならぬ

第六、詞は所謂大和風にて、サラ〳〵とした中に情の深く籠るやうに、研究に〳〵を累ねゝばならぬ。

第七、祭文の唄になつては、是も謳ふのではない、腹を〆めて泣いて、淋しく十分に乘つて語れば、其風になつて面白くなるのである。

斯く云ひ來れば數限りはないが、先づコンナ風で修業に一心を傾けねば、此段には交渉が出來ぬのである。夫から一番注意せねばならぬのは、此段に作者の注意が缺けて居つて、骨抜きになつて居るのは、貞任の初めて出る處である。『神ならぬ障子押明け、立出る教氏』と云ふ、此處が此段中

の性根所である。其腹の落付と、音遣ひが出來なかつたら、外の所がドンナに甘くても、語れては居らぬのである。夫から『手負を見屆け』と云ふ『見屆け』の下に、『懷中の一通奪取り』の八字を挿入して、『中納言』と『中』の音で語らねばならぬ。ナゼなれば此段の眼目は、環の宮のお守役の舅讒杖が貞任詮議の種の一通を持つて居る、夫に環の宮は、貞任が盜み出して置いて、其落度にて舅讒杖に腹を切らせ、其切口を檢視する序に、彼の一通を盜み取事が眼目にて、實せの敎氏になつて、入込んで來て居るのである。其文章が拔けて居るから、全體の譯が分らぬやうになつて居るのである　兎も角グット後に出る、貞任の品位と、一癖ある心持が漂ふ丈け語らねば、此段を語る努力は、全く無駄事であると心得ねばならぬ。又夫を語るまで聽集が保たねば、夫が矢張語れて居らぬのである。先づ大抵の事なら、斯る段は修業鍛練の上の後に語る事にしたい物である。

（三十八）奥州安達ケ原　四段目切　一ツ家の段

此外題は寶暦十二年午の九月（大正十五年を距る百六十五年前）竹本座に上場し、作者は竹田和泉、近松半二、北窓後一、竹本三郎兵衛等で、役場は竹本政太夫であると思ふ。此段は三段目の所にも書いた通り、斯界節語りの泰斗大和掾が三段目を語り、四段目は政太夫が語つたが、全部三段目で喰はれて仕舞ひ、政太夫は帆影になつたので、後年更らに政太夫が此三段目を語つて、其風が今日殘つて居るとの事。故に今日殘つて居るのは三段目も四段目も政太夫風と思つて居ればよいと思ふ。此種の作は謡曲の黒塚、安達原、石の枕、等色々類似の物はあるが、此段は三段目で環の宮の御附用人鎌杖が、宮を奪はれし落度にて禁庭より中納言教氏（貞任の甥物）が來つて切腹させ、其奪つた環の宮を貞任は奥州安達原の母岩手の許に送り、源氏追討の論旨を受けんと思ひしが、其時より止聾病にて其事叶はず。漢土耆婆が秘法の薬にて、胎兒の生血を絞つて薫むれば全治するとの事より、旅人の姙婦を殺して、其胎兒の血を取つたが、其姙婦は幼少の時、乳母に抱かれたる儘、

戰亂の爲め別れた、實の娘にて、其環の宮に附添ひ來りし乳人匣の內侍は其實、義家の末弟新羅三郎であつて、環の宮は義家の一子八ツ若で、全く替へ玉の宮樣と乳人とが入込んで、其上に娘婿の生駒之助は義家の舊臣であつたので、强勇の岩手も四方八方の手違にて、夫賴時の鬱憤を晴す事も出來ず、貞任、宗任の子供に源氏に復讐さす事も出來ず、嬲り殺せし女は娘で、婿は敵の舊臣で、一同取卷いて責め寄せるので、進退玆に谷まつて、腹を切つて死ぬと云ふ仕組である。筋は甚だ慘酷との評はあれども、奧州の夷でさへ、尙ほ追討の名義は天子の胤に依らねばならぬと云ふ、大義名分の道を示し、皆忠貞節義の筋に絡らんで書上げた物で、流石は三郎兵衞などの面影が見ゆるのである。況んや貞任が母に對する孝心をひらめかせ、日本武士道の本意を見せて、隱し置いたる寶劍は、弟宗任を義家が助けたる厚意に無條件にて返し、互ひに戰場にて勝負の雌雄を決するを以て、武士の歸結を宣言する等、筆端中々斡旋を盡したものである。之を語る人は長尾太夫が語つたとの事、其外は組太夫の語り方である、其他には一寸耳覺えがないのである。

庵主は先年コンナ物を捨て置くは、斯道の爲め勿體ないと思ひ、五代目鶴澤仲助に朱章を調べさせ、友人山科禮藏氏の宅で語つたが、下地の下手の上に、物が重いので、甚だ困難を極めたのであ

つた。此時東京に來て居た豐澤富助、鶴澤清七の兩紋師が樂屋に居て、廊下まで聞に來て居たが、其時の仲助の藝と云つたら驚く計りであつた。舞臺を下りると、語つた庵主には兩人一言の挨拶もせず、

「寬や（仲助は元寬三郎と云ふ舊友故元の名を呼ぶ）今日はドウしたんじや、豪らい勢いやナァ」

と云つた位であつた。夫かあらぬか其寬三郎の仲助は、其翌晩頓死をしたのであつた。其時仲助は斯く云つて居た、

「師匠寬治さんの南の連中さんの一ッ家を彈きやはつた時は、世界が全く違ふたやうに「ノリ地」と「ギン」の譜が豪かつたサカイ死んでもエイワイと思つて、彈いて見たンじや」

と云つて居たが、何樣其翌日頓死したので、仲助は一ッ家で彈死んだと、今でも評判して居るのである。

扨て『跡には獨り戀絹が』の「ハルフシ」は、尤も淋しく落付いて、メリ込むやうに語る事。『空も物憂き旅の宿』は「中ブシ」で、只だ云つて仕舞ふ譜もあるが、矢張紺太夫のやうに「本フシ」てジックリ肴へるやうに語るがよいと思ふ。『ほんにまあ』からの戀絹の獨り言は、腹に心持が出來ねば云

はれぬ。今一人別に咄相手があるやうに咄の詞になつては大變である。夫は息が面白く遣へて、詞尻が下り加減になつて居たやうである。夫が割りに長い獨言故、修業を要するのである。『それ者の果でもしどけなき』の「フシ」も矢張獨言の氣で語る事。夫から「次第に更る夜嵐の」から全く氣を替へて『安達原の軒もる月』と云ふ時は、其「一本ブシ」は「眞ギン」の音の有丈けを出して一杯になつて眼も血走つて語る。此等が古淨瑠璃の素養がなければ徹底せぬ物である。又氣を替へて戀絹の獨言になる、今度は腹一杯恐わ氣立つて語るとの事である。『後にすつくり白髪の婆々』と云ふ時は、滿場がビックリして呑まれて仕舞はねばならぬ。是で息をウンと詰めて『申〳〵コレ申と』はドウ云つたらよいか、讀者よく考へ見るべしである。組太夫が『呼はる聲に』と云つて、身を詰めて首を押出す間があつて『又悔り』と云つた時は、我々は全く藝ではない、事實じやと思つたのである。夫を押へて『イヤ』と云つて、ニツト笑ひ腹があつて『こはい者じやない、主の婆々でござるわい』と語る、「詞間」と云つたら、畫にも書かれぬと思つたので、此戀絹を殺すまでは、決して早くなつては物が破れて仕舞うのである。夫が中々〳〵力がなければ六かしい事である。『つい其腹を』と輕く云つて『たちわつて』がビックリする氣味で云ふ。「カブセ」て『オ、〳〵オホ……』夫が又中々云へぬのであ

る。『アーア、南無阿彌陀佛〳〵〳〵』が脇見をして云ふ氣味で『唱ふる口は耳まで裂け、安達が原の黒塚に、こもれる鬼と云いつべし』のフシまで淨瑠璃離れのした恐ろしき腹力で語る事。ソコデ『戀絹有るにもあられぬ思ひ』とかわられるのである。古人の咄しに、義太夫節に「カワリ」のないのは義太夫節ではない。常盤津、清元までは「カワリ」が本となつて居ない、古淨瑠璃の修業は總て「カワリ」の修業である。夫が假名切れが息で「ビシ〳〵」と切らねば、三味線も太夫も「カワリ」の藝は決してされぬものであるとの事。戀絹の口說は決して唱はぬ事。『斯くとは知らず生駒之助』以下の組太夫の運びと云つたら、全く天下一品と聞かれた。『指足してぞ忍び入る』は「ニシキ」の「フシ」に語る事。夫から『あいの襖を踏開けば』と息があり「合」があつて、『內は朱玉をのべたる御殿』となつて大變となり、此淨瑠璃の性根となるのである。全く政太夫風の「二」の「ギン」や「三上」「コハリ」等『かしづく有樣に』と「中」で「ナヲス」所まで氣を付けねば、『荒れし生駒も進みかね』と「カワラ」れぬのである。夫から岩手の物語りが又「カワリ」の一番六ケ數所である。全く武士詞の中に老母の腹構へが肝要である。此から段切までは政太夫が天下の藝界を風靡したる「カワリ」計りにて終るのである。夫から『何とかしけん、器はばつたり谷底へ』と語る聲の中に『俄かに渦卷水のあし

淸々滔々とわき上がれば』等、皆「コハリ」の音が大きく、高く、强く、一杯に遣へねば駄目である。『岩手は無念の、じたんだ踏み』が今まで語つたのを打消す程の情が大きく透らねば下の詞が立たぬのである。ナゼなれば此段は戀絹で泣くやうに書いて無いのである。全く此恐ろしき岩手の婆さんで滿場が泣くやうに仕組んである。夫は豫ても云ふ通り、尼ケ崎は、光秀で泣くやうに。陣屋は、熊谷で泣くやうに。此段は岩手で泣くやうに書いてあるから、外の人形は皆、此主人にからむ脇連れてある。夫を一番よく呑込んで語らねば、皆素讀になる讀み太夫である。夫で『夫の敵、國の仇子供に對して、功名させんと、我慢にこつて邪非道、人を人とも思はぬ天罰、忽ち報いて血を分けし、娘を親がなぶり殺し、嘸や苦し、かりつらん、地獄、蓄生、餓飢、修羅道、其苦みを身一つに請けし因果を斷切て、冥途の旅で言譯せん、娘よ、孫よ、暫く待てと、突込劍口にくわへ、緣先より眞逆樣、落ちてはかなく爲りにけり』と語つたら、是非とも滿場の聽集を屹度泣かす覺へが付くまで、腹に修業が積まねば、斯かる四段目は語れぬものである。以下は氣をしめて落合の積りで語れば夫でよいのであるとの事。

（三十九）壽連理の松　お夏清十郎　湊町の段

此外題は寶永の頃、大近松作にて、「お夏清十郎笠物狂ひ」に始まり、尚ほ同作にて、お夏清十郎の二十五回忌を當込み、「お夏清十郎歌念佛」を書いて、竹本座に上演し、後年明和の頃に至り、北堀江市の側に、豐竹座を始め、安永七年に此外題を燒直して、切狂言に「夏浴衣清十郎染」と云ふを上演し、又寛政の頃、同座にて「お夏清十郎花楓都模樣」を上演し、尚ほ江戸新太夫座にても、作者森羅萬象や、双木千齋などが筆を取つて、「お夏清十郎」と云ふ外題を書き、天明元年丑七月に上演したのである。而して此連理の松は、三代目此太夫が八重太夫より時太夫に改名する時の語物と聞く。この時太夫が即ち三代目此太夫になつたのであるから、多分寶曆の末年頃の事と思ふ。即ち大正十五年を距る百六十年前後の上演ならんと思はるゝ。上場の座は分らぬが、五行本にも豐竹時太夫、鶴澤勝造と銘を打つてあるから、北堀江市の側に、豐竹座を拵へた三代目此太夫の語り物には相違ないと、ヤット穿鑿し出したのである。左すれば筑前掾の語り物を主として、語り殘した

人と云ふ事が分る。作は則はち大近松物を、誰か纏ぎ剝ぎした物と思ふ。夫かあらぬか、此錂屋此太夫と云ふ人は、眞世話物の上手で、「半太夫」と云ふ節が大好物と見ゆる。名高い語り物の中、元文年間、同名の伊豆平八重太夫の語つた、堀川猿廻しにも、「半太夫」と云ふ節がある。又錂屋此太夫の「桂川連理の柵、お半長右衛門帶屋の段」にも、チヤンと「半太夫」の手が付けてある。此齋連理の松」の、お夏の「サワリ」にも、又チヤンと「半太夫」の手が付けてある。此錂屋此太夫の眞世話風を、最も好く其心持を語つた人は、彼盲人の住太夫であつて、庵主が今紹介する此段の朱章は、彼盲人住太夫の傳へた風である。其後チヨイ〳〵此段を語る太夫もあるが、魂を据へて聞いて見ると、語り朱も、三味線の朱も、正しくない。斯る由緒ある外題を、此儘に捨て〻置くは、故人に相濟まぬと思ひ、往年松屋町廣助、即ち名庭紱阿彌師に、懇々と此事を咄して、其朱章を正し、其上此段が名前替の時の附物で、役下げの爲め、段切が甚だ淋しい故、素淨瑠璃の眞打が語れるやうに庵主が二三枚目出たい段切を書足して遣つて、廣助に朱譜を附けさせたら、廣助は非常に苦心をして、態々鶴澤清六を京都まで遣つて、花賣節と云ふ譜を調べて、之に附けて呉れた。庵主は之を女義太夫の竹本素女に教へて置いたら、去る大正十四年二月六日に、博多の大博劇場に於て、故廣助

への報恩として此段を語つたとの事。當日は大入滿員で、內外大入袋を出して祝つたとの事である。元來此段は他の物と違ひ、一滴の血の氣も見ぬ悲劇である上に、お夏は清十郎と夫婦になり、許嫁のお梅は、清十郎の妾となり、お夏の兄の德次郎は、愛妓小半と夫婦になり、お夏の父の德左衛門も大安堵をなし、清十郎の父の佐次兵衛も、大仕合となり、お梅の母のお兼も大滿足をなし、小半の抱主たる、土佐屋半六は德左衛門から小半の身代金全部の支拂を受けて喜び、惡者の太左衛門までが、お梅の貞節を聞いて發起し、鬼に法衣の得道をして旭蓮社へ出家したので、殘る八人の者が、喜び祝ひの餘り、暖簾の花色手拭を冠つて、一同連節で花賣節と云ふ歌を謳つて、總立で踊り收めると云ふのが段切である。

先づ枕には、引出の譜もあるが、「三重」の方が好いと思ふ。『往昔は綸旨の紙も和泉路や』の「ハルフシ」は何も大時代に、最も古淨瑠璃の風で語る事。『湊の町に幾年か』から、世語に碎けて運ぶのである。「十日戎」の歌は太左衛門と云ふ惡者が、德次郎と小半とが、此清十郎の家に潛伏して居るのを探偵する爲め、醉つた眞似をして「十日戎」の歌を謳つて、小半の履物を盜んで行く所故、此歌を謳ふ中は、聲の高低や、足取も其心で謳ふ事。お梅に向つて清十郎が『ア、……ひどふ痩躄

がつかへた、コレお梅チト摑んでたもらぬか』と云ふと、お梅は許嫁ではあり、且つ惚れ抜いて居る清十郎の事故、嬉しさの餘り、飛付くやうに、『アイナア』と云つて見たが、忽ちに身を挫へた、夫は此頃清十郎父子が、主人徳次郎と其相方の小半を潜伏ひ、其小半の身代銀に屈托をして居るから、清十郎父子に愛想盡かしを云つて、自身身を賣つて、其所用の金を父子に與へやうと思つて居るから、直に氣をかへて、『エヽ私こそ縫物で肩が痛い、摑んで欲しくば按摩取を呼んで來たがよいわいナア』と云ふ、其心持が尤もスゲナキ中に無限の情合を含まする事。『エヽモ阿房らしいと云ひ捨てヽ、ばたくさ納戸へ走り行く』と語る時、『納戸へ』『チン』『ハーア』と云ふ時、名殘惜しさと悲しさとで『ウレイ』の情を含んで『シイイ、リイイ』『ツントン』『ユーウウ、クー――ウ』と心で泣いて、『フシ』を語る事、夫からお夏の出の『遠山嵐』から『湊の町にさしかゝり』までは『ハルフシガヽリ』『半中』等、總て道行の心持で譯なく澁みなく面白く語る事。『内を見やれば清十郎』は『ギンユリ』にて落付いて語る。『ションぼりとした立姿』と『フシ』に語つて、尤も好き間で『テン』を消して彈く、夫に乘つて『見るより思はず走り寄り』と『マクレヌ』やうに語る事。お夏の『地中ガヽヲ』からは筆では書く事が出來ぬ。師に就いて修業する事。『跡は詞も泣沈む』の『スエテ』から『チ

ン」になる。此からが「半太夫ガヽリ」になる。之も師に就いて習得する事。名高き『お醫者様でも神様でも惚れた病はなほりやせぬ』と云ふ、大近松の名文を乙女心を破らぬやうに語る事。夫からお梅の書置を、お夏が讀む時に滿場の涙を絞らせねば、此段の精神を破る者である。『兎にも、角にも、世の中に、あじきなきは、此身、斗りと、あきらめ、おしき、筆とめ、まいらせ候』と、モウ耐へ得られぬやうに泣いて讀む事。夫から父德右衛門が出て來て、萬事愉快に解決して、八人揃いにて踊る「連れ引」にて段切となる事。

（四十）蘭奢待新田系圖　三段目切　小山田幸内住家の段

此外題は明和二年酉二月（大正十五年を距る百六十二年前）竹本座に上場した筈である。作者は近松半二、竹本三郎兵衛、竹田平七ならんと思ふ。確か此時に吉田文三郎が、浮れ座頭を遣つたと聞く。役場は竹本政太夫と云ふ事であるが、元來此作の組立は、彼の「天勾踐を空ふすることなし時に范蠡なきにあらず」と櫻樹を削つて書いた、兒島備後三郎高德が、小山田幸内と云ふ浪人となつて、攝州兵庫の邊り、脇の濱に隱遁して、後醍醐天皇の皇子、鰹の宮樣を、窃かにおかくまい申して居る所に、幸内が釣獵に出た道にて、斗らずも彷徨てござる、勾當の内侍を伴ひ來り、雛の宮樣と共に、かくまつて居る其所に、後妻の産んだ子の、助一と云ふのがあつて、之が憶病者で、百姓業の外、何程教育をしても、武士になれず、幸内は殘念で溜らぬので、嫁もあるのに、勘當をして、其貞節な嫁丈けを殘し、之を相手に、老夫婦が暮して居る。夫れに或日幸内が、義貞最後の戰場たるべき、求め塚の附近で、此助一が、兵士共に團子を賣つて居るのに邂逅し、憤慨の餘り、手

強き折檻をなし、其邊に、義貞が謀計の爲めに捨てゝ置いた、澤山の鎧兜の中に、彼義貞が、蘭奢待の名香を焚き込んだ、龍頭の兜のあるを見付出し、之を助一に與へて、今攻めて來るアノ足利方の大軍の中にて、清和天皇の後胤、新田左中將義貞なりと名乘つて、是所で討死をせよ、左すれば、勘當を赦した上に、大なる忠孝の子として愛し、且つ喜ぶべしと云ひ聞かせたので、助一は止むを得ず、之を聞分けて、屹度討死すべく、誓ひを立てゝ引受けて、其鎧を持つて、父子今生の別れをしたのである。幸内は、ヤット助一の武士らしき決意を知つて、今更に喜びと悲しみとを混じて、歸路、旦那寺に行つて助一の戒名を書いた、位牌を貰つて歸宅し、窃かに佛壇に入れ、念佛をなして、心に泣いて讀書を始めて居る處に、一方貞節な、嫁のおそねは、外出の砌、身萎らしき、夫助一に遲遲し、何んでも、かんでも、父に勘當を赦して貰つてくれ、そして夫婦で百姓をして、兩親に孝行を盡そふと約束をなし、助一は夫から叔母の所に行つて待つて、晩景におそねの返事を聞に行くべしと相談をして別れたのである。夫から「端場の中に」なると、幸内の後妻は、嫁のおそねと共に、料理拵へをして助一の誕生日の祝をなし、蔭膳でも据へて、心斗りの祝日を過すべく、コソ〳〵と働いて居る、そこにおそねは少しの手隙を考へ、助一の事が氣になるから、氏神の詞に

詣で、勘當赦免の願を祈るべく、母の許しを受けて、出掛けて行く。即ち『願ひを深く神かけし、つま引繕ひ出て行く』と云ふ「オクリ」になつて、『隱居の間には、咳ぶき聲』となる。之からが三段目の切になるのである。一體此蘭奢待の如き史劇は、近松半二等の作としては、上々出來の部類で外の作物は、皆アセリ氣味があつて、ガサ〳〵して纏りが中々付かぬのである。然るに此蘭奢待の如きは、終始一貫、比較的、好く出來て居る。況んや一代の名人、竹本政太夫と云ふ人の藝力に掛けて、語り出した物故、義太夫節として、元祖の死後、斯る物は滅多にないから、如何斗りも流行せねばならぬと思はるゝが、サア其處が六ケ敷所にて、中々此段を語る修業が困難である。所謂政太夫風の全段に、漂つた遣り方にて、語り出してから「色」と「中」と「地色」と「音遣ひ」と「息と間」斗りの運びであつて、修業をせずして「力」と「讀馴」斗りで運んだら、馬鹿々々敷て、見ても聞いても居られぬ物である。攝津大掾は此四段目の盲聾の段の「岡太夫塲」を、是非語りますと云つて居た。之を聞いた大隅は、

「二見の師匠が、盲聾を語りやはりますなら、私は三段目の幸内を、ウント凝つて、是非語らせて貰ひます」

と云つて居たが、トウ〳〵兩人とも、語らずに死んで仕舞つた。若し此兩人が、アノ力量で、一度語つて置いてくれたら後世の爲め、大變な好い事であつたらうと思つて居た。是等は全く藝人を勉強させぬ、現代の興行師の罪であつて、庵主は決して攝津、大隅兩人の怠慢を責めぬのである。斯る行掛りがあればこそ、庵主は七八年間、此蘭奢待の研究に浮身を窶し、本を拂へては、本書の安井桂に書かせ、夫を又大掾に檢閲させ、夫を又紋阿彌に朱章を調べさせ、ヤット出來上つたのを、六代目仲助に朱章を繰らせて、庵主第一に「盲戀」の方を語つて見たのは、大正十年の春であつたと思ふ。丁度其時、友人の福島春甫氏も聞いて居たが、庵主は何だかエラクて、頭がフラ〳〵になつて、一寸感じが無いやうになつた。仲助は二日間、稽古を休んで寢込んだ。其次に此三段目の幸内を語つたのは、其年の冬であつたと思ふ。是は築地セーロカ病院の副院長、久保氏の家であつたと思ふ。素より兩人の仕事で、碌な事の出來やう筈もないが、只だ此段の「變り」が六ケ敷ので、腰碎けがして、兩人とも纏つた事にならなかつた。併しコンナ物こそ、本當に力を入れて修業すべき一大藝格であると思はしめたのである。是はドウしても「腹」も「力」も「藝術」も、夫相當に修業して來た、藝人に本當に修業をさせて、芝居で三十日間、語らせて貰はねば、義太夫節の面白味は滿場の

舞臺に漂ひ出ぬのである。そふなれば、如何に素人の天狗共でも、感心せずには居られぬと思ふ。是は藝人を何程鞭つても、出來る事ではない、仕打の方の興行師が、其氣になつて芝居を遣る腰を据へて、一鞭當てねば出來ぬ事である。今は興行師が「聲」を買ひ、「節」を買ひ、「人氣」を買つて、モウとう〳〵沒落しつゝある所である。我國最後の至藝とも云ふべき義太夫節は、ソンナ淺薄な物ではない。此三段目四段目は「聲」でもなく「節」でもなく「人氣」でもなく、全く興行師の腹と、藝人の力と、修業とにのみ待つ物故、素人の天狗共が、善惡の批評をしたり、眞似事をしたりする事は決して出來ぬ物である。斯る物が、再び世に出て來て、見る〳〵他の藝界を壓倒して、斯藝のみ、花が飛ぶやうに繁榮して來るので、歷代斯藝の盛衰は繰り返されて居るのである。彼の「大大根」と評判を取つた、故市川團十郎が、神明座や猿若町で、興行師に大損斗りをさせて居た頃、興行師の巨人たる守田勘彌と云ふ男が、故後藤伯邸に於て、芝居の恢復策を論ずる時、後藤伯と庵主は「ソンナ人氣取斗りの工夫で、芝居の恢復が出來るものか、ア、團十郎を種に、彼の歌舞伎十八番の恢復を計るのじや「腹」があつて、「物」を知つて、藝が「酒や」や「燃十」にはまらぬア、團十郎が、歌舞伎十八番を以つて復興の芝居をする時機が來たのである」と咄して、其儘に兩人とも忘れて居たら

其後噂を聞けば、勘彌は妻に向つて、斯く曰つたとのこと。

「俺は歌舞伎十八番の恢復をするのじや、お前も其決心をしてくれ、先づお前丈けの決心は「米」は一切借りて喰へ、「家」は一切無屋賃で住め、俺は一文なしで、芝居を復興するのじや」

と云つたとの事。（其妻は、今の勘彌を産んだ、藝者のおていである）。是は昔から、徳川様の御用達であつた、萬屋萬兵衛と云ふ人の娘で大江戸では、立派な家庭に育つた人で、一時は後に、内閣總理大臣となつた桂太郎氏が、親達に相談をして、妻女にせんとまで決心した程の、容貌も心も立派な持主の人であつた。彼の伊藤公のお腹として、今或高位の華族の奥様を産んだ婦人が、即ち當時の勘彌の女房であつたのである。此おていと云ふ人は、死ぬまで、右等の關係から、庵主の家などにも、出入をして居たが、意思の強い、心立の良い人であつた。此人の咄に、

「私は、新富座が世間に知らるゝ事になるまで、十八度借屋の店立を喰ひました、お米屋は、京橋日本橋、芝まで借盡しました、夫が良人の、始めからの決心、覺悟でございました」

と咄して居た。斯る決心の興行師があつたればこそ、彼の團十郎も菊五郎も、出來たのである。大阪でも彦六座の出來たのは、庵主の家に出入をして居た柳適太夫（何でも寺井某）と云ふ人が、骨を

折つたればこそ、團平も、大隅太夫も、組太夫も、廣助も、松太郎も出來たのである。今日若し、斯藝の存在を謝するならば、先づ守田や、寺井のやうな興行師を、第一に忘れてはならぬのである其お蔭でこそ藝人の方の勉強が出來る事になるのである。

扨て此切の語り方は、先づ『隱居の間には、咳き聲』と語るには、先づ絃の方に「トン〳〵〳〵ジヤン」と〆めさせるのが、如何にも田舍の物淋しき、靜かな氣分の出るやうに彈かせるのである。夫から『咳き聲』を「二の中」に響いて、收めるのである。是でモウ六ケ敷事は、何とも蚊とも云へぬ「間」があつて、『幸內殿、目が明たか』と、媼が次の間から物を云ふ、此「間」が何時も政太夫風の魂であり骨であると云ひ得るのである。又『老眼に書物、くり廣ろげ』と「二の中」から「二」に落ちて仕舞ふのである。此間に幸內の目に、一杯の淚が漂つて居らねばならぬ。『アヽヽ、年寄つたれば根がない、平家物語りを讀掛け、思はず知らず、ズル〳〵つと寢入つたのは、駕籠に乘つて山上參りしたやうな物、アハヽヽヽ』と、此「詞」と笑ひの六ケ敷さは、「腹」と「力」斗りの藝で、其譯は、心を止めて讀んで見れば、直に其六ケ敷さが分るのである。此丈け聞けばモウ政太夫風の三段目が、語れて居るか、居ないか分るものである。是から爺、媼の取遣りの詞、實に何とも云へ

ぬ面白さが浮び出ねばならぬ。『ウム、如何にも、悴助一が出世を、譬へて見れば此鰡、總て魚と云ふ物は、生て居る中は益ない物、漁師の網に掛つて、命を取られてこそ、貴人高位に賞翫せらるゝ、是を魚の出世と云ふ、侍もまづ其通り、出刃庖丁の刃にかゝり、腹切つて褒らるゝか、首打落して膾にさるゝか、夫が武士の立身出世じや、ア、悴助一は此魚にあやかつたかと、目に浮む、涙紛らし讀さしの、本に年は寄まい物、目がかすんでとすりこする』とまで語つたら、太夫は泣かすとも、聽衆は皆泣く筈の勢力が、腹に必要であるのである。夫から悴彌太郎が來て、義貞を討つた物語りの「ノリ」から、其彌太郎が義貞の變裝であつて、前にかくまつた、勾當の内侍は彌大郎の女房磯波で、又磯波と名乘つて來たのが、本當の勾當の内侍であつて、助一の憶病は贋物で、足利の忠臣、妻鹿孫三郎長宗である。夫が自害した女房の、おそねの首を切つて、勾當内侍の身代となし求女塚で、義貞の身代には已に彌太郎が立つて居て、其首に義貞が、天賜の、蘭奢待の名香で、燒香して弔ふと云ふ終りまで、息も吐けぬ修業の面白さである。

（四十一）蘭奢待新田系圖　らんじやたいにつたけいづ　四段目切　盲戀の段　めくらこひのだん

此外題は明和二年酉の二月九日（大正十五年を距る百六十二年前）竹田因幡掾座に上場した筈である。作者は近松半二、竹田平七、竹本三郎兵衛と聞く。役場は或る本には竹本錦太夫とあるが、又一本には竹本岡太夫ともある。後年摂津大掾に聞いたら、

「サア三段目が政はんで、四段目は岡太夫さんと聞いた事がムりますが、其中よく調べて置きませう」

と云つて居た。其後竹本古靱太夫に借りた、「高名集」と云ふ本を見たら「蘭奢待四ノ切は、竹本岡太夫」と書いてあつた、先づ岡太夫ならんと思はるゝのである。此四段目を『跡には一人母親が』から語るとすれば、「ハルフシ」から「スエテ」等、「詞捌」まで、總てハッキリ義込むやうに語つて運ぶを大事とする事。夫から此等の外題が、語り下ろし以後、中々流行せぬのは、文章の運び、句調とも句伸び、字餘り等多くて演奏者にも、聽衆にも、呑込む事が中々困難であるから、此結構な物が

世の廢り物となつて居るのである。故に大掾と廣助は相談の上、庵主に文章を縮め、句調を出來る丈よくして呉れと賴んで夫に朱章を入れたのである。夫を鶴澤清六に其朱章を繰せて、庵主が聞き夫れから又六代目仲助に練習させて、庵主が語つて見る事になつたのである。故に庵主の所持する床本は、三段目、四段目とも、丸本とは多少相違の個所があると思ふ。併し節譜は、大體に於て丸本の方の黑朱と、大なる違はない筈と思つて居る。今故廣助(名庭紋阿彌)の方に手控への朱でもあつたならば、直ぐに解るが、多分六代目仲助は大震後、其朱章は寫し直して、復興した筈である。

村踊りの拍子は最も陽氣に「ノリ」て語る事。お此の詞遣ひは大分に注意し、目明きにならぬやう又心の底に絶望の氣を持つて語る事。『アイの返事もないじやくり』の「地ハル」から、『今更ら申も』の「地色」「シヤン」から、『耻かしながら』の「フシ」となり、「ジヤン」と「ノリ」て、「シメ」て『忘れがたなき憂年の』と「大和地」になる事。母がお此を大塔の宮の、お身代りに斬らんとする時『ヤレ待て暫しと大塔の宮』と「ハリマカヽリ」になり『しづ〳〵二階をおり立玉ひ』と「フシハル」になり、夫より「地色中」にて『始終くはしくあれにて聞く』となり、宮の詞は、尤も品よく語り、夫から『安樂國へ引導せん』と「ギン」の尤も落付いた音で語る。夫からお此の目が開いてから、がらりとカワリ

『三千年に一度咲く、花より稀な此逢瀬「色」「詞」お前の事を明暮にこがれ〳〵て「地ハル」現なく』から「サハリ」となるので、最も生き〳〵と語る事。夫から『宮様のお傍は離れぬ〳〵と、花紫の御衣に取付、くどき泣き』と「地ハル」から「スエカヽリ」から「三ツ入」となるのである。夫からお此が嫉妬て狂ひ廻るので、母親が縁柱にくゝり付けた後、お此の獨り舞臺となり、宮様と織部の姫の影法師が、障子に映るので、お此の嫉妬は絶頂となつて、終に口から火を吐く事になるので、前代無比の大嫉妬となるのである。故に『次第に更る夜嵐の』と「地ウラギン」『フシハル』を最も烈へ込むやうに物淋しく語る事。夫から『障子にかげの』の「本フシ」も「ギンカヽリ」にて「上クル」氣味にて、「メリヤス」に渡さねばならぬ。『嫉妬の念ぞおそろしき』と「フシ」になりて、是から段々大森彦七の出になるのである。『猶も』と「ヲクリ」となり「テントン」『小影に窺ひ居る』と「鉦地フシ」に收める事。夫から「地コハリ」にて『早丑滿の物すごく、柳が枝に風ためて、サット吹來る一村雨』と「道具屋」になつて、『大森彦七盛長は』と「ノリ」て出るのである。夫から彦七が、鬼女の面を付けたお此の姿をした宮様を背負つて『立足もなくたぢ〳〵〳〵、たぢろぐ曲者、痩ぬ彦七』と「林清カヽリ」の「ヲクリ」となつて「詞ノリ」で後を運ぶのである。夫から黒川軍太と、がま六と取手の仕合が中々烈

しくて、其「ノリ」がすむと、大森と宮様と、村上彦四郎と、楠の後家との遣り取りとなり、夫から楠正行等の小供の軍勢のお迎となりて、段切りとなるのである。一體此段は總てザワ〳〵した組立てゞある物を、ザワ〳〵させずに踏〳〵めシットリと語り締める工夫をせねばならぬ物じやと聞いて居るのである。委敷事は三段目を書く時、書いておいたから參照してよく見る事。

（四十二）本朝二十四孝　三段目切　勘助住家の段

此段は明和三年戌正月（大正十五年を距る百六十一年前）竹本座にて上場し、島太夫、即ち二代目若太夫の語り場で、是が此人一代の大役、大場であつた。實に斯藝六蹈の陣立を羅列して餘蘊なく、努力し盡したりと云つても差支へなき物である。若し此場を滿足に語り得て、一人前の太夫たるの資格を定むる試驗問題としたならば、現今の太夫にては、其資格を有するもの寥々たるものならんと思ふ。俗に云ふ、筍の段の三難とは「解らぬ」と、「六ケ敷い」と、「前に受けぬ」と三ツである後世今一つ夫に大難を加へたのが團平である。是は前の三難を打消す程の藝力を養成して、「輕々と提げて苦なしに語り捨てよ」と云ふの一事である。庵主の聽いた處にては、故組太夫と、大隅太夫丈けは、慥かに最後の一難を實行したと思ふ。其他は全部丸潰れである。先づ一人も物になつて居らぬと思ふ。唯だ讀んで紙を繰り開く丈けで、命が危險なと云ふ太夫斗りである。

初め『木曾山木立』より、『信玄公の御入り』までは、端場の心持で力の入れ、緩めを誤らず語り。

又勘助がゴロッキにならぬやう、腕白一方で、又婆さんも世話で品よく、サラ〳〵と語ること。勿論節が西風であるから、夫に克く氣を付けて語らねばならぬ。夫から『句ふ』の「ハルフシ」からは東風を加味し「ギン」に寄せて語り、勘助の名乘から、眞西風で「大ノリ」「節足」「晉遣等を鍛練して、腹の皮の破れる程、投げ出して語らねばならぬ。又勘助の名乘までは、世話を忘れずに、婆さんも『兩人待て』までは、世話の氣で語り。夫から後に眞時代に成るのである。元來此若太夫と云ふ人は、東の元祖、越前少掾の孫であつて、名人中の名人である。越前少掾の高弟、豐竹筑前掾とは甲乙なしに、斯藝に努力した人で、筑前掾が一の谷の三段目を語る時は、此島太夫は須磨の浦組打の段を語つて、筑前掾の位地を危からしめた。又此人が菅原傳授寺子屋の段を語る時には、筑前掾は其三段目の、佐太村の段を語つて、其壘を摩せんとした等、實に世は泰平なりと雖も、藝道は白刃の修羅場であつた。現今の如く、節を付けて五行本を朗讀して居るやうな世の中に、本當の修業鍛練をして、此三段目を語つて堪納させる丈けの太夫を望むのは、望む方が無理ではあるが、英雄豪傑がなくては國が亡ぶるやうに、ソンナ太夫が出なければ此若太夫節は屹度亡びるに相違ないと思ふ。

（四十三）本朝二十四孝　四段目切　十種香の段

此段は明和三年戊正月（大正十五年を距る百六十一年前）竹本座にて興行し、作者は竹本三郎兵衛にて、役場は竹本鐘太夫であると思ふ。而して此場は四段目とは云へど、斯藝本領の凄慘悲愴の筋を書かず、太夫と人形使ひの藝格本位に仕組みたるもの故、之を語る太夫は、舞臺の高尚と、人形の品位とを、寸毫も失はぬやうに辿つて語り、人形遣ひは人形の容と、間と振とを見物の眼底に永く印象するやう使はねばならぬ事に成つて居る場である。故に六ケ敷としては限りなき物ながら場格としては、三段目よりもズーッと下るのである。前としても、下駄場と鐵砲渡しの違ひがあるやうに、切場も二十四孝の外題は、三段目がお仕舞である。況んや語つた人が島太夫、即ち二代目若太夫である。四段目は鐘太夫と云つて、日本無双の大音の太夫である。夫に此四段目を語らせて自分はアノ恐ろしい三段目を語つて、此外題の結びを付けた力に至つては、只々驚嘆の外はないのである。又此の如き名人に三段目を語られた後に、全く筋の違ふやうな、風の違つた此四段目を、

日本一の大音で語つて、夫が此人の出世藝となる程、上出來であつたとは、此鐘太夫が當時の勉強と鍛練も亦恐ろしい程である。ナゼなれば、此鐘太夫は忠臣講釋喜内住家や、近江源氏の八ッ目、盛綱首實檢を語つた人と、同名同人であると云ふことで、此四段目の修業が、如何に精勵努力の結果であつたかと云ふ事が判るのである。今時の太夫は、己れが給金を貰つて居る役場を粗末にして修業をせぬのみならず、自分の我流に節を付けて、勝手に讀付けてゐる。偶々上等の部が、他人の惡るい所斗りを眞似るのである。眞似の出來る所は屹度惡るい所で、良い所は修業せねば決して出來ぬのである。否修業してさへ出來ぬ者が多いものである。故攝津大掾は曰く、

「鐘太夫さんの風で此段を語つては、錢は儲かりませぬが、當り前に語れば、實に立派な場でムり升。先づ『月洩る臥戸に入る月の』と「ギン」て流しまして、「シャン」と彈いた音より高く『流れと』四段目風の「ハルフシ」で出る時に、此一段の位がチャンと定まらねばなりませぬ。團平さんはコウ申ました「私が「シャン」と彈いて、アンタが『流れと』と出るまでの間に、毎日脇の下から冷たい汗がたら〳〵と出るよ」と云はれた時は、此『流れと』で若い時から永年澤山お金を儲けました私も又冷ッと致しまして、其翌日から「シャン」と彈かれ升と、目がグラ〳〵ッとするやうな氣が

致しました。夫から「チントン」と受けられた後は大抵「トン」の音に付いて、當り前に語り升が、夫が違ひ升。「チン」の方の音に付いて自然と音を下げて來て「中ギン」の音に漂つて『人の簑作が』と段々と運んで參り升。夫から詞の困難は又別儀でムい升が、八重垣姫の出と來ましては「ギン」の音の違ひ分けが「ビードロ」甕の中で、金魚の泳ぐやうに、澱まずにハッキリ、ユラ〳〵と「ギン」の音を違ひ分けて語んなはれと、圓平さんに云はれました時は、私は太夫を止めやうかと思ひました。又「サハリ」になつては、實に泣ました。「アンタは師匠春さんのも聞いて居なさらうが、八重垣姫がソー腹の中で「ウレイ」の譜を探つて語つては、カラ駄目じや、涙はオボコ涙で、涙までオボコな色氣がなくてはイケません」と云はれましたから、私は、イヤ泣いたのは八重垣姫ではありませぬ、私が泣たのだす、と申ましたら、プット笑ひやはりました。此段で名高い咄は、私は圓平さんと分れました後も凝りましたが、松葉屋廣助と共に九年目に、少し心面白くなりました。又『庭の溜りの泉水』の處や、『渡り頼まん船人』などの處あたりになり升と、景事の心持やら、道行の足取やら、其混雜な藝風は何ともお咄になりません」

と云つた。之を聞いた庵主は丁度、能樂喜多流の哲人梅津只圓翁が、九十二歳の時、庵主が父に葵

の上を傳授せらるゝ時の講釋と、寸分違はぬと思つた、成程義太夫節は能樂から出て、チヤンと藝格の極まつた物じやナアーと思つて聞いて居た。今や哲人、大掾已に死して、其慈訓の聲のみ、庵主が耳底に殘り、斯藝の妙蘊は已に世に廢れて、皆新規のハイカラ義太夫節計りとなつて、彼の帝展の畫の如く、筆力と氣膽とを練らずして、只色彩の塗湛にのみ流れて來たやうに、斯の藝も其風格によりて生動すべき人形は、樣々の間違つた聲の畫の具で、顏も首も塗り潰ぶされて居る者となつて來たから、止むを得ず、庵主が昔日聞いた先哲の咄を思ひ出した儘、斯くは愚痴るのである。

（四十四）太平記忠臣講釋　七段目切　喜内住家の段

此段は忠臣蔵の作、即ち寛延元年より十九年後の明和三年戊十月（大正十五年を距る百六十一年前）の作で、竹田文吉座にて上場せし物であるが、何様作者が義士物に脂の乗つた時の作故、矢張名作であると思ふ。作者の近松半二、三好松洛、竹田文吉、竹田小出雲、筑田半七等顔揃ひの上に、斯界の張子房と云はれた竹本三郎兵衛が加はつて居るのである。役場は豊竹鐘太夫であるとの事。此人は近江源氏の八ツ目盛綱首實檢を語り、二十四孝の四段目狐火を語つた人にて、夫が又此渋い此段を語つたと聞いては驚かざるを得ぬのである。

此場は素浄瑠璃としては、前の『昔は馬に鞍馬口、今は妻子の飼料も、かつ〳〵なりし素浪人』から語らねば一寸工合の悪い事があるが、夫は先づ暫く不問にして措くとして『弓矢は家に傳へても今は仕へん君知らず、羽なき矢間重太郎』から語り出すに、其腹構への六ケ敷事は、誠に説明に苦しむのである。庵主は四十幾年閙澤山此段を聞いたが、是は好いなァと思つたのは一度も聞いた事

がない。彌太夫は淋し氣は有つたが品がない。津太夫は何處やら品は有つたが强味がない。咄しに聞けば盲人の住太夫が好かつたとの評判は聞いた。其一例として『家來が案內』間を明けて、淋しく「ツーン」と彈く、又間を明けて『おりゑ誰やら見えたぞや』と語つたら、見物がワーッと譽たとの事。庵主之を聞いて、其處は宜かつたに違ひないが、ソコでワーツと云はせたのが惡るい、ソンナ事で此段が語れる物ではない。庵主曾て五代目鶴澤仲助が彈いて居た、或る達者な太夫が、橫濱で看板を上げて尤も良き講釋の七ツ目を聞かせるからと云ふので、態々橫濱に出掛け、富貴樓の婆やら何やら色々の處を驅り集めて樂みにして聞に行つたら、イヤ早『弓矢は家に』の語り出しから、大名が多勢の供廻りでも連れて、お館入をするやうな枕で、ドコに淋し氣があるか分らぬ態で、喜內と重太郎の取遣りを聞いて、萬止を得ず退散したので、仲助と太夫は打連れて誤りに來た。

「イヤお前共が惡るいのではない、敎へた師匠が惡いのである、又三味線は良く彈けて居ても、此場が彈けて居らぬ丈けである、併し兩人共可成知らぬ經は讀まぬがよい、衆生は決して成佛せぬから」

と二度と語らぬやうに封じ込めたのであつた。最近にも有樂座で誰れかの講七を聞いたが、此等は

マダ調べの穴が違つて居た。永年の間何様腑に落ちる講七をマダ一度も聞いた事がない。明治庚戌の年の春であつた、大阪で大隅に一段講七を聞かせよと云つたので、銀水樓で聞かせて貰つた。聞了つて大隅が、

「旦那、ドウです」

と云ふから、

「今までに聞いた中の講七では、一番面白く聞いた、御苦勞であつた」

と云つたら、大隅は變な顔をして、

「私は講七と云ふ物はコンナ物と思つて、旦那に聞かせたのですが、氣に入ませぬか」

と少し突掛つて來たから、一場の衝突が始まつた。

「義太夫節は面白く聞いたが、講七には成つて居ないと思ふ、併し何程名人でも夫をお前達に望むのは無理じやから、只だ譽めて禮を云つたのじや、決して感心はして居らぬ」

と云ふと、大隅は躍起となつて、

「私共は一生の商賣だすサカイ悪い處は云うておくんなはれ、一生勉強し升サカイ」

「夫ならば愚見丈けは云ふが、『納戸へ連れて行く』といふ送りを語つて居る中に『昔は馬に鞍馬口今は妻子の飼料も、かつ〳〵なりし素浪人』と一遍腹の中で語つて見て、其文章を腹に〆めて、『弓矢は家に』と語り出してはドウじや、夫でないと重太郎が歸る家がドンナ家か分らぬ、其氣分の漂ふのが講七で、大隅太夫の語る講七と思ふ。又『喜内もニコ〳〵打ほゝ笑み』と云ふなら、心の底から嬉しい「色」を語つて貰いたい、夫でこそ後が語れるのである。即ち其後に『浪人の尾羽を枯らし、旅やつれも嘸あらんと思ひの外、顔色もすこやか』と心好げに語つて、止つて重太郎の身の廻りを見て、ヘット疑ひを起し、息で『衣服の美々しさ』と「ネバッテ」、『かわらぬ體に』と押えて、『マ、、先づは安堵』と輕く「カワル」べきである。其處に重太郎は無心平氣で、『拙者も方々も狼狽へ此儘に朽果人かと存じたに宜敷主取を仕り御覽の如く身廻りも皆主人より拜領……』と聞いて、最前より憤りを抑へかねて、『喜内覺りし、膝立直ほし、ヤイ重太郎』と喜内が云へるのである。夫が本當の講七で、大隅の語るべき講七と思ふ。併し此は侍に成つた事のある者でなければ、此喜内の侍氣質は分らぬから、お前に望むは無理と云ふのじや。前が此丈け仕込が付けばこそ、又其奥が語れるのである。『泣聲一度に父喜内』は第一三味線の手が、喜内が

蹠足で孫を刺殺す重太郎の意立の喜ばしさを感じて、覺えず刀を杖に躍り出る「足取」であるから夫を彈かねばならぬ。語る者は申に及ばず、是まで仕込んでこそ其氣が滿ちて『出かした重太郎』の山が語れるのである。講七の山は『出かした重太郎』の一言である。此山一ッの爲めに前の喜內重太郎、おりゑ、母親と道具立をして責めたのである。ソンナ組立が此段の全體に充滿してこそ講七だと思ふ。間違つて居たら敎へて貰いたい」

と云つたら、大隅は四五分間も沈默低首して聞いて居たが、アレ程の藝力のある太夫故、グーッと腹の器械に掛けて考へて、庵主がビックリする程の聲を出して、ポント膝を打つて、

「旦那違いない……アー違いムりませぬ、ありがとうムい升、今度私が一生懸命に凝つて、アンタに、面白い講七を聞かせ升、有がとう〳〵……」

と云つた。夫から其後庵主が大掾に面會した時、（大隅と大掾との間柄は相當疎遠であつたにも拘はらず、大隅は大掾に面會した時、右の顚末を殘らず咄したとの事）大掾曰く、

「大隅が申ますには、私は新町の師匠に別れてから、始めて良事を一ッ聞ました、アノ方の侍咄は心魂に徹しましたと申て居ました、私も講七に付ましては面白い咄がムり升、亡くなられた三代

目吉兵衛師に私が講七の事を聞ましたら、お前等が講七などを凝る了簡になつたら、俺は三味線は弾いて遣らないよ、兎ても一生語られはせぬから、と申されました、夫から又圓平さんに弾いて貰つてる時に、講七の事を咄しましたら、圓平さんは、アンタが是から講七などを凝る了簡なら、私乞食になつてもアンタの三味線を弾かして貰ひ升よ、と云はれました、コレ丈け兩師の腹は違つて居ました、私が師匠春太夫の前で、妹背山の四ノ切、竹雀の段を聞いて貰ひます時、『迷ひはぐれし片鶉』と申升と、「イカン〳〵〳〵」と云はれましたので、ジーツと師匠の顔を見て居ましたら、馬鹿俺の顔を見て居やうより歸つて、姫戻りの本をよく見て、端場が本當に語れるやうに成つて來い、と云はれましたので、ハツト氣が付きました。幾度も勤めました役の、姫戻りを新左右衛門さんに稽古仕直ほして貰ひまして、ヤツト師匠に此段を通過させて貰つた事がムり升」

と云つて居た。矢張此講七なども端場で屹度此段の氣分を拵へて語らねばならぬものと思ふ。

（四十五）關取千兩幟　二段目切　稻川住家の段

此外題は明和四年亥八月四日（大正十五年を距る百六十年前）竹田文吉座に上場した物である。前狂言が「花車壽永の春」で、此外題の第八、九の道行追出しまでが、切狂言である。作者は近松半二、三好松洛、竹田文吉、武田小出雲、八民平七、竹本三郎兵衛である。此段は第二の切で、役場は綱太夫を聞く。此時の太夫の顔觸れは、初筆が鐘太夫で、住太夫、唉太夫、組太夫で、彦太夫が中軸で、梅太夫、和佐太夫、倉太夫、綱太夫となり、書止めが染太夫である。

夫から書下しには、稻川を岩川としてある。又女房おとはの「サワリ」文句の如きものはなかつたのである。只だ『大事の相模をふつてやらざ成るまいと思へば、不甲斐ないやら口惜いやらで、おりや胸が裂ける樣なワイ』『オ、道理ぢや〳〵わいなア、去ながら、夫程の大事のこと、連添ふ女房に隱して居る、お前の心が聞へぬと、恨み淚に時うづる。早追々の呼使ひ、ヤア〳〵土俵入でござります』と是丈になつて居る。當時の綱太夫が語つて以來、此二段目の評判がよくて、夫が

切狂言であつたので、其後之を掛合に遣ふ事となり、夫が當つて、毎度掛合〳〵〳〵となつたのである。夫から嘉永の頃名古屋生れの新七と云ふ素人の三味線彈が、非常に手の廻る藝風で、京都に出て來て興行をした。其時京都出身の大阪角力に、稻川と云ふ人氣の良い力士があつた。夫に當て込んで、岩川を稻川と語り、又三味線の二段目の手を、アレコレと易へて面白く彈き、おとはの「サワリ」を書き加へて人形を踊らせ、「チンチリトン」と乘せて、『江戸長崎や國々へ行かしやんすりや、其あとの』などゝ語り、其後で矢櫓太鼓を面白く彈いたので、初日より大當りを取つたので、一般の藝人が其朱譜を取つて、我れも〳〵と眞似をしたとの事である。庵主の考へでは斯道、義太夫節の墮落は、此頃から始まつたものと思ふ。元來二段目の切役と云ふ物は、絞下太夫で、老功の太夫が後進を引立てる爲めに、自分が二段目の切に廻つて、後進に三段目四段目の切を語らせて小言を云つたものゝ由。第一自分が二段目に廻れば、客足も早くなるし、其外題の根本も早くドツシリと定まる故、一座の責任を負つて客の尻をちやんと落付かせて、後進の三段目四段目を聞くに、最も興味を持たせるやうに勤めたと云ふ心盡しであるとの事。故に千本櫻の渡海屋、政太夫場や、二十四孝勝賴切腹、染太夫場や、忠臣藏の判官切腹、政太夫場や、妹脊山の芝六場、綱太夫場

等の如く、重く〳〵二段目を大事の役場とした物である。夫に綱太夫の語り殘した此千兩幟の二段目の結構な物を、茶々無茶苦茶にして、藝人が之を何とも思はぬのみか、夫を我先きに眞似て前受け專門に聽衆に媚び諂ふた、當時の藝人の心裡は、モウ藝道墮落の機運が來て居たのであると思ふ。故に昔から名言が殘してある。

「藝は藝人が惡くし、旦那衆が之を善くする」

と、ナゼこんな言を云つたかと云へば、藝人は藝を商賣にして利益收入を欲しがる、ソコデ聽衆に媚びて、前受けに眼を眩ます。旦那衆は道樂で遣るのぢやから、折角覺へるなら、正しき道を研究したいと思ふ。ソコデ本當の事を覺へて居る。夫に藝人がツマらぬ藝をして、金取をして居ると旦那衆は腹を立てゝ最屓にせぬ事になる。夫が苦しいから、藝人は苦しいなりに、又本當の藝に心掛ける事になる。故に「藝人が藝を惡くし、旦那衆が之を善くする」と云ふのである。庵主は此段を澤山に聞いたが、一つも感心したのはなかつた。只だ明治の中頃、東京に竹澤彌七と云ふ三味線彈が居た。是は外の出し物は格別感心もしなかつたが、此矢橋太鼓丈けは一寸藝が離れて居た。先づ撥尻や蠟燭の曲彈は別として、落付拂つた大きい間で、掛聲が誠に宜敷、息合ひが藝の妙に入つて

居て、暫く弾く中に、風に連れた遠音近音が眞の檜太鼓に開かれる事になつて、懐の廣い藝風であつた。此れ一つは屹度良かつた事を證明してよいと思うて居る。庵主の考へでは、此外題は若し後年斯道回復の時機が來たらば、切狂言でなく、二番目物とでもして立てゝ見たいと思ふ。名にしおふ半二、松洛、平七、三郎兵衛等一騎當千の大作者の筆になつた物故、作も宜敷、文章も宜敷、太夫の顔觸も宜敷事故、二段目丈けを拾つて、後を捨てる品物ではないと思ふ。大序の釣狐の場が染太夫で、第二の岩川住家の場が綱太夫で、第三の相合傘鐵ケ嶽殺の場が住太夫で、第四の千羽川内の段が鐘太夫で、第五の團右衛門、吉兵衛決闘合の場が掛合で、團右衛門が咲太夫で、千羽川、吉兵衛が倉太夫である。夫から第六の足代屋の段が又掛合で、彦太夫の藝子桂と中居のおさかで、綱太夫の長崎客で、和佐太夫の中居と禮三郎で、住太夫の藝子藤江と岩川で、組太夫の錦木で、咲太夫の九平太の役割である。第七の鰻谷禮三郎佗住居の段は染太夫で、第八が道行で、第九が大團圓追出である。是なら立派に芝居が立つて、賑やかで、派手で、シッカリ興味のある外題であると思ふ。夫を二段目丈けで殺して仕舞ひ、其二段目も輕業師のやうな三味線彈が、行戻り引掛撥斗りを用ひて、道化交りの掛合專門の端物にして仕舞ふとは、殺しにも大抵程のある慘酷さである。

庵主の考へでは初めは引出しよりも『別れ行』の三重て出たがよいと思ふ。『芝居は南』の「小ヲクリ」『相摸と能』の「ハルギン」、『羽織脇差衣まわし』の「中ギンフシ」等、皆運びが宜敷いと思ふ。夫から『酒は松ばへ』の「江戸ギン」、此が何時も三味線の心得違のある處と聞いて居る。「江戸ギン」と云ふは「ヘタル」手になつて居て、必ず下に結びの「フシ」が「三ツ入」か何かあつて、一ト鎖りの手を切る下地拵へと聞いて居るから、念を入れて冴え渡るやうに彈くとの事である。夫から詞を克く〳〵研究して、人情の變りと息合とを、寸分間違へぬやうにして押通す事。夫から『町中の』と云ふ皆「地色」に語るがあれは「道具屋」で「ハッテ」出るとの事。『打連歸る我家の內』はユッタリとした「ハルフシ」て語らねば、昔の「手摺」は角力の足取が使へぬと云つて小言を云つたとの事、夫から『稻川土俵で逢ふと「チヽン」強い詞のどこやらに、あぢな金捧引する雪踏、ぐはらつかせてぞ出て行く』は、力一ぱいの聲を出し、足取を易へて大きく收めねば、又「人形遣」が小言を云ふとの事。夫から『鬢のほつれを撫付ける』以下は「ギン」の音を時代に遣はねば、綱太夫風にならぬとの事。夫から增補の「サワリ」も語るは結構であるが、躍らぬやうに世話女房に、シットリと「ウラ半太夫」の間て、即ち普通の「サワリ」の間て、「チヽン、チンテン」『互ひに胸を明しあい』の如く騒がしくならぬやうに

運ぶ事。夫から『行空の』三重の所で「道具返し」のかはりに、檜太鼓を三返し斗り引いて、サラ〳〵と語り收むれば、二段目として立派な太夫が一人で付け物にでも何にでも、シッカリした語り物になる物ぢやと、古老の咄に聞いた事がある。

（四十六）染模様妹脊門松　質店の段

此外題は明和四年亥十二月（大正十五年を距る百六十年前）大阪市の側豐竹座に上場して、豐竹此太夫（錢屋佐吉）が語つた筈である。作者は菅專介と思ふ。元來が大阪町風の氣質を本として筆を下した物故、大分意氣込が當時の時好に適し、先づ上作の方である。又節付けも先づ非難を打つ處はないやうである。隨つて之を語る太夫も、餘程其情合を呑み込まねば語れぬ。庵主は之を竹本攝津大掾に聞き、大隅太夫にも聞いては見たが、大掾の心立の藝風が大分立勝つて居たと思つて居る丁度庵主が大隅太夫より講釋を聞いた後、明治三十三年夏、大阪文樂座で聞き、大分其語り方と、腹構への面白き事に注意し、大隅の咄と違ふ所が澤山あつたので、頻りに研究して居たが、間もなく庵主が京都に滯在せねばならぬ用向きが出來たので、京都の丸山に或人の別莊を借り込んで居たら、大掾が京都で興行する事になつたので、毎晩聞に行き、歸りに大掾を庵主の宿所に連れて來て泊らせ、色々と話を聞いたのである。夫が丁度此年の正月頃、大隅が大阪の明樂座で語つたのを、

抜ける程聞いた後であつたから、此兩人の質店に對する力量と、學力との相違が判つたのである。其後故津太夫の語るのを文樂で度々聞いたが、此人は質店を提げて、裸で戰場に出て居た。大隅は小具足を着て、十露盤とを持つて居つた。大掾は暖簾の下つた、大阪の町の油屋の家庭を語つて居た。大隅の時は何でも前を生島太夫が語り、道行は今の錣太夫が語つて居たやうに思ふが、大隅の質店は藝として面白く、質店としては、大阪町風の出來事にはなつて居なかつたと思ふ。此時は彼の源吉が、仙左衛門に名前替でもした時であつたかして、幟や旗などが、太分澤山にヒラ〳〵して居たやうであるが、三味線の方も堅くなつて彈いては居たが、質店にはなつて居なかつたやうに思ふ。（但し、庵主微力の耳で）『此間大阪町々で御評判の高い色事、此あたりで大きな聲では申されぬ事』云々の詞遣ひが皆、太夫共の困難とする所であるが、是は大抵絞下の太夫が自身に云ふ氣であるから物にならぬ。太夫を忘れて何の遠慮も構ひもない、大道商人の摺物賣の聲でなければならぬ。夫になる腹構へがモウ困難である。夫で『物騒がしき大三十日』と語つて、次に『質店の帳箱に廬生が枕肝膽を碎く、久松思ひ寢の夢驚かす初夜の鐘、ふつと目覺し』と「カワツ」て、此段の本問題に入られるのである。夫から久松の獨言の「カワリ」がチヤンと語れねば、『ノウ久松々々』とお染

の詞の「カワリ」になれぬのである。此奥深い意味、即ち兩人に取つては世界中第一の大問題であると云ふ事が、腹に解つて居らぬから、只だグチャ〳〵と讀むので、今は夫より外聞く事は出來ぬのである。是から先は「カワリ」斗りで、三味線も太夫も修業の修羅場である。夫から『涙ながらに稚子を』と云ふ「文彌」の出は、段々名人の彈くのも澤山聞いたが、今の友次郎が若い時に、津太夫を彈いた時程、甘味く彈けたのを聞いた事がない。是は藝搦きの困難な事が解つて來て『共にしほるゝ目に涙』の「フシ」からボイと「カワリ」で、無調法な撥で彈いたから、「涙ながら」になつたのである。此人生涯の上出來として、今日まで覺へて居る。夫から先年文樂で、故大掾の追善興行とかと云つて、文樂の總藝人が、色々の吹寄義太夫を語るのを聞いた事がある。此時故名庭紲阿彌が永い間休業して居て、ボイと舞臺に上り、其吹寄せの中で、此「文彌」を彈いたら、故越路太夫が『涙ながら』と語り出した。庵主は天地の雲霧一時に晴れて、ビックリする程此「文彌」が面白く氣に入つたのである。此紲阿彌は廣作、廣助時代から、色々と批評のある人であつたが、此時庵主は、全く古今獨歩の「質店の文彌」を彈いたと驚歎したのである。庵主は吉兵衛も、松葉屋も、團平も聞いたが、此時程、感心したのは一つもなかつた。此段の「カワリ」斗りは、只だ手の彈ける丈けの人で

は甘味く行かぬ物と覺悟したのである。夫から『お染は顔を振り上げて』から色氣專門で語つては、殼潰れである。是が此太夫苦心の賣出の藝と聞いて居る。大掾の腹構への解つて居る人は、必ず庵主に同意をするであらうが、此文句は此娘一生中に又とない一大事を、自分の心の融け合つた情夫に打明ける文句である。其中に日本無双の神ながらの女の貞操を說いた所が、作者の力量である。其上にて兩人死を決するの樣であるから、ドウしても大掾主義でなければ語り解けぬのである。夫から藝道としては、久作の詞にも藏前になつても、色々と聞いて居る口傳もあるが、此邊まで腹が出來さへすれば、熟心に讀んで居れば自然に解る事と思ふ。兎も角「定間」斗り彈いて「定間」斗りで語つて居ては、何事も味の解る氣遣ひはないのである。

（四十七）傾城阿波鳴戸　順禮歌の段

此段は明和五年子の六月（大正十五年を距る百五十九年前）竹本座に上場し、竹本越太夫の役場にて、大評判を受けし物と聞く、作者は大近松の遺稿の筈である。此の越太夫は、大和屋利助と云ふ人で、利齋と號せしと。此人の藝術と美音は謂はずもがな、其間柏子の宜敷事は、前後に類なしとまで云はれた人の由。此の「順禮歌の段」は、殊に其の利齋間と唱へる風を代表するに足るものゝ由である。

此段は故攝津大掾が、一生涯研究して苦んだ物である。其證據は此段が文樂に懸りさへすれば、聽衆にも新聞にも、何時でも評判が惡るいのである。夫は此段の道筋と道理が分つて、屹度精神に捕はれて努力して居るから、素人受がしないのである。庵主が曾て大隅太夫にウッカリ云つた。

「鳴戸の樣な物は、お前の聲では子役が難儀じやから、兎ても語れまいのウ」

と云つたら、大隅の曰ふには、

「イヤ子役などは、商賣人として語れるの語れぬのと云ふは問題ではムいませぬ、子役があつて語れねば、悪聲の者は太夫を止めねばなりませぬ、アノ鳴戸と云ふ場は、圓平師に稽古も仕て貰ひましたが、中々稽古の仕遂げが付かぬ物でムい升。一見の師匠を御覽じませ、永年餅に搗いて苦しんで居らるゝではムいませぬか、モウ私の年になりましては、コンナ修業は出來ませぬ」

と、アノ傲慢な大隅さへ辟易して居る。夫は鳴戸が語れぬだの、知らぬだのと云ふ事ではない、十分知つても居れば、語る事も出來るのである。ケレ共只だ間と息と足取とが、附かず離れずに紋と組合つて、太夫と紋との兩人が一致して、一の爆裂彈のやうになつて、聽衆との間に破裂するやうにならねば、語れたとは云へぬのである。夫で修業が困難であると云ふのである。故に結綸はコウである。大掾は之を捕へて修業した丈けが、大隅より慥かに豪らくて、大隅は之に閉口をして、修業をせざりし丈が、慥に大掾より劣つて居たのである。併し兩方とも此に對する藝術其物が分つて居る丈けは、天下二人の義太夫傑であると云ふ事が分るのである。慥か明治丙午の年であつたと思ふ、庵主が餘り鳴戸に付いて、八笠數い講釋で威かされたから、少し忌ま〳〵數い考へも起つたから、其咄を五代目鶴澤仲助にして、是を引連れて大阪に往き、兩人にて大掾に就いて稽古をして貰

ふ事となつた。大掾曰く、

「お稽古は致し升が、御辛抱が出來升か」

と云ふから、今更出來ぬとも云へぬから、

「屹度辛抱をする」

と答へたら、大掾自分から庵主の宿(大阪中の島の銀水樓)に出掛けて來て、毎晩八時頃から十一時までの稽古である。其稽古の面倒と云つたら、庵主も仲助も往生して仕舞つたのである。大掾の曰ふには、

「藝人の稽古ならば、相當商賣の出來る限度に、又其人其時の力に應じて小言をも申し升が、旦那衆のお稽古は、お望とさへあれば、自分の覺えて居る事の上に、別に取調べてまでも稽古を致し升のが、斯道の本筋でムい升」

と、羽織を刎除け、頭の髮の中から汗を流して稽古をして呉れた。第一初めの、お弓の讀む手紙の讀方が馬鹿〳〵敷くてモウ云はれぬ程、幾度も繰り返して語つて見ても、大掾は膝に手を置いた儘沈默して居る丈けである。暫くして曰ふには、

「旦那方は學問もあり、世の中の事も私共より幾十倍賢こくて居らつしやり升が、淨瑠璃のお下手な程、世の中の事がお分りにならなかつたら、飯が食へぬ所でなく、此世の中に活きて居らつしやる事が六ケ敷いと思ひ升。元々此鳴戸の筋道と語り方は、此仲助もお稽古を致して居りませうが、私が芝居で語りましたのも、幾遍となくお聞にもなつて居り升から、語るのに聲をお出しになるのを、ソウ骨を折つて、幾度も同じ事斗りを繰り返へされぬでも宜いではムりませぬか、此お弓の讀む文は、ドンナ心持で讀んで居るか、と云ふ事をお考へになつて居り升か、國次の刀詮議の爲めに、世間の噂や、人傳の詮議では埒が明かぬから、直接に人の内や、質屋の蔵の中にまでも、勝手に忍び込んで、詮議を仕樣と云ふのが此夫婦の盜賊、衒になつた動機でムい升、夫に一合取つても侍の家に生れた武士の血液丈は、全身に漂つて居る我々であるからと云ふ武士氣質は、一時も忘れぬ夫婦でムい升。所へ此内通の手紙に因つて見れば、其悪事が露顯して、夫を初め自分の身の上にも、罪科が刻々に降りかゝつて居ると云ふ、此手紙の文言を讀つゝあると云ふ事がお分りに成つて、貴下は聲を出して居らつしやい升か、私は最前から承つて居り升が、ドウも貴下も仲助も、此鳴戸の段はドンな事が書いてあるかと云ふ事を、御存じもなく、今迄遂に

見た事も聞いた事もない小説を、初めて探り讀みに讀んで居らつしやるやうに聞ええまして、ドウしても鳴戸のお弓の聲が致しませぬやうでムい升」

と云はれた時は、如何に高慢な庵主も、仲助も、田舎者が巾着切に會つたか、馬鹿が鼻の先を人に彈かれたやうな顏になつて、ガッカリとして聲を出すの勇氣もなくなつたのである。其晩は擊劍の仕合にでも負けたか、相撲の稽古でも仕た後のやうに、ガッカリして十二時過に寢込んで仕舞つた處が、翌朝になつて、錠の下りた袋棚の中に入れて置いた、旅費千圓入のカバンを泥棒に取られて仕舞つたやうな馬鹿事が出來た。其時は大阪で船待をして、臺灣に往く積りであつたから、故兒玉大將の令弟兒玉文大郎氏も同行して居たので、仲助と兒玉君は、非常に捜索をして呉れたが、カバン丈けは朝日新聞社の横丁に捨てゝあつたと云つて、大阪の警察署から屆けて呉れた。其後大掾は「大變な高價な鳴戸のお稽古でムいましたナア」

と彼が死ぬ迄の笑ひ咄しになつたのである。

先づ順禮歌の前の分は、氣を替へて、遠き音と近き音とが、風に連れるやうに謳ひ、二度目の歌は、尤も近き音で謳ふのである。『心を鎭め、よそ〳〵數』は「綱太夫ガ、リ」である。お弓が我子な

らんと思ひ、又思つて後の息遣ひから、段々責込んで行く息遣ひと、間と足取に至つては、一ッづつ腹合計りの修業である。又順禮お鶴のドコまでも無心なのと、四國訛とは又一ッ〳〵の修業である。又『ま一度顔を』と「チン」とある後、「ハッ」と掛聲をするのが一番悪るい事である。『引寄せて』とある文句に對し、「ハッ」との掛聲なしで、「チン」で息を引ひて大きく『引寄せて』を語らねば、後の仕事も間も、小さくなつて仕舞ふのである。別れの順禮歌は涙斗りで謳ふのである。お弓の追駈けから後も執拗く六ケ敷いが、夫も主に息と間と、足取許りで藝人と聽衆とが一致した一塊りとなつて仕舞やうになるのである。

（四十八）紙子仕立兩面鑑　揚巻助六大文字屋の段

此外題は、明和五年子十二月二十一日（大正十五年を距る百五十九年前）豐竹座に上場せし物と聞く。作者は菅專助で、語り初めは鐘太夫で、前が駒太夫で、中が此太夫であるとの事。後年此太夫も語つたと聞く。此段は故攝津大掾が、先年大阪文樂座で語つたが、何でも三十餘年振りで語るとかと云つて居た。稽古は三代目吉兵衛に、江戸で仕て貰つたとの事。大分遣り方が拵て居たから庵主も段々咄しも仕て貰つたが、大要左の通りである。

「鐘さんは、日本一の大音の人で大達者で、四段目語りの名人でムり升ので、其後も鐘太夫と云ふ名を繼ぐ人は、大音でなければ相續出來ぬとさへ云ひ傳へた位でムい升、何樣二十四孝の四段目盛綱首實檢、忠臣講釋喜内住家、夫から此大文字屋も、鐘太夫さんの語り下しと聞いては、外題を聞いた斗りでも悶れる斗りでムい升、其後錢屋の此さんも此段を得意で語られたそふでムりますが、私は先づ鐘さんでお咄致します。昔日の太夫さんは、聲柄や持前の天稟で藝を仕やはつた

物ではムいませぬ。全く修業で物事が組立られるのでムい升から、先輩や師匠に習得する場合は天稟も長所も何處へやら飛んで仕舞ひ升、何でも命掛げの修業で、行所まで行かねばならぬ事になり升から、藝の風がチャンと動かなく極つて仕舞升、夫が鐘さん斗りではムりませぬ、よくお考へなさいませ、大和掾さんでも、安達の三、袖萩祭文の段、平假名の四段目揚屋の段、戀女房の十段目重の井子別の段等が、大和塲で時代物斗りで、世話物と云つては一段もムりませぬ、夫にボイと双蝶々の橋本の段の眞世話物を語りやはつて、アノ通り品がよくて、後世まで其藝風が殘るやうになつたとは、只々恐れ入るの外はムりませぬ、後世と成りましては昔の人とさへ云へば、達人〳〵〳〵と老人などが申升ので、若い者共は、アンナ事を云つて威嚇されるのじや、など〳〵思ひ升が、決してソーでムりませぬ、其語りやはつた外題の名を聞いた斗りでもビックリ致し升。況んや其運びから音遣ひまで、聞けば聞く程恐れ入るの外はムりませぬ、私共も永年何を語りましても、外題の名が違ひ升斗りで、語り方は何でも蚊でも同じ事斗り申しまして、高いお給金を戴きまして妻子安穩に暮して來ましたのは、何とも先輩の方々へ對し相濟まぬと思ひまして、昨今漸ふ二階に楯籠りまして、若い時稽古を仕て貰ひました、師匠の方々のお名を唱へまし

て、其御靈にお禮を申まして其前で語る積りで本讀を初め升事に成ましたが、研究すれば致し升程一段は〳〵と、サラリツと綺麗に遣り方が違ひ升、夫が一段〳〵と違ひませぬ事には稽古も修業も入用ではムりませぬ。此大文字屋は先師吉兵衛さんが氣を入れて東京で敎へて呉れました物でムい升から、覺へて居升丈けを貴下にお咄して置升」

と云つて呉れたのである。此を聞いた庵主は忽ちにして速成の、大文字屋の源太左衛門が出來上つたのである。「凡大文字屋一通りに於ては、日本に楯突く者なき源太左衛門」と威張込んだのである其後庵主は五代目鶴澤仲助にて此段を一度語つたが、何でも常陸山の女形で、大分不味かつたとの評判である。夫から友人の福島春甫君が熱心に此段を稽古仕て居たから、庵主は講釋の百曼陀羅を並べて聞かせたので、春甫君は講釋斗りでは意味が取れぬから、僕の宅で一晩散財するから、之を一段語つてくれと云はれるので、源太左衛門大乘氣になつて、六代目仲助で語つた處が、ドウしたか聲が皆目出ず、理窟負けをして物にならず、トウ〳〵喉から血が出て來て、夫が病み付きで强烈な咽喉病となつて一年半の間金杉病院の外來患者となつたのである。流石の源太左衛門も此大文字屋では、今尙ほ震へ上つて居る處である。其後此段とさへ云へば方々で聞く事を怠らなかつたの

であるが、立派な太夫衆の語るのでも、一つも行く所へ行つて居らぬやうな心地がする。アレは大文字屋でも小文字屋でも何でもない、唯作者の書いた物を勝手に節を付けて讀んで居るのである。と思つて居らねばならぬのであつた。ツイ此間或る女師匠の語るのを聞いたが、中々面白ふは語つて居たが、息の間が庵主の考へと皆違つて居た。此段の息と間は、全く外の世話物とは別であると思ふ。

先づ『既に日も暮れ飯焚が』の「ハルフシ」は、決して「ユリ」があつたり、「ナガシ」があつてはならぬ。夫から『飯焚が』は「三をハナシタ」音である。總て此鐘場は「ハナシタ」音が大事である。夫から決して忘れてならぬ事は、地合でも詞でも、息の間が本である。夫で風も模様も足取も、トンと違つた物が出來上るのであると心得て居ねばならぬ。『十方失ふ氣は暗闇』も「二をハナシタ」音である是で「トン」と受けて、「二をハナシ」た音の邊から流れ込んで、『心にもなき』の次の『わんさんを』は「二の上」を押へた音であるとの事。又「二」をハナシた音で『云ふも榮三か十露盤の』と辿り『提灯のかげも』で氣をかへ『心もかきくもる』は凡て「ハリマ」と云ふ節の内で、此れ程可愛らしい打沈んだ心持で語らねばならぬ所はないと思つて、其心持を離さぬ事。此心持が本となつて『お松と云へど

色かわる』と運ぶと、滿場水を打たやうになるのである。故大掾が、『ヲマーアアッウ――、トヲ――ヲヲ、イイ――エ――ドヲ――、イイイ、ロヲヽ、カアア、ワアヽ、ルウヽウンヌ』と語つた時は、滿場覺へず顏を見合せて仕舞つたのである。斯の如くなるを藝と云ふのである。今の藝人と云ふ者は、皆目無力であるから、見物が顏を見合せる時は、場代の高い時と、其一口の藝力の不味い時と、無茶苦茶の甚しい時とである。夫は其筈である、其の一口の音遣ひに油の出るやうな修業をせず、只だ凝る事は女の事と、衣裳の事と、容態の事と、土産物の事と、頭を下げる事丈けで、全力を擧げて勉强する事は、給金を餘計に取たい時に口を尖がらし、目を剝出し、高聲を上げて喧嘩する時丈けであるから、段々世間に愛想を盡かされるのである。元々藝と云ふ者は、優美を本とする事柄であるから、少しは藝人自身にも樂み氣がなくては、聞いても、見ても居られる物ではない。只だ飛脚が屆物をするやうに、汗みどろになつて、無暗に驅けつけて賃銀を貰ふのとは、事柄が違ふのである。「タヽキ」で『顏は辛苦に面痩せて』是で十分の息の間があつて、『敷居も高き兄の內』と又十分の息の間があつて、三味線に乘せられて『供のてつちや、腰元も』と運ぶのである。

其他書けば限りもないが、總ての人形の調遣ひが大分心持が六ケ敷いのである。夫は其人形の境遇

と心持を片時も取逃さぬやうにして皆眞心で親切に思つてスラ〳〵と運ぶのである。

因に曰く。後年或人が此大文字屋は此太夫の語り下しであると警告してくれた。ソーかも知れぬ併し確とした調が付かぬのである。庵主は只だ大掾から聞いた事を書いて置く。又大掾も大隅も聞いた事を庵主が再調べして、大分調べ違いがあるやうでもあるけれど、兩人とも矢張幼少よりの聞學が多いから、決して答めてはならぬ。後年名庭絃阿彌が、總てを熟心に調べてくれて、旦那アレは違い升、是も違い升。と云つた事も度々である。鐘太夫と云つても、幾人もある。此等は屹度識者の警告を待つのである。庵主は只だ聞いた事を無意識に其儘書いて置く事にする。

（四十九）近江源氏　八ッ目切　盛綱首實檢の段

此段は明和六年丑十二月（大正十五年を距る百五十八年前）再興座にて豐竹鐘太夫の役場でありしと聞く。作者は近松半二、竹田平七、三好松洛、竹本三郎兵衛である。此鐘太夫と云ふ人は、前古無比の大音嬌喉であつて、時代語りの達者で、後世の今日から考へても、恐ろしい程の語り人である。忠臣講釋の七ッ目、喜内住家の段が、アノ通り「澁味」の難物である。又二十四孝の四段目狐火が「品格」と「節」と「足取」と「音遣ひ」と「派手模様」の取捌きが、アレ程困難な物である。其上又急轉直下して、兩面紙子仕立の大文字屋と云ふ眞世話物を孤んで捨てるやうに語つたとも聞く。夫に又此盛綱首實檢を語つたとは、何と云ふ恐ろしい太夫であらう。夫に其「詞の腹變り」と「音遣ひ」の「貫目」と、「聲量の張り緩め」とは、全く御咄にならぬ程であるのを皆一樣に、後世に範を殘す程に語り開いた人であるとすれば、此三ッ丈けの比較研究をして見ても、義太夫節と云ふものは、全く藝術中の至難な物である事が分るのである。庵主が不斷云ふ、斯藝丈けは命掛けで修業せねば、其

門に入る事は出來ぬとは此所の事である。先人曰く、

一、息の吐き道を知らず、何處でゞも口を開けるのを燕太夫と申候。

二、人形の腹を會得せず、只だ三味にのみ合せて謳ふのを、素讀太夫と申候。

三、其段毎の格合を辨へず、斯藝の修業なき聽衆にのみ媚びるやうと語るのを按摩太夫と申候。

と、當今の藝人を此三ケ條で試驗したらば、先づ何者が及第するであらうか。

先づ此の近八の段は、

一、『盛綱は惘然と』

と云ふ一句は何で盛綱は惘然として居るかと考へねば語られぬ。

二、『思案の扇からりと捨』

も何の爲めに扇をからりと捨てたと云ふ腹が分らねば語られぬ。

三、『申さぬ先から心得たとある、御辭言が承はりたい』

と母に詰め寄る詞を、力强く聲高に語れと古人が敎へたるは、ドウ云ふ腹加減か知らねばならぬ。

四、『劍を合す血潮の瀧、修羅の巷の攻太鼓』から『ナァコレ〳〵聞分けてたべ母人』

とまでは低い聲を〆て語ると云ふ譯が分らねばならぬ。

五、『母は手を打ち』

庵主は之を咄に聞く。此母の詞が又言語道斷六ケ敷腹合である。長門太夫は「物語」を「トン〳〵ジヤン」と〆させて、グット息を詰めて、暫くして『母は手を打ち』と云つた時は、三味線の團平の丑之助も、樂屋も聽衆も、一所にビックリしたとの事である。ソコデ團平は毎日盛綱の物語りが眞底まで母の腹に徹する樣に「ジヤン」と〆ねば長門太夫に睨まれるので、毎日苦勞をして、壯若の團平トウ〳〵心臟を痛めたとの事である。

サア斯樣な主意で、始めから段切まで運んで行く修業と覺悟がなければ、此段を語る資格はないのであるから、先づ當今では素讀の外此段を聽く事は出來ないのである。

コンナ風に此段を仕舞まで書いて居たらば、際限がない。以下は此格で推て知るべしである。

（五十）近江源氏先陣館　九ツ目切　高綱隱家の段

此外題は、明和六年丑十二月（大正十五年を距る百五十八年前）竹本再興座に上場せしと聞く。作者は近松半二、竹田平七、三好松洛、竹本三郎兵衛にて、役場は竹本綱太夫との事である。此段は音に名高き近九、即ち八ツ目、盛綱首實檢、鐘太夫場の後、即ち義太夫節中に名高き長段の次にて、割に短かい物ではあるが、爾後の斯界を風動したる程、音遣ひ、運び方の六ケ敷物である。故人竹本綾瀬太夫が、東京にて演ずるを聞いて、誠に其稽古も、語り方も面白く聞いたが、元來が大阪方面でも餘り六ケ敷て、派手でなく、語り得のゆかぬ物故、流行もせぬらしいが、昔は素人の天狗連などは、老練の師匠等に賴んで、火水に成つて稽古をして、語つた物であるとの事。彼の重太夫を彈いて居た鶴澤寛治が、二十一歳位の時、吉兵衛に稽古をした、素人の連中さんを彈き合せもせず孤み合で彈いて、素人玄人の別なく、ビックリする程、面白く彈いたので、夫が評判になつて寛治も夫が藝道の賣出となり、近九の段も、夫から一層流行して來たとの事である。

元來の仕組が、

一、佐々木が替へ玉斗り遣ふと云ふが、近江源氏の筋故、此段では琵琶湖の船頭になつて、石山敗軍の總大將、北條時政を、船に乘せて、自宅へ連れ込むと云ふ段である。

二、其連れ込まれたる北條時政も、又僞せ者で、互ひに謀計の爲合ひ、嘘の吐き合ひをするのである。

三、妻の篝火も、全く船頭の世話女房ではあるが、又其時代に變る心持は、藝力の限りを盡さねばならぬ仕事である。

四、夫から、嘘の注進が、度々來る、其語り方が、夫々息込が違はねばならぬ。

五、阿房の盆太で、聽衆に涙を催させるやうに出來て居る。

六、一番六ケ敷事は、此段の品位である。

先づ『入さの月影』とあるが『入さ——の月』で切る事になつて居る。夫から『影さへくらく、しめじめーエと』と最も据りのよい「中ギン」で運ぶ事。『空に、ちらつく雪よりも齡の』まで「フシガヽリ」で字を配らねばならぬ。『雪を、褞ふたる』で止つて『簑笠着たる老——人を』と運んで『乘せて我家

へ、戻り船、エーエーエエ、エ、、、、』となつて、『艪を押切て陸ア――に、漕付け』と語らねばならぬ事になつて居る。夫から氣を變へて、謠詞となり『急候程に、早船が着きて候』となり、又氣が世話に變りて『ヤ、即ち是が我等が家、サア〳〵お上りなされませ』となつて『女房共戻つたぞよ』からは、全く船頭の世話になるのである。『簑笠脫捨て上座に直り』と「中」で上品に語り、『一樹のかげ、一河の流れ、ふしぎに亭主の世話となり、寒夜の一宿、過分の至り』までは、皆「地中」の音で最も大時代で、上品に語る事。『聞いて女房が、惘れ顏』から又世話となる。以下皆此式で、「變り」を心掛けて語るのである。此以下の高調の「世話詞」が最も綱太夫風の骨の折れる所である。『夫が詞に、それはマア〳〵、御難――ンギヤ』と云ふ時は、女房が横眼で、夫高綱と、ソーット、目を合せる人形の手があるとの事。夫から又世話に「カワル」のである。『佐々木が謀の恐ろしやと舌を巻いて物語り』と「フシ」に語つて、『聞女房が打しほれ、今のお咄聞くに付け、侍と云ふ者はちいさい子でも、軍して命を捨てると云ふ事は儚ないと云はうか、いぢらしいと云はうか、其親々の身に取つては、と云ふを打消』まで、女房の「地色」が此段の六ケ敷所にて、綾瀨太夫は、「此「地色」が語れねば、一人前の、太夫ではないと、師匠に云はれました。師匠は篝火の、臭ぶし

ない〳〵と云はれました。旦那、中々篝火の臭が致しませんで困りました。

此段に付いて大隅は、

「近九は、綱さんの物でオマスさかい、詞搦きと、第一お汁がお味くない事には、喰べられまぬ」と云つて居たが、矢張綾瀬太夫の咄の、臭がせぬ〳〵と云ふ咄と、同じ事であると思ふ。『しづ〳〵立て奥に入る』と「フシ」に語つて、『跡に女房がしく〳〵と、思ひ佗たる愛涙、夫も思案有顔に、手を拱ねいて差俯き、互ひに詞納戸より』の「間」をモウ持つて居られぬから、時代に「カワリ」たがる物である。夫が力の足らぬのである。是から夫婦で、奥の老人を欺しのわなに掛けやうと思つて居る所故、其語り方の加減に誰も困るのである。『ひよく〳〵出る、阿房の盆太』からガラリ變るのである。此段の内に眞面目な精神の者は、盆太一人と思はねばならぬ。故に盆太で泣かすやうに語らねばならぬと、云ひ傳へてあるのである。佐々木夫婦が、盆太との咄で、眞身を出して泣くやら、ワメクやら、又御注進を眞面目に聞いて色々の所作をするのは、皆奥の老人に、聞かす爲めであると思つて居らねばならぬ。夫に、騒ぎ廻つて、泣いたり怒つたりするのは、比較的眞面目でなければならぬのである。ソコデ佐々木の「地合」にも『骨は砕かれ身は刻まれ』と「大ノリ」に語つて

人形に奥を見る息があつて、『肝のたばねに烙鐵を』と音をしめて、低く語る風があるのである。女房の方も『モウ云うて呉れるな。聞程苦しい此胸が』と低く語つて、止つて「チヽン」と引くのに、三味線彈の方にも、其心持の息があつて、『さけるやうなと伏沈む』と高く、奥に聞へるやうに、悲しく語るのである。夫から御注進となつて、谷村小藤次が來る。夫に高綱が『シー〳〵』と云ふ心持は、始終奥の老人に對してする、聲の所作である事を忘れてはならぬ。『息つぎあえず、訴ふれば』と「フシ」に語るまで、鍛練に〳〵を重ねて、彼の綱太夫の「ノリ地」と「詞捌」を「竪地」と云ふは是の事であるとの事である。豎の段切の、筆助の「詞ノリ」も、阿漕の段切の、次郎藏の「詞捌」も、此御注進も、只だ鍛練の精神が語るやうにならねば、淋しくて聞いて居られぬのである。夫から、『用意さしやんせ四郎殿』と云ふ文字を、故園平が『用意めされや我夫』と、直したと聞いたが、園平文學の力は無くとも藝の力にて、此夫婦の腹の中を會得して、改めたと云ふ事が分るのである。二度目の注進、四の宮六郎の詞の中『てうど請て、ほし玉へば』と云ふ所に、一寸佐々木と見合せる、人形の息があつて、佐々木の目交せにて、又一層聲を高くして『忽ち顔色土の如く』と大聲に語るのである。夫から『俄に表驟がしく』から氣を變へて語るとの事。夫から老人が迎の軍勢に圍まれて歸

つた後、篝火が『手に入敵をやみ〳〵と』以下は、最も眞面目に語る事。夫は女房は、老人を眞の時政と信じて居たからである。以下の佐々木の詞は、比較的低い聲て語つて、夫がしまりて、強く聞ゆるやうにとの教へである。夫は佐々木も是所になると眞面目で、女房に云ひ聞かせて居るのであるからである。夫から段切は最も陰氣に語る中に「中ギン」の音を忘れぬやうに『抜け目なアきイ、イイ、イ……』と語つて、聽衆を地の底に引き込むやうになして置いて、三味線彈が、力にある丈けの間をもつて、絃を「スツタラ」、又、太夫が力で持てる丈けの間を持つて『智謀の』と「トツ」て『程こ――、そヲヲ、ヲヲヲ……と』と切のてある。

（五十二）神靈矢口の渡　四段目切　頓兵衛内の段

此外題は明和七年寅の正月十六日（大正十五年を距る百五十七年前）江戸豊竹新太夫座に上場せし筈である。作者は當代の奇才平賀源内、即ち福内鬼外が、流麗の筆を弄んだ物との事。勿論初段の切に、三段目の口は、鬼外の筆に非ずとの事。役場は五行本に、津賀太夫場とあれども、矢張丸本にある通り、豊竹住太夫場として語るがよいと思ふ。元來、序切即ち義興出陣の場を、豊竹村太夫が語り、二段目の切即ち篠塚八郎注進の場を、豊竹絹太夫が語り、三段目の切即ち由井兵庫助忠義の段を、豊竹住太夫が語り、又四段目の切、艇梁場の段、是も豊竹住太夫が語つたと聞く。此段は多く手負のお舟が太皷を打つ處まで語れども、此は落合の空中怨靈の段切まで、住太夫風で突抜いて語るがよいと思ふ。先づ口と中の豊竹伊久太夫、豊竹絹太夫の役なる頓兵衛出世物語りが濟んで、義峰臺が來て、『奥の一間へ入給ふ』との「送り」から、四段目になるのである。『跡打ながめ』の「地ヘルフシ」から『娘のお舟』と「中」でズ――ッと云つて仕舞ふのが、風である。故に六ケ敷のは、

『アトウー、ウチ――イ、ナガア――メ』と「息」があつて、『ムスウメエノヲオフウネ』と又「息」があつて、『ホンニ、美しいと云ふか、可愛いらしいと云ふか』と止まつて、首ウナ垂れた心で『とても女に生るゝなら、アンナ殿御と添ふて見たい』と只云つて遣ぶのが六ケ敷いのである。以下皆こんな息込てある。『おぼこ娘のヒト――スジニ、思ひ亂るゝイトヲ、スウキ』と「ウラギン」で、『穗にあらはれて』と「フシ」に語るのである。兎も角只だサラ〳〵と云つて仕舞ふ中に「息」と「間」がからんで、情が浮いて來るやうに修業するのである。往昔より此段は三味線彈などが何の味もない、雜用な譜が付けてあると、輕蔑すけれども、夫が大間違である。其何でもない所に、深い〳〵云ふに云はれぬ力の入る修業が必用になるのである。夫が即ち住太夫風である。何にせよ二代目政太夫西口ザコバ十兵衛と云はれて、播磨の掾の後を受た切語の大名人の高弟で、國根節と世に囃はれた三四ノ切語の大達者たる初代住太夫の語り風であるから、此人以後淨曲の語り方が一般に變つたと云ふ位で、此まで謳ふやうに崩れた物が、初めて語ると云ふ樣になつたのである程の大問題故、淨曲は始終此人の風で改善されたのである。淨曲の修業が惡い爲め皆下手になる。ソコデ何とかお茶を濁さねばならぬので、ウワ〳〵と謳ふ事になる。夫では淨瑠璃謳ひとなるから此住太夫風で、ヤ

ット先輩が引直して、淨瑠璃語りになすのである。清水町の園平が、當代の太夫が、皆謳つて〳〵仕方がないから、大隅太夫や、組太夫を引付けて、此風で古淨瑠璃を本として鍛つて〳〵鍛ひ上げて、ヤットどうやら語るやうに仕たかと思ふとモウ僅かの年間、園平の死後今日の太夫では語り得る者は一人もなく即ち謳ふか只讀か斗りとなつて來たので、淨瑠璃は何も恐ろしい事も怖い事もない藝となつて、誰でも遣れるやうに藝が墮落して來たのは、「息」と「間」と「足」とがない幽靈藝になつたから、斯く淨曲が衰微して、浪花節からでも、筑琵琶からでも、負けるやうになつたのである。即ち此の「矢口」のやうな物は、屹度其風を辨へて修業すれば、三味線彈も、太夫も其風を習得する好材料であると思ふ。即ち平賀流の文才名筆に成る『コレイナア、コレ、こちら向いて下さんせと、右よ左と付け廻す、琥珀の塵や磁石の針、粋も不粋も一樣に、迷ふが上の迷なり』と書捨て又『なんぼ田舍生まれでも、惚たが因果惚れられたが、不肖と思つて下さんせ』『ハル、サワリ』となつて、『日影の木々も花咲けば、岩のはざまの溜り水、月も宿る(清めは住む世、ともある)を思ひ出に叶へてやらうとつい一口、云ふてくれたがよいわいなと、縋り付いたる袖袂、さはらで落る玉笹の、あられもないが戀路なり』と何の屈托もなく、書き運んだ名文に、付けてある譜は、又サラ

〳〵として何の屈托もなく、全く文章に負けぬ力ある譜と思はるゝのである。此如き力ある物を、非力の三味線彈や、太夫が馬鹿にして、トウ〳〵世に流行らぬやうにして仕舞うたとは、何たる歎がはしい事であらう。夫から『斯くて時刻もひさ象の』の「地フレハル」から、『二十日田舍の月出て』の「本ブシ」となつて、『遠寺の鐘のかう〳〵と』の「ウギンガヽリ」となりて、太夫がソロ〳〵腹一杯の仕事に取掛るのである。夫から頓兵衛がお舟を床下より突いて、お舟の口說となり、終に合圖の太皷を打つて、村々の圍みを解かせんと心付く事となる。何たる面白い構想であらう。實に作者の働き氣配りは目も廻る程である。

此作より八十年ばかり後の嘉永年中に出來た、朝顏宿屋の如きは、全く此矢口から剽竊た物と思ふ。一方は琴を彈かせ、此方は太皷を打たせ、此方ではお舟を殺し、朝顏では眼を開けさせたのである。夫から同文同趣の『娘は死出の斷末魔』、『夫を慕ふ執着心、蛇とも成るべき日高川』。『頓巾靡山の悲しみも』、『是にはいかで勝るべき』とあるが、先づ『日高川』を「上」で『ヒ――ダカガワ』と「地色」に押へて詰めて居ると「チチン」と彈く、其絃にて「上」で『ヒレフル』と止つて、「息」となつて、『ヤァマァ――アァ』と又止つて、『ノ――ヲ――ヲ――ヲヲヲ』と止まつて「息」となつて、『カ

ナシミ――――イ――――イイ、モ――――ヲヲヲヲ』段々聲が力なく下つて來て『コ――ヲ、レ――ニ――ハア、イ――イ、カ――ア、デ――エ、マサルベキ』となつて、後は遠間に鳴る太皷『合』となる（或は『マサルベキ』の次が『合』になつてをるのもあるが、『鳴る太皷』の下で『合』になるのが好い）。是が全部三味線彈の力業である。『鳴る太皷』と太夫が云つて『息』を詰めたら、三味線が『ハツ……：、ト――ン』と打つ、ソコデ太夫が『ハア――ツ』と『息』を大きく引く、其『息』を取つて又『ハツ……トン』と打つ、又『ハア――ツ』と『息』を引く、斯くの如くして、昔江戸では三味線が『間』を少しづゝ攻めて、五ツ打つたとの事。其後は『トン〳〵〳〵〳〵〳〵』とお舟が落入つて、死んで仕舞ふ『息』になるのである。昔日江戸の文藏の門弟が、

「お師匠樣、矢口の太皷を一生懸命に凝りまして、ドウ打つて見ても阿房らしくて、三ツより上は打てませぬ、ドウカお稽古を願升」

と云つたら、文藏は暫く其者の顏を見詰めて、

「矢口の太皷の撥が、三ツ當り前に打てたら、今ではお前は、江戸一番の三味線彈じや、三ツ打てたら結構じや、私は此歲まで其太皷が打てぬのでまだ矢口の役を受け得ぬのじやがナア」

と云はれた時、其三味線彈は青くなつて引下つたと、咄に殘つて居るのである。餘程腹構へのある全く聽衆を馬鹿にして、此太鼓の撥を世に殘してやると云ふやうな、力量の三味線彈でなければ中々打てる物ではないと聞いた。以下は普通の落合で、イサギヨク力任せにグイ〳〵語り捨てるのである。

（五十二）妹脊山婦女庭訓　二段目切　芝六住家の段

此外題は、元大近松の作であるのを、明和八年卯正月（大正十五年を距る百五十六年前）近松半二、松田婆々、榮善平、近松東南等が、三好松洛を後見として、種々改作加筆して、竹本座に上場したとの事である。役場は竹本綱太夫と聞く。綱太夫風は外の段でも委敷書いたから是には書ぬが後世此段を語る太夫が、根本的に心得違ひをして、馬鹿にして語つて居るから、斯道の旗印とも云ふべき、妹脊山二段目が其位を失ふのである。先年七五三太夫と云ふ者が、此段を語つて居たが何様、出場が朝の十時前位であるから、聽衆も少ないので、聲の出次第に語つて居る。何でも今の鶴澤叶などが子供の時位で彈いて居たと思ふが、五日目か六日目位に、庵主が聞に行つたら、サア俄かに緊張し出して、語る片手に息間の合はぬ所を、床本の端を頻りに折つて印しなどをして居たが、ソンナ事では生涯間に合ふ筈がないのである。ソンナ道樂な事で、此二段目の切が語れる物なら、斯道の意義も淺薄な物と極るが、此段は紋下の語り物として宜敷物である。其後染太夫が仙昇

と云ふ三味線の絃で此役を語つて居たが、此は又美聲と腹強でワン〳〵と云つて語り、仙昇も又撥強、腹強で叩き立てゝ居たから、丸で力士のマラソン競走を見るやうであつた。二ツとも是では二段目にはなつて居なかつた。夫で此段の上出來と云ふのは近年聞いた事がない。何でも明治三十年頃の春と思ふが、稻荷座で大隅太夫が此妹脊山四段目の竹雀を語り、越太夫が杉酒屋を語り、組太夫が何處かを語つた時。たしか此二段目の切芝六の段を彌太夫が語つたかと思ふ。此は何でも庵主の腸に染み込んだ所が幾ケ所もあつたと見えて、今でも多少覺へて居る所がある。其頃は人形遣ひも餘程良好かつたと見へて、桐竹鯉松がおきじで、吉田玉松が芝六であつたと云ふ事が、今尙ほ眼の底に殘つて居るのである。

先づ始の「ヲクリ」の『御殿へ入りにけり』は、此田舍の荒屋を御殿に語り出す「ヲクリ」で魂の這入つた力と息とが積んでの「ヲクリ」でなければならぬと聞いて居る。ソコデ『樣子立聞女房が』と「カワリ」が付くのである。『心がゝり』と世話で云つて、「テン」『草臥さんしよ』は「地色で」云ふのである。『立寄つて』が「中」になると聞いて居る。夫から初まつて詞が、ソレ〳〵心持と息合の面白い物となるのである。『しかも牝鹿は、覺へのギックリ、ハ……』で大略、此段始終の悶着が思ひ遣

られねばならぬ程語れねばならぬのである。『ぶち殺すは』と云つて息があつて、『常住の事』と輕くなるのである。此二段目に限つて、「中」と云ふ音遣ひには屹度氣を許さぬ事。『毒蛇の口の一ト思案、心は後に出て行』と「フシ」語るのであるが、『行――ウウ、ク――ウ』と語つた後、目の色をかへて息を詰めて居て『一間に樣子立聞淡海、局々と呼出し』と「色」に語り。「詞」になつて『鍔元くつろげ立上る』までは殆んど一息に云ふ如く、急き込んで「マクレ」ずに云ふ事。夫からお雉子の詞を聞いて『ムウ、實に、一命を差出し、賴まるゝ程の玄上太郎、とは云ひながら草も木も、我大君の國なれど』と、最も品よく「カワリ」て語るのである。又「詞」で『今は草木にも心置かるゝ此時節』と打しほれて『スハと云はゞ用捨はならず』は劍幕で云ふ。『御前へ參つて返事を待つ』と意地を持つて云ふ事。斯樣に綱太夫風は「カワリ」の欵込みに油斷なく語る事。『サア兄さん、賃下され、饅頭ほしいと、ぐわんぜなき』と「フシ」に語る時は、モウ涙を催さねばならぬのである。夫から三作の詞の『イエ、狼狽はしませぬ』から『さらばでござる母樣と』と云つたら皆泣の所として書いてあるのである。お雉子の「地詞」とも能く藝力を應用して『いとゞ食入る縛り繩』まで、夫相當に語らねば、後が困る事になるのである。『母は正體腰も拔け』から『土邊に蹉跌と身を打付け聲をばかりの焦れ泣』

までは最も大きい間で大股に語る事。一體後世普通の二段目太夫が是まで〻切るけれども、此段に限つて書下しが奥へ〳〵と、最も重く〳〵書いてある上に、文章でも『御目も將さに秋の田の、苅穂の庵の假御殿』と作者滴身の蘊蓄を、是で始めて傾け出してあるから、ドウしても此段の切太夫は、一杯に語り通さねばならぬ所と思ふ。故に『土邊に蹉跎』の「フシ」を語つたら、全く氣を變へて謡い心で『憂いを拂ふ玉箒』と出るのである。「ナヲッテ」『いかな大事』からは「地色」に足を付けて語る事。『ヤア女性』からは總て辭詞で云ふ事。『祝つて一つ』と云つて一寸息があつて、『泣玉へ』と語るのである。『作よ作よは胸を裂く』と「地ハル」で強く、『妻のくるしみ』は、グット云つて仕舞つて氣を變へて、『イヽエイナ』と云ふ事。『ドウぞ此夜が、百ク――ウ、ネン、――ン、モ――ウ』と語る時はお雉子の「地合」では絶頂の所である。『早やつき出す興福寺』と「ギン」の音を据えて物凄く語る事。夫から是で打つ鐘の撥は、古老の說にも色々あるやうであるが、五ッに分けて打つと云ふのが一番正しい物のやうに思はるゝのである。

先づ『興福寺』と語ると「ハッ」と三味線彈が「ウケ」て打つ、『ハァ南無三寶』又「ハッ」と「ウケ」て打つ、『アノ鐘の』『ハッ」と「ウケ」て打つ、『數に縮まる』『ハッ」と「ウケ」て打つ、『子の壽命』『ハッ」

と「ウケ」て打つて五ツになるのである。夫から『修羅の鐘、打切六は』で「ハッ」と「ウケ」て打つと、『ヤア知死期かと』狂氣になつて語れとの教へであるとの事。『芝六居直つて聲を上げ』からの物語りは、最も「ハッ」て語る事。鎌足の出からは又全く氣を變へて出來る丈け品よく語つて、『十三鐘』まで鮮かに品を上臺として語るとの事である。

（五十三）妹脊山婦女庭訓　四段目切　竹に雀の段

此外題は元近松門左衛門作と聞いたが、後明和八年卯正月（大正十五年を距る百五十六年前）近松半二、松田要々、桑善平、近松東南、後見三好松洛等にて取纏め、竹本座に上場した狂言であると聞く。劇界にては、古今の名作として、太夫も春太夫、染太夫、綱太夫、唉太夫、島太夫、三根太夫、梶太夫等の腕揃ひにて出勤したとの事。此段の役場は竹本春太夫と聞く。何様床本にて僅か三十枚前後の小冊が、四段目の切り太夫の役であるから、夫れ丈け責任の重き事は、問はずして分るのである。此春太夫の風は「色」の語り分けに一つの間違なく「乗る」事の名人、「フシ絞り」の名人にて、「ツトン〳〵〳〵、ジヤン」と締めるのに、一生の中に一度も息を抜いた事なく、チヤンと詰めて待つて居て「ジヤン」との締めで息を取つた位であるとの事であるから、此人で總ての太夫の語り風が變つたと云ふ位であるとの事。夫だから總てに餘程注意をして修業をせねば、此四段目丈けは語られぬのである。

庵主が曾て此段を、故攝津大掾に習ふ時、晝は文樂で聞いて、夜は大掾が膝を叩いて小言を云ふので、フッ〳〵と困却した。何樣六尺大の男が、お三輪の眞似をするのであるから、出來ぬが當り前と思ひ、

「師匠、私は角力と擊劍なら素人では一寸半人前位は遣れると思ふが、此お三輪の眞似斗りは到底出來ぬよ」

と云ふと。大掾は目を剝き出し。

「アンタが眞似を仕やうとなされ升から出來ませぬ、淨瑠璃は眞似事ではムりません、私は先年、京都の祇園のお茶屋で、其家の旦那に組太夫が、此四段目のお稽古をして居るのを、隣座敷で聞まして感心しました、アンタの聲も惡るいが、組太夫の聲とはドッチがよいと思ひなはる、アンタの方がズット宜ろしい、夫程惡い聲で、組太夫のお三輪はチヤンとお三輪に成つて居ました、却つて金輪五郎の方が品が惡ふございました、決してお三輪の眞似ではございませんぞ、お三輪の心持になるのでござります、夫には作者がお三輪の心持で文章を書いて居やはりますから、アンタも其文章を讀んで、お三輪の心持になつて習ふた節と、詞を稽古しなはるのでムります、夫

が出來ねば人ではござりません、アンタが一度聞いて覺へなはるか、十度聞いて覺へなはるかはアンタの賢こさに依りますが、夫が分らぬと云ふのは、アンタの御熱心がマダ藝道の修業までになつて居やはらぬのじや」

とコツぴどく叩き下ろされたのである。此段に付いて又コンナ咄がある。夫は大隅太夫が文樂に這入つて後、大掾が此四段目を語つた。其樂屋の何處にか大隅太夫と南部太夫とが居た時、床では大掾が『たぶさつかんで氷の刃、脇腹グット……差通せば』と語つて居るのを大隅が聞いて、

「ハヽア師匠もモウ年を取りやハッタから、金輪五郎今國の刃が錆て來たわい」

と獨り言を云つた。夫を脇で聞いた南部太夫が、師匠の大掾に告げたので、大隅は大掾に呼付られてウンと叱られたと、庵主が聞いて居たが、其翌晩に大隅が庵主の宿に來て、

「旦那はん、昨日は二見の師匠に呼付けられまして、ドエライ目に遭ひましたよ、併し旦那はん、私は一生に又とない得を致しましたぜ」

と云ふから。

「ドンナ事であつたか」

と聞くと、

「夫がナア、私が阿房じやから起つた事ダンネ、併し阿房かて又得する事もオマスわいな、師匠が歸り掛に隙があつたら、今夜一寸宅に來てくれと、云置いて歸きやはりましたから、何事か知らんと思ふて行ますと、二階に連れて行かれまして、ナア大隅お前は師匠が四段目を語りやはる時はヨウ聞いても居なかつたらうし、又役も付かなかつたかも知らぬから、モウ年を取つて弟子に小言も云はねばならぬサカイ、恥を播くとイカンから、云つて聞かすから、ヨウ聞いときなハレ私は此四段目を師匠の語りやハル時、抜ける程聞いても居るケド、どふも錄に語れぬ、併し語る道には相當苦勞を仕て居るサカイ、咄丈は出來るから咄すのじや、此は師匠の取次と思ふて聞きなハレ、此四段目は初代春太夫さんから師匠春太夫まで、お家物として、夫は〳〵八ケ釜敷苦勞仕やはつたモンヤ、私も團平師に彈いて貰うて、此段を語る時、困つたナア……難儀ヤナア……ドウも彈けんわい〳〵〳〵、と毎日云ふて、「色」と「フシ尻」を八ケ釜敷く云ふて彈かれた、お蔭で今は語つて見る氣にもなれるが、一字一句油斷の出來る品物ではない、デ『たぶさつかんで氷の刃、脇腹ぐつと差通せば』此金輪五郎の刃は、決して錆ては居らぬが、藤原の御内第一の忠

臣で、入鹿を殺して天智天皇様の御代に仕よふと云ふ人じやから、心には忠義の道と慈悲の涙とが滿ち〳〵たお方じや、其人が入鹿を亡ぼす手立の爲めに、若い女の生血が入用で、お三輪を殺しやはるのじやサカイ、お三輪には只だ可愛想な斗ッかりで、少しも憎い心はないのじやぞ、其人がグウツ——と、差通しやはるのじやサカイ、只のグウツとは違ふぜ、私が稽古して貰ふ時『脇腹、グウツト』と云ふと、アヽイカン〳〵〳〵と云はれて、途方に暮れた、夫から師匠の語りやはるのを聞くと、『たぶさつかんで氷の刃、脇腹グッ……と』云やはる時は、モウ其前から師匠の眼は血走つて居て『脇腹ア……ラ、グウ……と』になるまで、何とも云はれぬ「間」がある、ハヽア茲じやナと思つて、其晩に師匠の酒の燗をする時、お師匠はん、今國が刃をお三輪に突込む時は可愛想にナアーと思つて突込んだら宜ふおますか、と云つたら、師匠は酒を呑み止めて、今日聞いたか、と云やはるから、ハイ聞かして貰いまして、ヤッと夫丈け考へました、と云ふたら、ムウ少しは四段目が分つて來たナア、其處まで分れば云つて聞かす、『たぶさつかんで氷の刃、脇腹ア……ラ』と語つて居る中に、お腹の中で、可愛想に氣の毒じやが死んでくれと云ふのじや、夫から『グウツ…』と云ふ前には、南無阿彌陀佛と云ふ「間」があるのじやぞ、俺は師匠にそ

う聞いて居るから宜ふ覺へておけ、と云はれた時の私の嬉しさ、思はず蟄半疊下つて有難うございます、と云つて、涙が止まらぬ程嬉しかつた。お前も語る語らぬは別として、妹背山が立つたら、弟子には稽古もして遣らねばならぬ、其時の爲に云つて置くから、ヨウ覺へといてお呉れ。と云はれた時は、旦那、私ア夢のやうな氣に成ましてナア、心の底から有難いと思ひまして、汗と涙で二見の師匠に禮を申ました。此を一つ教へて貰ひますれば皆何處でも同じ事と思ひまして昨晩から今朝まで四段目の本を讀んで來ましたから、此咄を旦那はんに一ぺん仕て置かぬ事には二見の師匠にも濟まぬと思ふて出て來ました」

と又額に汗をニジまして、大隅が咄したのである。此大隅と云ふ男は藝に掛けては恐ろしい男であるが、只の時は何事にも分別のない男で、見た事聞いた事を默つては居れぬ便りない男である。夫に藝道の金太郎で、何時でも源太左衛門で居る。「凡淨瑠璃一通りに於ては日本に楯突く者なき源太左衛門である」其大隅が此程の咄は餘程弱り抜いた物と思はれる。後の世の美譚と思つて書いておく。此から庵主の恥搔を咄し、

○『迷ひはぐれし』此「ハルフシ」は高く明かるく廻す事。

○『片うづら、草のなびくを知べにて』は『カアタアウウズウラ、草のなびく』

大掾曰く『『草のなびく』だすぜ、ナゼそふ語んなはれぬ、ソ……そないに體で語りやはつては見ともなふおますがナ、「腹ノリ」の心持で語んなはれ」

○『息せきお三輪は走り入』

大掾曰く「ソウ「色」を云やはつては、チツともお三輪は息せき走り入つて居ませぬがな、『イキセキお三輪ア――は(是に息の間があつて)走り入』『ツン〳〵』でおますがナ」

○『卯月あたりのはじけまめ、豆腐の御用が急ぐにと』

大掾曰く『『卯月あたりは』ネばつて面白く、此で氣を易へて『ヲ、豆腐の御用』と足をかへるのです」

○『行かんとせしが、イヤ〳〵』

大掾曰く「此「色」も息の間がおます」

○『と云ふて此儘に』

大掾曰く「此「テン」にも前と同じ」

○『長廊下』『恨み色なる紫の』

大掾曰く「皆フシ」に意味があります」

○『前後正體泣き倒れ』

庵主曰く「是まで來ると此四段目が何とも彼とも云はれぬ程重たくなつて來て、此お三輪の心持にドウすれば成れるかと思ふと、モウ語られぬやうになる物である。口では云はれぬ只だ見物も何もなく、夢現となつて力て語るのである」

○『口に食ひ占め身を震はし、ヱ……ねたましや』

庵主曰く「是を大掾が語る時に聞いた人は知つても居やうが、夫こそ實に眼が血走つて居つた」

○『入鹿を亡す』で一寸止り『術の一つは』少し低く『ヲ、出かしたなアは』大きく。

庵主曰く「死んだ吉田玉造は、先の春太夫には此『ヲ、』に今國が不憫の息があつて、『出かしたなア』と語つたと聞いたから、大掾に夫を尋ねて見たが、ウッカリ其處には氣が付きませなんだ、と答へた」

○『とは云ふ物の今一度、ドウぞお顔が拜みたい』から『戀し〳〵』と云ひ死に、思ひの玉の糸切れし』

庵主曰く「此の處も其頃聞いた人はよく覺へて居るであらうが、滿場の世界は、只だお三輪の心情斗りに成つて仕舞つたのである。古人に嘸名人もあつたらうが、夫は聞かぬ昔の人の事である。庵主などの時代では此大掾の四段目以上の物を聞く事は出來ぬと、煮へる程面白かつた。其上玆によく注意せねばならぬ事は、此段で人を泣かす所は此所紙一枚より外ないのである。夫で前から段取を付けての責方が六ケ敷ィのである。此丈け責めて置いて『因緣斯と「チン」あわれなり』と大掾が語り收めた時は、講座が廻つても聽衆は一人も物を云はなかつたのである」

（五十四）艶姿女舞衣　三勝半七　酒屋の段

此段は明和九年辰の十二月（とあれども明和は十一月二十五日に改元になつて居るから十一月か安永元年十二月かならんと思ふ）（大正十五年を距る百五十五年前）豊竹座に上場し、作者は竹本三郎兵衛、豊竹應律、八民半七と聞く。又役場は綱太夫と聞いて居るのである。何樣此場は昔から三味線の運の六ケ敷ので名高い物であつて、綱太夫の成功した割合に餘り後人が摸倣し得なかつたと云ふ事であつたが、天保時代に靱太夫と云ふ人が、拔る程修業をして、運びの間を夫是と變て面白く語り生かしたと云ふ風が土臺となつて、今日の風となつて居るとの事である。今日に於ける其語り方に付いては、十人十色、いろ〳〵の事を云つて居るが、庵主の微力では、ドレが正しいとの裁判は出來ぬのである。夫は皆全體の考が、庵主の考とは違つて居るからである。元來他の音曲には、皆家元と云ふ物があつて、大抵其風格が極つて居るが、此義太夫節には夫がない。強ひて云へば、一段一段の家元は屹度あるのである。ナゼなれば、斯藝は其劇の組立が如何にも大きいから

大序から大切まで、一人で研究して語り得る人がなかつた。朝の五時頃から晩の九時頃まで、一人で語る事は出來ないから、只だ一段々々丈けが、精一ぱいの藝である。故に此段でも、先づ綱太夫風を土臺として、好いとか悪いとかは云へるかも知らぬが、各人各個に勝手〳〵に語つて置いて、ドレが良いか、悪いかと問はれても、夫は到着點なしの、マラソン競走に、勝負を論ずるやうな物である。庵主に云はすれば、先づ初め綱太夫が語つた物ならば、其綱太夫風を知らねばならぬと思ふ。綱太夫風は前にも云ふ通り、初二代とも、淨瑠璃を極々陰氣に締めて語つて、三味線の方では出來る丈け陽氣に彈いて、夫がカラミ合つて、面白い曲情を殘すと云ふのが、此人生涯の苦心であつたと聞いて居るから、先づ其修業をするのである。夫を徹底的に遣り拔いたのが覺太夫である。彼の浪花節や、筑前琵琶のやうに、樂器の方と別々に、勝手に云ひたい事を云ふのは、音曲でも何でもない。只だ鑑札を受けて、飯を喰ふ藝人とは云へるであらうが、藝術家は音曲の掟を知らねばならぬ。丁度文字に王義之や趙子昂があるやうに、同文字でも、先輩の各大家には、書き方と運筆の方法が違つておる。夫を知つて學んで、字を書いて字の風が極るのである。今の學校の生徒のやうに、鉛筆やペンで、縦に書いたり、横に書いたりして、字の風格と云ふ藝術論が出來やうか。夫

は讀む丈けの字である。故に今の義太夫節は、勝手の音を遣ひ、勝手の間を彈く。故に之を素讀太夫と云つて何が差支へがあらうぞ。今の太夫共は、ヤレ『こそ』とかゝつて來たら、『れ』と結ばねばならぬの、ヤレ『中ぞ』とかゝつて來たらば、『あはれなる』と結ばねばならぬなどゝ、ソンナ事の研究斗りをして居るが、夫は作者と、學者の受持ちである。一度聞けば直に其間違は改良される事である。三味線は『入相の鐘に散り行く花よりも』と彈くのならば、ドウ彈けば『入相の鐘』になるかと「シアン」と彈くにも、其心持を修業する役目である。夫で太夫もドウ語れば『入相の鐘』になるかと修業するのである。夫が太夫の受持である。文章には三味線彈も太夫も關係はない。其關係のない事斗りに、太夫が凝つて居るから、天下一人も『入相の鐘』の彈ける奴も、語れる奴も居らぬ事になるのである。夫に善惡を評せよと云ふのは、云ふ方が無理である。先年庵主が大變貴の故清六が、東京の有樂座で沼津を彈く時、『いとしん〳〵と聞へける』と、古靱太夫が語る時、清六はモドカシクて堪らぬので、「トン〳〵〳〵〳〵ジャン」と捨撥に彈いた。庵主は清六を呼付けて、

「お前は大隅太夫の初役の沼津を文樂で彈いて居るが、あんナ「フシ」の彈樣で、大隅太夫は『お米は一人物思ひ』と語つたか、古靱太夫が如何程お前より下級な太夫であつても、『お米は一人物

思ひ』と云へぬぞへ、小言を云つて叱るのは修業の神聖じやから、叱るも結構じやが、叱るなら叱るやうに、叱る道を自分に明けて、叱らねば修業にはならぬぞ」

と云つたら、清六は頭の毛の中から汗を出して、庵主に過まつた事がある。夫から其興行は、一日も洩さず庵主は聞いたが、清六が毎日、其の太夫の心持を抱へて彈いたのには、庵主斗りでなく、滿場の受けであつて、此時の興行の事は、今に東京の素人玄人間にも、清六の三味線は〳〵と尚ほ語り草に殘つて居るのである。此で其藝人の心掛けと、修業の力量であると云ふ事が分るのである。夫が此三勝半七酒屋の段程、世の中に語り崩して居る物はないから、誰か一度は豪い太夫と三味線彈が、息を吹返す丈けに、生かして呉れねば、聞いては居られぬのである。併し此の義太夫節と云ふ藝の力は、又格別の物で、此間、庵主の家に來る、植木屋の親爺が、大の酒屋の段好で、曰く、

「旦那、私しやアお屋敷に永年お出入をして、常に女太夫の酒屋斗りを聞に行きますが、實に面白うムい升、私しやア酒屋とさへ聞けば、ドコまでも行升、併し旦那、此頃の寄席は、木戸が六十錢で、蒲團が五錢で、鮨が二十五錢で、煙草盆とで、先づザット一兩掛り升、コチトラの給金二

圓五十錢から、一圓を酒屋の段に放り出しまして、一圓五十錢を持つて歸り升と、其度毎に嚊と子供等とを相手に、喧嘩をオツ始め升、夫でも酒屋の段のビラを見升と、聞かずにやア居られません」

と云つた。何と是は太夫の力で、此植木屋の親爺の金一圓を捲上げて居ると思はれやうか。即ち明和九年から、大正十五年まで百五十五年の間を貫いた、全く義太夫節の力である。三郎兵衛、應律平七の力である。否綱太夫、靱太夫の力である。否其時彈いた三味線彈の力である。女房子と喧嘩をしても、財布の一圓を放り出させる力は、政府が軍艦を買ふ力よりも、廣大な物であると云ふ事が出來るのである。夫程の聞人を抱へて居ながら、今の太夫や、三味線彈は、今日のやうな藝を仕て居て、冥利に叶ふと思はれやうか。全く今の義太夫節は、天狗倒れ、素人崩れの時代と云つて宜いのである。

先年大阪の角座で、涼浮瑠璃に、故大隅太夫の此酒屋の段を聞いた事がある。即ち故清六が彈いて居た。此時伊達太夫の日吉丸で、吉三郎が彈き、春子太夫の白石揚屋で、故二代目團平が彈き、長子太夫の八百屋で、今の叶が彈いて居たが、此酒屋一段で、皆ナ暴風の前の胡蝶のやうに飛んで

仕舞つた。清六は其翌日に來て、斯く云つた、

「私は三味線彈になりまして、幾百度と此酒屋の段を彈ましたが、アンナ重たいサラ〳〵した、酒屋を彈いた事がオマヘン、其間と云つたら、油斷も隙もなりまへん、大隅師匠の素淨瑠璃丈けに私が押されました精かも知れませぬが、今に撥が手にコビリ付いて居るやうで、マダ體が痛うムり升」

と云つて居た。庵主は、

「アンナ柔かな、情の深いサラ〳〵した酒屋を聞いた事がない、お前の三味線は、皆情合にカラミ付いて、面白さに俺は泣いて居た」

と云つて、清六に褒美を遣つた事がある。其時の事を越路太夫に咄したら、

「成程面白ふムい升ナ、私も一つ凝つて見ます」

と云つた。其後吉兵衛が來て、

「越路さんから酒屋の咄を聞ましたが、今二人とも思案して居る處でムり升」

と云つて居た。今其時の咄を少し書いて見やう。

『鐘に散り行く』は成丈け遠い鐘に語る事。『あたら盛りを獨り寢の』は宗岸の「地合」に語る事。即ちお園が小紋の紋付に、黒繻子の帶をして、髪を橋かけに結つて、先に立つて行く姿を、後から宗岸が見て、「ア、氣の毒じやナア」と云ふ心持を、情合に語る事。ソンナ陰氣な情合を、大事に語るのが、綱太夫風と聞いて居る。『子故に』の「ウクオクリ」は成丈け憂に沈んで、『暗らむ』と語る事。「テン」で憂に沈んで居た宗岸がフット氣が付いて、足を變へて『タ、ソ、ガ、レヱ、ドーヲーヲーキ』「トン〳〵〳〵〳〵〳〵ジャン」と早く彈く事。婆々は笑はぬがよい。『奥そこもなく』は、『奥』と止まらぬ事。宗岸は憂の情を腹に持つて、泣かぬがよい。半兵衛は氣の毒の心を腹に持つてノソ〳〵と物を云ふ事。『ドンに生れた』が、皆「ギン」に落て居る。此は「ウレイ」の譜に下るじや。「ギン」は、お園の一人口說になつてからの事。大體が綱太夫にも、靱太夫にも「チン〳〵〳〵」との呼出は無い。「チン」『鈍に』と「ウレイ」に直ぐ落ちても好い位である。半兵衛の咳は、後年の太夫が語つたと聞いたが、又靱太夫も語つたとも聞いて居るが、ドッチか分らぬ。お園の一人口說の地合に「ギン」の遣い方を修行せねばならぬ。段切近くなつて來ては、十內の詞もヒッくるめて、サラ〳〵とした勢ひで語る事。是とは違へども、綱太夫物は鰻谷の骨桶が了へで、捕手から四ッ橋の段

切りまでや、鷺の奴筆助の詞から、段切までの勢や、阿漕の字内の詞から、よみちへ急ぐ一文字までの段切までの勢の如く、皆此風の意味が漂つて居るものと思はねばならぬ。

（五十五）櫻錦恨鮫鯖　お妻八郎兵衛鰻谷の段

此段は安永二年巳十一月（大正十五年を距る百五十四年前）豐竹定吉座にて、竹本綱太夫が語つたと聞くが、後に染太夫も語つて、其方が大評判でありしとの事。作者は竹本三郎兵衛なるべし。元來がお妻八郎兵衛と云ふ地唄を本として書いたものであるが、明治三十六年、五代目鶴澤仲助が竹本大島太夫を彈くにつけ、彼は大島にむかひ、師匠大隅太夫の風を、學ばざるべからざるを警告し、故團平師の朱章を繰りて、大島に稽古をした。庵主も亦大隅の此段を聽くを樂みとせし故に、必ず其傍にありて、仲助の稽古を聽いた。然るに大正八年十二月初旬、三代目竹本越路太夫が、歌舞伎座に來て、之を演じたが、其風攝津大掾に同じからずして、大隅太夫とも亦甚だ異なつてゐる是に於て庵主は、同じ一門の師弟でも、其音譜歩調に差違ある事が分つた。庵主嘗て攝津大掾に、此鰻谷に限り、其風の大隅と大差ある所以を糺せしに、大掾曰く、

「此御尋に對しては、私共面目次第もなき事で厶り升、一體綱さんの風と申すものは、私でも大隅で

も、兎ても習得する事の出來ない筋合を備へて居り升、故園平師は曾て、私に親しくいはれました事が厶り升。「東西を通じて綱さんの風を語り得る太夫を以て一人前としたならだ、太夫ではアンタの師匠春さん限りであり升、私が今斯ふ朱を調べて殘すのを、彈く三味線彈は出來るかも知れぬが、語る太夫さんは六ツケ敷いと思ひ升」と是は師匠春太夫の風を、命懸けで勉强して居りました私と大隅とを前に置いての申分で厶りました。夫では私も大隅も綱太夫風に付ては、疾うに園平師に見限られたのに相違ない人間で厶い升が、其困難である、學び難い、といふ所は、ドンナ所かと申ますれば、夫丈けは兩人共克く分つて居り升。綱太夫風と申升のは、先づ御分り易く申せば、太夫が十分腹が締つて、出來る丈け淋しく語りて、其間に搔き除ける事の出來ぬ、人情が漂ひ出し、三味線は又出來る丈け派手な音をさせて、夫が腹の締め方で、太夫の腹とからんで皆藝の活地となる、是が綱さん一生の心掛けであつたと、師匠に聞いて居り升、夫が私や大隅のやうに、派手になるか、ギゴチナクなるかの片輪者では駄目で厶います。夫を又双方の弟子共が聞いて語りましたら、扨ドンナ物が出來上るか分りませぬと、常に心に此恐れを持つて、綱太夫風をモガイて居りました。所に唯今無心に貴方の御尋を受けて、園平さんの豫言辻占がドン

と命中致しまして、私の胸にはドキンと徹へました譯で、夫で面目次第もないと、御詫を致すの外はムりませぬ。貴下には私壯年の時から、大抵の物は筋を御敎へ致しましたが、まだ綱さんの風のものは一度も御稽古致しませぬ、先づ阿漕とか、鰻谷とか申す物は、お心懸けは別として、餘程後年御力の附いた後に、御調べになるがよいと存じ升」

と庵主は此止め釘をポンと打たれたので、ギャフンと參つたのであつた。

茲に大正十四年丑の正月となつて、庵主は正に六十二歳の春を迎へて、大掾、大隅の死後已に數年を經過したるに付、微力ながらも、そろ〳〵と努力に着手せねば、命の方が間に合はぬと思ひ、心を締めて六代目仲助に朱章を繰らせ見て、ポツ〳〵と研鑽に着手する事としたのである。故に勿論此段に對する人の藝を評する資格はないが、今迄聞いた分では自分の合點に落ぬ物斗りであつた

（五十六）攝州合邦が辻　下の巻　合邦住家の段

此段は安永二年巳の二月（大正十五年を距る百五十四年前）大阪北堀江市の側座元豊竹此吉太夫同此太夫にて、古淨瑠璃の風を語り殘さんが爲めに、興行せしが始まりにて、此場は、即ち此太夫が語りたるものであるとの事、（文化の初め死す）此太夫は前名時太夫、又八重太夫と云つて、通稱岩田町錢屋佐吉と云つたとの事である。筑前掾の門弟にて、堀江市の側に芝居を建てゝ、自分で語つたが始りである。其後綱太夫も語りて、少しく風も違つて來たが、概して此太夫風の物で、一番働いた品物である。

即ち玉手の出の枕は四段目の節であつて、『氣はうば玉の』に音を遣ひ『玉手御前』は眞ギンの音を遣ふのである。此段中『玉手御前』と云ふにギンの音を遣ふのは、此處一つで、後にある『玉手御前』は皆尻が一の音に落ちるのである。入平の出の足取を語つた述「皷聲」より「窺ひ居る」までは、潜み聲である。合邦の詞は坊主がゝつた世話詞の中に、屹度律義の氣象を現はし、女房はドコまでも慈

愛一方の婆詞である。『泣ねど親の慈悲心を』と今時語つて居るのが、即ちアレが綱太夫節で、綱太夫から此節が變つたのであると。『オ、嘘であろ〳〵オホ、、、、』の笑ひは合邦に氣象した婆さんの笑ひである事が、ハッキリ分らねばならぬ。玉手御前の「サワリ」表に意氣を持つて、心に深き憂を含んで語るのであるとの事。總て義太夫節は色々の理窟屋がソコデ泣ては筋が割れて仕舞ふとかソコデ笑みを含んでは人形の腹の中が知れるとかと皮肉を云ふが、夫が大間違である。此段では玉手の此「サワリ」を聞いて聽衆が、ハ、ア此玉手は口ではアンナ色氣タップリの事を云つて居るが、何か腹の中に深き考へがあつて、決して不貞一方の女ではない。即ち惡い女ではない、善い人であろふと聞分けるやうに語る。夫が六ケ敷のである。一ノ谷の陣屋を語つて、熊谷が豪壯の詞の中に強い一方の荒武者と聞ゆれば、語れて居らぬのである。心に限りなく多情を含まれて、全身に涙の滿た人、即ち熊谷で泣くやうに語つて、始めて筑前掾の語り物の要領を得たと云はるゝのである。故に此玉手の「サワリ」は、一段中重複の意味のある一番六ケ敷處にて、毛筋程の油斷もなく、或程度まで玉手の心情を聽衆に感得させると云ふが難事である。合邦はドコまでも眞面目に、怒りに怒り、憤りに憤りて、其中に親子の愛情があればこそ、後に玉手の云譯を聞いて『オイヤイ〳〵

〳〵』の深情の破れ所が語れて、始めて合邦丈けの結び目は付くのである。俊徳丸は、能ならば主手の玉手の連で、ドコまでも品よく盲目を忘れぬやう、婆さんは脇の合邦の連で、總て合邦にカラマル事を忘れずに語るのである。此段を語るには、能の謡本の弱法師の一番をよく讀んで語るがよいのである。夫から俊徳丸の出から、玉手の嫉妬になるまでが、一番運びの六ケ敷所にて、此が此太夫風の大事の所である。夫から玉手の嫉妬は、此段の眼目であるから、間を大きく、引息を十分に取つて、マクレ間にならぬやう、人形に同化して、自分が人形になつて語らねば、人形が生きぬのである。『コタヘ兼ねて驅け出る合邦』は息で十分「ヘタッテ」語らねば、合邦の足取が語れぬのみならず、後が「マクレ」て云はれぬやうになるのである。玉手の手負ひ『憎い筈じや』は手負中。千本櫻三段目のすしやの權太と、此玉手が一番難物としてある位故、屹度「息」の注意をして語るものである。『道理じや〳〵』「チン」『憎ウいイイ筈じや』と一息に語つたのは、攝津大掾一人である。併し夫が決して自慢もで良いのでもない。此手負の情を語るには『道理じや〳〵「チン」憎ウいイイ、「チン」「カスレテ」はずウ、、じや……』と、此太夫、綱太夫から、春太夫までソウ語つたとの事である。夫が「ヱ」の譜から、「サ」の譜まで、クリ上げるには、「チン」で良き「息」を取らねば、手負の

情が浮いて來ぬのである。只だ一息に「上」の音自慢で、「サ」の譜までクリ上げて、クル〳〵廻して居るのは前には無論受けるけれ共、手負の情は逃げて居るに相違ないとは園平が云つたと大掾から聞いたのである。是は攝津大掾の藝の力で語つて、始めて成功したのである。玉手の云譯は寸時も手負たる事を忘れずに、スラ〳〵と語らねばならぬ。夫が中々六ケ數のである。其中に『思案を極め』の「カヽリ」の節から『黄泉の障りと成るわいのと』までが、殊に此太夫風の標本で、最も音遣ひに注意を要する處である。又『サレバの事』から『尋ねさがす心の割符』までが同じ風である。外にも澤山あるが、大略ソンナ處に注意を要するのである。調子上つて『取々』の「ハルフシ」から、「大落し」まで是丈けを又一段と見做し、一大事に語り。其以後は落各風の段切りと思つて語つて良いと云傳へてある。總て義太夫節は、名人の半時淨瑠璃と云つて、即ち今の一時間で、是丈けの物を語り上げたものにて、曾て攝津大掾は、

「淨瑠璃も段々下落致しまして、私共の樣な下手斗りとなりまして、昔の半時淨瑠璃、今の二時淨瑠璃となつて仕舞ました」

と云つたが、藝術は總て下落して、太夫が未熟不鍛練の爲め、講座に上つたら休む工夫斗りをして

居るから、コンナ事になるのである。此合邦の段を今の一時間と十五分位以上掛つたら、満足に語れて居らぬのであると思つたらよいのである。節を付け勝手に朗讀した上に、古人の風も、極り切つた「息」もメチヤ〳〵で、其上に一時間三十分以上も掛つたら聽衆を半殺の目に合せ、給金斗り高く取るのは、此藝道の大罪人と云はねばならぬ。況んや一人前の太夫として、其段中の人形に同化する事が出來ずして、藝が動く筈がない。曾て攝津大掾の咄しに、

「私共は未熟でソンナ事はムいませぬが、綱さんが講座から下りられて暫くの間は、體が間拍子になつて居て、直ぐは元の體に成られなかつたとの事でムい升」

と云つて居た。夫でこそ本當の藝人として尊敬すべく、又決して第二者の摸倣を許さぬと云ふ權威があるのである。

（五十七）傾城戀飛脚大和往來　新の口村の段

此場は安永二年巳の十二月（大正十五年を距る百五十四年前）曾根崎芝居にて上場した筈だと思ふ。役場は綱太夫とも若太夫とも聞くが、此書下しの時は、兩人とも退座した筈であるから、多分此太夫が此場を語つたものと思ふと、名庭紋阿彌が園平から聞いたと咄して居た。作者は菅傳助、若竹笛躬とあれど、元來が大近松の、冥途飛脚（正德元年三月作）と、紀海音の傾城三度笠（正德三年十月の作）とを、燒直ほした物に過ぎぬとの事。攝津大掾が昔日から、此段を語るに、何時も評判惡るく、自分も種々苦心を累ねたが、終に生涯雲の霽れたやうな、晴やかな藝光を顯はさずに仕舞つたのである。夫はナゼであるかと云ふ事を庵主は研究した事がある。大掾の力で此段を振り廻し〳〵、聽衆をワア〳〵と云はせる程、前に受ける仕事を知らぬ譯はないのである。夫をアノ樣にヨタ〳〵と運び、ジミ〳〵と語つた譯は、一通りの苦心ではないのである。夫は故園平が彈いて居る時、大掾フット氣のさす事があつて、園平に聞いたら、園平曰く、

「私の體は、アンタに遣つて仕舞うて彈いて居升、夫は表(座元)からの注文もあり升サカイ、其氣で彈いて居升が、アンタが氣が付きなければ仕方がオマヘン、聞いて居る事丈けは云升がナ、私の聞いて居るのは、元來近松さんの作と云ふ物は、書キャはる時から、運びの腹加減に注文が有るとの事、夫を太夫が第一に呑込まん事には、運べまへン、前の封印切の段を、此太夫さんが、アレ丈けの「足」で一段を纏めて語りヤハリまして、息込みがチャンと極まつて居升のに、綱はんも、若はんも、座を出やはつたので、又此段を此太夫さんが語りやはつたと聞いて居升サカイ、前の段とのヲリ合が、チャンと出來て居なくては成らぬ筈、夫が大近松さんの注文の、腹の運び方が出來ての上と思ひ升、好し夫でなくても、ソーでなくてはならぬ事と思ひ升、此段では、忠兵衛も梅川も、已に死を決して出て來るので、云ふ事も爲る事も、其心から出る愚痴と、世迷言斗りだすぜ、淨曲中に是程陰氣な物は有まいと思ひ升、其腹を太夫が失はずに語ればこそ、三味線彈も、反對に夫が浮立やうに彈けるのダス、若し太夫さんの方に、陽氣に乘氣味に腹を持たれた時には、三味線の方は反對に「ウケ」一つでも、陰氣に〳〵より外彈やうがオマヘン、夫ではお互に藝に成まへんからと、心配は仕て居ましたが、夫ではお答の方が收まりますまいから、仕方

なしにアンタの語りなハル通りに彈いて居ましタンジヤ」

と云はれたので、大掾も一通りならず苦勞をして、研究を怠たらず、團平と幾度も彈合せ〳〵してトウ〳〵アノ位の程度の物に成つたとの事。之は大掾の直話であるが、庵主が聞いて居たのでは、其「息」の遣ひ方からして今も面白く覺えて居るのである。前方先の江戸堀吉兵衛の彈いた時、風斗此段にブッ付かつて聞いた時、非常に面白く聞へた事がある。元來江戸堀吉兵衛とは、懇意には仕て居たが、藝としては庵主は常に反對の意見を持つて居た。意氣組と間合の事では、色々押問答した事もあつたが、此新の口村では云得られぬ面白い感じを起した故、吉兵衛を宿に呼んで、羽織一枚の褒美を遣つて、

「師匠、今日の新の口は、お前絶世の出來であつた。新の口はア、彈かねば、新の口にならぬと思ふ」

と云つたら、

「旦那はん、氣味が惡ふオマスなア、併し越路さんが、ドウ云ふ物か、此新の口に限り、出る聲を出さずに、沈んで斗り語りやはり升サカイ、私是ではドモならんサカイと思ひまして、一番陽氣

に〳〵彈いて遣れと思ひまして、譜を押へたら、撥に氣を付けまして、好へ音斗りさして遣りました、ホシタラ越路さんが、五日目にか私を呼んで、江戸堀、今度の新の口は、エロー語り好なァ、只だモ一寸早よならぬやうに仕テンカと云つて譽めて喜こんで呉りやハリました、アンタに譽られたので、私も安心して彈き升」

と云つた。其吉兵衛の心持が、ドンと團平の申條に當つて、滿場に斯の如き漂いがあつたのであらう。庵主は今日まで、此時の面白さが忘却出來ぬのである。何樣音としては、日本一の江戸堀吉兵衛が、腕に任せて氣を〆めて、好い音をさせたので、芝居一杯になつたのである。夫を一杯に大撥が受け止めて、心一杯に陰氣に氣を〆めて、腹の中で運んだのであるから、溜らぬやうに面白く聞えたのであらうと思ふ。夫から後は一度もアレ程面白く、新の口を聞いた事がない。夫から此段の風に付いては、何樣語つた太夫が庵主に、ハッキリ分らぬので、庵主はドウしても、綱太夫の風のやうに聞えて仕方がない所に、各方面の議論が、此太夫と云ふ事が多數であるから、今何にも云ふ事が出來ぬ。只だ一二云ふ事は大撥の語つたのを、標準とするより外仕方がないのである。

先づ『爲めかや』と乘つて出る中に、『やァ、、、』と云ふ中、即ち「テ、、、ン」と云ふ中に、腹か

ら寒い氣で語る氣が付かねば、お客は皆逃げる物と思はねばならぬ。夫でゞめさへすれば、後はサツ〳〵と住けるのである。『今は冬枯れてす、き尾花』と同じ氣で運べるのである。夫から『跡や先き』が腹薄く恐氣で語る『アトオヤーアァ』『チン』と間を入れて「ハ」と掛聲で、『サキ』と「ツメル」、『雪風』が離れて、十分「眞ギン」に据はらねば、後が云はれぬのである。以下は其腹で研究すべしである。

（五十八）競伊勢物語　三段目切　有常物語の段

此外題は、初代土佐太夫、即ち播磨大掾と、初代鶴澤寛治が書下しを語つたと云ひ傳へられて居れども、此説は庵主には分らぬのである。安永四年未の八月に（大正十五年を距る百五十二年前）豐竹島太夫座に於て、島太夫と春太夫とが、一日代りに勤めたと聞いたが、此方はソーであるらしく思ふ。作者は一寸マダ調べが付かぬ。何でも興業師某と丸本には書いてはあるが、確實な事が分り次第更に書く事にする。庵主は、竹本大隅太夫が此段を語るのを、始めて聞いて、身に泌む程面白味を感じたが、其前明治二十七年三月の末に、大阪文樂座にて、竹本攝津太掾（二代目越路）と豐澤廣助とが演ずるのを聞いた時は、マダ聞く力も付かぬ時ではあつたが、其有常の品位と、琴歌の面白さと、母親の詞遣ひの面白さとは、今尙ほ忘るゝ事が出來ぬのである。

庵主は元來、此段は碌に稽古を仕て貰つた事も、語つた事もないけれども、此段の風格が好きで今でも無理に語れと云はるれば、兎や角辿る位は出來る積りで居る。夫れ位に此段が好で、研究し

たのである。又大掾、大隅の語るのを、聞いた時から、其中で覺へて居る事を、忘れぬ爲めに少し斗り書いて置くのである。

先づ要諦丈けを云へば

一、此段の枕は、豆四郎と、信夫との忠臣貞女が二人とも、死ぬ事を概括した文句故、極々浸み込むやうに陰氣に語る事。

二、母の詞遣ひは田舍詞の中に無邪氣、正直と云ふ一ツの品合を語る事、是が加減物にて、中々六ケ敷、此詞が語れねば外の人形の詞がサッパリ立たぬ事になる事。

三、信夫の詞遣ひは、往昔は「幽靈詞」にとまで云ひ傳へられた事もあつた由にて心に始終怖氣を持つて、絶望の中に、夫に對する愛情を失はぬやうに語る事。

四、有常の詞遣ひは品の有る中に、強い處があつて、「變り」に能く氣を付けてサラ〳〵と修業する事。

五、豆四郎は大抵、太夫の才覺で語つてよいとの事である。

大掾の語つた時に、『アレかゝさんあんな事云ふてじやわいな、サ、よいわいの』と云つた時は、見

物は皆顔見合せた事が、今に殘つて居る。其詞の盛り方は、口で云ふのでは、何べん云つても云へる物ではない。腹の中に此段を呑込み、信夫の一杯の心持にならねば、決して云はれぬ事である。

『ドウしてそなたの、さればいな』から、信夫の詞は、何等の怖氣もない、當然の事を仕て來たと云ふ、心持の詞遣ひの中に、恐ろしい氣合が聽衆に移らねばならぬのである。

『ア、有がたし〳〵』からの豆四郎の詞は時代に「變る」のである。

『云ふに云はれぬ身の科を、隱す心ぞいじらしゝ』と語る時は、此乙女心を思ひ遣つて、聽衆一般に、云ひ得られぬ、引締りが付かねばならぬ。

大隅が語る時、『ホ、今宵の中にお供して、此所を立退く所存』を締つた小聲で云つて、『がコレ、そなたは母に勘當受キや』と叫んだ、其腹組と聲は、當時聞いた人は誰人も心根に徹する程記憶して居るであろふと思ふ。

大掾が語る時、『振上は上ながら、心の内は神佛、赦してたべと心願祈願』と云つた時は、モウ目が血走つて居た。又

『ホ、ウ、不幸を盡し愛想を盡かされ、親子の緣を切らずんば、母への孝は立まじと、立出る紀

の有常』と云つた、其聲は常にない違ざかつたやうな聲であつた。

大掾も大隅も、『アイ』と返事はしながらも親と夫の愛別れ』と語る時は、庵主の耳には、慥かに浮瑠璃を離れて居たと聞へた。夫でこそ他の外題に、比較する物もない程、此琴歌が悲愴になつたのであると思ふ。

（五十九）戀娘昔八丈　鈴ヶ森の段

此外題は、安永四年未の九月九日（大正十五年を距る百五十二年前）江戸薩摩小平座、名代新太夫にて、操人形にて興行したとの事。作者は松貫四、吉田角丸との事。此場は所謂追出物にて役場と云ふ程の物では無いが、五行本に竹本此太夫、鶴澤仲助と書いたのもあれども、此等の風は全く一時限の事であつたとの事。又高名集などに豐竹百合太夫とあれども、此も書下しの時のまゝ格別風も殘つて居らぬとの事。夫が今日のやうに流行せしとは不思議な事である。一時は立派な眞打の太夫が、切に之れを語つた物である。今の朝太夫や松太郎も、之を得意として語つて居たのを聞いた事がある。何れ書下しの時には、格別でない太夫が語つて居た物に相違ないが、夫が斯くの如き勢ひで流行したとは、ドウ云ふ譯であらうか。庵主は之を古老に聞いた事があるから、人々の心得の爲め、參考に書いて置くのは、咄の消滅せぬ爲めである。

昔日竹本春太夫が、何か座方と折合の惡るい時に、門弟斗りを引連れて、大阪の北の明地に舞臺

を掛けて、人形芝居を語つて居た時があつた、其時江戸で弟子にした。道樂者の織太夫と云ふのが尻切絆纏一枚を着て手便つて來た。師匠春太夫は、其不身持を叱りは仕たが、仕方もないから、古着物の一枚も遣つて、遊ばせて置く譯にも行かぬから、今夜から俺の追出しでも語れと云つた。處が、其追出しは一日更りで初心な弟子共が、鈴ケ森を語つて居た。夫が此織太夫の役となつたのである。處が其晩語つた鈴ケ森と云ふのが、實に聽衆も樂屋も驚く斗りの妙音に、藝力の至極を盡したので、殆んど師匠を喰はん斗りの出來であつたとの事。夫から春太夫は織太夫を呼んで、何處で此鈴ケ森の稽古を仕たかと聞いたら、織太夫曰く、

「曾て江戸の文藏師匠が、觀音樣信仰である所から、淺草の境内で千人寄せと云ふ奉納を、野大で五日間せられました時、壁の通る奴の方がよいと云ふので、私を呼んで、彈いて遣るから語れと申されましたから、出し物を聞きましたら、江戸書下しの内が良いから、先づ鈴ケ森位が好からうと申されました。私は鈴ケ森は知りませぬと申しましたら、夫なら俺が朱を付かへて置いた、鈴ケ森がある、夫を敎へて遣るから稽古をしろと申されました、お稽古を願ふて五日間語りましたのでムり升」

と答へたので、春太夫は感心して、

「毎晩藝を麁末にせぬやう、大事に語れよ」

と云つたそうだが、夫から毎晩織太夫の鈴ケ森が大當りとなつて、大入で打上げたので、誰れも彼れも稽古を始めたとの事である。其次に春太夫が芝居に歸つて語る時に、先代萩の御殿を語る事になつた。處が、直に此織太夫に、竹の間の役を付けて稽古をして遣つたので、門弟一同は大不平を起したとの事。然るに初日が出ると、此織太夫の竹の間が、ズバ抜けて良かつたので、又大阪中の評判となつて、織太夫は師匠のお蔭で一人前の太夫に成つたとの事である。其後の咄も色々聞いた事もあるが、不同異説も多くて咄が間違つて居るかも知れぬから、是丈け位で省略するが、此等が修業の光明と云ふ物である。即ち其受持の太夫に因つて、語り活かされたと斷言して良いのである義太夫節千番の外題でも、古の名人太夫が、一生の中には、色々の書下しを、幾十段語り始めたか知れぬが、大概出來が惡るくて、其内で一番上出來の物、即ち風格の總てが今日の時代まで殘つて流行して居るのは、幾らも無いのである。庵主の考へでは、ザット三十段の流行物を引いて除けたら、跡は一寸ピラの利かぬ聽人を引付けるやうな物は少ないのである。其以外の外題で、今まで流

行せざりし物を、一人の太夫に依りて語り活かされて、流行するやうに成つた物が、一段でも有つたら、夫こそ藝道の上からは大變な事件で、金鵄勳章である。先づ此の繊太夫の鈴ケ森や、竹の間は勿論夫であるが、其他にもお柳子別の段の如き、巴太夫と云ふ立派な太夫が語つても、餘り流行せず、其後綱太夫が語つても、餘りドットせず、終に麓太夫が語つて、非常に流行出したとの事。又三勝半七酒屋の段も、綱太夫が語つても餘り流行せざりしを、靱太夫と云ふ人が語り出して、今日の如く流行する様に成つたとの事。又中將姫類の外題も、岡本文彌が語つても、宇治加賀掾が語つても、西の元祖筑後掾が語つても、東の元祖越前掾が語つても、後に綱太夫が增補して語つても格別世の中に流行せぬのに、最後の後進生竹本攝津大掾が語つたので、今日の如く流行して來たと云ふは、全く藝と云ふ物は、一種特別の努力に觸れると、觸れぬとに依る物と云ふことが分るのである。最終に全くの素人衆の、十山と云ふ人に語らせる積りで、攝津大掾の師匠龜之助が、手を付けて語らせた鰹腹を、大隅太夫が十山や大掾に稽古をして貰つて、これ丈け流行するやうに成つたと云ふのは、何れも語り活かす力丈けは持つて居たに相違ないのである。元來藝と云ふ物は、一杯と云ふのが原則である。故に小娘の藝は、一合桝であつても、藝の總てが一杯に成つて居れば、聽

衆は充満して、幾年の後にでも夫が殘る。假令攝津大掾や、大隅太夫は壹斗桝で有つても、八分の量りでは、其の時限りに消滅して、後年に殘らぬ故、小娘の一合桝の一杯の方が勝利を得る譯である。故に元祖以來の大家でも、語り下しが後に殘らずして、却つて百年後の太夫のペー〳〵に、其外題が語り活かされた物があつて、流行したとすれば、其ペーペイに藝道の勝負は慥かに負けたのである。故に此鈴ヶ森を語つた織太夫は、慥かに語り活かして、藝道の勝利を占めた人には相違ないのである。

今日まで庵主の拜聽した太夫衆は、一段でも語り活かした、外題が有るであらうか。アラユル外題の死骸は山を築く程、語り殺した物斗りでは有るまいか。左すれば今日まで取つた給金は、語り殺し賃である事になる。若し何か語り活かした物が有るのなら、ドウか其外題の名を聞かせて貰いたい物である。

（六十）桂川連理の柵　お半長右衛門　帯屋の段

此段は、安永五年申の十月十七日（大正十五年を距る百五十一年前）堀江市の側豐竹座にて、豐竹此太夫の役場であると聞く。

此人元は八重太夫、又時太夫とも云つて、岩田町とも錢屋佐吉とも云つた人であつて、元筑前掾の弟子で、新古淨瑠璃を興行して、後世に殘し、世話語りの上手達者で、時代物の方は師匠筑前掾の三の切を殘らず語つて居た人であるとのこと。夫から又壽連理の松お夏清十郎湊町の段を語る時が、時太夫より此太夫に、名前替をしたのじやとも聞いて居る。左すれば此帶屋の段は此太夫時代の時と思ふ。

扨て此段で決して取違へてならぬ事は、前段ではお絹が主手で長右衛門が脇で、後段に長右衛門が主手になるのである。後は主手連れ脇連れである。故に長吉義平で笑はす斗りが目的ではない。お絹で吃度泣かすまで情が積んで來ねばならぬ。長吉義平で笑つて、長右衛門がソワ〳〵する斗り

で、お絹でドッシリ聞人の魂に何等かの響きを與へねば、此段は語り甲斐の無い物である。庵主の聞いた帶屋は澤山あるが、一つも此太夫風の眞世話になつて居るのを聞いた事がない。庵主曾て力量はある或太夫のを聞いた事があるが、前受けも好し、面白くも聞へたが、總てが敲きの「間」であつた樣であり、眞世話の「足」には成つて居なかつた。夫で常に庵主が義太夫節は力量斗りでは語れぬ。風をシッカリ握らねば其物になれぬと云ふのは此事である。併し夫には力量が無ければ握れぬのである。庵主の聞いた中では大隅太夫程帶屋の面白いのを聞いた事がない。夫は前受けや情合は先づ別として、一節でも敲きの「間」では語らなかつた。故に庵主等の力ではドウしても敲かれなかつた。譬へば其力量太夫の方は『弱身を見せぬ親と子が跡に引そい出來合の蓙をかぶつた色事師打連れ勝手へ』と語り運ぶ内に『ヨワミオ、ミセヌオヤトコガ』と聞へた。大隅の方は『ヨワミオ、ミセヌ、オヤト、コガ』と聞へた。是丈けハッキリ違ふ。夫が此太夫風の眞世話の「間」と「足取」であると。夫を大隅はコキオロシ、ブチタ、いて修業させるのである。力量太夫の方は、藝力もあり、人氣も好し、又物の辨へも優秀ではあるが、帶屋の修業丈けは大隅より下である事間違ないのであるナゼなれば帶屋丈けは大隅程修業して居らぬ事が、チャンと語る事に現はれて居るからである。併

し其所に又妙所がある。大隅は好くても成功せぬ。其證據は實に結構な帶屋を誂つて居ても、生涯流離坎軻で道路に死んだ。一方は修業で負けても智恵と力量が有るから、屹度夫で成功するのである。即ち只だ其風が後世に殘るか殘らぬかゞ違ふのである。故に誰でも本氣に勉強して本式の風格を修業すると云ふ事に氣が付いたら、大隅以上、大掾以上に成る事は受合である。藝と云ふ物は、何處まで面白い物か限りが分らぬ。アノ天狗の大隅が斯う云つた事がある。

「アンタ私の帶屋を譽めて呉りやハッて有難うムい升が、夫は新町の師匠を譽めやはるやうな物じやと思ひ升。ナゼなればアンタの云ひなはる事が、私が師匠から云はれて、血の涙の出た處斗りを譽なはるさかい、私は譽られてフーと考へ込むのだす、夫からナ、アンタ二見の師匠の帶屋を聞きハツタ事が有升か、アノ方で帶屋の良え筈がないと思ひ升のに、帶屋丈は又格別に宜ふおますぜ、其腹構へと運び方は、全く別物で、私聞く中にも面白ふて付いて往かれぬやうでしたぜ、私も凝りましたには違いませんけれど、二見の親爺さんのは、又凝所が違つて居升ぜ、私は聞いた當分はハット案じ込ました」

と云つた。然し庵主は不幸にして大掾の帶屋を聞いたことはないが、この大隅の咄しで、大抵はそ

の寸法が分つたのである。庵主は常に思つて居る、凡そ藝と云ふものは、面白いといふ間はマダ駄目であつて、寧ろ空恐ろしく成らねば、所謂成つて居るとは云い難いのである。又大隅が『コレ長右衛門さん道理は道理ながらお前はキツウ濟ぬ顔』と云つた一言は、庵主終生忘るゝ事は出來ぬのである。アレが本當の世話である。世話大將の此太夫の風であると思つてさへ居れば間違はないと今も忘れぬのである。『コレ長右衛門さん』と云つて見ても、團平は幾十度云つて見ても目を潰つて開けて呉れぬ、ソコに妙味がある。舞臺の上の繁齋も義平も長吉もおとせ婆も、皆引込んで仕舞つた跡で『親の慈悲心身にこたへ差うつむいたる夫のそば云はんとすれど胸塞り暫し詞も出ざりしが』とチヤンと其切情の文句が書いてある。夫を語つた跡での、お絹が、夫婦差面ひになつて溢れ出んとする程の情合が込み上げて、『コレ長右衛門さん』と云ふ一言であるから、モウ一杯になつて口に言はれぬ心が、詞に出るのじやから、夫で之を何と語つたら宜いか、夫が藝の問題である。庵主が大隅のを聞いた時は『暫し詞も出ざりしが』『トン〳〵〳〵ジヤン』と〆めて、『コレ長右衛門さん』と云つた時は、前から仕込まれた技の爲めに、情が積んで居たから、頭がクラ〳〵とするやうな氣がした。一體此帶屋の段の山は、太夫として前後二つの『長右衛門さん』で聽人全體の頭をクラ

〳〵とさせる位の事を考へねば山になつて居らぬのである。一つはお絹の『長右衛門さん』で、一つはお半の『長右衛門さん』である。克く後先を考へたら修業と鍛練の結果でなければ、語れぬ物と云ふ事が分るのである。夫が分れば團平が眼を開けて稽古を仕て呉れるのである。其處が恐ろしい藝と云ふ所である。此下らない一場の戯作で鬼のやうな男でも、俺もアノ様な女二人に此の如き切情を以て圍まれたら、屹度死ぬであらうナア、と其境遇に同化して仕舞ふやうに成るのである。夫が藝力である。只節を付けて淨瑠璃を讀んで、何所にでも山斗りを付けて語る奴を素讀太夫と云ふのである。

（六十一）新板歌祭文　お染久松野崎村の段

此段は、安永九年子の九月（大正十五年を距る百四十七年前）竹本座にて、竹本組太夫の役場であつたと聞く。

此人は天性の惡聲であつたそうだが、野崎村丈けは實に古今無雙の上出來で、後世幾多の名人が出ても、此風丈けは、イジル藝力の者が無かつたとの事である。此人は惡聲の爲め總ての音の止まりが「二」を放した處にも、「一」を放した處にも落ず、只だ「三」を放した處に斗り落て、夫以下には下らなかつたとの事で、其惡い處を利用して、凝りに〳〵凝り拔いて、此一段を作り出したので、作者の近松半二は花飾の大傘を拵へて、組太夫の立看板を覆うたとの事である。組太夫一代の名譽は、今日まで、其音節が替らぬのである。

先づ『鐵漿の付けやう』の音の落處、『切つても切れぬ』の音の落處、『堤傳ひを漸々と』の音の落處其他澤山あるが、『私しやなんぼでも得切らぬ』の音の落處、『晴間は更になかりけり』の音の落處等

三味線の「トン、ジャン、ツン、テン」等に付かず、音の離れた處が云ひ得られぬ派手な「サワリ」になつて、遂に此段の風をなしたとの事である。故撮津大掾曰く、

「私は天保年中に生れましたが、同年代の者の記憶では、野崎村を當り前の風に語つて、成功した人は無いとの事、私は惡聲ではムりませぬが、難聲の爲め、松葉屋(故廣助)と相談致しまして、渡世の出來る丈けの野崎村には纏めて語つて居ましたが、其後團平さんに彈いて貰ひます時に、三四日も語りまして、團平さんが何とも申しませぬから、此語り方でドウであらうか、と尋ねましたら、團平さんが、ハア結構、誠に能く出來て居り升、私はアンタの師匠春さんを彈して貰ひまして、本當の組さんの風で語つて居られたが、中々苦心して骨を折られる割には、實入が薄かつた。私はアンタの語んなはる通りに彈いて居升が、アンタのは自分の力を知つて、力相應の商賣、渡世をして居なはると思つて居りました。夫が本當の纏まりの付いた藝で、私は夫をイジル力はありませぬ、此野崎村丈けは、夫で押し通しなはれ、と云はれました。此咄を聞いて、私ソーツと致しましたが、是程永年惡る塊りに、かたまつた物を、今急にドウすると云ふ力もムりませぬから、トウ〳〵夫て通しました。左すれば私も、不成功者の一人で、昔日、命掛けて苦心の

修養をしやはつた、組さんには、矢張り相濟まぬ藝人で終る事になりました。貴下は今の大隅が語る野崎をお聞になりましたか、アレが初めの枕に『跡に娘は氣もいそ〳〵』と語り出す處、ドス聲で汚ない音遣ひを致しまして「三上」の音から放した音を、ウネ〳〵と遣ひ分けて行升處、アレが師匠春太夫の語りました通りの惡化したのでムり升、アレを聞升度に、私は師匠の事を思ひ出しまして、苦心して居ましたが、私ではドウ遣つても師匠の眞似が出來ませぬから、程能く都合を致しまして、此位の處に語つて居升、夫を團平さんに尋ねれば、前申したやうに云はれ升から私も野崎村では、ハーア俺も折角太夫に生れて、トウ〳〵野崎村丈けは、當り前に語れずに終るのか、と度々歎息致しました」

と云つた。此攝津大掾の述懷を聞いた庵主も、亦身をソラス程驚いた。アレ程面白い大掾の野崎は大掾、松葉屋の製造物で、商賣渡世の爲めに、餘儀なく語る音節であつたかと思ひ、夫から根ほり葉ほり聞いて、ポツ〳〵と敎へて貰つたのが、前に云ふ通りの癖物である。故に庵主は野崎村に付いては、今の太夫の語るのを、善とも惡いとも批評する資格を有せぬのである。唯後學參考の爲に庵主が聞た丈けの事を書て置くのである。

（六十二）伊賀越道中双六　沼津里の段

此段は、近松半二、近松加作の作であると聞く。初演は天明三年卯の四月廿七日（大正十五年を距る百四十四年前）竹本座にて上場せしものと思ふが確實な證據は分らぬのである。中興の名人竹本染太夫の役場であるが、前の小揚げと云ふ處は、男德齋、即ち唉太夫が語つたのであるが、此人は名人である上に、チヤリに堪能な人であるから、語り方が、全く奥と違ふのである。元來が風格の違ふ人であるから、「間」と「足取」の捌きが、小氣味の好い程、極りが立派でなければならぬ。

十年斗り前に、大隅太夫が文樂で初役の時、此事を調べて中々研究して勉強して居たが、初日五日目に庵主が聽いた時は、マダ腹捌きが付いて居なかつた故、奥との照り合が面白くなかつた。十三日目に又聽いた時は、ビックリする程キハ立つて面白かつた。一すアノ位の沼津は聽く事が出來ないと思つたのである。是は故津太夫が大方受持つて、幾度も語つて評判を得て居たが、只滑憾な事には、前も奥もノベツであつた。流石大隅太夫の語り方は、前と奥とは腹捌きがアッと云ふ程違

ふて立派であつた。故攝津大掾も初役で語つたが、此時は庵主を相手に、大掾が自分の研究旁、去る明治庚戌の年の春より、数へ試みた色取りで語つたのである。

一例を擧れば、大掾は『ドウジャ爺父殿、痛みは癒らふがの』と云ふに『ハイ、ア、ホンニ痛みはトーント直りました』と云ふやうな息合に、三晝夜に數百度も云つて見たとの事である。アノ老功と、アノ力と、アノ年齢で、アノ勉強は、頭の中で唉太夫を描き、其藝風を辿る所の研究は、只だ仙化せん斗りである。大隅太夫も同じ此場で『孝行な娘が花手向、花の立方ハイ、御覽じやつて下さりませへ……』の一語を、平作が涙一杯の聲で笑はねばならぬので、夜通し遣つて居たら、トウ〳〵夜明前には自分が泣出したと云つて居た。殊に此段は、先師春太夫の語るのを抜ける程聽いて、何でも覺へて置かねばならぬと思ひ、其本を南區の寫本師に頼んで書いて貰つたら、一枚文久錢四文であるから、一冊三十錢餘であつた。内金十五錢を渡して後、長き年月後金が渡せぬのでトウ〳〵其家の前が通れぬ事になつた。或る時座摩の社内にて、其寫本師にバッタリ行會つたからピョコ〳〵頭を下げて詫言を云ふと、其寫本師が、

「春子はん、ソンナ心配には及びません、御前の勉強は尋常でないから、屹度エライ太夫さんに成

んなはるに違ひないから、御前さんがエロウなんなはつたら、其時御呉れやす、夫まで貸ときまサ」

と云はれた事を、其後スッカリ忘れて仕舞つて、今度此役を語る事になつて思ひ出したから、段々其寫本師の事を尋ねたら、モウ疾うに死んで、其息子が天王寺町で張物屋をして居るとの事じやから、朝早くに行き、菓子折を持つて、其家を尋ねて、金五十錢を包み、

「今度アンタのお父さんの書いて呉りやはつた本で語り升さかい、ドウしても之を取つて貰はねば語る譯に行きませぬ」

と云つたら、其息子夫婦が、涙を流して、

「親父の墓が直ソコでをますさかいに、一寸一緒に參つておくれやす」

と云はれて、大隅は大喜びで墓參りをして、好い氣持になつた、其本が即ち此本であり升、と云つて見せた。大隅太夫と云ふ男は、不斷の事のズボラな事と云つたら比類ない位であるが、藝道の事になると、此通りの事が澤山あるのである。太夫が一段の淨曲に對する、苦心研鑽は、大抵コンナ物である。此を今時の太夫は、碌に稽古もせずに、自分の智慧才覺斗りで、好加減に語り廻して暮

して居る。其了簡は實に憎みても餘りある事である。

奥の『お米は獨り』からが、染太夫場であるが、秋の夜のメリ込むやうに、淋しき貧家の暗闇に、一人の節婦が眠りもやらず、夫の爲めに、恐ろしき決心をする境涯を語り出す、太夫の腹構へこそ眞の涅槃經である。お米の「サワリ」が、尤も染太夫風の漂ふ處である。『一たん本腹』の「カ、リ」の節は腹で語る。『此頃は』は付かずに、『色々介抱盡せ共』は「ウレイ」で浮いて語る。『此近所で御養生』も浮いて語る。『其貢に』も同じく。『先程のお噺しには』も同じく。『金銀づくでは無いとの噂』の『金銀盡く』は上離れに、『無いとのヲ――オオ、オ、ウワサ』と足を極めて息を持つて語らねば、「テン」と彈けぬ。夫が眞西風、四ツ間の拵へである。詰まり平作の追掛けまでが、本當の三段目、太夫のクセ風格を辿る難物である。夫から『實に人心樣々に』からは、本當に端場、落合から修業仕上げた太夫でなければ、決して語りも、眞似も出來る譯のものでないとの事である。皆グズ〳〵デコ〳〵と、下手の講釋を聽くやうである。其サラ〳〵と藝位高き所に、無限の人情の漂ふやうに語り捨てる意味は、今時の餅搗太夫では齒も立たぬ仕事である。何を措いても性根を入れて修業が第一である。修業のない物は、藝術とも美術とも名は付けられぬのである。

（六十三）伊賀越道中双六　八ツ目屋　岡崎雪降の段

此段は、天明三年卯の四月（大正十五年を距る百四十四年前）竹本座にて上場し、作者は近松半二、近松加作である。役場は竹本住太夫であると思ふ。伊賀越中の八ケ間敷物である。

此住吉屋文蔵（國根住太夫）と云ふ人が、一生の中には江戸へ來て、志渡寺も語つた、長局も語つた。又竹本座にては、島太夫の語つた二十四孝の三段目も語つて、評判噴々たる物であつたが、此竹本座には、岡崎の段程ズバ抜けて豪かつた物は有まいとの事である。大隅太夫も芝居で四度斗り語り。組太夫のも一度は聞いたが、其外に、故綾瀬太夫が抜ける程稽古をして、東京で語つて居る時も、庵主は誠に贅澤な稽古をした物じやと、感心して聞いて居たが、其時の絃は多く豐吉や、團八が彈いて居た。二人とも天稟の藝の良い人ではあつたが、一方太夫の方は、何樣藝が極つて居る一方絃の方は、藝は良くても極つて居らぬから、紙六七枚語る中には、詰まり引摺らるゝ譯になつて居た。其後に大隅太夫が語るのを聞いた、是も良くアレ丈け藝の極りが付いた物であると思つて

聞いて居た。近來又三代目越路太夫が語つたのも、又度々聞いたが、前の三者は岡崎の稽古から、太夫が生れ出て居るから、其藝が畏ろしかつたが、越路太夫の方は、越路太夫の藝力から、岡崎が生れ出て居るから、良くは語つて居たが、稽古が手薄いから、畏ろしくはなかつた。先代越路太夫も六十歳から本當に凝つたから此三代目も是から此岡崎に凝るか凝らぬかゞ、一つの問題である。斯様に歷代の藝人が、丹精を凝らす品物故、生半可な天狗様の、齒の立つ物ではないのである。

○『既に其夜も、しん〳〵と』、此『しん〳〵』と言つて仕舞つて、音の遣へる人が滅多にない。

○『遠山寺に告渡る』、是までの腹と音遣ひで、八ツ目の位がチヤンと定まつて、聽衆が耳を澄まさずやうにならねば、此段は成功六ケ敷のである。

○夫から『早九ツのかねてより』からの「乘變り」が其位にならねば出來ぬ。

○捕手の間の「ノリ」止まりと「足」の伸縮は、天下大隅太夫の右に出る者はあるまいと思ふ。

○幸兵衛の息込み。捕手の小頭と應對の詞と政右衛門と應對の詞との「變り」は中々六ケ敷い。

○世に師弟の情を語るに是程六ケ敷い段は有まいと思ふ。

又大隅が、

○幸兵衛が出て往つた後で、婆さんが『戻らしやるまで寝られもすまい』の獨り言の六ケ敷さと云ふたら、私は一生に一度も其心持に語れませなんだ、と云つて居た。

○又お谷の出の「ウキタヽキ」の節と足取を、或る大家の太夫が、憂と泣との腹を持つて語つて居るのを聞いて、滿場の見物が感心して居たが、是は岡崎を語る事を知らぬ太夫である。此所は寒いと云ふ心持と、靜かと云ふ心持と二つに腹を〆めて、八九月の大暑の時に語つても、滿場が冬の寒夜に居る如き心地になるやうに語らねばならぬ。憂を持のは、ナヲス處からである。岡崎の宿より先きに日が暮れて、此所が峠であることは、昔からの極まりである。

○大隅太夫は火の番が、『つぶやぎ歸る』と云ふ音遣ひで、毎日ワーッと聽衆に感嘆させて居つた事を忘れぬのである。

○夫から『癪と寒氣にとぢられて』と云ふ處は、毎日大隅太夫と云ふ人間は居らぬやうで、浮瑠璃斗りが滿場に漂ふやうになつて居た。

○夫から幸兵衛が歸つて、門口で政右衛門との應對の處が、此段の打止めに六ケ敷處である。幸兵衛が家に這入つてからは、普通の義太夫節になるので、氣を付けて語りさへすれば好いのであ

る。夫を此邊から一層モタレ込んで語る太夫があつたが、夫は沙汰の限りである。

最後に肝要な事を一つ云つて置く。多くの太夫が此國根風、即ち初代住太夫風と云ふ物を知らずに、住太夫風は豪らい〳〵と天狗を云つて居る丈けで、其風を知らぬから、藝が總て油賣に成つてタラ〳〵と長く斗りなつて仕舞ふのである。庵主は之を攝津大掾と大隅太夫との兩人より同じ樣に聞いた。曰く、

「國根風と云ふ物は、安永の中頃より一般の藝風が違つたと云はるゝのは、此人の仮名詰、間詰の名人であつたからの事である。總て太夫が此風を忘れたならば、何物も語れませぬ。夫が古淨瑠璃の回復である。即ち仮名詰めとは紲を捨てゝ云つて仕舞う事である。夫が力なければ出來ぬ事である。『アート、見送りて襖の蔭』『硯の海のそこはかと』『既に其夜もしん〳〵と』『雨に連れ風に連れ』『師匠の賴に』『アート、見送りて菅の谷が』又「カヽリ」でも『トヾカイデ——エエ何とせふ』と云ふが如く、サラ〳〵と云つて仕舞う事である。此風は決して忘れてなりませぬ」

との教訓であつた。先づ此段に就いては大觀コンナ物である。

（六十四）加賀見山舊錦繪　七ツ目切　長局の段

此外題には、天明二年寅の正月（大正十五年を距る百四十五年前）江戸新太夫座に上場し。作者は容揚黛と聞く。役場は住太夫とのことである。

豫ても云ふ通り、此義太夫節にて七ツ目と云ふのは、筆にも口にも盡し難い、六ケ敷所のある物としてある。忠臣講釋七ツ目、鐘太夫場。白石噺の七ツ目、紋太夫場。忠臣藏の茶屋場、筑前掾、政太夫場の如き、皆其藝力ある位地にならねば、語られぬ事にしてある。殊に此加賀七は、住太夫が一代の當り藝で、後世藝人の研鑽は、火水を熟するに至つたのである。彼二代目越路太夫の、名前替の出世藝も此段であり、三代目越路太夫の名前替も、此段であつたとの事。殊に大隅太夫が團平の稽古で、此段に苦勞した事は、今更筆紙の能く盡す所ではない。

『アート「ツン」見送りーイテ、フスーマノカゲ』此文章を云つて仕舞つて、夫が曲節になる。即ち是が住太夫節と云ふとの事。即ち江戸淨瑠璃の先代萩御殿の切の『アート「ツン」見送りーイテ、政

岡カア――アガ』即ち住太夫節で、三代目若太夫、即ち幾竹屋庄藏と云ふ人が語つたとの事である又住太夫の役場で、江戸淨瑠璃の志渡寺の段でも『アーアト「ツン」見送り――イテ、菅アーノヤアが』夫を皆三味線彈と、下手太夫が、名々各々に後世勝手に替へて、彈いたり語つたりしたのじやと聞いたのである。四五年前も文樂で、或る太夫が、此段を語つて居る時、死んだ廣助が、庵主の宿に來て、

「旦那はん、アンタ文樂には一寸とも來やはりませぬが、一ペン來て見なはれ、エロー面白ふござりますぜ、長局が聞物だす、『テも恐ろしいたくみ事』と云うてますぜ」

と云ふから、其氣になつて聞きに行つたら、前年より總て背景が綺麗で、人形斗りがホタへて、舞臺がガサ〳〵して、久し振りで見たせいか、何所にも力の入らぬ心地がした。夫から長局の語る太夫が出たら、總て活動寫眞の辯士程も力が入らぬ。成程『テも恐ろしいたくみ事』と、只だ云つて居た。廣助は庵主の側らにあつて、目に涙を浮べて、

「新町の師匠が、大隅さんを稽古して居やはるのを、毎日聞いて居ましたが、大隅さんが『テも恐ろしいたくみ事』と幾度云やはつても、何を云うてるのじや、と云つて、中々通しやはりませぬ

私は大隅さんが可愛想になりましてナア」

とガヤ〳〵と云つたので、隣棧敷の見物から咎められて、廣助は腹を立てゝ歸つて仕舞つた。庵主は彼に誘ひ出されて、置いてキ放を喰はされて、其活辯よりも悪るい、長局を、トウ〳〵仕舞ひまで聞かされた事がある。物價は騰貴し、義太夫節は下落して、住太夫節などは、其風の昔語りも出來ぬ事となつたのである。

『ヌウキイア、シ……サアシイア、シイ……トイキーイツーウキ…』是に云ひ知れぬ息があつて、『…テも恐ろしいたくみ事』となればこそ、修業の問題にも成るのである。夫が甘く行くか、不味く行くかは、其人の器用不器用であるが、修業に因つて其心持が浮き出るのである。夫で此お初の詞遣ひが、心持から出て來る故、一大事の悪事を聞いた獨り言になつて來るのである。夫に活辯太夫は、今一人外に咄し相手が居つて、咄しをして居るやうに聞へるのである。夫で廣助が憤るのである。夫が分らねば、七ツ目は語られぬと斷言出來るのである。

夫から尾上の廊下下りは、全く氣をかへて、品よく語る。夫を見たお初は、素々岩藤の悪事を立聞して居るから、下女詞の切々に、主人尾上の顔を見詰めるやうな息遣ひが、此段の型と聞いて居

る。又尾上の詞遣ひは顔を人に見られぬやうに〳〵とするやうな心持で語るとの事である。又書置を書く間は、決して泣いてはイカヌ、只だ殘念々々と云ふ息と、泣く息とが間違はぬやうに語るとの事。お初が『家國を失ひ』から『御家中散り〳〵』の邊から『たつた一人の不了簡で千萬人の身にかゝる』と云ふ邊りは、サムライ詞の氣で語るとの事。又尾上の上品も、お初が出て行つて、ガラリと變り、此迄町人の娘々と云はれて居たのが、是で顯はれて、『身も浮く斗り』から『此中のお文にも』以下總て町人の娘になるとの事。又『ア、我ながら未練なり』から、元の尾上になるとの事。お初の驅け込みは、總て太夫も三味線彈も、マクレル事に極つて居る。夫は屹度人間の足取の間でなければ藝が大きくならぬ。大きくならねば、見物が引付けられぬ。昔日の古靱太夫は、自分の兩の手で膝を叩いて間を拵へて驅け込みを語つた事もあると聞いて居る。此所のお初も滅多に泣いてはイカヌ、『すきを見合せ岩藤を』、『御恩を送り申さんと』の邊は皆チャンと武士詞になるとの事『夜も早や』から落付いて最も大きく運んで、總て世間を憚かる心持で、夫が大きく聞ゆるやうにと云ふ加減が、中々注意を要するとの事である。

（六十五）伽羅先代萩　六ツ目切　政岡忠義の段

此段は、天明五年巳の八月（大正十五年を距る百四十二年前）江戸結城座に上場し、役場は三代目若太夫、即ち幾竹屋庄蔵と云へる人が、好評を得たる段であるとの事。作者は松貫四、高橋武兵衛、吉田角丸等が作した物で、全體は劇として上作の部に數へられると云ふ評判である。

此段は矢張東風に手が付いて居る。庵主は故後藤象次郎伯の高輪邸にて、大隅太夫が語り、鶴澤寛三郎が彈いたのを、始めて聞いたのである。元來がアノ大隅の聲柄で、此子役澤山で高き音遣ひのある物を語るのが無理であると、聞人の人々、即ち五代目菊五郎や、富貴樓のお倉や、庵主抔は伯がコンナ物を語らせるのは、注文が悪いと、ザワザワ云つて居たが、大隅は平氣で裏店の子供の喧嘩か、ムク犬が二疋で噛み合ふやうな、小役を語つて、丸で鶴喜代と千松は、乞食の子のやうな品合であつたので、聞人も大分迷惑のやうであつたが、『お末が業を信樂や』と飯焚の處となつて來たら、其音遣ひと、情合のカラミの面白くなつて來た事と云つたら、一同水を打つたやうになつて

來て、雀の歌の邊になつた時は、聲が良いやら悪いやらも分らず、滿場情合で引付けられて、政岡の泣笑ひとなつたら、一人も泣かぬ者はない事になつて來た。

夫から榮御前の出に成つて來たら、息と運びが切り放れて良いので、飽迄筋を知つて居る人々でありながら、此先き何となるであらうかと、目を見張つて心配するやうに成つて來た。夫は何でコウ成つて來たかと云へば、『梶原樣の奥方御入なり――』と云つた後で、大隅が何とも云ひ得られぬ息合で、『コレ千松、常々母が云ひし事、必ず〳〵忘れまいぞや…サ早ふ、〳〵』と追遣つて』との云ひ方が、何とも云へぬ情合が籠つて、此一言が、親子一生の訣別ともなり、又萬一の場合死ねよとの大覺悟を千松に云ひ渡した事ともなり、又自分も、此榮御前の入來は並大抵の事では收まりは付かぬ、此處が五十四郡の興廢存亡を分つ時である、との大覺悟を付けた時の一言である事にもなる、と云ふ深い〳〵情合を罩て千松に云ひ聞かせた一刹那である。夫程の情が、『コレ千松、常々母が云ひし事、必ず〳〵忘れまいぞや…サ早ふ、〳〵』の一句に漂ひ罩る。夫には前からの仕込もあつて、無心の聞人に夫がハッキリと明白に此丈け分つたので、榮御前が出て來てから、一同心配が始まつたのである。庵主は素より三味線を彈いて居る鶴澤寛三郎でも、一同の人々でも、コンナ先代

萩の御殿を聞いた事がない。此段に感服するには、外に名人も澤山あらうが、『必ず〳〵忘れまいぞや』の一言にて、此處に至るまでの修業をせねばならぬとなつたら、誰れも先代の御殿を稽古する人はあるまいと思ふ。夫から大隅が語る政岡のクドキ、『誠に國の礎ぞや』以下は、丸で咄しのやうで、何時も人々の面白がる處は全部ないので、只々顔も上げ得ず泣く計りであつた。大隅が語つて仕舞ふまで、脇息に凭つて、息を詰めて聞いて居た後藤伯は、ヤット。

「御苦勞であつた」

と挨拶をせられて、漸く一同を顧みて、

「ドウジヤ判つたか、此を聞くと、五人も十人も顔を塗つて、騒ぎ廻る芝居は馬鹿な物じやネー」

と云はれた。此時まで五代目菊五郎は、永く沈默して聞いて居たが、ヤット頭を上げて、庵主に向つて、

「旦那。此大隅さんの息込みで、政岡を仕ましたら、素顔で袴を着けてしても、屹度見物は泣き升ぜ、併し今の役者には此丈けの藝人は居りませぬ、若し居ても、アノ息込で廣い舞臺を懐に入れて出ましたら、役者なら長生が出來ませぬ、キット早死して仕舞ひ升」

と云つた。庵主は又此菊五郎の咄しに一入感服した。藝人の見所には責任がある。唯では決して聞いては居らぬ事が判つた。

斯様な譯にて藝と云ふ物は、天然の聲などの問題ではなく、修業と、心掛けと、腹構へ計りである事がハッキリと判るのである。夫から此大隅の御殿に、頭を刺戟せられて、此を無上の御殿として仕舞つたのであるから、其後ドレを聞いても徹底がなく、皆全部雀が小歌を謡つて居るやうな氣がして來たのである。故に此御殿の段を聞くのには、中々聞方に庵主等も困難したのである。夫から有名な彼の攝津大掾の御殿を聞いたのは、其數年の後であつた。突然又高輪の後藤伯邸から呼びに來たから往て見たら、攝津大掾（其時の越路太夫）の御殿が始まるとの事で、庵主は不思議な事じやと思つて居たら、驚て御殿が始まつた。庵主は之を聞いて、斯く感じた。丸で大隅の御殿と品物が違ふ。其語り方も節も音遣ひも、兩人全く同樣ではあるが、大掾の始めよりの努力は、大隅と丸で違ひである。夫は品格である。大掾の御殿で始めて、五十四郡の國主の江戸屋敷は斯くも有らうかと思つた。其品位の中に、色々の事件と情合が滿たされて居たのである。始め大掾が語り出す時はアーア好い聲である、名音であるナァーと思つたが、後には聲が好いやら惡いやら、又夫も判らぬ

事になつて仕舞つた。只だサラ〳〵と語つて、其泣方なども大隅のやうに穢なくなかつた、夫が又一層深酷味を加へたやうであつた。要約して之を批評すれば、大隅の御殿は只の普通の家庭の中の事件であつて、大撥の方は本當の仙臺の御殿であつたと云ひ得るのである。後藤伯も後で斯ふ云はれた。

「杉山君、矢張り師匠は師匠丈違ふネー、大隅の方は騒々しかつたネー、此方は塵も動かぬ程靜かな御殿の中の劇であつたネー、只だ三味線がジヤガ〳〵云つて何だか邪魔になつたネー」

と頻りに吉兵衛の三味線を排斥せられたが、庵主は吉兵衛最贔であるから默しては居たが、吉兵衛は良き音を亂用して、情と「間」と「ノリ」を彈かぬから、斯く云はれるのである。後藤伯も矢張り大分の聞人であると思つた。其後大隅に逢つて此咄しを仕たら、彼曰く、

「二見の師匠も私も、清水町(園平)でウンと遣られた仲間でムり升さかい、云ふ事には違ひはオマヘンと思ひ升が、アノ方のは品物に襤褸がオマヘン、値打相場が違ひ升、アノ方はアレで仰山お金を儲けハリました、私はマダ一文もアレで金を儲けませぬ、夫丈け違ひ升」

と云つた。其後後藤伯は大撥に十種香を語らせ、大隅に又十種香を注文したら、大隅は斷はりを云

つて、志渡寺か、狭間合戦の官兵衛砦かをと覆んだので、大隅は夫を語る事になつて居たが、後藤伯の事故の爲めに中止になつたのである。

扨先代の御殿と云ふ物は、大略コンナ物であるから、之を語るには節付け以外に、澤山の注意と心掛けが入るのである。先づ枕の『跡見送りて政岡が』と語り出すにも、大掾が後年聾になつてからは、只だサラ〳〵と云つて居たが、若い間は『アー……ト「ツン」見送り――て』と音で語つて居た。即ち長局の出と同じ事であつた。夫は志渡寺の『跡見送りて菅の谷が』と同じ事である。此を住太夫節と云ふとの事である。夫から『誰に問ふべきやもなく』此を皆「スヘテ」と思つて語つて居るやうであるが、此は「フシハル」であるとの事。此幾竹屋庄蔵と云ふ人は「ハルフシ」の名人で、七通にも語り分たとの事である。其「フシハル、カ、リ」を音を遣つて語つたと云ふまでゝある。其證據は只の「フシハル」で語つて見ると、却て都合が好い位である。夫から『モウ何云ふても大事ないかや』と、鶴喜代君が云つた後『ハイ』と云つた後……』と息があつて、『外に……誰も居りませず』と云ふ、此加減が全段を通じて皆此詞遣ひが六ケ敷心持である。總て節や、足取や、音遣ひは、師匠に習へば判る。『ドリヤ「トン」拵ふとかい立つて』から此心持である。總て茶の湯の道具で間に合せに御飯を

焚くのである、皆其積りで節付けが出來て居るから考へねばならぬ。「チン」『取り出す』と云ふ「ギン」の「ウクォクリ」が滿足に語れる人が少ない、夫から飯焚になつて『イツ水。さしを』と水さしが成丈け切れぬやうに語る事、夫は炊ぎ桶も同じ事で、『かし。ぎ。桶』と二ツも三ツも切れたがる、夫がいかぬ、成丈音て持つ事。以下此に同じである。夫から皆『力なく〳〵』と云つて仕舞ふが、アレは『チカラ、ナ、ク、ナ——ク』と泣いて「ヒロウ」こと。夫から又『梶原様の奥方御入』から、ハツト氣を變へて語る事。夫から八汐が千松に突込んでから『此でも……カアー』とエグッたら、千松が『ア……』と泣き、又『此でも……カアー』とエグッタラ又『ア……』と泣く、又『コ、、、コ、此でもカアーと、なぶり殺しに千松が苦しむ聲の』と語るべきだと、三樂と云ふ人が『古咄集』に書殘して居る。夫から『トハ云ふ物の可愛やなア』からは、口說であるから、成丈け口說に語つて、謳はぬやうに心掛ける事。先づ大略コンナ注意が此段に必要である。

（六十六）碁太平記白石噺　七ツ目切　新吉原揚屋の段

此外題は、天明五巳の年の頃、月日は判らぬが（大正十五年を距る凡百四十二年前）江戸の結城座に上演した筈である。作者は紀上太郎と云つて、何でも今の三井家の祖先に當る人が、すこぶる風流な人で、常に多くの藝人を呼集めて淨瑠璃の創作に、浮身を窶して居たとの事であるから其人らしいのである。糸櫻本町育の如き、志賀の敵討の如きも、皆此三井旦那の匿名紀上太郎の作らしいのである。

丁度其頃江戸に下つて居た竹本紋太夫に、五ツ目と此七ツ目を、節付けさせたとの事である。故に此揚屋の段の役場は紋太夫と思はねばならぬのである。此紋太夫と云ふ人は、三代目で前名倉太夫と云つたそうで、本名此村屋治兵衛と云つては、上方でも江戸でも、評判の名人で、斯道の物識と云はれた人の由である。元來此紋太夫と云ふ名の初代は、二代目義太夫、即ち播磨掾の門弟であつて、薄雪の清水の段や、橋供養の二の切や、二ツ蝶々の米屋の段等を語り、終には竹本上總掾と

任官して、布引の二段目切三人上戸の場を語り、講座にて藝往生をしたと云ふ名高い人との事である。二代目は當時名人輩出の折柄とて、二段目の切までは、役が付かなかつたらしいが、物識としては、中々名高い人であつたとの事。夫から三代目紋太夫は此倉太夫であつて、餘り三人とも藝が豪らかつた爲め、其以後此名跡を繼ぐ者がなかつたとの事である。此人の風を、故攝津大掾が咄しをして居た事があつた。

「私はマダ物の解らぬ時に、三代目吉兵衛さんから、紋さんの咄しを聞きました事がムりました、初代政はんの風を呑み込んで、情語りの風を開いた人は、此人じやと云うて居られました。又後年に至り、團平さんは、紋さんの風は總ての藝が抜ける程呑込むと云ふのが本であるから、人情が自在に語られるのである、と云うて居られました。成程揚屋の段も、私は度々役は付きますがしのぶの詞など、十分に鍛練して呑込まぬ事には、アノ詞を云つても情が浮く事にはなりませぬ又宗六の詞でも鍛練に〳〵をして、總てを呑込まねば、此役の腹が浮いて來ませぬ」

と云つて居た。庵主の聞く所によれば、此宗六は、千葉三郎兵衛とかを當込んで作者が書いたのであるから、其心で詞を考へねばならぬと。元來修業も鍛練も、此詞が大事の眼目である。曾て三代

目越路太夫が、庵主に咄しをして居た。

「私は師匠が急に病氣になられまして、白石の揚屋の代り役を致した事がムります、三味線が松葉屋（豊澤廣助）さんでムりました。何樣直ぐに飛んで出て語りましたから、演了てから、松葉屋の師匠が風呂に這入つて居られましたから、其所へ行きまして、板張りに手を付いて、師匠の病氣が如何かと思ひますから、明日からドウかお稽古を願ひたうムりますと云ひますと、松葉屋さんが何をへ、と云はれますから、ヘイ「白石」をと申しますと、松葉屋さんが、顔を手拭で摺つて居られましたが、一寸止めて、考へて居られましたが、鏡で私の顔を振り向いて、ア、マア、イ、今日位の所で、ドウにでも遣つとき……、稽古したかて……味好ふ遣らりやへん……お前等では一生遣られぬかも知りやアへん、と云ふて稽古をして呉れやはりまへんので、心の中で甚だ殘念に思ひまして、其儘に語つては仕舞ひましたが、程經まして、二見の師匠の機嫌のよい時、松葉屋はんの云やはつた事を咄しをしましたら、師匠が、ア、アノ氣むづかしい人じやさかい、そない云ふたのじや、其松葉屋に云はれた事を、マア悲しむ事を後にして、よく思案をせぬ事には、藝の事は解らぬぞへ、元々斯の道で七ツ目と云ふ物は、其位の藝にならねば、口で

教へたからて解らやへん、講釋の七ッ目、加賀見山の七ッ目、忠臣藏の七ッ目、皆自分の力で思案せねば、解らぬ物である。聞いた位、教はつた位では解らぬ物と思ひなはれ。と云はれて、ビックリ致しました。其後私が或るお茶屋で、素人さんに此揚屋を稽古して居ましたら、奥に大隅さんが來て居られまして、後で挨拶に參りましたら、大隅さんが小聲で、貴田はん、揚屋のお稽古の仕方が遣ふぜ、アレでは情は丸で語れて居らぬ、私は新町の師匠に『ヲ、姉さアでムるかいノウ』と云ふ所を、コレ大隅、お前は遠國から、年の行かぬ田舍娘が江戸へ來て、散々恐い思ひをして、氣も魂いもワナ〳〵して居る所に、圖らず實の姉と解つた時、嬉しいか悲しいか、其娘心が解つて語つて居るのか、『ヲ、姉さアでムるかいのウ』何と云ふ情けない詞遣ひじや、私は、そんなお前が了簡なら、稽古にでも、お前の語るのを聞くのはいやじや。と云はれた時は、ゴッンと鼈甲が石に當つたやうに、今日まで思案斗りして、揚屋はヨウ語る氣にならぬのじや、此七ツ目は總て思案をして〳〵仕拔いて、第一に腹が合點して、サラ〳〵するまでにならぬ事には、情が浮いて來ぬと思ふ。と云はれました、私は大隅さんとは藝の風も元から違ひますので、云やはる事を餘り氣にも止めずに居ましたが、此時斗りは又揚屋でビックリ致しました」

と云うて居た。斯る組立で出來て居る物らしいから、本當に七ツ目を修業するなら、先づ其腹構へが肝要であると思ふのである。

始めの彈出しが、日本無双の面白き心持で彈く撥捌きで、「ツン〳〵〳〵ツン」と「ノリ」て彈く、『入相の』とフリ切る力が六ケ敷加減物で、入相でも陰氣にならぬやうに、「シアン」『鐘さへ早く』と出來る丈け陽氣な入相に語る事。夫から『暮れ果てゝ』が何時も「一」の音に落る、夫がイカヌそうである、「ニジッタ、ギン」に落ちるとの事。『靡の』と云ふ「ウクォクリ」も「中ギン」の心であるとの事。『萬燈會』で始めて「一」に据るのであるそうな。『歌舞の菩薩』は時代に語るとの事。「わけて全盛」から世話になるそうじや。『客嗜』は『キャク——ウウ』と云つて「ウワサ」を別に云はねば『キャク——ワサ』になるとの事。信夫の詞もよく氣を付けて『ヲヤ〳〵〳〵、ヲンジロサアタチ、人が』と云ふ『ヒと』は、『フと』と云ふ積りて、『ネソベッテ居る』と云ふ中に『ネソベッテール』と云ふ積りで、『キトウラへ』と云ふ中に『キトウレへ』と云ふ積りで、『ニカイ』を『ニケ——』と云ふ積りで、『プチアゲテ』を『ブッチャゲテ』と「ノン」て「ッメテ」云ふ積りで、『コリヤマア、ナンタル』を『アン』と云ふ積りで、『ドコモカモヒカリ』を『フカリ』と云ふ積りで、『クシサア』を『クッサア』と「ツメ」る

積りで、『ヒッカカッテ』を『フッカカッテ』と云ふ積りで、『ヲ、、ヤサ――シナ』と『サ』を引く事、『メコワラジ』を『ワラズ』と云ふ積りで、『タズネテ』を『タンネテ』と云ふ積りで、『ヲラダケ、ヒトリ』を『ウラダケ、フトリ』と云ふ積りでとの事。マダ書けば澤山あるが、此等は寛政六年頃の「奥州言葉の色草」と云ふ本によつて、調べ上げたとの事である。

夫から奥になつて、『その五月雨の暗き夜に』と云ふ文句が大性根の處にて、此音が煮へ込むやうに据らねば、奥にならぬとの事。「ツン」と聞いて直ぐに『敵を討つたる』と云つたら、宗六にならぬとの事。「息」があつて、眼色をかへて云ふとの事。夫から『舞うて飲むやら唱ふやら』の「カワリ」は藝の氣で腹から「カワル」事。『意見上手の親方が』と云つたら「こもる」と「間」で云つて、「ウレイ」で『ナアサアケ――ニイ』と「ヘタッ」て情を持つて『宮ヤーア城野が』とやさしく『妹を』『チンテン』『部屋に、奥座敷イ――イ』と切るのであるとの事である。

（六十七）蝶花形名歌の島臺　八ッ目切　小阪部兵部館の段

此外題は、寛政五年丑の七月（大正十五年を距る百三十四年前）作者は若竹笛躬、中村漁眼が、彼の柴田勝家が辭世に『夏の夜のゆめ路儚なき後の名を雲井にあげよ山時鳥』とありしを、本として作した物で、役場は豐竹麓太夫と聞く。

此作は至極窮した筋ではあるが、節付けが眞東風になつて居て、手順がスラ〳〵と出來て居るから、世に廢たらず流行するのである。餘程手垂れの人の付けた音譜と見ゆる。大抵コンナ物は臭い甘つたるい手で練上げてあるが、此丈けは夫がソーならぬのである。全く「受け」の間に力があるからである。故に總ての「受け」を彈丈けの力量に備への付いた、修業をした人でなければ、中々彈けぬのである。元より小阪部音近は、長會我部元親の事であるが、夫にしても孫と〳〵に斬合はさせる趣向などは、只だ珍を競ふ丈けで、物に成つてをらぬ作である。夫れと同じく、由良之助生立の段の如きは、嘔吐すべき物である。又宗貞が妻眞弓に渡した扇面の詩を、父音近が誦むのに、昔よ

り『秋來月を見て歸思多し、自から籠を開いて白鷴を放つ』と大きな聲をして太夫が語るが、是丈けは全國中改めて貰はねば、馬鹿々敷くて聞いて居られぬのである。元來此詩は支那の陶淵明が、故郷を思ふの情を、他の人が作つた詩で、題は、和孫明府懷舊山、唐の雍陶の作としてある。

詩は、五柳先生本山に在り、偶然客と爲つて人間に落つ、秋來月を見て歸思多し、自から起つて籠を開いて白鷴を放つ。

山、間、鷴の三字が韻字で、詩を作るには是非置かねばならぬ字である、夫は十五刪の韻と云つて其韻の中にある字を撰んで作らねば、詩にはならぬのである。夫を終ひの一句に限つて、起と云ふ字を抜いて七字を六字となし、十五刪の韻でもない、十一尤の韻の中の鷗の字を持つて來て、韻字として居るなど言語道斷である。況んや鷗の字は、かもめと云ふ水鳥の事である。白いかもめを籠に入れて居るなどは咄しにならぬのである。鷴の字は新字典にも、かのこどり、白雉子、形は山鷄に似て、距嘴共に丹く、尾の長き鳥である、又白鷴とも云ふ、白雉子であると書いてある故に白鷴とは白雉子の事であるから、此丈けは此を語る人が、全國中改めなければならぬ義務があると思ふのである。

總て此處を語る太夫は、東風の眞摯を修業すると同時に、腹から徹底的に「ギン」の音を修業せねばならぬのである。『秋は殊更』から「ギン」の上品な音が、滿場に漂はねばモウ物に成つて居らぬのである。又姉妹の詞爭ひが下品な喧嘩になつてはならぬ。又『帶際取つて引戻す』の邊からも「チ、チ、チ、ツン〳〵」の如き、「チリガン、〳〵、〳〵、〳〵」の手の如き、姉妹とも重き裳の衣物を着て居るから「マクレ」て早く成つてはイカヌ。足取も「間」に氣を付けねば、先の方は彈かれぬやう語らぬれやうになる。又此段の貫目を語る事の一例を擧ぐれば、昔から『無禮の挨拶仕るな』「ツン」『身も禮服に改めん』と語る一言が何とも云ひ得られぬ貫目がなくてはならぬ。夫が物に成兼ねるので、此段の品位が建て直らぬのであると聞いて居る。

庵主は三代目越路太夫が文字太夫から越路太夫に、名前換をした時が長局、次が堀川、其の次が慥か此蝶八であつたと思つて居る。其時前の枕が少し浮いて「足取」が持て居なかつたから永年の贔屓太夫だからハラ〳〵思つて、是では奥まで甘く語れるか知らぬと、妙くなからず心配をして居たが、此『身も禮服に改めん』との一語になつて、本當に徹底的に貫目が付いたからハアー此の太夫は屹度立派な太夫になるナアと安堵をした。又其の時の吉彌（後に吉兵衛）の彈いたのは、勝手は

惡るかつたが、總て上出來で「受」が皆活きて居た。殊に『無禮の挨拶仕るな』「ツン」の如き、今尙ほ耳に殘つて居る。同じ人の今の吉兵衛に今一度アンナ「ツン」が彈けるかドウだかと云ふ程良かつたのである。總て此段はソンナ事が、大天狗の所として味はねば取所も聞所もないのである。夫は特別な此段丈けの修業が根本になるのである。夫さへ分れば段切まで獨りで語れて行くのである。總て文章の意味に對する「受け」と云ふ物は、實に一段を死活せしむる大問題であるが、今の數多き三味線彈や太夫連も、ソンナ風の藝を聞かせて貰いたい物である。

（六十八）日本賢女鑑　十冊目　片岡忠義の段

此外題の書下しは、寛政六年寅の三月（大正十五年を距る百三十三年前）豐竹此母座に上場せしと聞く。作者は近松柳、近松松介ならんと思ふ。役場は調べても慥かな事は明らぬのである。話には、豐竹時太夫と聞くが是とても論據がないのである。

明治二十五六年の頃か、大阪彦六座で、彼の茶びんの時太夫と綽名ありし太夫が、此役で出座した事がある。其時庵主端なくも聞いたが、格別面白くも思はなかつたが只だ『くもらぬ操、日本の賢女鑑と云つべし』と語つた時、滿場其徹底した腹加減に感服したやうであつた。其後文樂座で先の津太夫が、此役を語つた事があつたが、其時庵主又行き合せて聞いたが、外の物は兎も角此段の品のよい事は絶品であつた。勿論節付けは東風になつて居るが、此段は品が第一の修業である。

先づ三重の『騒ぎ立』が、餘程好き工合に三味線も、太夫も氣を付けねば、此段の品の貫目が供はらぬ。夫から枕文句に氣を付け、「ギン」の音の遣ひ方と、「足取」の運び方が中々六ケ敷のである。

『唉花に』の「ギン」の音が能く据つて、『向ふ敵なし』と語つて、ウンと「間」があつて、「眞ギン」で、『鎧草』と運び、『方八丁の大花壇』と語るのが、「間」が悪るいと、『方八丁』でなく『方三間』位の花壇になつて仕舞ふのである。總て斯藝は「間」が基であるから、「間合」をシッカリ極めて語るまで修業せねば、萬事が駄目になるものである。『鎌倉方へ裏切の』と「三上」を傳ふて運び、『所存や』と云つて『深き』と「ギン」になつて、『奥御殿』と「色かゝりの中」となり、『忍び込んだる』と又「ギン」になつて、『造酒之守』と「コハリのユリ」になつて收まるのである。此等の注意が落付いて、据りが藝の上に付かねば、東物は駄目である。『絶入死骸じろりと見やり』と「色」に語つて、『奸佞邪智にて貪りし』と云ふのが津太夫の腹加減は持つて生れた品格にて、今日まで何とも云ひ得ぬ上出來で、今まで聞いた中で、此人が一番と思つて居るのである。夫から妻染の井、娘住の江の運びがあつて『ヤア聞たくもないよまい言』と「ヲシ」て、『伯……』と「クセ」があつて、『夷』と輕くなり、『叔齊餓えて益なし』と運び、『一旦鎌倉へ裏切の片岡』と「クセ」に語り、『だまりおろふと』云つて「間」があつて、『にべもなき』と「上」から下して「フシ」になる所もよかつた。夫から住の江の自害となつて、『恐ろしい石火矢を討手の役は何事ぞ』と語つた時は、滿場愈へず感嘆の息を吐いたのであつた。夫から

片岡の詞が總て工合宜敷くて、『坂本の城中に我と思はん者はなきや』等の息遣ひ、腹加減が、津太夫としては絶品であつた。夫から秀盛の詞として『ヤア〳〵春元誓し〳〵、坂本の軍師和田兵衛秀盛、宇治の方を是に守護せり』と音に掛つての詞は全部潰れて形なしで云へなかつたので、滿場顔見合せて落膽したのであつた。其爲めか『威儀を正して着座せり』のヲロシまで、總てスベリ加減であつた。夫から又春元の詞で盛り返して、工合よくなつた。併し秀盛の詞は一體に怖氣が付いて居て惡るかつた。『底意を見拔く秀盛が、詞に片岡氣もゆるみ』から、片岡の腹組みと息遣ひは餘程面白かつた。一體此長詞を斯くまで引しまつてコナシた津太夫の力量は、他の企て及ばぬ所と思はれた。『麗はしき御尊顏を拜し』などの時は、津太夫も見物も、皆目に露を宿して居つた。

何でも此時の三味線は、松葉屋廣助であつたかと思ふが『殺すまい物エ……エマ情ない』『テン』と『カワッタ』時の好サと云つたら、滿場唸り聲が涌いた位であつた。『一生殿御の肌知らず』から『伏轉べば』の『クリ上』になつた時は、一人殘らずの拍手であつた。夫から槇の戸の『詞ノリ』に『カワッタ』手ギワと云つたら妙であつた。『イ、エイナァ現在連添ふ私さへ』の『カワリ』もよかつたが、『口說立つれば造酒の守』の『スリ込』になつて、『ヲ、娘出かした』の詞の息遣ひは、全く老功と思は

れた。茲は昔から多く間違易き「手」がある。夫は『親の不忠を諫めんと』は「シャン」と彈いて、『異國本朝に』と切つて、『例めしなき』と「本表具」に語るのが悪るいとの事。此は「ヘリ切」に彈かせて「表具カ、リ」に『異國本朝に例しなアーーアキ』と語り、『孝行者手柄者』と「色」に語つて、是で「シャン」と「本表具」にして、『親子は一世ヱーー、ノオヲ、別れとやアーーアーーら』と語る物と聞いて居る。尚ほ念の爲めに大掾に聞いて見たら、夫はトンとお說の通りと思つて居りますと答へたのである。夫から『唱ふる六字は鯨の波』の段切に至るまで、永年津太夫の藝を聞いて居たが、此程結構な物を聞いた事がない。全く老功の力と思はれた。

（六十九）伊勢音頭戀寢刀　油屋の段

此外題は、寛政八年辰の五月四日（大正十五年を距る百三十一年前）狂言作者近松徳藏が、之を芝居に仕組みたるが初めとの事である、爾後之を床本に書直したるは、故豐澤團平ならんと思ふ。筋は甚だ不味が、其節譜の颯爽たる事は、斯藝中他に比を見ぬ位である。

此段が今日此の如く流行するのは、全部團平の力量と見て差支へないと思ふ。故に之を演奏する太夫にも、眞正なる力量を要するのである。夫に可笑しきは、彦六座出の太夫でなければ、滅多に之を語らぬのである。夫はアレは團平の新作物で、淺薄な物であるとの意味が籠もつて居るやうに聞かれる。夫が言語道斷である。假りに一人の太夫を捕へて、之を修業させて見たらば直に分る。中々〳〵急な事には成効は六ケ數のである。組太夫や大隅太夫も之を語つて、或る成功は仕たが、其團平作の音譜を案ずるに、中々容易の事ではない、團平滿身の力は、殆んど此一段に集中して居るやうに思はるゝ。現在語つて居る太夫は、皆夫が分つて居らぬやうに聽かるる。分つて居れば、アン

ナ事は語つて居られぬ筈である。骨組は綱太夫風に搦んで居るやうであるが、夫が中々〳〵鰻谷許りでも行かず、阿漕計りでも行かず、其運び方が一種特別の藝力が漂うて居るので、決して不心得な藝人の手に及ぶ物でない。

先づ枕のお紺の一人舞臺がサア困難である。油屋と云ふ茶屋の氣が漂うて、譜が付いて居て、其語る心持は、憂に沈んだお紺の一人舞臺である。元來一人舞臺を語る太夫は、藝の至つた太夫の力試しであつて、尼ケ崎の十次郎が本當に語れる物でない。『漸涙押拭ひ、母樣にも祖母樣にも』は只の力で云つて居られる物ではない。酒屋のお園の獨り舞臺は綱太夫物の中でも大難物である。鰻谷の八郎兵衛の獨り言、此油屋の貢の獨り言、皆心持が大事で、夫から「變り」と云ふ物が出來るのである。夫にお紺の獨り舞臺は「變り」無しで運ばねばならぬのである。

『後にお紺はウツとりと』から『漸に顏を上げ』から、『恨涙にくれ居たり』までと云ふ物は、頭の上らぬ心持で音遣ひは、或る陽氣な氣分に觸れて、心持は沈みに沈んだ陰氣な運びを鍛練せねばならぬのである。夫から貢と云ふは爾宜であるが、少なくも萬次郎の便りにして居る士氣のある男で、一寸腹の立つ事が有つても、キアツ〳〵と猿のやうに怒つて計り居ては片付かぬのである。群がり

來る怒氣を押付けたり、又夫を押宥めたり、其腹加減が六ケ敷のである。外の人形は、此處では貢を怒らせるやうに〳〵にと、工夫さへして腹合を拵へて置けば宜いのである。お紺は貢を見て、『ヲ、誰れかと思へば貢さん』の一語は、大事の詞にて、お紺滿身の情にて、此詞を飛付くやうに云つて、夫から萬野や、他の者に氣兼をし、氣を取直して、『お客と杯するのは』云々と運ぶので、コンナ處は澤山あるのである。『又引返す』からが心持が出來ねば足取も語れぬのである。

夫から喜助の意見の詞遣ひから、其「變り」の心持が出來ねば、忠實の心が現はれぬ。夫から十人斬る事になつては、「息」と「間」と「運び」が極つてから、「變り」方を語る修業鍛練が、出來ねば人間所ではない、大根一本も斬れぬ事になるのである。夫から元來『折紙の詮議』と云ふ問題も可笑しいが、夫は劇だから見遁すとしても、葵下阪と云ふ刀の名が可笑しいのである。此刀は元越前の國下阪住の康繼と云ふ鍛治が、葵の紋章を刀の忠に彫る事を、德川家から許るされて、武藏國江戸にも來て刀を打つ事になつて、御紋康繼とも云ふのである。只だ葵下阪〳〵と計り云ふては、刀の銘にもならぬのであるから、何處ぞに此文字を書込まねばならぬのである。

（七十）加賀見山廓の寫本　七ツ目切　又鵜住家の段

此外題は、寛政八年辰の正月二十九日（大正十五年を距る百三十一年前）竹本愛藏座元にて興行せし筈であるが左すれば、天明二年寅の正月二日、加賀見山舊錦繪を、江戸新太夫座で興行せしより以後、十五年目の作である。舊錦繪の方は、作者は容揚黛であるが、此方の作者は中村魚眼の筈である。役場は、竹本彌太夫か、竹本内匠太夫か、竹本重太夫か、竹本映太夫か、調べて見ても分らぬのである。

先年今の竹本古靱太夫に聞いて見たが、風は政太夫になつて居る筈でございますと云つて居た。夫から故名庭弦阿彌も、矢張り、政太夫風であると云つて居た。左すれば、政太夫風で語るがよいと思ふ。

先づ身賣りの間を端場に語り、『泣々別れ行』から切に語る事。

それから『影見送りて』のところは、黒朱に、「地中」とあるが、『カゲエ……』『ツン』と受けて

「見送りて、主従は』は、最も淋しく煮へるやうに語る事。「本ブシ」も出來る丈け、底煮のするやう『長の夜』も息の續く丈け、シットリと云ふ事。夫から「テンツン」と彈く時、故人圓平は底拔けのする程であつたとの事。ドンナ事が底拔のするのかと聞くと、前からの仕込が違ふとの事。先づ夫が十分に出來て、「テン……ツ……シ」……『六ット』と高く出て……『ショヤトヲ』と低く云ふ事。『ヘダアテエタア……アアア』と「ハッテ」……「テッツン」……『アア……ア……ル…』「ツトン〳〵〳〵ジャン」と、少しも位落のせぬやう、則ち秋淋たる夜の氣分が十分に漂ふやうに心掛ける事。夫から手負になつたら、太夫は一時も「コハリ」の音と「三上」の音をを違ひ分ける事を忘れぬ事。三味線彈は「テン」と「ツン」と「トン」の「ウケ」を、決して粗末にせぬ事が、政太夫風の大事の事と聞く『折から』と庄屋の出になつたら、太夫は「口捌き」專門、三味線彈は「撥捌き」專門に、修業を鍛練して、面白く語る事、彈く事。段切は又「時代」になつて語り捨てるとの事。又女房の口說は手負であるから、餘りサラ付かぬやう、餘りネバらぬやう、此丈けが加減物にて、三段目、四段目太夫の腕次第にて、手負を忘れぬやう、「フシ」付けの意味を忘れぬやうとの事である。昔大隅太夫が、此役の付いた時、清水町の圓平が、

「大隅や、今度又助がお前の役に付いて居るが、お前語れるか」

と云つた時、大隅ウッカリ、

「ハイ又助ならドウゾ語れるかと思ひ升」

と云つたら、圓平が、

「ソウカ、夫は結講じや、一遍彈合せておこふかナ」

と云つたので、大隅は本を持つて師匠の前に出たが、ドウした事か一口も云へぬので、何遍も〳〵遣り直して見ても云へぬので、席を下つて平伏して、

「お師匠さんドウかお稽古を願ゑ升」

と云つたら、圓平が、

「此段は席の寫本の方で、七ツ目になつて居る、昔日長門はんが、古人の風で稽古をして居やはつたのを聞かせて貰ふた事があるサカイ、私も初役じやから、默つて彈いて居たが、お前が古人の風で、獨り歩行が出來るやうであつたら、私も安心するが、マダ夫は六かしい、私も調べて明日から稽古しますから、早やうから來なはれ」

と云はれたので、大隅は大喜びをして、夜起きをして本を讀んで出掛けた處が、『長の夜』で『長の日を暮らし』「テ……ン……ツ……ン」がエライので、六ツも初夜も十時も十二時も過ぎる頃になつても、其氣分が浮かぬので、全身綿のやうになつたら、師匠が、

「私も修業じや、芝居でも彈く丈けは彈かねばならぬサカイ、精出して遣つとくれ」

と云はれた時は、お師匠さん、私はモウ一ツ別に命を持つて居りませぬ、アンタに彈ける丈け彈かれて、私が生て居られますかいナ、と云ひたくなります、夫から手負でウンと苦しみまして、女房の口説が、早よすぎる、遲すぎる、夫では手負でない、息がわるい、間が悪るい、と申されまして、ヤット初日の日に漕ぎ付けましたら、師匠が、マ、其位で語つときなはれ、又今度出る時にシッカリ稽古して上げるから、と申されました、此上シッカリ稽古をされましたら、私は吃度死にますジヤロウと思ひました」

と咄して居た。庵主はコンナ品物に對しても藝人と云ふ者は、何といふ恐ろしい修業をする物であらうかと、其時から思つて居たのである。此咄しは故弦阿彌、富助、仲助等は、皆知つて居たやうであるが、思ひ出した儘を書いておく。

次に『五ケ年以前大殿には』は『當春既に大殿には』とし、又床本にある『天なるかな命なるかな』とあるを、古靱太夫が丸本の通りにして、『天なり命なり』と直して居るが、夫よりも『天命今ぞ思ひ知る』と直した方がよい。又床本の『大殿様とは露知らず』よりも、丸本通り『大殿様とは白刃の剣』と語つたがよいと思ふ。是丈けは庵主の注意である。

（七十一）繪本太功記　十冊目　尼ケ崎の段

此外題は、寛政十一年末の七月（大正十五年を距る百二十八年前）大阪道頓堀若太夫座にて座元豐竹諏訪太夫にて開場し、作者は近松湖南、近松柳、千葉軒で、役場は豐竹麓太夫であると聞く。

此人は大阪洗場の鍋屋宗兵衛とて、鍋宗大盡と世に持囃やされた全くの旦那衆にして、音曲に堪能の聞へ高く、現に一中節「深草」の節付けは、此人であると傳へられたる位である。東の芝居が維持困難となつて、矢倉が傾く時、芝居が潰れるなら、俺が出て遣ろふと云つて、出勤したと云ふ、義太夫界で大天狗の元祖とも云ふべき人である。其辯名前は鞍馬山下の麓太夫と謙遜して、藝界に身を投じたが、其音聲と云つたら、古今無比と傳へられ、「表の三本」で上がツカへず、「裏の三分」で下がツカへず、「ギン」の音と云つたらドノ譜からでも「ニジッタ」高い所から出して上品此上なく聲量、腹力共に剛強にして一人も敵する者なかりしとの事。無論其頃の事とて簾内で語つて居たが床側に茶棚を据え、銀瓶の白湯わかしを掛け、玉露の茶を入れて、切れ羊羹を菓子器に盛り、語る

片手に茶を入れて呑み、光秀の出の前までは胡坐をかいて語り、夫からヤット正坐となつて語り。夫で人情と云ふ物が溢るゝ斗りであつたとの事。後年清七や圓平の如き八ケ間し屋が出て、色々崩れた節を訂正補修したが、此麓場斗りは一撥も手を下し得なかつたとの事である。全く藝道に生れ付いた人であつたと思ふ。其風格が今日まで存續せられて麓場と云つて八ケ間敷いのである。

元來此段は剛壯憤懣の氣で充滿した光秀で、聽衆が泣くやうに書いた物である事を能く會得して其他は光秀を泣かざるを得ざるよふに仕向ける、責め道具に配せられた人形斗りである事を忘れずに語ると云ふのが太夫の一番大事の仕事である。

『殘る蕾の花一つ』一輪の白牡丹がグッタリと萎んで居る氣で、『水上げかねし風情にて』『ギン』の「ニジッタ」音で運び、『漸〳〵涙押止め』は涙を胸に湛へる氣で語り、「トン〳〵〳〵ジャン」と〆るまで息を詰めて、「ジャン」で息を取つて、『母樣にも祖母さまにも』と腹の底から涙で云ふ。『初菊が立聞く涙轉び出て』を『マロビ、イイ、イ――イデ』と足を付ける心で運ぶ、『ワッと斗りに、泣き出せば』の「スエテ」を大事に、「ナアキーイ、イイ、イイ』『ツトン』イダセ――エ、エーベ』と産み字を一つも間違はぬやう語る。之等の息遣ひと、産字の「間」と「足取」と「音遣ひ」と「ギン」の音

の癖と一つも引地をせずに運ぶのを、先づ麓場の心掛けと云つて宜からう。『二世も三世も』の語り方が皆悪るい。『ニセ――モ――ヲヲ』と語る事は好くない。『ニセモオ――オヲォーヲヲ』「チン」『サンゼーモ』『チョン〳〵』メヨオトジャアト』と語る事。『討死とは』も『ウチ――イ』『チチチン』と「ヨビダス」事は宜しくない、『ウチ――ジニ――イトオワアーア』と成るべく切らずに語る事。『爽かなりし其骨柄』は『サワャカァ――ア、ナリシ』『チン、チンツン』と弾かせて、『ソノ――ヲ――』と入れて、『コツ――ウ――ウ』と又入れて、『ガァ――ア――ラ』『ツトン〳〵〳〵』と語る事。夫から總て東物には「地色」が禁じてあるから、「ノリ地」『詞ノリ』詞の字配りに、深甚な注意をして稽古をせねばならぬ。「ひつそぎ鎗」『チチン』『主を殺した天罰の』の一句は、ナゼ老母の述懐の中にアンナ譜が付いて居るかと云へば、此一段の主眼が、光秀の主殺しと云ふを道徳觀の尺度として、深酷に戒めた文章で、丁度此所に至つて其主眼の文字に觸れざるを得ぬ事になつた作者の意思を、譜節者が取つて朱章を下したから、手負の老女の繰り言中に、斯る派手な手を付けたのである。故に演者も現代の無神經太夫の如く語らず、老女の繰り言の主意を前々から連絡の切れぬやうに腹に持つて、『主を殺した天罰の報いは親にも此通り』と語る事を忘れてはならぬ、夫を忘るゝと老女の

云分やら何やら分らず、聽衆の手を叩く爲めに噪鳴る事になるのである。操の口說の『此見玉へ光秀殿』からが、所謂「詞ノリ」と云ふのである。「詞ノリ」の口說と云ふ物は、節には語れ、諞ひはするなと云ふ教へを聞いて居る。夫で『お諫め申した』と語るのに『オーイーサメモヲシタソノトキニ』と素直に下トキニ』と絃に付いて語ると、諞ふのである。故に『オーイーサメモヲシタソノトキニ』らぬやうに「詞ノリ」に語ること。則ち咄しのように云ふ事。夫が絃に合ふ事にならねばならぬ。絃の方は一切太夫に構はず、極まつた譜の通りに彈きさへすれば、夫でチヤンと藝になるのである。『思ひ止つて玉はらば』も『タマワラバ』と絃に付いて下げるからイカぬのである。「タマワラバ」と下げずに詞の如く云ふ事。

元來始めに云ふ通り、光秀で聽衆が泣くやうに書いてあるので、老女が死を以て訓戒し、妻が口說立てゝ諫め、悴が死を以て父の非行をなげいて死し、可憐の嫁が手負に取付いて泣立てるので、『流石勇氣の光秀も親の慈悲心、子故の闇輪廻の絆にしめ付けられてコタへかねてハラ〳〵〳〵』とトウ〳〵泣くのであるから、此までの仕込が藝で、此の如く四方八方悲慘の情合で責め付けられる時は、光秀でなく夫以上の大惡人でも、其本然の性善に返つて泣くは、最も至極であると思ふやう

に語る事が、此尼ケ崎を語る大主意である。故に『さすが。勇氣の。光秀も。親の慈悲心』とネバッたら息を詰めて、親を思ひ『子故の暗』と語つたら息を詰めて、子を思ひ『輪廻のきづなに、しめ付られ』と大「ヘタリ」に息で「ヘタラ」して情合を聽衆に納得させて、後『こたへかねて』と語らねば、『ハラ〳〵』と大落しは語られぬのである。皆大落しでなく小落しである、否齟齬落しである。光秀の泣く落しブシになつて居るのは一つも聞かぬのである。

（七十二）箱根靈驗記壁の仇討　十一冊目　いざり瀧の段

此外題は、享和元年酉の八月（大正十五年を距る百二十六年前）司馬芝叟等の作にて、之を上場したと思ふ芝居は、調べても分らぬのである。役場は竹本綱太夫であると聞く。朱章は一切四段目の手が付いて、西風の純粋なる物である。

豫ても云ふ如く、此綱太夫場と云ふものは、阿漕でも、鰻谷でも、酒屋でも、近九でも、一種動かす事の出來ぬ困難な風のある物故、其六ケ敷割合に世の中に流行せぬのである。其内酒屋丈けは後年靱太夫と云ふ、腕利の太夫が努力熟誠の結果、足取と、詞の運び方を面白く語つたので、非常に世に行はるゝ事とは成つたが、矢張り綱太夫場は決して崩れては居らぬものである。即ち太夫は飽まで陰氣に語る事に努力し、三味線は飽まで陽氣に彈く事を研究して、夫がカラミ合つて聽衆に無類に派手に聽ゆるやうになると云ふのが、綱太夫一生の努力であつたとの事であるから、決して一節や所々の間拍子が、其風に限られて居るのではない。故に攝津大掾も大隅も、庵主には終に一

段も稽古をして呉れなかつたのである。只だ一段全部の講釋をして、庵主等を威かす事計りで、死に別れて往つたのである。其上是に屹度心得て居らねばならぬ事は、詞の研究である。綱太夫塲に限り、節より詞が困難である。夫は先づ詞の口捌きに一點の澱みなく、立板に水を流すやうに語る中に、一種云ふ可からざる境遇と情合とを語り盡すと云ふのが、殆んど、一定極つた風じやそふである。彼の阿漕の如き、次郎藏が『扨は桂平内兵衛樣の御子息平治樣かや』から段切に至るまでの詞遣ひは、驚きと、敬意と、懺悔と、忠誠と、決意とが、言々語々の中に横溢緊張して、一點の凝滯も其間に止めざる語り方は、一通りの修業にては譚り盡す事が出來ぬと云ふ事。是は斯道に心ある者は、之を聞くと直に、實にソーダナアと、共鳴同意の出來る困難さである。其他難易はあるが、鰻谷でも、仕舞掛けの骨桶の邊から、八郎兵衛と銀八との詞遣ひ、捕手の口捌きから四ツ橋差しての切までの、切捌きの如き、近九の御注進の變りから、高綱の詞遣ひ等、酒屋でも、僅かながら、十内の詞遣ひの、甘く言へた者がないと云ふが如き、皆意味は一樣である。

大隅が角座の素淨瑠璃で酒屋を語る時、

「十内の詞が六ケ敷と聽いて居升から、或る先輩(誰だか忘れた)に聞ましたら、床に上つても、氣

になつて語れませなんだ」

と云つて居た。個様な譯故、此處でも仕舞掛けにある、筆助の詞が一つの修業物である。故に綱太夫場と云ふ物は、先づコンナ風に研究をする物と思はるゝのである。

初め枕に「ツン〳〵」と彈いたら、『忠孝』と語り出す事が中々の困難である。「シャン」と彈いたら決して「シャン」に付いてはイケない、「シャン」は派手に彈て、『身にも因果』と「ハリマ」は極々陰氣に語る事である。「本フシ」を陰氣に語り、又『飯沼を』ユッタリと「ノッテ」語る。『乘せて綱手を』も「足」が亂れてはイカぬ。夫から『勝五郎』と語る節は、「サイガイ」とか云ふ節で、盲人とか聾りとか必らず片輪者に限つて付ける手だそふだ。夫で心を屹度〆めて、其心で語らねばならぬ。或る文樂座の太夫は、忠臣講釋の七ツ目で、『おりゑが戸の隙間より差覗き』を「サイガイ」に語つて居た事があつた、是は其太夫が、天性下手なのか、ソーではない、只だ習ふべき事を習はずに、無茶で語るから、コンナ無茶になつて、「おりゑ」はお蔭樣で貧乏をした上に、片輪者にまで爲さるゝのである『車の助け』から「足」が變つて、本舞臺になるのである。『箱根風』の「ギン」の音は「ニジッタ」程、高き處から出るのである。『漸〳〵』「シャン」も又派手に彈き、『庭に』を極陰氣に語るのである。夫から一

番六ケ敷のは、初花が『紅葉のあるのに雪が降る、嘸寒かつたでござんせふなァ』の詞が、昔から太夫の、一番氣の張る詞である。膚薄な、身も震ふ聲の中に、貞節の心に、張詰めた氣が滴ち、『嘸寒かつたでござんせふなァ』は身も聲も霜ふ思ひが滿場に漂ふと云ふのが、語り方の原則とも云ふべき詞である。夫に答へる勝五郎の返事は、淋しい中に元氣を見せ、直に情愛にからんで、妻を勞はる心が、前に徹底せねばならぬのである。此等の主意を基として、最後まで無理のないやうに運んで行くのである、コンナ事を書けば限りはないが、大抵コンナ品物は、一息でも、鍛練の積んだ極つた息を吐かねばならぬと思ふ。總て修業せねば、何も駄目になると思はねばならぬのである。

（七十三）日吉丸稚櫻　三段目切　小牧山城中の段

此外題は、享和元年酉の十月（大正十五年を距る百二十六年前）豊竹座に上場したと聞いて居る作者は近松柳、外三名との事。役場は麓太夫との事である。果して麓場とすれば、大分運びに氣を付けねばならぬと思ふ。

庵主は大掾、大隅とも、此場を語つたか語らぬか知らぬが、前の津太夫の此の段は聞いた。三段目としては面白くは聞いたが、麓場としては餘り無意味過ぎたやうに思はれた。但し此段のやうな場は、餘程筋を正し、風を考へねば、ウカ〳〵役は受取れぬと思ふ。元來麓太夫と云ふ人は、一中節「深草」の節付けまでしたと云ふ程の人で、「ギン」の音と云つては、すべて「ニジッタ」音の強き人にて、古今無双と云はれた程の恐ろしい聲の人で、「東の座が潰れるなら俺が出て遣う、何も人助けの爲めじや」と云つて、出場した人であるから、北條時賴記や、尼ケ崎などを語る時は、總て籠内で語り、夫に其人情の絡みと云ふ物は、初めから聽衆の腸に染み渡り、『殘る蕾の花一つ』の聲

の据りと云つたら、十八に成る十次郎の姿が繪に書いたやうに浮出て『母様にも祖母様にも、此れ今生の暇乞ひ』と云つた時は、其聲の絡みで、モウ見物は〆め上げられて、ホロッとしたとの事、『二世も三世も夫婦じやと思ふて居るに情けない』と云つた時は、皆聞人が泣いたとの事。其頃「情けない」と云ふ事を符牒で、大阪の人は「エライ麓でナア」と云ふたとの事(淨瑠璃古咄集)夫から『光秀は聲荒らげ』と云ふ事になつて、初めて坐り直して、『スザリおろふと光秀が、一心變ぜぬ勇氣の顔色』と云つた時は、見物も何も一人も居らぬかのやうになつたとの事である。サア斯る人が此小牧山城中を語つたとすれば、初めから腹構へがチャンと違つて居らねばならぬ事が、分るのである。

引出の『散る花の、別れをしばし慰むる、程をや春の名殘りなるらん』との歌は、今直に死ぬ事になる女房お政の、假りの醉心地と云ふ事實を呼び出す前表の文句であるから、尤も澄んだ巾廣き聲で語るは當然の數へではあるが、其中に何とも云ひ得られぬ、淋し氣と憐れ氣とが漂よはねばならぬ。其處が麓場の何時でも六ケ敷處である。夫が「眞ギン」「中ギン」「ウキギン」「ハルギン」等が、腹の中で嚙み分けて、運び出て來ねば、夫が面白く漂はぬのである。總て此場の音は、「一」「二」「三」

とも煮え込む程、ドノ音も初めに据はると云ふことが大事である。『襖の蔭にて聞ました』「テン」ではイカぬ、「トン」と受けて、先づ「一」に音が落付かねばならぬ。「トン」の音で『トハ――ア云ふ物の、情なアーイー』『チン〳〵』過ぎし逢ふヲ――ヲヲヲ――夜ヲ――ヲの』と運ぶのである。『無理イーイ、イ、、、』と「ヨタ」を語つてはならぬ、『無理イーイ』と打つて極める處である。直に『云ふ――て』と語らねばならぬ。『案じ、暮らアシータア、ア、、、「チン」甲斐イイ――イ、モーヲ、ノヲ、ヲーヲヲ、「チョン」ヲーヲオ、チ、、、、』チ、チン、、、、」とならねばならぬ。夫からお政が手負ひなつて、『生きて詮ない身の覺悟』以下が籠場で大事の處である。ナゼなれば手負のやうに苦んで語られぬやうに手が付いて居る、只だ手負の息遣ひと、腹に手負ひの心持を忘れぬとで、此文句を手負の「地合」に聞かせる藝力が示してある。是に尤も注意をして居らねばならぬ。夫が腹の修業である。夫は八陣八ツ目の雛衣の手負も同じ事で、籠場持前の節である。是は東物には成べく「地色」を禁ずるから、「詞ノリ」やコンナ手を付けるのである。

夫から說經になつて『祝、ア、、、、イーイ、ノヲヲ、ヲヲヲ、ヲー、ヲー、ヲーヲヲ。トヲ、、、モ』となつてはイカぬ、「チン」と聞いて、『トモ――ヲ、シラ、アア』「チン」『ア――アア、ガ

――ア』「チ、、、、、」となるのである。夫から早太の出からは、「大ノリ」と云つて、腹強く出來る丈け「ノリ」詰めて、段切まで語り捨てるのである。

（七十四）忠臣義士傳　彌作鑓腹の段

此段は、嘉永の頃（大正十五年を距る七十七八年前位）倉田千兩と云ふ人が、素人の名人十三と云ふ人の爲めに書いたとの事。夫を又三味線彈の鼈之助と云ふ師匠が、此十三の悪聲に合せて、譜節を付けて、其弟子の龜次郎、即ち竹本摠津大掾をして、此十三を彈かせたより始まりたりとの事其後竹本大隅太夫が、大掾に筋を聞かせて貰つたら、大掾が、

「お前は一度、十三さんに稽古して貰へ、ソースルと又別に語り處が分ると思ふから」

と云はれたので、早速十三に頼んで稽古をして、工夫に工夫を凝らし鍛練に鍛練を積んで語り出して、斯く今日まで流行するのであると聞く。

庵主は曾てマダ大隅太夫を知らず、隨つて最屓とも何とも考へのない時、大隅の此段を聞いて驚いたのである。淨瑠璃も此の如き架空の構想を、寫實的に生動させねばならぬと極まれば、決して模倣の出來る物ではないと思つた。總て一句〳〵の息遣ひと云ふ物が、玄妙の人情に觸れて、聽衆

の心を襲くやうに感動せしむる事は、何物も他に比較物がないのである。

先づ「ヲクリ」を語つて、「トン〳〵〳〵ジヤン」と「シメタ」あと『後に彌作は只一人』と云つた時、ヲヤ是は浄瑠璃か知らん、何だか事實の咄のやうじやと思ふ程の息込みがあつた。『思案十方に暮れけるが』と「スエテ」を語つた時も、ズーッと引付けられて、何だか自分が非常な困難にでも遭遇したやうな氣がした。夫から「ハアー」と云ひ『無理とも云はれず』と語るのが、一句〳〵と引込まれる氣に計りなるのである。是は何でもマダ語らぬ前から、既に太夫の腹構へと息組から出る大隅太夫式の電氣にでも感染して居るのに相違ない。『斯くと樣子は白臺に』と云ふ「道具屋」節の所から『芝村七太夫參つたり』と聞いた時は、サア大變な事件が是から持上るに相違ないと、心配を始めたのである。『ソコニ、六ちや九ちやな譯がムりまして』と云つて居る時は、心に恐ぢ氣を持ち、氣味惡るき笑ひを浮べ、眞ッ正直な百姓彌作の心配が語り出された。其有樣は何と云ふ恐ろしい、心理的の寫實であらう。藝道の極致も、勉むれば斯くまでになる物であらうかと感歎したのである。夫から七太夫の詞遣ひと云つたら抑揚、頓挫、緩急、强弱、縱横に働いて、夫が恰も堅板に水を流すが如く運ばるゝのである。夫を受けて應答する彌作の心理から、湧き出る詞遣ひと云つたら、唯

々手に汗を握る許りである。夫を蟇上げ〳〵して、終に七太夫が『手鎗投げ』云々の文句となり、『畦道を行く七太夫が背骨をドッと』から『くすぼり返つて死してんけり』と語り、「息」を詰めて『ハ、ッハ、ア――、モウ叶はぬ』と彌作が氣抜けになる息遣ひと云つたら、實に筆にも口にも綴て形容丈けでは盡されぬのである。

元來此段は、作としても文章としても、極々粗雜な物であるが、全く藝人の鍛練と苦心とにて、此の如く破裂するが如く現實化して生動すると云ふのは、其演者たる大隅の力量が、慥かに認識せらるゝのである。庵主の考へにては、嘉永以後の作としては、本藏下屋敷、松王屋敷等あれども、此段の如く深刻にして、峻峭なる物はないのである。夫は作に非ずして、大隅の修業鍛練の産物であると思ふ。そして大隅が斯くまで藝道に働き得たのは、總て世人の粗略に打捨てゝ居る、古淨瑠璃の風と住太夫の風とを、故師團平より、拔ける程叩き込まれた結果であるに相違ないのである。

抑も古淨瑠璃の風と云ふ物は、斯道に片時も忘れはてならぬ風であつて、是がなくなれば、義太夫節は今の女太夫のやうな物になるか、常盤津か清元のやうな物になつて仕舞ふかである。夫を喰ひ止めたのが、住太夫と三代目此太夫である。其故にこそ彼の三代目此太夫は、此風を後世に殘さ

んが爲めに、大阪堀江市の側に芝居を建て、師匠筑前掾の殘した古淨瑠璃の風を捉へ、合邦や、質店等を始め古淨瑠璃の風を主として、專念に語つたのである。此風は團平の彈いた春太夫までは、兎や角傳はつたが、其後が滅絶するので、大隅を捕へて之を稽古臺として、ウンと叩き込んだのである。夫が一方大隅の大不幸となつて、生涯人氣立たず、難行苦行をした因とも成つたであらうが又一方大隅に此修業がなかつたらば、鰒腹を斯くまでに語り殘して、後世の敢て企及し得ざる程の物は出來なかつたであらうと思はるゝのである。

（七十五）増補生写朝顔話　四段目切　宿屋の段

此段は、嘉永三年戌正月（大正十五年を距る七十七年前）書下しで、作者は山田案山子とある。役場は竹本重太夫との事。總て此義太夫節なる物は、元祖竹本義太夫が、貞享二年丑の年二月朔日大阪道頓堀西に、初めて人形操座の櫓を揚げて、世繼曾我や愛染川を語つて以來、此藝の風格が極まり、其門下の名人雲の如く輩出して、各々懸命の修業をなし、而して其人に依り其性質に依つて、各々長短善化の優風を成して、トウ〳〵此重太夫の朝顔話を打止めに、其風が無くなつたと云い得らるゝのである。此朝顔以後に出來た、本藏下屋敷でも松王屋敷でも鎌腹でも、作の善惡と演藝上の難易は有るけれども、藝としては三味線彈が朱筆を打つた通り、太夫が力任せに語り通るまでの事である。此以前の外題こそは、彼名人が懸命修業の結果、己れ自身にも動かす事の出來ぬ、「音遣ひ」と「足取」と「間合ひ」と「詞訛り、地訛り」等の風格がチヤンと極つて仕舞つて居る事は、彼の能樂と同じ事である。夫を學ぶのが即ち藝である。其の人を藝人と云ふのである。若し夫を捨て

て勝手に語るのなら、「ハルフシ」の一つも覺えて置けば宜い、「ハリマ」の一つも覺へて置けば宜い「スエテ」の一つも覺へて置けば宜いのである。其他「表具」「說經」「道具屋」「文彌」「本ブシ」「小チクリ」「ウクオクリ」「詞がゝり」「節がゝり」「中落し」「大落し」「ヒバリ」「海道」「地色」「景事」「冷泉」「相の山」「三ッ入」「九ッユリ」「節落ち」「文彌落ち」等、斯道一通りの節を一つ宛覺えてさへ置けば、何でも義太夫節は語れる譯である。

然し此藝はソンナわけ合のものではなくて、その實際は一外題〳〵に付いて、組立が違つて居る事を呑込む事、一段〳〵について其役場太夫の命懸の修業が、ピッタリ極つて風を成して居る事を呑込む事、夫から其文章によつて太夫の心構へ腹構へが違ふ事を呑み込む事で、所謂「暗ら闇を明るく步行座頭かな」と云ふ程の容易に人の眞似の出來ぬ藝をして、復自分獨特の風をも殘すのである。夫で修業を爲ねば藝人にはなれぬのである。夫で眞似の出來ぬ事をするから、高い報酬も貰へるのである。夫に今の藝人は、何でも一つの節のやうに聞へる、否な其一つの節さへ滿足に浮出る事が出來ぬのである、否節處ではない、一切が滅茶苦茶である。夫なら藝人ではないのである。夫では只の節を付けて本を讀むのである。聽衆が受けさへすれば、其節を浪花節で讀んでも差支へは

ないのである。夫を暇と金とを潰して聞く人、此が人間中の一番馬鹿者である事になるのである。故に此朝顔までは、ドウしても重太夫の風を修業して語らねばならぬのである。庵主は曾て聞く、此竹本重太夫は藝の天性は下手の方であつたが、藝風は筑前掾の風と、錦太夫の風とを修業した、正しき藝人であつたとの事、夫に聲の修業が仕てある爲めに、一種の重太夫風となつたとの事である。

先づ枕の『暫しは旅と綴りけん』の一鎖りでも『綴りケー、ンー、ンーン』と切り方が極つて居て、其後に此の『ンーン』と「ハリ切り」で振り切る、又音も極つて居る。夫から『昔の』と云ふ「ハルフシ」の下廻しも『ムカシノーオオオオ、オーオ』も決して「二」に下つてはならぬ。夫には『ムカシノ』の、『シノ』の二字を一寸「ハリキリ」に入れて持たなければ「二」に落ちて來るのである。夫から『オオオオ、オーオ』の『オオオオ』を順に正しく下げて、『オーオ』を屹度「三」の譜で振り止めるのである。此等が重太夫の風であつたと聞いて居るのである。『筆のあと』はドウしても「二」の「眞ギン」に据はらねばならぬ。「ジヤン」と〆めたら全く別の心で、尤も落入るやうに淋しく、『つれ〳〵侘るタービの宿』と語る。『夜ンノヲふすまの隙もりて、風に、またゝく、燈火の、影も、淋しき』と運ぶ、

「本ブシ」まで太夫の腹に其境界を描がいて語る事が大事である。モウ此枕一枚を聞かされたら屹度聴衆が其氣分に引入られて、ハーと納得する事にならねば、此四段目が語られたとは云はれぬのである。夫から朝顔の出になつて、庵主が大掾に就いて此風を學ぶ時『娘深雪は身に積る嘆きの數の累なりて、堪へ失ふ目無し鳥』と運ぶのに、大掾の運び方が何とも云へぬ妙味が有る故、

「師匠お前の『娘深雪』からの運びは、私がドウ考へても其人形の抱へ氣味が取れぬがナア」

と云つたら、大掾は滿面に笑みを浮べて、

「アンタ夫にお氣が付やうに成んなはつたら申し升がナア、此所は私が東京で之を語り升時、三代目吉兵衛さんが私を呼付けて、コレ南部、アンナに朝顔の出でお客に受られてはドモならんがナア、三味線が彈て居られはせぬ、少し物を考へて語つてはドウじやと、云はれましたので、ハテ難儀じやナア、ヤツとお客が受けて呉りやはるやうになるとイカンと云はれると、始終苦勞にして語つて居ました處が、其後師匠春太夫に聞いて貰ひました時、『娘深雪は身に積る』と申し升とモツとサラ〳〵と語りんかいなアと云れ升ので、其積りで語り升と、ハーア足が悪いがな、ソウ只云ふてはイカンがなアと云はれ升、サア、ドント行詰りました、夫が苦勞の始まりで、永い間

心に離さず苦労斗り致しました處が、其後安達の三段目を語るに付、師匠に聞いて貰はねばならぬ事が出來ましたので、夫を師匠に頼み升と、師匠は何とも返事をせず、ア、お前は朝顔の出はドウしたかと云はれ升から、ヘイ一時も心に離さず凝つて居升と申しましたら、ソーカ一寸遣つて見いと云はれ升から、又ハット思ひまして、扨ドヲ語つたら宜いかと思ひまして、何でソンナに凝つて苦労して居たか、可哀そふにと師匠に思つて貰いさへすれば、夫で宜いと思ひまして、『娘』と一寸止りまして『深雪は身に積る歎きの數の果なりて、ネグーラ』と持つて『失ふ目なしドーオオーリ』と哀れの心持專門に語りましたら、マアそんな心持で語れば宜い、總て朝顔でも、袖萩でも、初めて舞臺に出る時に、お客樣が初めて人形を見て、アーア哀れな女じやナア、可愛相な身の果じやナア、と思つて吳りやはるやうの心持ちで語るのじや、其算りで安達の三を克く讀んで語つて見イと云はれました。其時私は又ハット思ひました、私はお客さんの事などは思ひませず、師匠の前を通過しなかつたら大變じやから、師匠にさへ私が不憫と思つて貰つたら宜いと思つて哀な心持を持つて訴へたので厶り升、夫が當りましたので、多くの語り物の上に澤山の發明を致しました、此等の心持が本當の前受けで厶り升、今時の前受は考へ所を取違へて居り升

アンタお聲は悪ふ厶り升が屹度ダンナイから、其心持で御修業なさりませ」

と云はれた事がある。大抵の事は是で分るのである。夫から五行本に『危きその』とあるが、アレは『危く木曾の』と語らねばイカヌ。夫から『こがれ初めたる戀人と』『チン』と「三上」て受けさせて、『かたらふ間さへ』と「ハリ切」から出て「三上」に廻つて「三」を放した音に戻る事、是を忘れてはならぬ。是が筑前風即ち重太夫風の大事の所である。夫で「テ、テ、デン」と呼ばれて『夏の夜の』の『夏』は紘より高く出る、『短い』も高く、『所尋る』も高く、『手便』も高く、『思ふに任せぬ』も高く『國の迎ひ』も高く、總て紘に付かず語る。夫から『迷ヲ、イイイ』と持つて、『イデ』とツメル事。夫から『悲ナアアーアアシイ、サアーアア』『チン』『アーアア、オ……』と運ぶ事。『悲ナーアアーア、シイサア、アーアア』になつてはイカヌ。夫から三重の『追ふて行』は是非「サグリ三重」に語る事。『張り詰めし』が皆イカヌ。『張り』と止り『詰めし』とツメネば、「チン〳〵〳〵」が「ツマ」らぬ、ソコで『力も落ちて伏まろび』が「カワッテ」息で止つて「ヘタタッ」て語れる。其時に淨瑠璃が一杯になるのである。夫が聽衆も一杯になつた時である。「文彌落し」から先きは「落合の心持で落合に語るな」と云ふのが教へだそうである。『名のみ流るゝ大井川「チン」水の泡とぞ、なりにけり』を氣を付けて、

浄瑠璃をお任舞ひにして、夫からは本當の段切を語るとの事である。

（七十六）忠臣二度目清書　寺岡切腹の段

此外題は、江戸にて安政の頃、作られた物と聞くが、語り初めは竹本音太夫、鶴澤咲松と聞く。芝居に上場した事は無いらしいが、節譜は四段目に付いて居る。一時は關東關西を通じて、中々流行した物であるが、今でも女太夫の口語り共が、方々で語つて居るが、腹を締めて本當に之を鍛練すれば、中々面白いものと思ふ。明治二十七八年の頃、五代目鶴澤仲助を、庵主が後藤伯より引受けた頃、

「是非何か一段お稽古を願升」

と云ふから、

「夫では二度目清書を聲慣しに稽古してくれ」

と云つたら、仲助は變な顔をして、

「私能く存じませぬから、宅に勇造さんの朱章がござりましたと思ひ升から、一遍調でまして、お

稽古に出ます」

と云つて歸つた。數日の後、稽古を初めたが、是が仲助との初手合せであつた。其稽古する家が、東京築地の柏屋と云ふ待合で、毎日午後の三時と約束を極めて、双方時間に遲速のあつた時は、其日は稽古を止めて、斯道の咄しをする事に極めたのである。

扨て枕の『夢と見て現とさめし』と云ふ處を、毎日〳〵幾度遣つたか解らぬ。『大星由良之助が侘住居』となると、又夫が幾度の事であつたか解らぬ。『侘住居』『テン』となる、夫は『住居』と云ふ、音の落付を研究して見ると、中々面白くて、氣持の好い處には、中々落ちぬ物である。『まだ驚もこと問はで』の『ギン』の音が、思ふ儘に聲が出ぬ、夫が一入面白いのである。『軒端に』と云ふ『ウクヲクリ』は一層の興味である。夫から『出立時刻は』是は多く『出立』『チン』と、『カ、リ』になつて居るが、アレは勇造の朱章では『出立時刻は』と『地色』になつて居る。『テン〳〵』『ホノ——ヲヲグラア——キイ、イヽンニイ〳〵』『チヽチン』となつて『ギン』の音を失はぬがよいのである。以下の『ノリ地』は一切絃につかぬやう、仮名で語らぬやう、『クサリハチマキ、イチヤウニ』とならぬやう『クサリ、ハチマキ、イチヤウニ』と云ふ風に、腹で『ノリ』て運ぶ事が肝要である。『二度花の色香

もなく』「シャン」と「表具」になつて、『野邊の』「チリ、ン」かげ——エろふ——、ヲヲヲ、ハ——ル——ウ、ノ——ヲ、ユ——ウ——ウキ』となる。『フタタ——アビ、ハナノ、色香ももなく』「シアン」『野邊の』「チリ、ン」『カケエロ——、ヲヲヲ』と……〳〵……〳〵……〳〵と毎日〳〵夫斗りの稽古となつたら、其待合の女將が、大變氣の短い、遠慮のない女であるので、帳場で聞いて居てモウ溜まらなくなつたかして、ツカ〳〵と座敷に來て、

「旦那、もう「シアン」『野邊の』「チリ、ン」に厭き果てましたよ、私方も商賣ではムりますが、ソウ毎日〳〵『野邊の』「チリ、ン」斗りを立通しに攻められましては、家が『野邊の』「チリ、ン」で燻ぼつて仕舞ます、奉公人も私も、頭が變になりまして、仕事が手に付きませぬ……お師匠樣もヨイ加減にしたらドウです……お前さんだつて「シアン、チリ、ン」斗りが能でもあるまいから……ドウか私の方も助けると思つて、少しは外の事のお稽古は出來ませぬか、大の男が晝日中に二人まで、待合の座敷に楯籠つて、鷲鳥でも〆殺すやうな聲を出して、『野邊の』「チリ、ン」斗りとは、何と云ふお道樂でせう、女房子があつて、世間にも立られるお方としては、餘り御威光がなさ過ぎますよ」

と天邊風しに叩き下されて、グッと閉口はしたが、其處が狂的のデン〳〵病患者であるから、

「おかみよ、お前の家の治安を傷り、營業を妨害して、「野邊のかげろふ菌」を振蒔いたは、誠に氣の毒ではあるが、お前の毎日稽古する一中節でも、趣味のない、おれから云へば、肥厚性鼻炎かピカタール患者が、乾電氣でも掛けるやうに、鼻で斗りムーン〳〵と云つて、意氣がつて斗り居る、夫を俺は只で聞いて居るのじや、俺は良いお客ではないかも知れぬが、規定の席料を拂ひ、夫相當お前の商賣に順應した金を出した上の、『野邊の』『チリ、ン』であるから、マア少しは我慢するがよい。此『二度花の色香もなく』からは、平右衛門が物語り中の六ケしい「カワリ」で、節は少しも六かしい事はないが、カワッタ腹の思惑が聽衆の腹の中に、分け入らねばならぬ程の、聲と情と息とが、活ねばならぬ。夫が幾度もの修業でなければ、出來る物ではないから、斯く勉強するのである、其道に入れば、夫が又惘らめられぬ程面白いものであるでノウ」

「旦那、私は何つて居ます、モウ〳〵浸み〳〵腸に分け入る程お出來になつて居り升よ、有難くて涙が出る程、感心致して居升よ」

と、ドコまでも馬鹿にするのである。コンナ馬鹿氣た修業をして後の事、用事あつて友人の、青木

周藏子爵と渡邊昇子爵と小美田劉宜坊と、京都に行つた。三條嘅の旅宿で、晩酌の後、是非庵主に腹ごなしに一段語れと云ふ。折柄隣家で小娘の聲で、此二度目清書を稽古して居る。其三味線が、如何にも面白く「受け」も「間」も「合」も誠に調つた四段目の三味線である。ソコデ庵主が、

「アノ、今隣で彈いて居る三味線てなら語つて見やう」

と云つたので、早速宿に頼んで、其三味線彈を呼んで貰つたら、夫が野澤喜八郎と云ふ師匠であつた。夫から庵主は旅中の樂み此上なしと思つて摑み合で此二度目清書一段を、此師匠で行つたが、聞手の三人は素より義太夫の解る人ではないから、ウンと泣かせて遣つた。又其師匠も汗をかいて彈いてくれたが、

「私はこんな物で、コンナに一生懸命三味線を彈いた事はござりませぬ……エライお稽古をなされましたナア」

とお世辭を云つてくれたので、庵主は好い心持にはつて、早速大天狗を構へ込んだのである。其翌朝四人で飯を食ふ時、小美田坊主が、プ——ッと噴出して笑つたら、他の二老人も破裂したやうに噴飯した。庵主は變に思つて其譯を聞くと、其三味線彈が歸る時、宿の婆さんが懇意の餘り、其喜

八郎に向つて、

「お師匠さん、御苦勞さま……大變な大きい聲のお方でナア……商賣人のやうじやナア」

と云ふと、喜八郎が、

「ハア、やう覺へて居やはります……併し淨瑠璃が餘り詰まつてますさかい、商賣人になりやはつても錢にはなりますまい」

と云つて歸つたので、其婆が惡るい奴で、早速之を小美田坊主に饒舌つた。小美田坊主は大悅びで直ぐに他の二老人に咄したので、三人は之を庵主の淨瑠璃以上に面白がつて「錢にならぬ〳〵」と云つて笑つて居たのが破裂して、斯く一度に吶喊の如く、噴飯したとの事である。是が庵主の二度目淸書に對する包まざる告白である。

（七十七）義士忠臣蔵　本蔵下屋敷の段

此外題は、嘉永後、安政か、明治の間に出来た物と思ふ。其作者と年月は解らぬのである。語り始めの太夫も誰だか解らぬ。其中解つたなら又書く事にする。一体此段の世間に流行する事は、非常に盛んな物であるが、今日までマダ一度も感服するのを聞いた事がない。ナゼなれば太夫の語り風は何でもよいとして、西物か東物かが解らねばならぬ。夫から三段目物か四段目物かの辨別はなくてはならぬと思ふ。又夫等を兎も角としても、庵主は餘り流行するから参考のため、一寸氣付いた事丈けを書いておく。

庵主は此段の手の付け方は、西風で三段目に語つたが好いと思ふ。其積りで庵主は、全く己の意見として述べて見るのである。夫は模範とすべき、太夫の語るのを聞いた事がないからである。ドウか斯道先覺の師の教へを聞たいと思ふから、茲に一己の意見を、先づ發表して置くのである。

『人知れぬ、ウ――ウ――ウ』と『地色』に云つたら、『思ひこそのみ』を最も靜かな音に『カ、ッ』て

『わび、イイシィ――ケ、レ――エ――エ』と愼重に振り切るのである。『我身ぞ――ヲ、知る』と詰める事。『三世の緣も浅サ――ア草の』と腰強く語るから、『片はら町にしつらいし』と「ノル」事が出來るのである。『忍びとヲチヲ、「チリガン」ヲン、「ツン」見へて』と「ハズミ」に語るのも、三段目風に能く「ノリ」て、「ネバリ」を持つて叮嚀に運ぶのである。皆人々の語るのが、三味線も太夫も運びが碎けて居るから、三段目にならぬのである。「ツトン、ジヤン〳〵」と「ノリ」て『座敷へ舁込む』との摸樣が語れて、夫から『あらん限り』は「地色」にならぬやうに『ア、ラア――アア、ン――ンンンン、カキリノ』と「ヲロシ、ガヽリ」にシットリと「フシ」を大きく、落付くやうに結びを付ける事。夫でないと『御用すきにや』と「カワラ」れぬのである。『コリヤ、斯々と、耳に口、イイイイ』と云つて、紘に四ツ障はらせて、『成程、心得ました、ア、コレ、シイ――、スリヤ……お姫樣の乘物は』と輕るく、『ヲ、サ』となるが三段目としては都合がよいと思ふ。夫から『必ずぬかるな、心得ました、ア、コリヤ、……密かに〳〵』となつたがよいやうである。以下總て「ノリ地」は「間」を出來る丈け大きく語る事。夫から三千歲姬の一人舞臺になつて、大分臭い處もあるやうなれど、此等は譜節者に敬意を表して、素人だてら何事も云はぬがよいと思ふ。夫から『是が忠

義の仕納めかと、ヲ、、、ヲ、、、ム……、ヲ……』「チチン〳〵」となる「ウレイ」に語る所が、躄瀧の段の枕の『カアッ――ウ、ゴヲロヲヲヲヲ、ヲ――ヲヲ、ヲヲヲ、ヲヲヲ、ムウ――ヲヲ……』此は「サイガイ」と云ふ節にて、片輪者に付ける譜との事。夫を皆此『仕納めかと』に語る人があるから、一寸書いて置くのである。先年或る大太夫で、講釋の七ツ目、喜内住家の段の、おりゑが「戸のすき間より顔差のぞき」の「ウレイ」に此「サィガィ」を語つて居る人があつた。庵主は三味線彈でないからシッコクは云はぬが、此等は皆三味線彈によく尋ねて語る事。「三重」から奥の運び「女彌ガ、リ」は「景地心」にて語る所と思ふ。『御前へこそは、引かれくる』を、叮嚀に收めて、『斯と知らせに』と云ふと、大變舞臺の据りがよくなるやうに思ふ。『褥の上に座を設け』と「色」に云つて「息」をツメて後、『イヤナニ本藏』と云ふ。總て此「息」にて、上品に云へば、若狹之助の詞になる。此「息」が總ての緩急を産み出す「息」であると思ふ。『刀ひらりと若狹之助』と云ふ人が多いが、アレは『すらりと』であらうと思ふ。『しづ〳〵座に着』の「フシハル」は尤もユッタリ彈かせて、ユッタリ語る事。是から全く若狹之助の「カワリ」となる。夫がハッキリ語れねばイカぬ。夫から『開けば高野師直が』から「大ノリ」に「大間」に語る事。二上りの歌の『馴れし』からは、尤もサヘ〳〵と語

る。『送る』から『氷のくさび』までは、憂を含んで語る事。『朝げの嵐』から『うかれし事も』までは、又サヘ〳〵と語り。『最早』から又「ウレイ」を含んで『柴小船』と語つて、よく「息」を考へ『本蔵近ふ』と云ふ事。夫から『蟲きぬ』からは、當り前の段切に語る事。

（七十八）夕霧伊左衛門　廓文章　吉田屋の段

此段は、元來大近松作とも聞いて居るが、此名霧と名題を打たる作物が數多ある爲め、何れが何うやら捕へ所が更になく、隨つて此段の年代等も分らぬのである。傳說に、

「京都島原に名霧と云ふ傾城あり、絶世の美人なりしが、佳人多難の諺の如く、甚だ不仕合せの運命に弄ばれし女にて、父一人子一人の境界なりしが、幾多の艱難を嘗め、トウ〳〵親の爲めに遊女にまで身を沈めし後、其父に死別れ、奉公の中にも不仕合せの事多く、止むを得ず、大阪の新町に鞍替えなせる中に、藤屋伊左衛門と云ふ豪商の若旦那に思はれ、其の情交日に厚く、遂に二人の中に一子を産け、間もなく伊左衛門が靡祿零落の後、夕霧は病死なし、伊左衛門は夕霧との情交を忘れ得ず、死に至るまで不犯無妻の境界にて終り、其中娘は生長の後、大和街道にて夕霧茶屋なる物を開きしに、甚だ繁昌せりと」之を聞いて狂言師某が戲作して芝居に掛け當時の名優藤十郎なる者が、伊左衛門に扮して上演したりしに、大當りにてトウ〳〵十回も繰返して此狂言

を演じた。夫を後年大近松翁が筆に載せて書下したとの事である。

斯る譯故、諸説紛々として、年代も作者も、此を語つた太夫も、役場も、庵主には更に捕促して書く事が出來ぬのである。庵主は此段を二十年斗り前に、大阪文樂座にて竹本攝津大掾と野澤吉兵衛の演ずるのを聞いて、其音譜の幽溫にして高尚なるに驚き、淨曲中にては捨て難き物と思ひ、早速五代目鶴澤仲助を派遣して稽古に遣つたが、大掾は非常に喜び、仲助を自宅に宿泊させて、熱心に稽古をして呉れた。其後庵主が下阪して親しく大掾に就いて、此段を稽古する時、彼は曰く、

「私は此段を四十五年振りに語りましたが、上演の前に興行師や最屓の旦那客からも、度々御注意を受けました。夫は、外に語る物がなければ仕方もないが、聽衆の耳馴れぬ物を語つて、受けが惡るかつたら、興行師にも旦那客にも、相濟まぬではないかと申されましたが、私は長年當座に出勤しました餘德に、ドウか受けが惡ふても一度は語らせて貰いたうムり升、夫は此段は恩師三代目吉兵衛師が、一通りならぬ苦心をして、此段を修業して私に敎へて下さつた物でムり升、其上に今の江戸堀吉兵衛は其弟子でムい升のに、此の段を知りませぬから、私が達者な中に吉兵衛丈になりと傳へて、師恩を忘却せぬ驗に致したいと思ひ升からと、願ひまして出しましたら、直

ぐに東京の貴下様が、態々仲助を出稽古に下して下さいましたので、私の思ひの念が届まして、コンナ有がたい事はムいませぬ。貴下様が態々お稽古に人を下された咄しが、大阪の評判になりまして、斯くの如く日々大人でムいまして、當地の旦那衆も興行師の方からも、色々と賞與の挨拶がムりまして、此様な喜びはムりませぬ。私は早速一昨日師匠の墓參りを致しまして、心から恩師の靈に咄して參りました。併し旦那は四分の調子で「三上」を押へれば御難儀なお聲で、コンナ物を私にお稽古なされてドウなさるお積りでムり升か」

「夫はお前の咄が間違つて居る、藝道と云ふ物はドンな片輪でも修業が基である、俺の弓の師匠は左手が曲らぬ片輪で弓術は天下の名人である、お前も聲では俺と反對ではあるが高い聲の片輪である。表の一本や七本の調子で「ェの譜」から「サの譜」まで繰り上げて、マダ聲が餘つて居る、夫で沓掛村や大安寺堤を俺に教へたではないか、夫はお前が修業と鍛練の結果である、聲は出來合の物で天性である、修業と鍛練とは其天性を矯める力の事である、組太夫や大隅太夫は、先代の御殿や十種香や阿波十は知らぬかと云へば矢張り知つて居る、語れと云へば何時でも語り、又我々にもチャンと稽古もして呉れる。俺は淨瑠璃を稽古するので、此夕霧と云ふ淨瑠璃を覺へたい

のである、決して之を語つて人に賞られやうとか、太夫になつて此で金を儲けやうとか云ふのではない、ドウかそんな事を云はずに教へてくれ、仲助にお前が稽古して呉れたので、一通り聞いては居るが、此から太夫の音遣ひと足取と腹構へを覚へたいのじや」

「私は心から恐れ入ました、夫では今晩から毎晩十一時までお稽古を致し升が御辛捧が出來升か」

「人に物を習ふのに教へる人から負けるやうな事では、習ふのではないと思ふから、安心して教へて貰いたい」

と云つたので、稽古を始めたのであつた。夫から段々咄を聞くに、此段は昔時殆んど六七十年も中絶して、世間の藝界から消滅して居たのを、京都の前の鶴澤友次郎が之を嘆いて再興はしたが、一向に世に用ひられなかつた。然るに三代目吉兵衛が三味線彈の龜次郎と云ふ即ち攝津大掾を、太夫と引立てるのに、先づ南部太夫と云ふ名前を與へ、之に色々淨瑠璃を教へて見ても、何様小男で聲が小音である事から、此聲に合ふ物を始めに教へたいと思ひ、風斗此夕霧の事を思ひ出し、友次郎の死後に誰が其教へを受けて覚へて居るであらうかと、京都の方を色々と穿鑿したが、誰も覚へて居る者がなく、或る古老の人の咄に、祇園の藝者で八重吉とか云ふ者が、友次郎に此夕霧を稽古し

て居るのを聞いた事があると聞いたので、其八重吉の行衛を探したら、大阪長堀の裏店で今稽古をして居るとの事で、吉兵衛は菓子折一つを提げて、長堀の裏店に尋ねて行つたら、三尺斗りの長露路の行止りに四疊半斗りの長家に、七十斗りの老媼が稽古をして居るので、名前を尋ねたら夫に相違ないので、叮嚀に禮儀を述べ、扨夕霧を友次郎師にお稽古しやはつたと聞ましたから、ドウか一遍聞かせて下さいと頼んだら、其老媼は吉兵衛を普通の稽古人と思ひ、今貰つた進物の禮心に愛嬌を翻し、

「私がお師匠さんにお稽古をして貰ふたのは十八の年頃の事でおますから覺へて居るかドウか分りませぬが、分つて居る丈け遣つて見ませう」

と云つて彈出した。夫が瓦色に汚れた三味線の皮で、飯杓子のやうに耳の摺れた撥であつたとの事之を聞いた吉兵衛は懷にして居た本にサッサと音譜を書入れ、厚く禮を云つて歸つて來たが、之を基としてアノ日本一の名人の蒸溜器に掛けて煮じ出した朱章、此れが今回大掾が敎へられた夕霧であるとの事である。故に此夕霧が吉兵衛によつて世に行はるゝやうになつた。以上の咄を聞き、堂島の吐月と云ふ旦那衆が、此吉兵衛の控本の表紙に「瓦色庵飯杓子」と書付けた。吉兵衛は後に其

下に「師より三代目野澤吉兵衛へ傳授」と書入れて所藏して居たとの事。其後其八重吉婆さんは、此段が流行するやうになつて、自分の所に聞に來たのが、今滿天下に名人の評判ある野澤吉兵衛師であつたと聞いて、禿た頭より汗を流して、

「私ドウしよう、アノ方が吉兵衛はんでおましたか……恥しー」

と云つたと云ふ一つ咄もあつたとの事である。名人吉兵衛の藝道に熟心なるも、攝津大掾の師恩を忘却せざるも、庵主は之を双美として、聞いた丈けの事を書いて置くのである。其後鶴澤仲助は之を東京の旦那方に教へたので、搦月、華山、竹洗、鷺洲、新高等の紳士連が、盛に此段に興味を持つて呶鳴るので、女藝人としても呂昇や素女も仲助に習つて講座に掛けるやうになり、夫から義太夫藝者等も座敷藝に、之がなくては物足らぬ事となつて來たので、今日此段の旺盛を見るのである。尙ほ書きたい事も澤山あつたが、全部先年の震災で調べた物が燒失したので、此位の記憶丈けにしておく。

扨て以下は大掾の語つた床本に因つて書くが、

○『戀風や』の夕霧の出からは、常盤津の譜が幾所も這入つて居るやうであるが、夫が常盤津にならず

ぬやうに語らねばならぬ。

○敎へ方、習ひ方に困つて、總て非常に「ネバツ」たり「足」が早くなつたりするが、夫は兩方共駄目である。總てコンナ物は極り切つた「間」があるから彈く方も語る方も、此段には「間」で腰をチャンと極めねばイカヌのである。

○詞に一種の風があるから、夫を克く聞いて氣を付けねばならぬ。

○『冬編笠』よりは總て四段目の風を忘れてはならぬ。「一」の音と「ギン」の音が極まらねば、外の音は遣へぬ事となる。

○「花は嵐」の合の手は、お半長右衛門の道行と同じやうであるけれど、夫がウカ〳〵して道行風にならぬやうに語る事。

○『喰ひしばる』と云つて、寒氣を濕らせる爲め、『ホウ〳〵』と、凍る手を息で吹くやうな「間」があるが、夫を『ホ、ホ、ホ、』と拍子付ではならぬ、『ホ――ツ』と云ふ中に「間」になる事。

○「鼻に扇の横柄なり」の一句でトンと伊左衛門の品格が定まる事。

○『昔は鎗が迎に出る』の「文彌」の音遣ひから、『編笠の中の』までの「林清」の節、音遣ひが、品格を

主として語る事。

○總て「スエテ」の節に氣を付けて、屹度四段目に語る事。

○『夕霧文章』になつては早くなつてもダラ〳〵してもイカヌ。早く遲く互ひ違ひに、足取が生きて居ねば何にもならぬ。

斯る模樣專門の藝風故、中々筆の先にて書く事は、最も困難であるから、教へる方も習ふ方も寸分の油斷なく修業すると云ふのは、此段の事であると思ふ。

（七十九）三日太平記　九ツ目切　松下嘉平次住家の段

此外題は、書下しの年月も上場の芝居も、震火の爲め書籍全部の燒失に付、調べる手寄もないのである。只だ明治十七年申の春頃、大阪の彦六座に於いて、出世太平記九冊目と銘を打つて上場し嘉平次住家の段を豐竹柳適太夫が語つて居るから、此三日太平記を、出世太平記とも云ふのであるかと思ふのである。併し書下しの役場は豐竹鐘太夫と聞いて居るから、庵主は先づ此段を鐘場として修業したのである。總ては先覺者の注意を待つの外ないのである。

元來此鐘場と云ふ風は色々音遣ひの癖もあるそふであるが、先づ第一に「間」を出來る丈け大きく明けると云ふのが、逃れる事の出來ぬ條件であるとの事である。故に十種香の段も、近八も、喜内住家も、此嘉平次住家も、太夫も三味線彈も、出來る丈け大きい「間」で運ぶ事である。送りを語つたら、「ジャン」と聞いて、大きい「間」で大きい聲で『跡には』と「ハルフシ」を語るが、決して「廻し」てはならぬ、『ワア……』と產字を引いて「ハネル」のである。夫から『心』とは最も「下」の音の沈んだ

聲で『五月闇』と「中」に「カワリ」で「カブル」氣味にて音を遣ひ、又直ぐに「迷ヨ――ヲひはぐれし、我子の――ヲヲ、噂さ』と運ぶのである。『餘所には聞けど』と止まつて、『とや角と』と「ツメ」て「ジヤン」と聞いたら『察し入つたる』と「本ブシ」に煮へるやうに落付いて語るのである『立歸る一作が』からは、全く氣を「カヘテ」さら〳〵と運ぶのである。『我家の内』と云つたら「息」で「間」をあけて、「中音」で『見馴れぬ女の只一人、しかア――も』と「モッ」て『愁に沈む體』からサラ〳〵と、夫から、『戸口に伺ひ立聞く共』を「フシ」に語るのであるが、此鐘塲は「フシ」になつたら、總て『タチギ、ク――ウ、ト――ヲ――、ヲヲ――ヲモ』とドッシリ、ハッキリと煮へ込むやうに、遺憾なく語るのである。「ジャン」と聞いたら、又「カワリ」て淋しく綺麗な音を遣つて、「アシ」をかへて運ぶのである。夫から「詞遣ひ」は早くも遲くも、最も叮嚀にハッキリと「間」を考へて語つて、夫が決して假名にならぬやうにヲットリと情合が浮出て、聽衆に呑込めるやうに云ふ事が第一である。夫で音遣ひでも決して先の文句に移らぬやうに、一つヅヽ、叮嚀に運ぶのである。或る時庵主は大隅太夫に、

「お前は、三日の九を語つたか」

と聞いたら、

「ハイ語らぬ事はムりませぬが、私共のやうにガサ〳〵した、語り口に修業をしました者は、アンナ、ヲットリとした物は中々語りヅロウムり升」

と云つて居た事を覺へて居る。故に鐘塲と云ふ物は、何も六ケ敷い風はないとしても、「詞遣ひ」と「間」を大きく、拔けぬやうに、ダレヌやうに語るのが、中々一通りや二通りの修業では出來ぬのである。夫には「地中」や「地色中」などの音遣ひを、最も叮嚀に反覆して修業せねば、鐘塲にはならぬ甚だ手易いやうでも淨瑠璃を講釋のやうに語る事になるから困るのである。此さつきの一人言は、最も叮嚀に音遣ひに念を入れて修業をして、『聲をも立てず』の「スエテ」まで收まつたら『始終の樣子』から又氣をカヘテ、一作を語るのである。夫から一作とさつきの兄弟の詞の遣り取りが、又一ト修業である。夫が濟んで『ハアッと驚くさつきが胸に、ひつしとひゞく陣太鼓』からは、三味線も太夫も「息」の競爭である。大きく早く、ネバツて彈く『只鐵桶の如くなり』と「フシ」に太收まりに收るのである。夫から「チンツン」と聞いては『さつき』が又「カワル」のである。總て淨瑠璃に「カワリ」と云ふ物は六ケ敷物となつて居て、三味線も太夫も、一生苦勞をする事ではあるが、此鐘塲の「カワリ」と云ふ物は又格別に六ケ敷物である。只だ腕達者、口達者丈けで語つて居ると、夫がモウ風

にならぬから、滅茶〳〵になるのである。「カワリ」も一つ〳〵違ひ、「息」も一つ〳〵に違ふのである。何にしても覺へて仕舞つた太夫でなければ語れぬと心得て居らねばならぬ。よい加減では決して遣れぬのである。又「ノリ間」にも一つ〳〵修業する事である。夫から嘉平次の笑ひは、此段の山であるが、夫は意味を持つて出來る丈け小さく、大きくさへ笑へばよいのである。只だ厄介なのは、久吉の品格を語る事が六ケ敷のである。夫が十分に語れたら、後は其太夫と三味線彈の力次第で、普通の淨瑠璃となつてよいのである。

（八十）明烏六花曙　山名屋の段

此外題は、富士松新内流を焼き直して、芝居の舞臺藝に組立てた物を、何でも四代目綱太夫が、綱太夫の頃、床本に校正して語つたが始めじやと聞いて居る。明治時代になつて、色々の太夫等が盛んに演奏したのを數々聞いたが、皆何の興味も起る運び方ではなかつた。元來がコンナ風格も藝規もない物であるから、ドンナ風に語らうとも、太夫の力任せではあるが、餘り流行するから、聞き苦しくない丈けには運ばねばいかぬと思ふ。

往昔五代目鶴澤仲助が、故後藤猛伯のお抱三味線であつた時、猛伯の家政整理のため、庵主に仲助の引受方を頼まれたので、其仲助の藝風を聞いて見ると、元々彼が二十歳臺で、彦六座で故源太夫を彈いて三段目四段目を彈いて居る時の藝を聞いて居る耳では、猛伯のお相手を十年もして居たので、何とも始末に困る程藝がイジけて居る。是では到底駄目であるから、兎も角寄席に出よと命じた、仲助も其決心をして色々と太夫を物色したが、當時一人も適當の太夫が居らぬ。夫では素人

の化物を探せと命じた、其頃豐澤松太郎の門弟で、松十郎と云ふ三味線彈が太夫になつて、甲府で宿錢もなくウヅ振つて居るとの事故、兎も角金を送つて招んで見よと命じた。早速來た男は十月末に浴衣一枚の男である。取敢へず築地の柏屋で手見に紙治の内を語らせて見たら、詞は音が低くて今一ッ工合が悪いが、淨瑠璃は器用に運が付て居のに感心した。是ならよいと云ふので、早速に衣服等を拵へて遣つて、化物として東京を威かさねばならぬので、直に攝津大掾に手紙を出して、門弟の中に加へて、口上看板を出してくれと頼んだら、大掾早速承知して、二見太夫と云ふ名を與へて、當時東京第一の義太夫寄席、日本橋茅場町の宮松亭に看板を掛けさせた。其初日の出し物が、此明烏六花曙浦里時次郎山名屋の段であつた。庵主は始めから此の太夫を馬鹿にして居る上に、出し物の山名屋が馬鹿にせざるを得ぬ物である。只だ仲助の三味線をのみ氣にして居た所が、先づ『座數も靜かなり』の「ヲクリ」が、何だか變に感ずるほど穩やかにスーッと運ばれて、引付けられた「ジヤン」とシメたら、太夫は「間」を放つたらかして、ヲヤと思ふやうな「間」で『雪はまだ』と極々汚ない聲で「地色」に出た、「テン」と彈いたら又夫を捨てゝ、輕るく見臺を押へて顎を突出して『殘り『て』と輕く云つて、『サ——ム——ウウ、キイ——イイ』と締つた聲で云つて、又輕く『ハアル——

ウウ――ノウ――カ――アゼ』と云つたら、滿塲既に送りて押へ付けられて居た處に、此所になつて一方の隅から、溜り切れず「ヤア、越路太夫ソックリだゾ……」と聲が掛ると同時に、滿塲の大拍手であつた。夫から『フキ――』と「下」で止まつて、『ハレヌミノ浦里――ヲ――ヲ――が』と輕く欺まして出た面白さ、『湯上りイ、イイ――イ、スガタ、ソノマヽニ』と云ふ聲の頃合の好さと云つたら無い、『カムロノ、ミドリ、ウチイツレテ』と「足」を語り、『上る、一階』の「ギン」の音が一杯でよく。『絲が煙草盆』と放つて置いて、「チン〳〵」と「長地ガヽリ」となつて『煙に憂さは晴らして――エヽヽモ、ハア――アアレ――エエ、エヌ――ウ』『チン』『ヲモ――ヲヲイーノヲ、時ー次郎ヲ』「チン、チリンチ、チチテツツン、ツツンツンツン」との運びの好さと云つたら、兎も角滿塲醉つて仕舞つたのである。是から「文彌」になつて普通『セ――エ――カア――レエ――テ――エエ』となるのを、ポンと捨てゝ、一寸見臺を押へて、杖を突いて出て『ウ、セカレ――テエ』「チン〳〵」『エエ』「チン〳〵」「ヨイ」『エ……エー、イイ、マア――ワアア――』と入れて『ヤア、マアナ――ア、ヤア、アアアア――ア』と止まつて、『アアアア――、ノ……』と語り捨てた時は、只だもう聽衆は後も先もなく夢現を辿るやうになつたのである。夫が別に好い聲でも何でもないが、藝

がよくて、「間」がよくて、汚ない聲の遣ひ方が上手で、ドンナ事を云ふにも覺へがあるので、破、舒、急、輕、重の運びがチャンと鍛練してあるから、コンナ外連ものを外連に語るにも、淨瑠璃の風格がチャンと据つて居る。此二見太夫の山名屋は、織太夫を初めとして、嘸誰も彼も語つたではあらうが、此人の此段は横から押しても、縦から押しても、ビクともする物ではない。決して似せ物ではない、鍛練の結果から出た藝と見へたのである。夫から『通ひ廓に咲く花の』の「ギン」から出る聲が、全く語る道を知つた大太夫の語り口であつた。夫から時次郎の口説になつて「シアン」と「表具」に出る時、少しの當氣もなく、目色をかへ「息」を詰めて『二人一處――、ニイ――イイ、死ヌウウナア、ラ――ア――ペア、アトデ――ヱ』「チン〳〵〳〵」と彈く時は、聽衆總てが其息に引付けられて啜り聲を出したのである。夫から浦里の口説となつて、『ヱ――ヱ』と泣き詰めた「息」の強さ、『ソリヤアンマリじゃ』の強さと云つたら、恰好が付かぬ位になつたのは、前の『ヱ――ヱ』が強かつたからそふなるのである。『ナサケナイ』が泣聲の「カワリ」が溜らぬ程よくて、直ぐに『今宵別れて私しが身や、可愛い緣は、何と、「チ、チン」なろふと――ヲ、ヲモ――ヲヲヲ、ワン――ンンス』と泣いた時は、本當に此段の山を語つたと思つた。夫から『呵責の、鬼に、引――イイツ……タテ

ラレ』と『引立られ』を「息」を詰められる丈け詰めて「マクレ」氣味に放り出して、寄席の滿場が破れ出る程に云つて、『シホ〳〵』と「カワッ」た手際は、全く傍若無人と見へた。『シホ〳〵』の「ヲクリガ、リ」から『立つて行く——ウウ、後から』と『アトカラ』と足取に語つて『アタリヲ、ニラム、カヤガメノ』と意地悪るく云つて、『光ア——リンニ、カアガアヤアク』と「ヲクリ」になるまで、毛筋程の隙もなかつた。夫から「說敎ガ、リ」の三味になつて、「チチチンチンチン」と渡したのを受けて『ヤア——アア、ミ——イイ、イイ、イイイイイイイ——イイ、イ——イイ、ワアアア、「チンチン〳〵」ア——アア「チン〳〵〳〵」ムウ、ア——アア』「チチンチン〳〵」となつた時は此太夫死はせぬかと思ふ程一杯に出た。夫からがらりと「カワリ」て探り氣味に『あやなし浦里が』と云つたので、ア、何所までよく語る事を鍛練したものかと感心したのである。夫から只だサラ〳〵と攫んで捨てるやうに語つて、彦六の二上新内で聽衆をドッと悅ばせて、『早や東雲の明烏』と段切つて仕舞つた手際は、全く明烏の標本と思つた。夫から後で考へて見れば、「詞」は矢張一本方低くて充分語れては居らぬ事に氣付いたが、何樣藝が出來て居るのでソンナ事は問題に考へられぬ上出來であつた。昔日から誰々の風などと云ふのは、斯くの如く一杯に出來た物の事から始まるのであるは申ま

でもないが、庵主はコンナ仕様もない物で、斯く感じたのは之が始めでゞあつた。夫から早速大掾に手紙を出した。曰く、

前略、此間中手紙を以て弟子を御頼致候處早速御承引下され、貴姓の二見を以て名前に遣はされ祝着に存居申候扨て藝道の儀は如何やと内々心配致し候末、今日貴師の名染深き宮松亭にて初日の演藝を聞申候處、先づ〳〵名前を與へられた弟子たるに恥ぢぬ丈けの者とは、慥かに見受申候、先づ淨瑠璃を語る事を知つて居り、息遣ひが出來て居り、間拍子が調ふて居り夫に件ふ鍛練が出來て居り候、元々田舍藝にて、詞や音遣ひには無理な所もチヨイ〳〵之有候得共、先づ近來に得がたき者と存候、云々

と書いたが、其返事が面白い、

御尊書賜り繰り返し拜讀仕候、二見太夫儀不一方御世話御引立を蒙候由、本人書狀にても委數相承致候、師弟の契約致候私身に取り重にありがたく存じ上奉候、殊に今日のお手紙私共多くの門弟共と共に長年御贔屓を蒙り候に未だ一度も此の如きお譽めのお詞を、旦那樣に戴候者一人も無之、只だ二見太夫一人のみ斯る御賞詞を蒙り、私門弟の中より斯る者を出し

候事、私身に取り此上の喜も無之、此上とも行末御愛想盡かし等無之様、數々御叱りお引立の程、偏へに〳〵御願申上候、云々

と書いてあつた。夫から二見太夫に其手紙を見せたれば、二見太夫は忽ち落涙して、

「旦那様、マダ顔も見た事のない、日本一の師匠を、旦那様のお蔭を持まして、其師匠から斯る親身も及ばぬお手紙が、旦那様に參りますとは、私は如何致して、此師匠様に御恩報じを致したら宜敷やら、是も只々旦那様にお縋り申て藝道の勉強致すの外ムりませぬ」

と云つて居た。其後越路太夫や南部太夫等が、大變ボヤキ始めた。曰く、

「家の師匠は、顔も知らず名も知らぬ者に、自身の名字の名前などを遣つて、我々一生の中に書いてもらへるか、ドウか判らぬ程の、立看板を書いて、夫が東京で當つたと云つて、我々弟の爲めに一度も書いて呉れられぬ禮狀までを旦那はんに遣られたそふじや、ア、我々の行末が思ひ遣らるゝはい」

と云つて居たとの事を、大掾が聞いて、兩人を呼付け、

「お前等は、二見太夫の事を聞いて、大變ボヤクそふじやが、夫は東京の旦那はんにお目に掛つた

時ポヤキなはれ、私は東京の旦那はんを信用申して居るのじや、貴様の弟子にして好い者が居るから、コレ〳〵にせよとの、お手紙であつたから、私は此年まで澤山弟子も持つたけれども、マダ一度も旦那はんに夫丈け云ふて貰つた弟子を一人も持たぬ、アノ旦那はんは私が四十六歳の時から御最屓になつた方で、引續いて弟子全体が何かとお世話になつて來たんじや、其上藝と云ふ物のよく判るお方じやさかい、其方がアレ丈け思ひ切つて云やはる事じやさかい、信用致ませぬとはドウしても云はれぬのじや。夫に矢張旦那が、實地聞きやはつても、好かつたので其事を立派に手紙に書いてくれはつたので、其私の嬉しさは、お禮を申さずに居られるものでない……。お前等は何も申さずに、一ぺん旦那はんが來やはつた時、二見太夫の咄を聞いて見い」

と云つたとの事。此咄を聞いたから庵主は、越路と南部を呼んで、斯く云つた。

「お前達は、大掾門下で一二はあつても、三四とない優秀の太夫である。修業も練達も天下に恥ぢぬ藝人である、夫が素人に毛の生へたやうな二見太夫と、なんて競爭心を起すのであるか、ソンナ魂性では、若し三人とも明烏を、素淨瑠璃て、田舍廻りに語つて競爭したら、屹度負ける事受合である、ソンナ事は少しも氣に掛けず、今では大隅の藝を聞き、師匠の藝を聞き、此兩人を負

かす事を、ナゼ心掛けぬ。藝道は勝敗であるぞ、常陸山の弟子は、師匠と顔が合つた時、師匠を投げて土俵の土に埋めたら、師匠は涙を滴ぼして喜ぶのである、俺は藝人の藝を上達せしむるのが、一生の道樂であるから藝さへよければ誰でも喜んで世話をする、藝以外に才智があらうが、辯巧があらうが、夫には一切關係はせぬのである、俺位の者にでも可愛がられやうと思ふなら、唯々藝を研きなさい、二見太夫と云ふ者は化物である、今藝人にした斗りの男である。但し明烏では慥かに感心した。お前等は負けるに相違ない事を、繰返して云つておく」

と云つて聞かせた。之を要するに明烏は、澤山語る者もあるが、庵主の生涯中に聞いたのでは、二見太夫が一番よい。其語り方は當時師匠仲助の二枚目を彈いて居た六代目鶴澤仲助が、よく聞いて覺へて居る筈である。同人に聞いて見れば直に判るのである。庵主の耳に殘つて居る、二見太夫の明烏を書いて、此稿の責を塞ぐのである。

（八十二）　増補　菅原傳授手習鑑　松王屋敷の段

此外題は、書下しの年月も、作者も、上演の芝居も解らぬのである。譜節の付方は、或る場所は「ギン」の音の遣ひ方と「足取」とが、東風のやうにもあり、又或る場所では、全く西風のやうに思はるゝ所もある。要するに末世の作物であるから、マアこんな物であらう。或る場所は長吉殺しなどの譜も付けてあるやうであるが、先づ東風で語つておけば大違ひはないと思ふ。

『八重一重』の「三重」は出來る丈け大きく、聲の据る事が專一である。『新に建し一構へ』は「地中」に語る事。夫から『庭の立樹も』から以下は、極く靜かに運ぶ事。『爰に住居も』も「地中」で『奥深きイ――イ』は「ギン」で、『心も』は「色」で、『タレカーア、サーアア』と「フシ」に收める事『御いたはしや、亟相の』と「スエカ、リ」を「中」に收めたら、「長地がゝり」にて『御臺所は此樣よ――ヲヲリ』と運びて、後は「ギン」に「フシ」を辿る事。以下は「色」のトメ〳〵を、餘程念を入れて語らねば、猶更に値打のない物となるのである。『筑紫に――い、「上にて」ござるーウ』と入れて『ワガー、ツマ

ヤカンシユサイニタダヒトメ』とサラ〳〵と運ぶ事。『早玄關へ高挑燈』からは成丈け巾廣く運ぶ事『時平の家來春藤玄蕃上座へむづと』まで切らずに云つて、『押直る』と「フシ」に收める事。「カワリ」て『斯くと知せに主の松王』と尤も靜かに運ぶ事。此松王と玄蕃の詞の遣り取りは此段の眼目にて、此で太夫の力の解る所である故、緩急輕重をよく工夫して、氣を付けて語る事。『風を食つて落しやらんもはからはれず』と五行本に書いてあるが『は』の字がないがよいと思ふ『悠々として、タアーアーアア、チイ――イ、カアア――ア、エエエ――エエ、ルウ……』と「錦フシ」に收める事。此から女房と松王の遣り取りから『涙に誠あらはせり』までは、事理明白に「詞」も「地合」も緩急をハツキリ修業して運ぶ所と思ふ。『ハット計りに女房は』からは音を間違へぬやう、「間」を叮嚀に情を辿りて語る事。『用意の懷劍拔放し』となつたら、今迄の腹をかへて場面を改める事。松王の詞は此邊から成丈けサラ〳〵と運ぶ事。『心に思はぬ惡念も』と五行本にあるが、念は、言がよいと思ふ。『打てかはりし夫の義心』と語つたあと『聞く女房が嬉し泣き』と云ふ、此嬉と泣の二字が、作者の大注意の處にて、此で此段の作意を引絞つて堪納した所である。故に語る人も其心で、一杯の情を籠めて云はねばならぬ。『聞く女房も――ヲ、ウーレーシイ、ナアア、キイ――イ』『エヤ』と云ふ掛聲

で「クリ上」になるのである『アイ、……あい、とは云へど――テ、今マ――アアサラニ、心の、張の、弦る――ウ、キレテ、力、ナアクウナアアクウ、タチアガレーエ、ベア、アア』と「三ツ入」になるのである。此からが譜節者の注意の所である『取出す小袖もかゝる身イイイニ、――ナルト、白地いと染め上げし、齢を祝ふ、ムウレ、ヅウルウモ、今はアーア、「ヨイ」アアアアア、ア、ア、ア、ワア――』と云ふやうになつてくる。此「地合」の中には、越前風の「ツメ地」と云ふ「フシ」をよく練習せねばならぬ。『明六の』と云つたり『雞は、にくし』と云つたり『それは、出船の』と云つたり『子の』と云つたり『一葉は、枯れて、又一葉』と云つたり、皆「ツメ地」である。何にしても古き名人の語つたと云ふ風格などは、ない物故、別に取立て六ケしい物ではないが、「節」や「息」を修業するには好き一段である。よく三味線に就いて修業すると大變爲めになる一段であると思ふ。夫から普通の淨瑠璃では段切に『影向の、松に』の『松には』を「トル」が此段では『松ウ――ニ』『シアン」となる此丈けは忘れてはならぬ。夫は此菅原傳授では、二段目の道明寺に此風が政太夫で始まり、三段目の櫻丸切腹に筑前掾で『神イ――ノ』となり、四段目の手習子屋の段に島太夫で『鳥邊――ノ』となつて居るから增補でも菅原傳授と名を打つたのであるから『松ツ――ノ』と云ふ事になつてゐる。

（八十二）忠臣義士銘〳〵傳

赤垣出逢の段

此外題は、何時頃の作で、何時頃の初演で、役場は誰が語つたかが、シツカリ解らぬのである。明治三十一手の頃と思ふ、竹本大隅太夫が丁度東京に來て居て、後藤猛太郎伯が庵主と共に大隅太夫最屓であるところから猛伯は止せば好いのに大隅を東京築地の瓢屋に呼んで、五代目鶴澤仲助に彈かせて、此段の大天狗振りを大隅に聞かせやうと計畫したのである。庵主は大隅に語らせて聞く事は結構であるが、猛伯が聞かせるのは、有ずもがなと思つて居たら、仲助も困つたと見へて、庵主に止めてくれと頼んだ。其中に猛伯は見臺を持出させ、身仕度を調へて、仲助に早く〳〵との催促である。仲助も止むを得ず夫へ出ると、猛伯の語り出したのが、此赤垣出立の段である。猛伯と云ふ人は天性のカンチク聲で、調子が高い方と低い方とにフラ〳〵と逃げる。仲助はハラ〳〵と心配して、汗たら〳〵でヤット一段を演了した。其後庵主が大隅を築地の金水館と云ふ家に呼んで、飯を食はせる時、同席して居る仲助に向つて大隅が、先日聞いた赤垣出立の段の咄を始めた。其時

の咄を今はよく記憶せぬが、何でも慶應年中に、倉田千兩とかが書いたとか云つて居たやうで、又初演は天王寺邊の長尾太夫とかと云つたと思ふ。今シッカリとは云へぬが、何でも其邊の間に出來た此一段じやと思つて居たら、大差はあるまいと思ふ。其時庵主は面白さに大隅に水を向けて、

「お前は此段を語つた事があるか」

と云ふと、

「ハイ清水町の師匠と、和歌山に參りました時、或るお客に望まれまして、師匠に一度稽古をして貰ひまして語りました、其後師匠が語つて見いと申されましたので、何でも一二度は語つたと思ひ升」

と云ふから、

「氣の毒じやが、乘り掛つた咄じやから、今晩一寸聞かせてくれる事は出來ぬか」

と云ふと、大隅は、

「ア、、寬や(五代目仲助の舊名)…杉山の旦那はんが是を語りやはつたら宜しいぜ……私が解つて居る丈けは今申します……寬や彈いてんか」

と云ふと、仲助は、

「私い後藤の旦那のお稽古はしましたが……味じやう覺へて居まへん」

「イヤ〳〵此間聞いた、アレでよろしい、彈ていナ、旦那はんに一ぺん聞いといて貰ふとナ」

と云ふので、早速仲助の家に人を遣つて、三味線と五行本とを取寄せた。聞人は庵主一人である。庵主はこゝまで大隅を調子に乘せて語らせるのであるから、控へ本に鉛筆を舐めて、一生懸命に構へ込んだ、サア夫から赤垣出立の段が始まつた。夫が二分か三分の低い調子である。

『降り埋、むウ――ウ――ウ』と云ふ、其聲の大きさと、長さと、強さと云つたら、傍で聞いて居れば、只だビックリする斗りで聞取れぬのである。モウ夫で威壓されて、庵主は參つて仕舞つた。『雪の、ヲヲ――ヲ――ヲ』と持つた聲と云つたら、アノ大きな鼻の穴を、庵主の方に向けての音遣いで、又息の根も止まる程押付けられた。『野山ア――アア――モ』と云ふ聲は大開きに自然に開いた聲で、トテモ鉛筆を持つて相手になつて居られぬのである。『サア、ケ――エ、エ――イ、ユエ――エニ、身も……』と「息」を詰めて、後を云はぬから、ヲヤと庵主が振り向くトタンに『破れ笠』と「ツメ」て云つたときは、庵主の心臟は變に異狀を呈した。大きいと云ふか、強いと云ふか

兎も角彼の藝に呑まれて居るのであるから、庵主其者の存在はモウないのである。庵主は滿天下の有らゆる荒浪に揉まれて來た男であるから、大臣や元老位が、五人や八人來て威してもビクともした事はないが、藝の威力に押付けられた形容と云つたら、画にも書かれぬ慘憺さである。只だビックリして兎ても是は覺へられる物ではないと思つたのである。大隅に本氣に稽古をして貰つた人は世にも澤山あるであらうから、覺へもあるであらうが、三尺と離れずにアノ聲と息遣ひとを聞いたら、全く庵主の云ふ通りの感に打たるゝのである。其間〳〵に仲助の「ウケ」や「ハコビ」を講釋する仲助も有難さに一生懸命で眼色をかへて彈いて居る。夫から「トン〳〵〳〵〳〵ジャン」と「早間」に〆めると、『掃除仕舞ふて稽古場より立出る若黨曾平太』と云つた其口捌きには、又ビックリした。コレは兎ても俺には云へぬはいと思つた。『ヲ、、源……藏……樣、ではムりませぬか』……『ヲ、、……曾平太か』と云つた「カワリ」の大きさ、又ビックリした。總てドコモかしこもビックリ斗りである。夫から母との對面となつて『遙かの遠國へ參りますれば……何時……歸國とも相知れず』の處になつて、モウ庵主は引付けられて聞いて覺へる氣も何も、何處へか行て仕舞つた。締める丈け締めて居た大隅が、『ワハ、、、、』と笑つた時は、知つて居ながら又ビックリした。夫

から母と兄とに對する問答は、寸分の隙間もなく、其「息合」と「間合」と云ふものは、如何に修業しても鍛練しても、眞似も出來る物ではない。『老さらばふ――ヲヲて』と『て』の字がツマッて、グッと云ふ「息」があつて、下から『ヲ――シカアラ――アアヌ』と云ふのが、全く情合の涙の砲彈が山になつて破裂するやうであつた。此等の事を書けば限りもないが、庵主の微力では兎ても書き得ぬのである。又筆では書いて解らぬやうな困難な事情斗りである。

併し斯道の普通から云つても、書いた位では兎ても習得せられる物ではない。先づ新作物があつたら、三味線彈が譜を付けねばならぬ、付けたら、攝津大掾でも、三味線彈に聞して貰はねばならぬ。聞かせて貰つてから、自身の力量相當に研究工夫をして、三味線彈と彈合せをする、夫から出來上つて床に掛るのである。故に今庵主が書く位、「息」と「間」と藝術の要所〳〵を書いておけば、夫で一段總ての淨瑠璃を稽古するに工夫して應用するのには澤山であると思ふ。夫が出來ぬ位の力量の人は、之を讀んでも役に立たぬと思ふのである。庵主は此大隅の此一段を熱心に聞いて、永い年月掛つて研究をして、少しも心から離した事はない。今は震災で燒けて仕舞つたが、其本があつたら永年研究した痕跡がチヤンと書込んである。此如くして一度も床に掛けて語るやうな機會はな

かつたが、十幾年の後東京築地の同氣クラブで、兩總裁の蜂須賀侯と清浦子が、義太夫を聞くと云ふので催された時、庵主が同クラブの演藝委員であつた爲め、是非之を語れと勸められ、始めて此赤垣を語つたのであつた。故に五代目仲助も前後になく稽古の外は之が始めて彈いたのであつた。素より讀み付けて語るのであるから、碌な事の出來やう筈はないが、大隅のお蔭で永年凝つて居た物を始めて語つたのは、非常に愉快を感じたのであつた。コンナ新らしい詰らない作でも、大隅と云ふ名人の蒸溜器に掛けて、一度煎じ出す時は、非常に尊い藝妙が出て來るのである。要するに斯藝修業の妙術は、ドンナ藝でもよく聞いて研究するの外はないのである。少し覺へると直に天狗になつて、人の藝を聞く力がなく、他人の藝は不味く斗り聞へる人は、夫ではモウ斯藝との前途は斷絶であると思はねばならぬ。

（八十三）八陣守護城　八ツ目　正清本城の段

此外題は、文化(?)四年卯の九月（大正十五年を距る百二十年前）大阪道頓堀大西芝居にかはり新淨瑠璃として上場せし筈である。役場は紋下豐竹麓太夫と聞く。輓近豐竹古靱太夫が、當時の初番付一枚を贈與してくれた。之に依ると紋下は座元、吉田芳松太夫、豐竹麓太夫とある。此八ツ目には竹本麓太夫である。三ツ目の口と七ツ目の口が豐竹濱太夫(後の綱太夫)である。三ツ目の中と六ツ目の口が竹本錦太夫で、三ツ目の切と十目の口が竹本染太夫で、四ツ目の切と七ツ目の奥が豐竹巴太夫で、六ツ目の切が竹本彌太夫である。ソコで八ツ目の切が豐竹麓太夫で、十目の切が竹本咲太夫である、十一目は掛合となつて居るのである。

元來此八陣八ツ目は奥の文章が悪るいので、文樂等でも度々聞いたが、ドウモ情が浮いて來ぬので、去る明治三十七八年の頃、庵主が不完全ながら多少校訂して置いた。今竹本靜太夫や鶴澤芳之助などが時々語つて居る。此段は所謂麓場の本場であるから、キチンと裃を着たやうに語らねばな

らぬ。音違ひを間違へたり、引字をしたりしては何にもならぬのである。「ギン」の音は「ニジッ」た丈け上から出る事、下りを順當にする事に注意するのである。元來天下無双の名音の太夫の語つた物を、夫以下の聲の悪るい者が修業するのであるから、能く氣を付けて鍛練せねば聞かれぬのである。

先づ「三重」が滅多に他の義太夫節に類のない、送り三重を引縮めて頭に付けた譜であるとのこと「シァン〳〵〳〵」と三重を彈出すのに、其撥がハッキリ鮮かに「間」が締まつて居らねばならぬ『行く』と云つたら三味線彈が「ヤ」と云ふ聲を掛けて、『ウウウウウ――』と五ッ云ふと「チン」と彈のそこで『ウーウーウーウウウウ、ウー、ウ』と下廻しに語るのである。即ち只だの三重とは一寸違ふてある。『サーア、キィーイイ――イ、ハ――ア』と「フシ」になる。「テンツン」と受て「ギン」の「ニジッタ」音にて『二重に建てし』と運ぶのである。多く『思惟の間』と語るが、矢張り『思惟の間』と語るがよい。『人の出入は』の『出入は』は矢張り古淨瑠璃の風で「二」の破れた音である。『蟲の音』は、三代記八ッ目の枕の『蟲の聲』の如く、「ギン」の音で一杯に語るのが、越前や籠の風との事。『物凄き』は『モノ――ヲ――』と入れられる丈け入れて、「ギン」で『スゴ――ヲヲ、キィイ――』大きく「ツト

ントン〳〵〳〵」と出來る丈け非常識に語るがよいとの事。「チントン〳〵〳〵ジヤン〳〵」となつたら、『我本城』からは、一切探る「足取」の心持との事。『我れ』は『ワレーエ』に持つて『ながら』と運ぶ。ハズミを探るハズミで『おく露、踏分けてエエエ——エエ』とならぬやうに『フミワケテ』と止まつて、『エエ』と二ツに折るがよいとの事。『不孝の科』は「カヽリ」に語る事。『よも成るまい』は一本高く收める事。『都でお別れ申してより』からの運びは、アドケナイ娘の詞のやうに、成丈け謳はぬやうにと心掛けて、決して引字をせぬやうに運ぶとの事。元來此東風の物は「地色」を「地色」に語らず、「地ノリ」「詞ノリ」「中ノリ」と云ふやうに、咄のやうに運ぶのを、三味線の方が最も音色よく、「間」をよく、三味線丈を聞いて居れば、謳つて居るやうに彈かせる物との事で、此は大撥が庵主に、和田合戰の三段目を稽古する時、クドく念を入れた教訓であつた。夫から雛絹が自害してからの節廻しが、一番六ケ敷く、此を三味の譜の通りに云つて居たら、手負ではない事になる。此を手負に聞かせるのが太夫の力量である。此等は東物の三段目物にエテある譜付けである。日吉丸の三段目もお政の手負になつてから、矢張此雛絹と同じ事で、譜の通りに謳へば手負ではない事になる。此等は修業の進むに隨つて考へねばいかぬのである。夫から荒岬の「文彌落し」から先は、節

は手易いが、詞の氣分と「カヽリ」と云ふ節が四ッモ五ッモある。此語り分けを考へねばならぬ。夫から段切の流れ題目を叮嚀に稽古をして、正清の大往生となり、始めて「ニジラヌ」『眞ギン」で端坐合掌を云ふのである。

（八十四）三十三所花の山　観音霊験記　壺阪寺の段

此段は、元吉野川と云ふ作本であつたのを改作して、新町の大園平が畢生の妙譜を施したとの事で、大隅太夫や組太夫、越太夫の役場として名高い物で、今日まで世間一杯に流行して居る明治年代の傑作物である。勿論文章は極めて幼稚な物ではあるが、園平が藝力の全部を傾けた痕が、此一段の全面に漲溢して居るから、斯くは流行するのであると思ふから、庵主は切に彼故人の藝力を推賞するのである。

枕文句の『夢が浮世』は地歌の「まゝの川」であろふと思ふ。其音遣ひの六ケ敷事は誰も満足に云つて居る者がないやうである。夫から『鳥の聲』の地歌は「菊の露」かと思ふ。元來淨瑠璃に「菊の露」の文句の書入れある物は、大抵死ぬと極つて居るやうであるから、其凶兆を呼出すべく物淋しく音遣ひを辿る事が、又六ケ敷のである。庵主が此段を熟讀する處に因ると全部綱太夫風が漂つて節付けが出來て居るやうであるから、三味線は出來る丈け派手に、太夫は出來る丈け音を遣ふに陰氣に語

るべしてある。果して然れば『尋ね廻れば』の『尋ね』は「ウレイ」の譜に落ちて來ねばイカヌ。酒屋の段の『鈍に生れた』の『ドン』が矢張「ウレイ」の譜に落るが當り前であるが、天下皆此『ドン』も『尋ね』も「ギン」の譜より下つて居らぬやうである。酒屋でも此段でも奥になつたら「ギン」にならねば成らぬと思ふ。一體コンナ所は「チン〳〵〳〵」と呼出しを三味線に彈かせるのが太夫の非力である「チン」と「ウレイ」で「一」を彈かせて出て見たら直に「ウレイ」に落ちる譯が分るのである。夫を何處でも「チン〳〵〳〵」と呼出させるのは、昔は浮かれ藝と云つて下げすんだとの事である。文章の意味を語る事も藝力が〆つて居れば、ソンナ事は賴んでも出來ぬ物である。故攝津大掾は曾て庵主に稽古をする時に、斯く云つた。

「私共の修業して今日に成升までは、一通りの事ではムりませぬ、第一お仕打さんも(興業師)藝人も一通りの貧乏ではムりませぬので、藝は第二として、お金を儲けねば生きて行く事が出來ませぬ、夫には「浮かれ藝」を致しますれば前受けがよくて、お客樣が澤山來て呉りやはり升、私は興業師から夫に使われましたのでムり升、一時は仰山お金を儲けた事もムり升が、修業の上と藝と云ふ上からは、心ならぬ事をさせられましたのを殘念に心得て、師匠に就き先輩に願ひまして、

各段の風格、藝風と云ふ事丈けは常に修業致しました、其上で工夫を致しまして講座の藝は別に稼ぎましたのでムい升、殊に圓平さんと別れましてからは、圓平さんは大隅太夫や組太夫を引〆た古淨瑠璃の風の引からげた藝に仕込まれまして、少しでも「浮かれた藝」を許しやはりませなんだので、兩人とも苦勞は致しましたが、お客さん方には餘り良くはムりませなんだ、夫で私は旦那のお稽古を致ますのは、私の覺へて居る引〆つた藝風丈けをお教へ致升ので、自分の修業と思ひましてのお稽古でムい升、今更講座て永年賣込ました藝を變へる事は出來ませぬので難儀致ますのでムい升」

と云つて、教訓は常に藝道の根本から咄して教えて呉れたのである。故に「呼出」などゝ云ふ三味線の手は餘程考へて彈いて、又語らねばならぬ事である。「チン」と彈いて濟む所を、上手の三味線がフザケて「チン〳〵〳〵」などゝ彈くのに乘せられて、藝術上にも意味にもない音遣ひをして、「浮かれた藝」をするのは、自分丈けは夫れで好いとして、之を聞いて覺へる、後輩の門弟共の爲めには、言語道斷である。夫も玉三の『首は前にぞ落ちにける』「チーン チン チン チン」と呼出すが如きは、初花姫と云ふ裝を引いたお姫樣が駈け寄るのであるから、無くてならぬ呼出しであるけれ

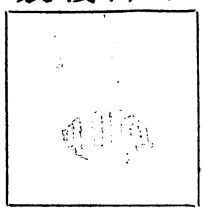
ども、酒屋のお園が『鈍に生れた此身の科』と身悔みをする意味に呼出されて、聲を振つて揚句の果が「ギン」の譜より下らなかつたとなつたら、自分の力相當に考へて見たらば分るのである。庵主は決して呼出を禁制にするのではないが、綱太夫がコンナ所は、即ち其段の前半では屹度「ウレイ」の譜に落して〳〵て語つて居るのを考へると、決して前受けが好いと云つて「浮かれ」る文章の意味ではないやうに思ふのである。壺阪とても同じ事で、天にも地にも代へられない夫の體の見へぬのを尋ぬるのに、「ギン」の音で振り廻す筈がないのであると思ふ。前に戻るが、澤市の一人舞臺になつて『亂るゝ心』から殊に「林清節」によく氣を付けて彈いて語らねば、團平の力を殺すのである。皆浮かれて居るのである。夫から『身の果は哀れ』「チン」と云ふ「ウレイ」に氣を付けて彈かねばならぬ。何時てもコンナ時は、此「チン」で人が一人死ぬのであると聞いて居る。夫が『涙の色ぞ』「チン」も『心遣ひぞ』「チン」も、庵主には藝人の彈くのが皆同じ樣に聞ゆるのである。此等は庵主の微力かも知れぬが、藝人の方でも深く注意せねばならぬと思ふ。又此段では「四ッ間」と云ふ事に氣を付けるのが一番大事である。次には澤市を陰氣に殺して、お里を陽氣に殺したと云ふのが、眞に團平たる力の面影の見ゆる所で、綱太夫風をウンと呑込まねば出來ぬ事である。『ナアムウアミ、ダブツ、

ミダブッウ…ノ……ヲ』と お里を踊らして殺した所に力があるのである。夫から『コレハシタリ初めてお目にかゝり升』の初めては、『久さアし振りでお目に掛り升』が好いと思ふ。夫は前の文章に『三ツ違ひの兄さんと云つて暮して居る中に』澤市は盲目になつたのである。故に奥の『初めて拝む』も、『再び』の方が好いと思ふ。其外に注意すれば、氣を付けねばならぬ所が澤山あるかと思ふ。

大正十五年十一月一日印刷
大正十五年十一月三日發行

定價　金三圓五拾錢

不許複製



著者　杉山茂丸

發行者　東京市芝區三田小山町二ノ六四號　三角哲夫

印刷者　東京市麻布區飯倉町一ノ一二番地　遠藤梅吉

印刷所　東京市麻布區飯倉町一ノ一二番地　清巧堂印刷所

發行所　東京市麻布區南日ヶ窪町十五番地　黑白發行所

電話青山七〇一八番
振替東京三五七九三番

杉山其日庵先生著

百魔

前編（既刊）
後編（近刊）

【定價　金貳圓七拾錢】

發行所　大日本雄辯會講談社